

クロス・ストラトス

caose

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

物語は人と世界の存在で変わる。

そんな中で人は変われるのか？

立場を奪えば変わるのか？

いや・・・そうではない。

立場を奪つても結局は変わらないのだ。

世界の修正力はそれほどにも・・・強力なだから。

これは転生した人間が一夏に成り代わり代わりに一夏になる人間が

他の人間となつてIS学園に巻き起こる事件に遭遇するお話

尚この話は拙作の『カオス・ストラトス』の三次創作と想ってください。

# 目次

全ての始まり | 1

学会において | 12

白騎士事件 | 20

改名 | 29

IS・・・動かしちゃった。 | 42

自分の相棒 | 48

アイドルが来た！ | 57

出会い | 66

嘘だろうと思う事は必ず起こる | 74

世界の反応 | 79

自己紹介 | 92

自己紹介。② | 98

クラス長決め | 106

放課後。 | 116

部屋に入ってwww | 123

それぞれの戦いの前。 | 132

エルム対宗壺 | 140

織斑一夏対セシリア | 147

エルム対宗壺 決着。 | 155

織斑一夏対セシリア 決着 | 161

歓迎会 | 172

転校生は中国の代表候補生 | 181

試合開始 | 189

乱入者現る | 198

異形のISを倒せ | 207

襲撃後	216
転校生来る	224
授業開始	232
演習	238
お願い	248
クーリエが入居した。	255
ラウラ対宗壺	262
ラウラ対宗壺②	270
ラウラの実力	277
今後	285
その後	289
学年別トーナメント戦	297
試合開始	306

闘い続けて	314
システムの悪意	323
クライマックス	330
事後処理	339
お風呂にテ	347
買い物	355
馬鹿との遭遇	363
水着かって	371
宿について。	375
兎来る	382
着替えて	388
海で遊んで	396
翼の正体	404

試験運用	411
束来る	417
作戦に向けて	424
作戦会議	432
戦闘開始	439
戦闘後	449
海の中	458
言葉	467
進化	475
戦いが終わって	494
世界情勢	510
各国の少女達 (海外編)	516
国内にて	524

プールで遊ぶぞ!	533
2学期	540
内容決め	548
楯無と特訓	556
祀るだー!!	565
劇は大ごと	573
劇は終わりにて戦場の始まり	582
織斑一夏対オータム	589
悪魔の斬り姫	597
その後	606

# 全ての始まり

2006年12月17日・朝5時24分

その日は雪が降り積もっていた。

周りの山々は白く薄化粧の如く積っていた雪の中をとある男性が歩いていた。

「ふー、ふー、迄来たら大丈夫だ。」

そう言いながら白衣を着た男性が・・・1人の赤ちゃんを連れて歩いていた。

見たらまだ生まれて1か月位に見えるが・・・髪の色や肌の色が異なっていた。

一人は黒髪に肌色の小さな男の子

男性は何やら辺りを気にしながら赤ん坊達を毛布で包ませて近くにある古い道路を

歩きながらこう思っていた。

「(やれやれ・・・まさかこうなるとはな。)」

そうお思いながらここから少し離れた大きな山に一度視線を向けると・・・

赤ん坊が泣き始めた。

「ふいえええええ。」

「ああ、御免ね寒くて。もう直ぐ近くの集落につくからそこでミルクとかを

飲んで東京に行こうね工。」

そう言いながら男性はもう一度歩き始めた

### プロジェクト・モザイカ

人工的に超人的な天才を製造するクローン計画。

これには予め多くの国が秘密裏に出資していたのだが何者かの集団によって計画に参加していた職員の大半が死亡しないし行方不明。

それと同時にコード『W11000』が中心となってクーデター。

この合わせ技によって計画は凍結されたがプロジェクトには幾つかの派生形が存在していた。

一つ目は超人的な天才であるが更に言えば以下のとおりである。

クローン技術に伴う兵士の育成

兵器作成及び薬品の試験投与に伴うデータ取り



異なる人間同士の同調

まあ、他にもいろいろとあるが主立って行われていたのは以上の通りであるが  
こんなのを常人の神経で出来る訳がない。

そう・・・異常者が必要だったのだ。

この科学者・・・ロボット技術・兵器科学者『鬼塔 久三（ひさみ）』も  
その一人であつた。

「成程な、それで私の下に。」

「はい、この日本において貴方以上に安全にこの子と私を匿えられるのはいません。どうかお願いできないでしょうか・・・」

「『斑鳩 崇継』さん。」

それを聞いて『斑鳩』は暫くしてこう答えた。  
「分かった、貴様の言葉確かに聞き届けたぞ。」

「！感謝します」

「但し条件がある。」

「条件・・・？」

「貴様の能力を最大限に生かして新兵器・・・それも世界では未だ開発されていない新世代を開発せよ！それならば匿う匿う事ぐらい良しとしよう。」

「・・・分かりました。」

「うむ、暫くは我が研究所で過ごすよ。子供はこちらの乳母に面倒みさせよう。」

「ありがとうございます。では」

そう言って『鬼塔』は部屋から出て行ったあとに隣にいる

男性『真壁 介六介』が『斑鳩』に対してにこやかにこう言った。

「くくく、『斑鳩』社長もお人が悪いですな。彼が兵器開発のプロである事は既に明白な上であの様な約定を。」

「まあ、彼から貰ったこの情報のおかげで私もスムーズに動けるし

それにこの様なたかが一人ぐらい天才が生まれたからと言って計画を停止するようにと言う政治家共は政界から消してしまつた方が後が楽だしな。」

「そう言う大量の人間の情報が記載されていた。何処の組織や政治家、企業などが幾ら投資していたのかについてが事細やかに記載されていた。」

すると『斑鳩』は『真壁』に向けてこう命令した。

「『真壁』よ、この情報を彼に渡しておけ。良き扱いをするであろう。」

「は、彼にですな。」

「ああ、彼だ。」

『風鳴 八紘』に。」

「ああ、分かった。情報は貰っている。連中は私が引導を渡す。」  
ではと言って電話を切ったこの少し白髪の入った黒髪の男性こそ

『風鳴 八紘』であった。

彼は自民党で柔軟な対応が出来ると有名で次の総理大臣候補とも呼ばれていた。  
そんな中でこの情報は正に僥倖とも言えよう。

すぐさまに貰った情報を使って追い込んだ。

これにより百人近い人間が政界から姿を消した。

その中には大物政治家や起業家の社長、会長が経済界から姿を消した。

「とはいえ、何を造るべきかか。」

『鬼塔』はそう眩きながら今ある兵器雑誌やあらゆる産業の情報データを見たがどれも参考にはならないかと確信したのか如何するべきかと考えて漫画を

読んでいると・・・ある事に気づいた。

それは・・・。

「・・・これは！」

それを見て『鬼塔』はある事を考えて設計図を引いた。

それだけではなく途中途中にある新しい技術も作り上げてその骨子となる模型を

作って『斑鳩』に見せに行った。

「これがそれか。」

「はい！それだけではなく新しい筋肉や義肢なども入っています！お目に入れて貰えば」

そう言いながら『鬼塔』はそれを『斑鳩』に見せるとそれを見た

『斑鳩』はニヤリと笑ってこう答えた。

「良いだろう、貴様とあの子の匿いを許そう。」

「ありがとうございます！」

『鬼塔』は笑顔でそういうと『斑鳩』はそう言えばと言ってこう聞いた。

「そう言えば貴様あの子供は何というのだ？名無しなのか？」

「あ」

それを聞いてやつべーとそう思っていると『鬼塔』はこう思っていた。

「（名前かア・・・考えていなかったなあ。今まで坊やだったし

いざ考えるととなア・・・)」

う～～んと考えているとある事を思い出した。

「(そう言えばあの子『S—O—O—O』って呼ばれていたな。

S—O—Oとなると・・・!!)」

するとそうだと思つて『鬼塔』は『斑鳩』に向けてこう答えた。

「名前は・・・こうは如何でしょう。」

「うむ?。」



「『鬼塔 宗壺』と言うのは。」

これが本来ならば『織斑一夏』と呼ばれるであつた少年が新たに付けられた名前であつた。

プロジェクト・モザイカ計画壊滅の11日後の事である。

## 学会において

2011年7月10日

学会で発表が執り行われた。

日本中の科学者たちが軒を連ねる中で鬼塔はこう呟いた。

「ああ・・・等々ここ迄来てしまったか。嫌だなあ、逃げ出したいけど逃げても斑鳩さんに地の果て迄追いかけられそうなんだよなあ。」

そう言いながらそう言えばとこも思っていると・・・とある少女が現れた。

「おいおっさん。チョット邪魔」

「邪魔って俺年上だよ。」

鬼塔はそう答えるが少女はこう続けた。

「良いからどけ！」

「はいはい・・・全く今時の子ってどうしてこう」

そう言いながらどくと少女は其の儘・・・壇上に向かって立ち去って行った。

「・・・は？」

鬼塔はマジかよとそう思いながら壇上を見ると白衣を着た少女は

唐突に現れるとある物を紹介した。

「はくくい、皆のアイドル『篠ノ之 東』ここに参上！皆ってさ、宇宙に行くのにスペースシャトル使ったり宇宙飛行士の育成にお金かかかってるでしょう？

それを一気に解決したのがこれ!!」

『IS（インフィニット・ストラトス）だよ!!』

「何あの発明？」

鬼塔はそう呟いて説明を聞いていた。

疑似的な無重力状態を発生することが出来るPIC

あらゆるものを機体内部に特殊な空間に保管、転送ができるパステロツテ

そして何よりも360度近いセンサーのハイパーセンサー

正直なところそれらをたった一つのコアと呼ばれる小さな結晶に収まるといってもない発明に鬼塔はこう考えていた。

「ふむ、PICなら飛行機に使って燃料費の節約が出来るしパステロツテなら

大型のトラックとかの運用はなくなるし災害現場にあれば間違いなく多くに人々を救えることが出来るな、それにハイパーセンサーも使い方次第なら深海調査とかに使えそうだよなあ。」

そう思っているが少女『篠ノ之 束』は更にとんでもない事を口にした。

その内容は・・・これだ。

「ああでも、これって何と何と女にしか起動しないんだよねえ♪」

「ハイ？」

鬼塔はそれを聞いて何言ってるんだと思ってるように続けた。

「(とんでもない失敗作じゃないかー!!いやなんで男女どちらも

何てしないの!?!可笑しくないそれって完全に欠陥品じゃん!!

ほら他の人達も俺と同じこと考えてるから表情が完全に馬鹿な子目線だよ

あれー!!)」

そう思っているとやはり口々に鬼塔が思っていることを口にした後に

下がらせろと言ってある科学者はこう続けた。

「ここに来るなら先ずその欠陥を改善してから来ることだ。欠陥のまま

発表するなど科学者として恥さらしだ。」

「・・・何だと・・・!!」

少女『篠ノ之 束』それを聞いてギリりと齒軋り鳴らして何か言いたそうな表情をしているがその科学者はこう続けた。

「さっさと次を出せ。」

そう言つて『篠ノ之 東』はクソと言つて下がった後に鬼塔が現れた。

「ええと、私が発表いたしますのは3つです。」

「まず一つは『戦術機』と呼ばれるパワードスーツです。」

「パワードスーツつてさっきの『IS』とかいうのもそれだったよな?」

「はい、ですがあれとは違つて男女共同ですので悪しからず。」

そう言うのと周りでは(▽?▽?;)ハッハッハと笑い声が聞こえると鬼塔は

こう続けた。

「この機体は操縦する人間は両手両足の内部に操作システムが

組み込まれていまして運用時間次第では機体その物がパイロットに適するように  
なります。」

「続いて生体義肢です。これは両手両足が欠損された人達の

サポートタイプですがこれらは今までの義肢とは違つて付けた人間の

電気信号を受信することで生身であつた時と同等のスペックを発揮することが  
出来ます。」

「そして最後に炭素製人工筋肉です。」

これらは主に筋ジストロフィー症の患者等に使用することを第一としこれにより

常人の筋肉と同じでありながらもそれ以上の運動性能を発揮することが出来ます。」

それらを聞いて科学者達は食い入るような目でそれを見ていると鬼塔はこう締めくくった。

「以上が私が発表するものですが何かご質問は?」

そう聞くと科学者の何名かが手を上げてこう聞いた。

「『戦術機』についてなんですが配備する際に既存の兵器との互換性は?」

「生体義肢についてだが医療関係だけでなくあらゆる機関との同時運用の見通しは?」

「炭素製人工筋肉についてなんですが体内に入れても大丈夫なのか?」

そう聞かれたので鬼塔はこう答えた。

「はい、最初の質問ですが『戦術機』は既存の兵器とは全く違ってしまふ為新たに教導をしなければいけません。それは恐らく新人を充てるでしょう。」

生体義肢についてですが目下検討中です。最後の質問については遺伝子情報をベースに病に侵されていない筋肉から採取してから作りますので大丈夫です。」

他にはと言ってそしてその儘鬼塔は何とか説明を終えた。

だがそれを『篠ノ之 束』は見てこう呟いた。

「何だよ何だよ凡人共が！束さんが作ったISよりもあんな鉄の塊に目がいくなんて馬鹿じゃないの！！全くこれだから・・・！！」  
そう言いながら空を見上げてこう思いついた。

「だったら証明しちゃえば良いんだよ♪」



その時に見えた『篠ノ之 束』の表情は何やら満面の笑みであった。

## 白騎士事件

そして2012年12月21日。

世の中ではマヤ文明における破滅の日だと言われているが世間一般は

そんなの関係なく人々はその日を楽しんでいた。

そんな中で斑鳩が運営している重工業『斑鳩兵器産業』では60機近い

戦術機『撃震』の完成版が配備されていた。

この機体は装着型となっておりパイロットの周りに機体を装着すると言う流れになっっている。

そんな中で開発責任者でもある鬼塔はその光景を見てこう呟いた。

「いやはや、これは壮観だな。」

そう呟きながら戦術機を見ていた。

あの学会の後医療関係から戦術機以外の技術について相談が相次いで特別に政府が認可したのだ。

それからと言うもの正に社畜と言わんばかりの労働環境となってしまう斑鳩が

裏から役所に手を回してくれたおかげで息子として引き取った

『鬼塔 宗老』の面倒はそのほとんどが乳母さんに任せてしまっており

自分が出来るのと言えば誕生日や偶の休みに遊んであげることぐらいしか出来なかつたりと色々で大変であつたのだ。

だが今製造している戦術機を自衛隊に納品すればやつと事で長い休暇が取れるので宗老と何処かで旅行したいなあと思つてみると・・・斑鳩から

電話が来たので何だろうと思つて取つてみると・・・とんでもない事を聞いてしまったのだ。

その内容が・・・これだ。

『鬼塔!今すぐ戦術機は使えるか!?!』

「ええ!何ですいきなり!?!」

『良いから使えるのか!?!』

「ええと・・・今動かすとなるとテストパイロットだけですから15機が限度ですけどいったい何が」

『・・・最悪な事が起こつた。最悪日本が滅びる。』

「・・・何です其れ？マヤ文明の嘘ごと？」

『嘘ならばそれで良かったがそうではない。テストパイロット全員を

トレーラーにぶち込んで戦術機を送ったら連中に話すが貴様には今話す。』

「？」

『・・・各国のミサイルが我が国に狙いを定めている。』

「・・・ハイ？」

『既に発射態勢に入っておる。我々は戦術機を東京に配備させる。後の場所には避難勧告で地下鉄等に避難させているが時間が足らん！それで戦術機を使って

ミサイルの破壊に努めて欲しいのだ！！』

「ちよつと待つて下さいよ！確かに今来ているテストパイロットは

全員自衛隊から出向してきている人達ばかりですけどそれでも」

『分かつておるが背に腹は代えられないのだ！風鳴総理も承知しておる!!!

頼む！この国の一大事なのだ!!今は・・・只頼む！』

斑鳩の切実な言葉を聞いて鬼塔は如何するべきかと考えているが確かになと思つてこう返した。

「分かりました。トレーラーを送りますが一つ約束してください。」

『何だ・・・』

「絶対に……全員を生きて帰してください！他に何があっても  
ミサイルが終わったらす！」

『分かっている、いらぬ指示は与えん。』

「では直に用意します。」

『ああ……頼む。』

それを聞いた後に鬼塔は携帯の通話を切って全員に向かってこう言った。

「総員今すぐ出動できる戦術機パイロットはトレーラーに乗って出動！

職員は非常シエルターに退避だ!!」

それを聞いて何故だと思いつながら全員が行動して戦術機部隊は

東京に向かった。

そして東京に配備された戦術機部隊は作戦概要の説明を聞いて取り乱しは多少あれど落ち着いて部隊を纏めて沿岸部に構えた。

そして暫くして・・・ミサイルが現れた。

『総員！攻撃態勢！！！』

そう言って両手と背面部にマウントされているマシンガンを構えてミサイルがレーダーに入るのを待つて・・・届くと言った処で何かが来ると言う

情報が届いた。

『どうした!?!』

『我々とミサイルの中間点に未確認飛行物体を確認!!』

『聞いていないぞそんなの!!!』

それを聞いて隊長はそう言うが突然として・・・ミサイルが爆発した。

よく見ると先ほどの飛行物体でもある・・・人型らしきものがミサイルを

斬り落としているのだ。

マジかよとそう思っているが隊長は全員に向けてこう言った。

『全機兵器使用自由！飛行してミサイルを排除する!!』

『了解!!』

そうやって全機スラスターに火を吹かして飛行した。

「ん？何だアレハ??」

現在ミサイルを破壊している少女が戦術機部隊を見てそう言うのと突然に他のミサイルがいきなり破壊されたのだ。

「!?」

『そのアンノウン機！こちらは戦術機部隊だ!! 貴官が何者か知らんが

援護する!!』

「ふ……いらぬ世話だな。」

少女はそう呟いてミサイルを斬り捨てたり荷電粒子砲を使って掃討しているが戦術機部隊もマシンガンを斉射したり肩部に搭載されているミサイルを使って攻撃したりと各員で対応した。

そして……7時間後、ミサイルが全て消滅した。

すると何処からか艦隊が現れると音声がかえった。

『そのアンノウン機に告ぐ！こちらは海上自衛隊だ、貴官の所属と階級と

目的を答えろ！さもなければ迎撃も辞さない!!』

そう言つて戦術機が発進されているのを見ても少女はそれを見て鼻で笑つて立ち去ろうとするので海上自衛隊は攻撃するがまるで柳の様に何の支障もなく戦術機を攻撃しながら立ち去つて行った。



この日『白騎士事件』と呼ばれたこの事件により『I S』と戦術機が世に  
脚光をもたらしたの言うまでもないが首謀者はと言うと・・・。

「ふざけんじゃねえぞ！アタシの『IS』がこんな鉄くずと同じなんて  
悔しい!!」

怒り乍ら新聞を破り捨てていた。

## 改名

「モンドグロツゾ閉幕、勝者は日本代表『織斑千冬』。

この子間違いないかな。」

鬼塔はそう呟いきながら新聞を読みながら食事をしてしていると・・・  
声が聞こえた。

「父さん、行儀が悪いよ。」

そういうのは間違いないイケメンになれる少年『S-01』改め『鬼塔 宗壺』である。

あの時は未だ腕の中で寝ていた子供がいつの間にか大きくなって少し嬉しそうな表情をしていると鬼塔はこう答えた。

「ああ、悪いな宗壺。少し気になることがあつてな。」

そう言いながら朝ごはんでもある焼き鮭をご飯に乗せて頬張ると宗壺はこう聞いた。

「けど父さんが読んでいるのはISでしょう？戦術機には関係ないんじゃない？」  
そう聞くと鬼塔はこう返した。

「違うぞ宗吉。別の視点から見ても情報を読み取っていく事で新しい技術の発見に繋がるんだぞ。」

「ふーん、変なの？」

そう言いながら宗吉は味噌汁を啜っていた。

これと同時に。

東京某所になる神社。

「え？引越し？」

「そうだ、お前には辛い事となるが政府から安全の為に言われてな。」

家族バラバラになって別々の土地で暮らすそうなんだ。」

「父さんも・・・母さんも？」

「ああ・・・濟まない、お別れも言えないそうだ。直ぐに支度なさい。」

「・・・はい。」

「サヨナラ一夏。」

そう言うこの少女の名前は『篠ノ之 箒』

篠ノ之神社の一人娘で東の妹なのだがその姉が何処かに

トンズラしたただけではなくISのコアの製造方法すら彼女しか知らないため

日本政府は家族たちをそれぞれバラバラにして転居させるという作戦に

うって出たのだ。

正史ならば箒は幾つもの土地を転々としたことで精神的に

不安定になってしまっていたが・・・この世界においては違っていた。

「箒ちゃん。君はこれから新しい苗字、名前で暮らすこととなるからこれまでの様な生活は出来ないって思つててくれ。」

「……………」

「(不安なんだろうな、無理もない。まだ10歳の女の子なんだから。)」  
箒の事を想つて政府の役人の一人がそう思つていと

そろそろ着くよと行つてそこに着いた。

「うわあ……大きい。」

箒はそう呟きながらその家を見た。

日本家で巨大な家であつたが役人の一人がインターホンを鳴らしてから入ると扉の前に少し細身であるが青い髪の優しいような風貌の女性が座つていた。

「いらつしやい箒ちゃん。遠路はるばるよく来てくれたわね。」

「い……いえ……どうも。」

箒はそう言つてその女性に向けてお辞儀すると今度は男性が現れた。  
理知的で和服を着て眼鏡を着た男性があらわれるが箒はあれツと思つて  
こう考えていた。

「(何処かで見ただことあるけど何処だつたんだろう?)」

そう思つていると役人がその男性に向けてこう言つた。

「それでは『飾鳴総理』。私はこれで。」

「折角なんだ。ゆつくりしていきませえ。」

「いやいや、私にも仕事が未だあるもので。」

そう言っている筈は更にあれと首を傾げていた。

「（総理って確かこの国で一番偉い人……だったよね？）」

そう思っていると男性がこう名乗った。

「初めまして箒ちゃん。私は『風鳴 八紘』。今日から君は私と妻の

『風鳴 千鶴』の娘になるんだよ。」

「え……え……ええええええええええ!!」

この日風鳴家に少女の絶叫が響き渡った。

「落ち着いたかね？」

「あ、はい……ええとそちらの方は？」

箒はそう言つて自分の隣に座っている男性を見た。

紅いカッターシャツとピンク色のネクタイを身につけ、

紅い髪の巨漢のマツチョな男性を見ると男性はこう名乗った。

「初めまして箒ちゃん。俺は兄貴の弟『風鳴 弦十郎』！公安警察官で働いているが俺の事は『オジサン』って呼んでも良いぞ!!」

(?▽?;) ハツハツハと笑いながら自己紹介していると

八紘は弦十郎に向けてこう注意した。

「弦、お前はもう少し声を小さく出来ないのか？子供が驚くぞ。」

「すまないな兄貴こいつが俺なんだな。」

そう言うのと全くと八紘は頭を抱えながら箒に向けてこう言った。

「ああ、すまないな箒ちゃん。放っていて。」

「い……いえ、けどうして？」

そう聞くと八紘はこう答えた。



「うむ、当初ならば君は居場所がバレない様に各地に移動させるという

計画があったのだが私が止めたんだ。君はまだ10歳だ。多感で友達とも遊びたい盛りの子供を大人の理由であちらこちらに飛ばして

それで心が壊れてしまったら元も子もないのだ。我々議員は国民の代表として国民の幸福を第一に考えないといかんだ。だからこそ私の家に置くこととなったがこれは防犯の意味においても大切なんだ。」

「?。」

「元とは言え総理の娘ともなれば色々とトラブルが起きるだろう?。」

そういう意味においても護衛がどうせつくのならばごつちの方が未だ対策が取れるんだからね。」

「ですけどそれで迷惑」

「君は子供なんだ。迷惑かけても罰は当たらないさ。」

だからと言って八紘は箒を抱きしめてこう言った。

「もう自分を偽るのはヤメテ・・・存分に泣きなさい。」

それを聞いて箒の目から・・・溢れんばかりの涙が溢れ始めた。

「へつく・・・ひぐ・・・ウワアアアアア!!」

泣きながら箒は八紘を抱きしめていた。

今まで甘えきれなかった分も含めて一杯……泣いた。

「箒ちゃんはどうしたんだ兄貴？」

「ああ、泣き疲れて寝てしまつてね。今千鶴が寝巻用の浴衣に着替えさせてる。」

「そうか……未だ子供だもんな。」

「ああ、所で弦。お前に」

「分かつてるさ兄貴、護衛についてなら俺が手配しておくよ。」

「すまないな、今日はこれで帰るのか？折角だから飯でもドウダ？」

八紘がそう聞くと弦十郎はこう答えた。

「悪いな兄貴、何せ今や戦術機の登場で自衛隊の旧式になり下がった

兵器の受け取りとかで警察全般その使用説明に俺も四苦八苦しているからな。俺も勉強しなければならぬしな。」

それじゃあと云つて弦十郎が立ち去ろうとすると八紘はこう言つた。

「……弦、……ありがとうな。今回紹介してくれて。」

そう言うと弦十郎はこう返した。

「……兄貴は今まで風鳴の事で頑張つてたんだ。

これくらいはしとかないとな。」

それじゃああと云つて立ち去る弦十郎を見て八紘はこう答えた。

「……済まない。」

そう呟くしかなかった。

「・・・おはようございます。」

「ああ、おはようつてもう夜だな。」

八紘は起きた箒に向けてそう言つて箒の表情を見た。

目元が赤くなっているが心がすつきりしたようである。

すると風鳴は箒に向けてある事を言つた。

それは・・・。

「突然だが君がこの家に入るにあたり政府はある条件を言いだしたんだ。」  
「？」

『重要人物保護プログラム』という元はアメリカにある制度なのだが

これは犯罪に対して重要な情報を提供してくれる代わりに戸籍等を新しく

作り変えらせてその人の人生をもう一度零からやり直すという制度なんだ。」

「それに伴って新しい名前にするようにと言われているがそれで良いのなら」

「それで……私は普通になれますか？」

箒はそう聞くと八紘はこう答えた。

「まあ多少不便なところがあるかもしれないがそれでも普通の暮らしは保証できると思う。」

「でしたら私を……宜しくお願い致します。」

「……分かった、で名前なんだが君の名前の箒は『ほうき星』、つまり意味は『どれだけ遠く離れようとも必ず帰ってこれる』という意味なのは知っているかい？」

「はい、父が私の名前についてそう教えてくれました。」

『ほうき星』、何百年に一度とも言われる彗星の一つで次にいつ会えるか分からなく会えたとしても既に忘れ去られている私からすれば悲しい星だ。」

「……はあ。」

「だからこういう名前にしたのだがどうかね？」

八紘はそう言つてある紙を渡すと箒はこう聞いた。

「この意味つて何ですか？」

「ああ……それはね。」

八紘はその名前の意味を言った。

そして1週間後。

「それじゃあ新しいお友達を紹介するわね。名前は?」  
そう言って教師が少女に向けてそう聞くとポニーテールの少女はこう答えた。

「『風鳴 翼』です。よろしく願います！」

『翼、その意味は大空に羽ばたいて自分の生きたいところに行き  
自分の意志で未来を進んで欲しいという願いの言葉だ。』

IS・・・動かしちやつた。

「いやはやそれにしてもまた酷くやられたな鬼塔？」

「(？▽？；) ハッハッハ・・・本当にですよねえ。」

2020年5月5日・こどもの日

本来ならば休日なのだが今はそれどころではないのだ。

何せ研究所が・・・半壊同然になっているからだ。

「然し《女性権利主張団体》は何回襲えば気が済むのだ？」

「私じゃなくて彼女たちのトップに聞いてください。」

女性権利主張団体

それはIS登場以降に現れた組織で《IS》を伝える我々女性こそ優良種であり

男は劣等種である」という何とまあ阿保な事を口走る組織であるのだが今やEU内では無視できない勢力となっておりつい最近ではイギリスでクーデターが起きて

女性首相を中心（全員女性権利主張団体のメンバー）となった政権が発足されて以来男性は大体がサンドバッグか売春夫となっており金持ちも問わず酷い目に遭っており一時は国外から脱出する人間たちもいたがあらゆる交通網に検問が入っており



出て行くものなら見せしめに I S で斃り殺にするという酷い状況となっている。

然し何故イギリスなのかというと日本では戦術機が I S よりも幅広く

運用されているため I S はモンドグロツゾか I S 学園に配備して運用か

次世代機関発の為の運用と日本では戦闘は小規模でしか出来ておらず

女性権利主張団体の活動は世界で最も最小と言っても過言ではない。

そんな中に於いてもどこかの国で奪った I S で襲撃してくるのでこちららは

たまったものではないため新型戦術機や新兵装のテストも兼ねた戦闘を行っており

今や斑鳩グループ専属部隊が出来上がっている。

ぶっちゃけた話国内で戦闘部隊を作るというのには賛否両論あったが各研究施設や

重要拠点、都市に対してのみ許可されているため問題はない。

「今回は半壊か、流石に第二世代 I S 5 機では相手が悪かったな。」

「まあそれでしたらまた研究所の半壊した箇所にもサイルとか付けければ

良いじゃないですか。」

「貴様しれツと言っているが周りを見てから言え。」

斑鳩が鬼塔に向けてそう言うとうと鬼塔は周囲を見渡した。

周りに見えるのは開発工場という名目で広い敷地と後ろに聳え立つ山々と . . .

ハリネズミの如き砲台の数々であった。

いや何でだと思っほどの異常なほどの光景であろう。

屋根の上にはイージス艦で使われる対空機関砲、戦艦で使っていたであろう砲台、ミサイル発射装置などどレーダーまであるのだから最早要塞と言っても過言ではなくこれはこれまで行くとも現れた産業スパイや女性権利主張団体のメンバーに牽制するという名目で配備されているのだが正直なところ・・・オーバーキルと言っても仕方ないが慣れとは恐ろしいものだ。

何があつたとしても大隊が上空で撃墜されて逮捕された後に機体を押収されてコアは日本政府に返しているのだから。

「父さん！」

「ああ、宗壺か。どうしたんだそんなに慌てて？友達と遊んでいたろ??」

「そんな事言っている場合じゃないだろう！研究所が半壊したって聞いて」

「大丈夫大丈夫、その時父さんは家にいたから」

それにデータを確認しないといけないからね。」

そう言つて（?▽?;）ハツハツハと笑う鬼塔を見て宗壺はこう呟いた。

「そうか・・・良かった〜。」

ホツと落ち着くと宗壺はISを見てこう聞いた。

「ねえ父さん。このISってどうするの?」

「ああ、そいつは襲撃してきた連中の機体だから触っても良いけど  
気を付けてな。」

はいいと宗壱はそう答えて襲撃したI S《ラファール・リバイブ》を触ろうと  
手を伸ばすとそんな中で鬼塔は斑鳩に向けてこう聞いた。

「やはり第三世代機何ですが早急な配備が必要ですね。」

「だが未だ十年しか経っておらず然も今は第二世代機で十分なのにか？」  
「ですがI Sの進化を考えれば矢張り」

「ウワアアアアア!!」

「!?!」

すると突然宗壱の悲鳴を聞いて鬼塔と斑鳩は何事だと思つて振り向くと  
目に映つたのは……。

「……………へ?」

「え、ナニコレ?どうなつてんの?」

I Sを纏つた……宗壱がそこにいた。

すると斑鳩は鬼塔に向けてこう聞いた。

「おい、お前の息子は男だよな？」

「はいそうですよ・・・そうだよな？」

斑鳩と鬼塔は互いにそう言うがもう一度宗壺の方を見て・・・

大声でこう言った。

「いや何でIS纏ってるの!？」

そう言うしかなかった。

「それでこれからなんだがなあ。」

「これって・・・下手したら最悪な事になりませんか？」

鬼塔は斑鳩に向けてそう聞くと当たり前だと言つてこう続けた。

「下手したら宗壺君は実験台として研究所送り・・・其の儘芋蔓式に彼の出生がバレて

色々と面倒なことになりそうだからなあ。」

「そうなんですよねえ。」

斑鳩の言葉を聞いて鬼塔も同感だとそう思っている中で隣で話を聞いていた

真壁がこう提案した。

「ではこういうのは如何でしょう？彼は高校進学と同時に I S 学園に送るまでに我々が彼を鍛えるというのとは？」

「ですがそれでも何時かバレるか」と

「それは《風鳴》元総理に頼みましょう。ああ見えて顔が広いですしそれに

彼には確か引き取った少女がいますが養子で色々と複雑な事情がある為に自衛用の I S を製造するという大義名分と我々も I S 部門に参入できる言い訳が立つのでは？」

「・・・仕方あるまい、14年前から共犯関係だった彼とも

もう一度話さなければな。」

「事業は私が計画を。」

「じゃあ私は機体の設計ですね。」

「それに＋して奴の教導もな。」

互いにそう言って更に今後についての計画を話していた。

## 自分の相棒

それから1か月後

「え、俺に専用機!!」

「そ、お前IS動かしてしまっただけなら、それで俺が作ったんだよ。その為に《IS開発部門》を立ち上げたんだからな。」

鬼塔は宗彦に向けてそう言いながらポチポチとボタンを押して扉を開くとすぐそこに・・・ISが鎮座されていた。

大型のアンロックユニットスラストと装備された大剣が特徴的な灰色のIS。

「こいつが・・・。」

「そ、こいつがお前のIS、《灰戦騎》だ。」

「《灰戦騎》。」

そう言つて宗彦はその機体の周りを見回していると鬼塔はこう説明した。

「この機体は中近距離型のISで特徴的なのはこの大型スラストだ。

こいつを最大加速すればイグニッション・ブーストと同じスピードを出すことが出来るし何よりもこいつの第三世代兵装はAIサポートによるビットシステム!!」

そう言うのと鬼塔は端末を宗壺に押し付けるように見せてこう続けた。

「こいつのビットはイギリスで開発された奴とは違ってAI補正が入るから最大使用数は6基にも関わらず機体操作をしつつ戦闘が出来るという優れたもの！然もAIにおける自立学習システムも相まって使用する度に滑らかな動きが出来るようになるの良いこと尽くしなんだー!!」

「……父さんって普段こんな感じなんだな。」

宗壺は鬼塔のハイテンションな声を聴いて呆れながらそれを聞きつつ宗壺はこう聞いた。

「そう言えば父さん、一つ聞いても良い？」

「？」

「《灰戦騎》の隣にあるあの機体は何？」

そう聞いて隣にある2機の機体を見るとああ、あれなと言って鬼塔はこう続けた。

「あれは別の人が使う機体だよ。」

「？」

そして場面は移り変わって東京にある・・・スタジオ。

「神様も、○らないー！思い○歴史をー○ろうー！！」

「ハイ！良いよ翼ちゃん！！今日はここ迄！！奏ちゃんと休んで休んで！！」

「ハイ！ありがとうございます！！」

音楽を歌っていた少女がそこにいた。

名前は《星音 翼》、《風鳴 翼》であると同時に《篠ノ之 箒》が  
アイドルとして歌っていた。

何故アイドルになっているのかというと・・・ただ単に中学の友達に面白半分て受けてみないかと言われて受けてみたら受かっただけではなく

プロデューサー自らが頼み込んでアイドルになったがそれに伴い彼女に



マネージャー兼ボディーガードとして風鳴元首相が知っている人間を当てたのだ。その人間の名は《遠藤 シズナ》、関西出身のボディーガードナーである。

人当たりの良さと同時に翼に対しても一人の人間と接してくれるだけではなく生活面や学業面においても信頼する人間なのだ。

そしてもう一人翼が信頼する女性が・・・この人だ。

「お疲れ翼！」

「ちよーびつくりさせるな《奏》!?!」

「悪い悪い、つい何時もな。」

そう言いながら悪びれもなく答えるのが翼にとって姉の様な存在ともいえる女性《天羽 奏》である。

彼女は箒よりも前からアイドルで先輩なのだが本人曰く《別にこれから

コンビ組むんだから呼び捨てで良いぜ!》と男前な事を言う為最初は抵抗したがもう諦めたと言わんばかりに今では呼び捨てになっている。

すると奏は翼を見てこう聞いた。

「未だ引きづってんのか? I S の事。」

「ああ・・・正直未だ迷っている。父さんが私の事を想ってくれているのは嬉しいが私は I S は・・・。」

そう言つてあの時の事を思い出した。

数日前

「え？専用機・・・ですか？」

「ああそうだ、向こうからそう言われてな。企業のテストパイロットとしてだがそこは父さんとは懇意にしていな、聞くだけ聞いてみないか？」

「・・・考えさせてください。」

「お前がISの事をどれだけ憎んでいることは私も知っているが取敢えず・・・」

済まない。」

「・・・私も変わらないといけないのかもな。」

「?何だつて?」

「イヤなんでもないよ奏。それに私はI S学園を受けなきゃいけないし。」  
翼はそう言つて自身の立ち位置を思い出した。

何せ自分は《風鳴 翼》である前に《篠ノ之 箒》、姉である束に対して

日本政府は安全の為にここに置かれることが決まっているのだがそれでもと

勉強ぐらいはなとそう思っていると奏がこう言った。

「そんなに辛気臭い顔すんなよ、アタシら《ツヴァイ・ウイング》がこれで解散じゃないんだぜ！夏休みに冬休みとかでライブしなきゃあいけないしき!!」

「けどそれだったら奏はどうするんだ？」

「アタシはアイドルしつつやっぱ女優に向けて勉強」

「それなんやけどその勉強は三年後までお預けやで。」

そう言つて後ろから《遠藤 シズナ》が2人に向かってそう言うとき奏がこう聞いた。

「えつと《シズナ》さん・・・それって一体？」

何でと聞くとシズナはこう答えた。

「簡単な話や、奏もI S学園に生徒として入学するんやで？」

「いや待ってくれ！初耳って言うかマジで言ってるのかよ!？」

「アタシの成績知ってるんだらう!!？」

「やからこそもう一度学校に行って知識入れ直すんやろが！翼が休んだらクイズ番組赤っ恥確定やで!!」

「うぐー！」

それを聞いて奏は苦い表情を浮かべた。

そう、彼女は馬鹿なのだ。

翼の勉強も正直なところ頭を悩ますところが多いのだ。

おまけに徹夜でクイズ番組に向けて翼の下で勉強をしなければ馬鹿なのだ。

「やからこそ《ツヴァイ・ウイング》2人がI S学園に入学すれば

名前も爆上がりなうえに企業から機体を貰えばスポンサーが増えて  
うちらはウハウハやからほら勉強勉強!!」

「今最後にとんでもない事いてなかったか!？」

「お前何言うとるんや！勉強せーへんやったら・・・バカしかおらん

お笑い番組で尻たたきされてもらうでく〜。」

「畜生この悪魔がー!!」

奏はそう言いながら参考書を読むことと相まった。

そして翼はシズナを見るとシズナはにこりと笑っていた。

恐らくは奏も一緒にいれば精神的苦痛が軽減されるんじゃないかというシズナの思いやりに翼は心の中でこう思っていた。

「(ありがたいなごございますシズナさん。)  
そう思いながら2人は勉強を始めた。

# アイドルが来た!

それから2週間後。

翼と奏はシズナの運転する車と共に鬼塔がいる製造工場に入った。

「すげえ……まるで要塞だな。」

「ああ、然しここ迄大掛かりな武器を所有する辺りやはりここは

『斑鳩グループ』にとつて重要なのだろうな。」

「当たり前やで、ここは『戦術機』の製造拠点。『女性権利主張団体』の襲撃が後絶たんからこうやって重武装化しているっていう話やで。」

シズナがそう言つて駐車場に向かっているとある男性が見えたのでシズナは窓を開けてこう聞いた。

「アンタが『鬼塔 久三』はんか?」

「ええそうです。そういうあなたが『遠藤 シズナ』さんですね?」

「そうや、そんで『ツヴァイ・ウイング』も一緒や!」

そう言つて後ろの席を見てみると確かにいた。

そして鬼塔は翼と奏に向けてこう言つた。

「ようこそ、私がここの開発責任者の『鬼塔 久三』だ。君達の機体は既に整備室に格納されているから先ずはお茶でも。」

そう言つて鬼塔は2人を研究所にある待合室に案内した。

「ここがそうです、既に息子がセッティングしていますので。」

「息子ハンがおられるんですか？」

「ええまあ、と言つても私は未婚であの子は引き取つたんですけど

あの子には未だその事話していないもので。」

内緒ですよとそう言うので鬼塔が扉を開けたその先には宗壺が

お茶とお菓子を用意していたのだが翼は宗壺を見て・・・目を大きく見開いて



こう呟いた。

「・・・一夏・・・!!」

そう呟くが宗壱は自身の名を名乗った。

「一夏?俺は宗壱ですけど?」

「・・・あ・・・スママセン、人違いでして!」

「イヤイヤ良いですよそんなのって言うかアイドルに頭を下げられたなんて知られたら俺粛清されかねないので良いですって!!」

宗壺は翼に向けて慌ててそう言うのと久三は宗壺に向けてこう言った。

「あれ？何かあったのか？？まあ良いけど宗壺、お前も残りなさい

ここで話があるから。」

「あ・・うん。」

「?。」

翼と奏は何でとそう思っていると久三は2人に座る様に促した。

「それじゃあ座って座って、宗壺も。」

そう言うって3人が座るともう一つの席にシズナが座るとさてとと言うって

2人に向けてこう言った。

「それじゃあ翼さんと奏さんには専用機が配られるけどこの機体は

ウチの機体であると同時に日本政府の所属となります。そうなった場合

有事の際には出撃となるのでご容赦を。」

それを聞いて2人はこくりと頷くと久三はこう説明した。

「それではまず翼さんに与えられる機体は『蒼羽場斬』、

近接格闘型の I S です。」

それを聞いて翼は資料を確認した。

資料には式本の刀と銃剣が一丁装備されていた。

「次に奏さんに与えられる機体は『橙天槍』、高機動型で飛行性能は折り紙付きです。」

それを聞いて奏も資料を見てみるとマシンガンが一丁、シザーシールドと大型の槍が一本装備された機体である。

「まずは『蒼羽場斬』ですが第三世代兵装としてあげられるのはプラズマを使った高周波振動刀です。こいつは光学兵器に対抗できます。」

「そして『橙天槍』は可変機構が採用されていまして第三世代兵装は槍と盾を合体させてそれをアンロックユニットに搭載させれば同じ様に振動波によつて機体の残像を作る事が可能となっております。」

後は慣れですねとそう言うとしズナがこう聞いた。  
「ほんで?こいつはライブでも使えるんかいな?」

そう聞くと久三はこう答えた。

「ええ、武装は全てオミットされますがライブは出来ますよ。」

「よっしゃー!これでI-Sを使ったツアー内容が出来るわくわく!!」

シズナはそう言つて喜んでいるが翼は何やら浮かない顔をしているので宗壺は何でだろうと思つてこう聞いた。

「あのう・・・どうかなされましたか?」

「ああ・・・いいえ、何でもありません。」

「？」

宗吉は翼の表情を見てどうしたんだろうとそう思っていると久三がこう言った。

「それじゃあ整備室に行きますか。」

「へえ、こいつがねえ。何だかカッコいいな！」

「これが私の。」

奏と翼は互いにそう言いながら自分の機体を見てるとシズナがこう切り出した。

「本じゃ先ずはこいつを使って訓練らしいけど教師は誰なん?」

「ああ、それでしたらこちらの戦術機部隊の人がやりますので。」

それを聞いてシズナはそうかというのと2人に向けてこう言った。

「ほなそれやったら1週間後にまた来るからちゃんとやるんやでえ?」

シズナはそう言つて立ち去つて行くのを見て久三は2人に向けてこう言った。

「それじゃあ訓練に入ろうか。」

そして夜。

本来ならば寝ているはずの翼であったが何だか寝付けない様子で外を歩いていた。

「(またISか・・・もうこいつとは関わらないと思っていたのになあ。)」  
そう思いながら翼は右手に付けられた剣の形をした腕輪を見ていた。

「(私は結局あの人の関係者なのかもな・・・)」  
翼はそう思いながら自嘲しているところある事に気づいた。

「?・あそこは未だ開いているのか?」

実験棟の一つが未だ明るいのので何でだろうと思つて近づいた。

それが運命何だと分からないまま。

## 出会い

「もう夜なのに・・・まだ仕事しているのか??」

翼はそう言いながら実験棟の出入り口は・・・閉まっていたため

裏口から入って暫くしてある部屋に明かりがあるのが分かって少し扉を開けて中に入ると目にしたのは・・・。

「え?・・・男がISを・・・動かしてる?」

そう、動かしているのだ。

自身の想い人とそっくりの男性が・・・ISを。

灰色に近い黒の機体が縦横無尽に飛び回って機体を動かしていた。

そんな中で久三がいるのを見て翼は何で彼もとそう思っていると機体の動きが



何故か変わった。

機体背面部にある大型のウイングから六基のソードビットが舞い踊ってバルーンを貫くと今度は腰に装備されているハンドガンで撃ち落としながら

バスターソードを使用して薙ぎ払うというシンプルなものであったがそれでも……美しかった。

何一つ迷いのない剣筋に翼は呆けていて……つい人前に姿を現した瞬間に……宗壺が久三に向けて通信した。

『父さん！誰かがいる！！出入り口に！！』

「はあ！……一体誰……翼さん？」

「あ。」

あの後何見たのかを聞かれた翼は少しして答えた後でこう聞いた。

「あのう・・・彼は」

「ああ、間違いなく動かされるんだよあの子。」

「一体どうして」

「私にも分からない、だが一つだけ言えると言うならば・・・

あの子の存在は間違いなく第二の白騎士になると言っても過言ではないだろうね。」

「・・・確かにそうですね。」

翼はそれを聞いて確かにとそう思っていた。

嘗て白騎士事件の一件で世界の軍事字状は様変わりして

今やパワードスーツや新兵器・IS開発などである意味で今の日本は

ライセンス生産等でウハウハなのだ。

そして女尊男卑と言う酷い風潮が海外では主にEUで蔓延しており

もし万が一発覚したら彼を神輿にするという輩や暗殺すると言った面々が

出るかもしれない。

幾ら要塞の様な施設と化したこの斑鳩グループも只では済まないだろう。というかこれ以上火種は増やしたくないという所が本音であろう。

すると久三が翼に向けてこう言った。

「まあ見た以上は内緒に……無理だよなあアイドルだと色々との見の周りの報告とかをネットでもやるもんだからどうしたもんか」

「あの……私黙っています。」

「……へ？」

久三はそれを聞いて顔は何でと思っているが内心はこうであった。

「(だよねえ！この子だって秘密あるし僕知っているし!!)」

「私には秘密がありますし誰もが持っていますから私は黙っています。」

「そうか……良かったー。(本当に良かったー!!)」

内心マジで喜んでる久三であった。

そして久三は着替え終わった宗壺に向けてこう言った。

「それじゃあ宗壺、彼女を部屋まで送って言うてくれるか？父さんはこれから残業している皆と会議するから。」

「うん、お休み父さん。」

「ああ、お休み。」

久三は宗壱に向けて笑顔でそういうのを見て翼は少しだが・・・羨ましそうな表情を浮かべていた。

「済まないな送って貰って。」

「いや良いって、女の子がこんな夜中に一人でいるのがあぶねえだろ？」

「ここは敷地内だぞ？」

「だけど万が一って事があるだろう？そう言う時に備えて行動するようになって

父さんが耳に聒胝が出来る程教えてもらったからな。」

「ふふ、良いお父さんだな。」

「ああ、俺の自慢の父さんだ！」

満面の笑みを浮かべる宗壺を見て笑顔で笑っている翼を見て少し赤面している宗壺は翼を見てこう思っていた。

「(本当に綺麗だよなあ、同じ年なんて思えねえよなあ。)」

そう思うが当たり前であろう。

スタイルは間違いなく奏よりも上で特にバストサイズに至っては間違いなく同い年の女子よりも間違いなく大きい。

それに伴い偶にだが一緒にグラビア何かにも出ている程だ。

それを知っている宗壺からしたら高嶺の花とも思える程の少女と歩いている事には驚愕とも言えよう。

そして宗壺はそう言えばと思っただけ聞いていた。

「そう言えば俺の事を『一夏』って呼んでいたけど

俺とそいつそんなに似ているのか？」

そう聞くと翼はこう答えた。

「ああ、本当に似ている！実際双子かと思えるほどにな。」

「へえ、会ってみたいなあ。」

「そうか・・・なあ。」

「?何か煮え切れないような言葉だけどうしたんだ?」

宗壺はそう聞くと翼はこう答えた。

「・・・昔私は虐められていてな、その時に助けてくれたのが一夏で

私も慕っていたんだ・・・いたんだが。」

「?」

「離れてアイドルになって今となつてはだがアイツの見る目はまるで・・・

画面の向こうにいる誰かを見ているかのような・・・そんな感じだったんだ。」

「へえ・・・」

「だがお前は違う、私をちゃんと見ている。真つすぐに私を。」

「普通はそうだろ?」

「ああ、普通だったな。」

翼はそれを聞いて確かにとそう答えると部屋の前に着いたので宗壺と別れる前にこ

う言った。

「それじゃあ・・・これから宜しくな。」

「ああ、こつちこそ。」

宗壺と翼は互いにそう言って別れた。

互いに・・・仲間と呼ばれる関係となるまでそう時間はかからないであろう。

## 嘘だろうと思う事は必ず起こる

それからと言うもの奏と翼は I S の訓練や勉強等を集中的に（特に奏）行い機体調整も念入りに行っていた。

そして宗壺の方も順調に捗っており発表出来る位の完成度迄仕上げていた。

それだけではなく全ての機体の強化兵装なども製造し始めており少しずつであるが機体に装備されていくこととなっている。

そんな中で久三はコーヒーを飲みながら《灰戦騎》の兵装を眺めていた。

これらを基に新たな兵装を作るためという大義名分（実際は眺めていただけ）で見ていると久三はこう思っていた。

「（社長の話によれば I S 学園の学園長とも話はあるから卒業後に発表されるって事が決まったし進路についての入学金は奨学金で何とするって言ってたし後は荷造りに必要な物資の運び出しの準備ぐらいだな。」

そう思いながら更にこう続けた。

「（思えばあの子を育てて15年、色々あったけどそれなりに充実した

毎日だったなー、3年・・・長期休暇除いてもあの子と一緒に暮らせるのは



もうあと僅かか。」

なんだか寂しくなるなあと思いつながらコーヒーを飲んでいると……斑鳩から電話が来たので受話器を取った。

「はい社長、どうしましたか？」

『貴様の所にテレビあるな？』

「ええありますけど何かありましたか？」

『点けて見ろ。』

「？」

何だろうと思って点けて見るととある情報が流れてきた。

その内容は……これだ。

『世界発の男性 I S 操縦者発見！名前は《織斑一夏》！！！』

「ぶふー!!」

とんでもないニュースを見て久三はコーヒーを噴出したがそれだけではなかった。

その相手が正に……宗壺と瓜二つに程近い人間なのだ。

「ちよ!?!何ですかこれって言うか宗壺と殆どそっくり……まさか!?!」

『ああ、恐らくは例の計画の生き残りだろうな。』

「マジかよ……こんなの明らかにしたら風鳴さんも只じゃ。」

『確かに、それとだがその風鳴殿からだがお主の息子についてデ報告するそうだ。』

「ちよつと待つて下さいよ!あの計画がバレるってさつき」

『いや、所詮は似た人間として片す。それに今公表してもそこに宗壺を匿えれば安全だし先ほどの少年は千冬殿の家に置いておき二十四時間監視させるために更識を派遣するそうだ。』

「あの有名な対暗部組織ですか……厄介な事になりそうだなあ。」

『まあな、だが今後の事考え我がグループからも護衛部門の連中を

派遣させよう。……大人の我儘に子供を巻き込ませるのは如何せんな。』

「ええ……本当ですよ。」

その後鬼塔宗壺の存在が世界にバレたのはそれからすぐの事であった。

「本当に濟まない宗壺！この埋め合わせはちやんとするから!!」

「いや良いよ父さん、俺は気にしていかないしって言うか友達からは

『女子校に通えるなんて羨まシネ!!』何て言われてるしな。」

「アハハ・・・それもどうかと思うけどな。」

久三はその友達はまだ半分は冗談であろうなとそう思いながら今後の事を考えていた。

「(やれやれ・・・これからどうなる事やら。)」

そう思いながら夕焼けを眺めていた。

## 世界の反応

そんな光景を見ていたのは世界中にいたのでそれらを紹介しよう。  
先ずは日本。

「一夏がISに？」

翼はそれを聞いて目を丸くしていたが対して驚いていなかった。

「となると宗壺もという事になるな、まあ私はまた奏と宗壺といられるなら  
どうでも良いがな。」

すつかり一夏に対して冷めきった感じの翼は席から立ち上がってこう言った。

「さてと、そろそろ呼ばれるな。今日中に収録を終わらせないと。」

そう言つて待合室から出て行つた。

「男性のIS操縦者、私も専用機があつたら・・・あそこに行つていたのかな？」

少女はそう言いながら部屋でテレビを見ていた。

水色の髪を内側に撥ねている眼鏡を付けた少女はテレビを消すと

電話が鳴ったので取ってみると電話の主はこう言った。

『更識特別少尉、例の機体が完成した。4月から訓練に入ってくれ。』

「了解しました。」

そう言つて電話を切つて写真を見た。

そこに写つていたのは・・・嘗て仲の良かった姉妹であつた写真。

あの日を境に疎遠になつたがもう関係ないと言わんばかりに写真立てを倒して見えない様にして部屋から出て行つた。

イギリス。

「男がI.Sを扱うなど・・・何と汚らわしい！そうでしょうチェルシー!!」

「・・・ハイ、お嬢様。ですが話して見れば良いお友達に」

「なれる訳ありませんわ!!男など下賤な存在ですわ!!」

そう言って歩いて行く少女を見て赤髪の少し年上の少女はこう思っていた。

「(このままでとあの子は最悪全てを失う事になってしまおう!この国も・・・

このままでとあの子を利用してでもしたら・・・最悪彼らに協力を

仰ぐしか・・・!!)」

そう思いながら少女は空を・・・星を眺めていた。

フランス

「へえ、男性IS操縦者ねえ、まあ私には関係ないか。」

そう言いながら金髪の少女はテレビを見てると・・・声が聞こえた。

「おい何やってんだ『S』!スコールが呼んでるぜ!」

「ハイハイ今行くよ『オータム』さん。」

そう言いながら少女はテレビを消して部屋の向こうにいる女性の所に

向かって行った。

中国

「何でヨ！どうして私がI S学園に行けないのよ!？」

中国軍作戦司令部の一角で問い詰めている茶髪のツインテールの少女が頭の髪が後退している男性とちよび髭を生やしている男性に聞くが頭が後退している男性がこう答えた。

「いや、君が言っていたではないか？『I S学園、ハン！受ける訳ないじゃないの!?!』と言っていたよな？」

「仰る通りで。」



「気が変わったのよ!」

「そう言われてもこちらにも順序があるしそれに今行ったとしても入学式には間に合わないしなあ?」

「その通りで。」

男たちは少しあざけわらったような感じでそう言うよ……。

ガン!と壁から音が聞こえた。

振り向くと何と……壁に穴が開いていたのだ。

そして視線の先にいたのは……ISの腕部パーツを部分展開している先ほどの少女がニコリと……少し影が入った笑顔をしてこう聞いた。

「どうにかして下さい? オジサマ。」

それを聞くと2人は顔を青くしてこう言った。

「わ……分かった、何とか手を尽くそう。」

「……………」

「ありがとうございますー!!」

そう言つて笑顔で立ち去るのを見て未恐ろしく感じたのかこう呟いた。

「今どきの子とは……何を考えているのか分からんな?」

「おっしやる通りで・・・。」

「(待ってなさいよー!! 一夏!!)」

ドイツ

屋上にて銀髪の少女が空を眺めていた。

隣には小型のテレビで織斑一夏についての特集を見るや否や嫌な顔をして消して空を眺めていた。

「・・・教官。」

そう呟きながら空を・・・夜空を眺めていると・・・自身の上に影が出来た。

何だと思つて目を開けるそこで目に映つたのは・・・胸の谷間であつた。

・・・いや、何言つてんだと思つているようだが本当なのだ。

そして少女は少し視線を更の上に向けると顔が見えた。

人懐っこそうな顔。

紅い目。

自身と同じ銀髪に兎の耳みたいなリボン。

すると少女の上にいる・・・もう一人の少女がこう言つた。

「ラウラ、見つけた〜♪」

ニコニコとそういう少女を見て少女ラウラはこう答えた。

「何だお前か『エルム・M・ハインリヒ』。」

何の用だとそう聞くと『エルム・M・ハインリヒ』はこう答えた。

「ああそうそう、私 I S 学園に向かう事になったでしょう?」

「ああ、私の機体をベースにした『ズイーベン』を使うのであるろう?」

「そうそう!それで私にさ、『織斑一夏』又は『鬼塔宗壺』にコンタクトを掛けてみるって言われているからさ!それでラウラにアドバイス聞こうと思つててさささ!!」

どうしようかなあと聞くとラウラはこう答えた。

「簡単だ、その無駄な乳で誘惑してみろ?男は簡単に堕ちるぞ?」

「ブ~~~~そんなんじゃないよ~~~~!お友達としてなれないかなあつて事  
なんだけどさ!!」

「知った事か、軍にいる以上は任務を忠実にこなす事だが一つだけ  
言っておくぞ。」

「?」

そういうとラウラはこう答えた。

「『織斑一夏』は私は葬る相手だ、もしそいつと仲良くするようならば

「貴様も潰すぞ。」

良いなと言うとエルムはコクコクと黙って頷くとラウラはこう締めくくった。

「分かったならばさっさと荷造りでもしておけ、さっさとな。」

「ハ〜い。」

そう言つてエルムは立ち去るとラウラは空を見上げてこう呟いた。

「『織斑一夏』・・・教官の恥さらし、必ず貴様を悉く消し潰してやる。」

そして再び日本

「何だよ・・・これ？」

テレビを映すとそこには自身と瓜二つの・・・『鬼塔宗壺』の写真を見ると顔を青くしていた。

そう、自身と・・・織斑一夏と瓜二つなのだ。

いや、重要なのはそれではなかった。

重要なのは・・・これだ。

「何でアイツが生きてんだよ！アイツは死んだはずだろう!？」

「それで俺が『織斑一夏』に成り代わったはずじゃなかったのかよ!？」

大声でそういうと落ち着いた感じになってこう呟いた。

「いや、慌てるな俺。俺は原作よりも強いんだ『織斑千冬』と同格の体力と『篠ノ之束』と同じ頭脳って言う……『転生特典』があるんだ、そうだ……

俺は最強なんだ……そして俺のハーレムが実現するんだよー!!」

アハハハツハと笑い声が聞こえるが彼は未だ知らない。

既に戦術機がある時点でこの世界は原作ではない事に。

そう……変わってしまったのだ。

人も、世界も……そして運命も。

## I S 学園

「こいつが2人目か。」

そう言っているウルフヘアーの美人な女性の名前はブリュンヒルデ

『織斑千冬』であるのだが斑鳩グループからの紹介で映っている宗壺の写真を見て驚いているが千冬はこう続けた。

『斑鳩グループ』・・・最近では軌道エレベーターの建造計画にも

携わっている程の多角経営グループ。戦術機を作って兵器産業においても影響力が強いが・・・だがこいつは・・・いやまさかな。」

そう言つて千冬は宗壺の写真を見て何か思ったような感じであるが意識を

切り替えてクラスの写真を見ていたが・・・この考えが真実であったと

分かった時には世界が変わっていく事に気づいた後であった。



さあ、舞台は整ったぞ。

役者は集い、道化と歌姫、そして主人公が集う I S 学園が・・・新たな舞台だ。

## 自己紹介

4月1日

この日IIS学園に新たな生徒が来た。

各国から選ばれた生徒や日本国内において高い倍率を誇りながらも潜り抜けた正に猛者とも言つても良い面々である。

そんな中で一年一組の教室では若い女性の声が聞こえた。

「全員揃つてますねー。それじゃあSHR（ショートホームルーム）を始めますよー。」

そういうのは平均よりやや低めの身長で生徒たちとあまり変わらない位でありややダボツとした私服に加えてやや大きめの黒縁眼鏡をかけているのを見て

顔だけ見れば『子供が無理して大人の服を着ている』という感じに

見えそうにないが・・・顔の下・・・胸ら辺で考えを改める人間が多いであろう。

服越しから見ても分かる程の爆乳が目の前でバルンと揺れていたのだ。

そんな中で女性是这样続けた。

「それではみなさん、一年間宜しくお願ひしますね。」

そういう中で・・・イレギュラーが一人いた。

そう・・・IS学園は本来女学校なのだが今年はどうではないのだ。今年には2人も男子生徒が来ているため内容が異なってしまうのだ。

そんな人間の片割れでもある・・・織斑一夏はこう思っていた。

「(等々本編の始まりだ・・・ここで俺は活躍してヒロインは全員

俺のハーレムだ！それにしてもアニメとかで見えていたけど山田先生の胸って本当にでけえよなあ。顔ぐらいいはあるんじゃないかおい?)」

そう思いながら織斑一夏は山田先生の胸をバレない様に見ている中で全員が織斑一夏を凝視していて反応が無い為に山田先生は少し涙目になってこう言った。

「じゃ・・・じゃあ自己紹介をお願いしますね、えつと出席番号順で。」

そう言っただけで最初の生徒が挨拶している中で織斑一夏はとある少女を探していた。

その人間とは・・・。

「(それにしてもどっちも見渡しても筈がないじゃねえかよおい!

どうなってるだ?まさか入学すらしてねえって訳じゃないよなおい!!)」

そう思っていると・・・目の前で声が聞こえた。

「・・・君、織斑一夏君」

「は、ハイ!？」

山田先生の声を聴いて織斑一夏は飛び起きるかのように声を上げると山田先生は慌てながらこう続けた。

「ア、あのゴメンね大声出しちゃって、あ、怒ってる?でもねあのね、

出席番号で今『お』が付く織斑君なんだけどだからゴメンね?」

自己紹介してくれる・・・かなあ?」

そう言いながら山田先生は胸の谷間を見せつけるかのようにそう聞くと

織斑一夏はそれを見てごちそうさまとそう思いながらこう続けた。

「イヤスママセン山田先生。そんなに謝らなくても良いんですよ?」

俺が聞いていなかったのが悪いんですから。」

そう言つてニヒルなスマイルを醸しながら織斑一夏は自己紹介した。

「初めまして、『織斑一夏』です。得意な事は体を動かすことと料理、うっかりISを触ってしまった事からここに来てしまいました。が

これから一年宜しくお願いします。」

それを聞いて黄色い声上がるが織斑一夏は内心こう思っていた。

「へへへ、ちよろいちよろい。直ぐにこれだぜ、先ずは箒を後回しにして

今日の前にいる・・・あの女だ。」

そう思いながら織斑一夏は金髪のロングの美少女を見ていた。すると後ろから声が聞こえた。

「ほー、貴様にしては上出来な方だな。」

「あ、千冬姉って痛！」

「織斑先生だ。」

そう言つて女性『織斑千冬』は織斑一夏の頭部目掛けて出席簿を頭に見事命中させると女性がこう聞いた。

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けて済まなかつたな。」

「いいえ、副担任としてこれくらいはしないと・・・。」

山田先生がそう答えると織斑千冬が全員に向けて自己紹介をした。

「諸君、私が織斑千冬だ。君達新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが私の仕事であるが私のいう事をよく聞き理解しろ。出来ないものには出来る迄指導してやるが私のいう事を聞け。良いな？」

そう言っている・・・教室全体で声が響き渡つた。

「キヤアアアアアアア！千冬様、本物の千冬様よ!!」

「ずっとファンでした。」

「私、お姉さまに憧れて福岡からこの学園に来たんです!!」

「あの千冬様にご指導頂けるなんて嬉しいです!」

「私、お姉さまの為ならば死ねます!」

きやいきやいと騒ぐ女生徒達を尻目に千冬はこう呟いた。

「・・・毎年のこととはいえ良くこれだけの馬鹿者が集まるものだ、感心させられるが私のクラスだけではないよな?」

凄く鬱陶しいそうな表情でそういう千冬の言葉を聞いて・・・  
更にヒートアップした。

「キヤアアアアアアア!お姉さま、もっと叱って罵って!!」

「時には優しくして!」

「そして付け上がらない様に躰をして〜!」

何だか後半は個人のあれが駄々洩れしているがそれを聞いている千冬はもうどうにでもしてくれと言う表情であった。

さてとと言って千冬は全員に向けてこう言った。

「ざっと、SHR（ショートホームルーム）は終わりとする。

諸君らにはこれから半月の間でISの基礎知識を叩きこませた後で同じく基本動作

を染み込ませるが返事はちゃんとしろ。私の言葉には絶対に答えろ？良いな！」

『『『『ハイ！！！！』』』』

それを聞いて女生徒達は口を揃えてそう答えた。

そしてこの自己紹介は・・・他でも続いた。

## 自己紹介。②

千冬が現れている中で一夏が探していた筈はと言うと……。

## 1年三組

「諸君初めましてと言っておこう。私が貴様らの担任となった

『ヴェレッタ・ヌウ』だ。」

この褐色の肌に銀髪の髪に片方は前に目を隠すかのように長く後ろに束ねた彼女はアメリカ代表だった『ヴェレッタ・ヌウ』。

機体は『アラクネ』だったIS操縦者で同時に軍部にも所属していたが

第二回に於いて敗北後一線を退いて教職に就いた。

「科目は実習が主だが貴様らは未だ未熟者ばかりだ、故に半年で基礎講習を受けて貰うが分からないことがあれば何でも言ってくれ。分かるまで教えてやる。」

「ハイ！『天羽 奏』。19歳で皆よりも年上だけどアタシは皆と同じラインからのス



タート……って言うか分からない事があつた時は教えて欲しいなあなんて。ああ趣味は体を動かす事だ。」

そういうと辺りで……黄色い声援が巻き起こつた。

「見てみて！奏さんよ！」

「あの『ツヴァイウイング』の?!」

「私CD持つてる！」

「後でサイン下さーいー!!」

そういうと『ヴィレッタ』は全員に向けてこう言った。

「ほら貴様ら！そういうのは後でするとして自己紹介がまだ終わっていないぞ！」

そう言つて更に他からの自己紹介が終わりそして……。

「『星音 翼』だ。皆と同年だ。趣味は奏と同じく体を動かす事だが……

宜しく願います。」

翼はぎこちない様子で自己紹介すると……更にヒートアップした。

「星音さんってまさか!?!」

「ちよつとウソ！ツヴァイウイングが集結している!!」

「もう私ここで死んでも悔いはないわ!!」

「お前ら死ぬならその前にさっさと落ち着け。」

ヴィレッタはそう言って周りの女生徒を宥めているが・・・正直な所面倒くさそうな表情であつた。

全くと言ってヴィレッタは全員に向けてこう言つた。

「それでは終わったら授業に入る、教科書を準備するように。」

そして1年四組

「これは・・・キツイ、滅茶苦茶に・・・キツイ。」

宗壺はそう言って・・・教卓の真正面にある電子黒板を眺めているが  
後ろの女生徒達の圧に正直な所・・・グロッキーになっていた。

そんな中で教師が現れた。

「初めましてと言っておこう。私が貴様らの教師である

『ファイカーツィア・ラトロワ』だ。覚えておくように」

淡々とした少し厳しそうな表情をするこの金髪の女性は

第一回ロシア国家代表生の『ファイカーツィア・ラトロワ』、

結婚して退役したのだがIS学園が出来て暫く経って夫の会社の都合で

一緒に来日して以降は友人に紹介されてここに入ったのだ。

夫と息子はこの学園から近くにある団地に住んでいるためラトロワは

そこから通っている。

本人は最初は乗り気ではなかったが教導している間にこう言うのも悪くないと

考えていたりする。

そしてラトロワは全員に向けてこう言った。

「君たちは今日から入学したてだが、中学からISの基礎知識を学んでいると聞いているがここではさらに専門的な事を学ぶこととなるのだが・・・」

中には初心者レベルもいると言う訳だ」

そう言つてラトロワは宗壺に目を向けるところが続けた。

「よつて簡単な所・・・諸君からすれば復習と何ら変わらないと思う用であるが専門的私見から見た講義とそうでないとは見方が異なる為君たちにとつても

—にはならないと考えてくれ。其れではまずは自己紹介を始める。」

そう言つて自己紹介が始まり暫くして・・・鬼塔の番が来たので立ち上がったと言つた。

『鬼塔宗壺』です。趣味は料理と陸上。ええと・・・ISを動かせるつて分かつてしまつてからは一応勉強したつもりですけど未だ分からない所がありますので・・・どうかよろしくお願いいたします！」

そう言つて頭を下げる宗壺を見て周りは何やら・・・ひそひそ話が聞こえた。

「あの子があなの？」

「鬼塔つてもしかしてあなの戦術機の？」

「同姓じゃないの？」

「けどそんな名前そう簡単には」

そう聞いていると・・・とある女生徒がこう聞いた。

「質問く、鬼塔つてもしかして『鬼塔久三』さんの親戚か何かですか〜?」

そう聞いたのは・・・エルムであつた。

そんなエルムを見て周りはいくも喋つていた。

「あの子何処の子?」

「綺麗な髪。」

「何あの胸!何かツプあるのよ!」

そういう中(何人かは羨望の眼差しを向けている)で宗吉はまあ良いかと思つてこう答えた。

「ああ、はい。『鬼塔久三』は俺の父親です。」

それを聞いて生徒一同が・・・驚いた。

『『ええええええええええええええええええ!』』』

「あの『鬼塔久三』の息子さん!!」

「嘘!有名じゃないの!」

「どうしよう私変じゃない!!」

「女尊男卑に差し迫った世界に数穴を開けた救世主!!」

「けどEUはそうじゃないはずだよ?」

「噂よ噂。」

互いにそう言っている中でラトロワは宗壺に向けてこう言った。

「全く、そういうのは言わなくて良いだろう?皆騒ぎ経っているぞ。」

「スミマセン。」

「まあ良い、それでは・・・次はお前だ。」

ラトロワは宗壺に注意した後、エルムに目を向けるとエルムはこう答えた。

「初めまして、『エルム・M・ハインリヒ』。ドイツの代表候補生です!」

得意な事は嫌な事は直ぐに忘れられることです!」

以上とそういうと質問が入った。

「はい、エルムさんに質問です。」

「はいどうぞ!」

「胸のサイズは幾つですか?」

「ああはい、胸のサイズは」

「そういうのは男子がいないうきにやれ。」

「ラトロワはエルムに向けてそう注意した後、席に座らせるところ言った。それでは授業を始める。」

## クラス長決め

「そういえば聞いた？イギリスの代表候補生と織斑一夏君が次の月曜日に模擬戦を行うって。」

「ええ？何で??」

「何でもさ、イギリスの代表候補生が日本を侮辱するような事を言つて決闘騒動になつたんだって。」

「けどよくそんな事言えるわね？織斑先生がいるのに。」

「その織斑先生がイギリスの代表候補生に対して代表候補生としての基礎講座をここで受け直させているんだって、放課後かららしいよ?」

「全く馬鹿ねその子。それで、同郷の子は何て?」

「今謝り歩いているようだけど最悪って事も。」

「全く、イギリスの代表候補生はどういう教育を受けていたのやら?」



「何だか凄い話になってるな？翼さん。」

「ああ、間違いなく学園中の話題になってるが内容次第ではイギリスも只ではすむ筈がないと思いたいがな。」

「何せ今のイギリスは女尊男卑の総本山扱いになってるし議会もそいつらのシンパが殆ど全員だから注意もしないだろうな。」

「それにしてもまあ・・・私と宗壺君もだけどね。」

宗壺、翼、奏、そして・・・エルムが互いにそう言いながら食事をしているがそう・・・宗壺も同じなの。

全ての始まりは2時間目の前である。

「それでは各種武装の説明と行きたいところだがクラス代表を決めたいと思おう。」

ラトロワがそう言つて全員に向けて説明した。

「クラス代表とは・・・まあ早い話がクラス長だな。月末に行われるクラス対抗戦の出場だけではなく生徒会の会議や委員会の出席となっている。

尚一年間は変えられないので全員よく考えて決める・・・この際だ、

生徒手帳に誰を入れるかのデータを貴様らに送信するからそれで決めてくれ。」

そう言つて送られた情報からクラス全員の名前が出ると

それぞれデータを送信すると黒板型のディスプレイから表示されるとこれが出た。

鬼頭宗壺 15票

エルク・M・ハインリヒ 15票

「え!?!俺!!」

「あれ?私が出てる?」

宗壺とエルムが互いにそういうとラトロワは2人を指名して立たせると  
こう聞いた。

「さてと、民主主義によればこの場合は多数の決定におけるものであり  
決選投票にもつれ込むこととなるようだが貴様らは専用機持ちである事から・・・分  
かっているな?」

ラトロワはニヤリと2人に向けてそう聞くと生徒の一人がこう聞いた。

「あのうラトロワ先生、質問が?」

「何だ?」

「鬼頭君も専用機持ち何ですか?」

そう聞くとラトロワはこう答えた。

「ああそうだ、何せ男性IS操縦者だからな。用心の為に持っていても  
不思議ではあるまい?」

そういうと鬼頭を見て互いにこう言った。

「良いなあ、専用機。」

「私も欲しいなあ。」

そう言うが宗壺はこう反論した。

「そんなこと言っても専用機持っていたら持っていたで大変なんだぜ？」

機体の調整は俺が毎回調整しなきゃあいけないしそれにレポートを纏めて

兵装の確認も自分なんだぜ？それだったらなあ。」

「まあそうかも知れんがそれでも色々と特典が付いていると思えばなあ。」

宗壺の言葉に対してラトロワは少し遠い目をしてそう言っていた。

そしてラトロワは2人に向けてこう提案した。

「それではだ、来週の月曜日の1500に第5アリーナにて試合を

行うとしよう。第5アリーナは学園の左下にある海際である為送れない様に。」

それでは授業といくぞと言って授業が始まった。

「そういえばそつちはどうなんだ？」

宗壺が翼に向けてそう聞くと奏がこう答えた。

「ああ、翼がなつたぜ。」

「へえそうなんだ。」

宗壺は翼を見てそう聞くが翼はこう答えた。

「私は奏が良いと言っただがな。」

「だってよ、アタシは皆よりも確かに年上だけどさ。それでもアタシよりも

頑張り屋な翼の方がうってつけて思っただのさ。」

奏はそう言つて翼の頭を撫でてしていると翼は唇を尖らせてこう聞いた。

「そういつて本当は面倒くさいって理由だろう？」

「・・・ナンノコトカナ？イミガワカラナイヨ」

「片言で答えるな！」

翼は奏に向けてそう言うど・・・声が聞こえた。

「箒?」

「!!」

翼はその声を聴いて目を見開いて見てみると目の前にいたのは・・・  
織斑一夏であった。

「箒?」

宗壱はそれを聞いてどうしたんだと思っているが織斑一夏は翼に向けて  
こう続けた。

「やっぱり箒じゃないか?懐かしいな6年ぶりかな?見違えた」

「済まないが人違いだ。私は『星音 翼』だ。」

「何言ってるんだよ箒?俺だよ俺、ほら『篠ノ之』」

「人違いだと言っている。」

「何初対面みたいな口調なんだよ？ほら？幼馴染の」

「本人が違うって言ってるんだから別に良いだろう？」

「お前確か・・・『鬼塔宗壱』だったな。」

「だったら何だよ？」

「どいてくれないか？俺は『箒』と話したいんだ。」

「翼さんが嫌がっているんだ、無理やり話すような奴の言う事なんて聞きたくないな。」

「何だと・・・!!」

織斑一夏はそれを聞いて少しぎろりと睨みつけるが奏も参戦してこう言った。

「こいつは『星音 翼』だ。アンタの言う奴はいないしこいつが違うって

言ってるんだから違うんだ。近づかないでくれるか？」

「アンタ何様のつもりだ！」

「アタシはこいつの相棒だ！相棒を見捨てる程屑じゃない!!」

「奏」

翼はそれを聞いてウルリトシテいると周りの視線が集まり始めたのか織斑一夏は少し離れてこう言った。

「まあ、今日はこれくらいにするけどまたな筈。」

そう言って立ち去って行くがエルムは宗壺に向けてこう言った。

「アイツなんか嫌い、自分中心って感じ。」

「ああ俺もだ。」



「何だよあの野郎！俺と同じ顔にしやがってあの偽物野郎が!!」

今に見てろよ・・・けちよんけちよんにしてやる・・・それにしても

あの銀髪の女は原作にはいなかったけど結構いい女だったなあ・・・それにあの胸山田先生以上だったな・・・アイツも俺の力で惚れさせてやる。」

ククククとそう笑いながら食事を始めた。

## 放課後。

織斑一夏の介入があったことを除けば比較的（来週戦闘になるが）穏やかな一日を過ごした宗壺は放課後ラトロワからこう言われた。

「放課後残っている。大事な話がある。」

そう言われて教室に残っているのだ。

そして暫くして・・・ラトロワが教室に入ってこう言った。

「鬼塔、貴様の今後について説明がある。」

そう言つて席に座らせるとラトロワは対面に座る様に生徒の椅子に座るとこう続けた。

「貴様は確か1週間は斑鳩グループが運営するホテルに宿泊する

予定であつたな。」

「はい、安全上の事を鑑みてと言われましたけどそれが？」

「ああ、だが政府からIS学園に圧力がかかつてな。大事な男性IS操縦者に何かが起こつてはたまつたものではないと言つてきてな。急遽貴様と

織斑一夏には部屋が与えられることとなつてしまつたのだ。」

「ええ?!ですけど荷物とかは」

「そつちは既に斑鳩グループがこつちに配送を終えている。部屋の方は鍵を持っていくからここに向かえ。」

そう言つてラトロワは部屋の鍵を手渡した。

「ええと・・・『1018』か。・・・織斑一夏と同部屋ですか?」

正直な所それは嫌なのだ。

昼食での一件で彼に対して何だかわからないが・・・嫌悪感を感じたのだ。

生理的というよりも・・・根本的なナニカを。

するとラトロワはこう答えた。

「いや、先ほど言つた通り男性のIS操縦者に何かあつたらたまらないと

言っているからな。襲撃とかを考慮して別々になっている。」

「そうですか・・・(良かったー、何せあんなことがあつたから

気まずいんだよなあ。)」

「だが貴様なのだが・・・部屋の調整に手間取つてしまつてどうも同居人がいる。よつて同じ部屋となるのだが一応この教室のクラスメイトだ、・・・

変な気を犯すなよ?」

「いやしませんつて!そんなことしたら俺朝刊のニュースで

スクープされちゃいますよ!!」

父さんの仕事とかもありますしというラトロワはそうかと少し笑いながら続けた。

「さてと、貴様とハインリヒとの試合までについてだが今日の授業を見て

貴様は既に他の連中と大体同じくらいと思つて良いだろうと思つたが

貴様は大丈夫か？」

「アハハ・・・何とかします。」

「全く・・・貴様はもう少し危機感を持ったほうが良いかもしれんな、

ここは一応国立と言うより世界が注目している進学校と言つても過言ではない。

卒業出来ずに留年なんて私は御免だからな。」

そう言つて宗壺を注意した。

何せ世界中のIS操縦者を夢見る少女達が集う事実上の進学校だ。

留年或いは自主退学など年柄年中と言つても良いくらいに少なくなり

現に2, 3年に至つては1年時の半数未満と言つても良いくらいだ。

然しとラトロワは宗壺に向けてこう言つた。

「貴様が努力すればその分結果はついてくる。忘れるな、普段の行いと努力こそそれは未来に於いてかけがえのない財産となるのだ。」

「ハイ。」

「分かればいい。」

そう言いながらラトロワは宗壺の頭を撫でてしていると宗壺はこう聞いた。

「あのう先生……これって」

「ああ済まない、つい息子に対してやってやっていることをしていたな。

何か言った後は必ずこうやってしまうんだ。」

嫌だったかとそう聞くと宗壺はいいえと言つてこう続けた。

「俺母親がいなかったもので、父さんが何時も何か良い事したら

頭を撫でてくれていたんですけど女の子の人からはされたことがなくて。」

そう言うラトロワは少しだが……悲しそうな顔をしていた。

これまで父親からしか愛情を注がれていなかったためか

母親からは無いというのにも関わらずここ迄真人間に育て上げられるとは

中々だなど思いながらも出来ればこの子には寂しい思いはさせたくないなど

そう思っているとラトロワは宗壺に向けてこう締めくくった。

「さてと、長話に付き合ってしまったって済まなかったが報告はもう少しあるから

聞いてくれ。」

「ハイ。」

「夕食は6時から7時の間、寮にある一年生用の食堂で摂ること。自炊がしたければ学園内にある食糧倉庫に行くといい。あそこは

シヨツピングモールの食品売り場並みにあるから菓子や総菜も完備してあるから用がある時は調理場のスタッツフに声を掛けるといい。風呂についてだが各部屋にシャワー室があるからそれを暫く使つて来い、貴様と織斑一夏の大浴場を使う時間設定が決まったら追つて連絡する。」

何か他に聞きたいことがあるかと聞くと宗壺はそれをいいえで答えるとラトロワはこう締めくくつた。

「それではまた明日会おう。」

解散と言つて教室から出て行つて宗壺も遅ればせながら向かつて行つた。

『1018』、『1018』．．．ここか。」

宗彦はそう呟きながら部屋に向かって扉を開けようとするところある事を思い出してこ  
う呟いた。

「あ、そうだった。同居人がいるんだったな。」

そう言つてノックすると．．．声が聞こえた。

「ハ、い、どなた様？」

「今日からここに越してきた『鬼塔宗彦』ですけど同居人ですか？」

「ええええ！鬼塔君!?ちよつと待つて!!」

そう言う．．．何やら間違いなく聞き慣れた声が出ているが

何だかドタバタと音がしたが暫くして．．．扉が開いた。

そこに入っていたのは．．．。

「エルム……さん!？」

「あ、鬼塔君！」

バスローブ姿の……エルムがびしよびしよの髪で立っていた。



## 部屋に入つてWWW

「エルムさん!？」

「あ、鬼塔君!!」

エルムがびしょびしょの状態でバスロープ姿で現れたが正直な所・・・  
目に毒な光景であった。

何せ頭に着けていたうさぎの耳みたいなりポンを取り外しているためか  
少し大人っぽい雰囲気か漂い少しだがシャンプーの匂いもする。

然し見れないのがその・・・胸だ。

何せ爆乳である為バスロープから見える谷間が風呂の水を集めるかの様に  
溜まっていくのが見えたのだ。

更に言えば足もまた見れないものだ。

綺麗な脚であると同時にバスロープから見えるレッグバンドが恐らく

ISの待機形態なのだろうがそれでも青少年からすれば刺激が強すぎるのだ。

そして宗壺はエルムに対してこう言った。

「ああ御免！着替えてからまた出直す。」

「ああ良いよ別に、早く入って。」

エルムはそう言って宗壺を手招きして中に入らせた。

「荷物って……これだけなのか？」

「え？そっだよ。」

エルムはしれっとそう答えた。

部屋が……殺風景なのだ。

エルムは恐らく荷だししていたのであろうがあるのは……

恐らく勉強道具一式程度でしかなかった。

するとエルムは宗壺の荷物についてこう言った。

「宗壺君のは私のベッドの隣ね。窓際は私が陣取っちゃったから。」

「お……おお。」

宗壺はそれを聞いてエルムの隣に座ると宗壺がこう切り出した。

「ええと・・・それじゃあこれから宜しく。」

「宜しく♪」

「そんでだけど部屋に入るにあたってルールを作りたんだ。」

「？」

エルムは何でと思っていると宗壺はこう答えた。

「あのなあ、俺達男女で一緒に暮らすんだぜ？ルールを作っておいた方が

互いの為になるんじゃない」

「ええええ〜面倒くさいよ〜。」

「面倒くさいってなあ・・・。」

宗壺はめんどくさがるエルムに対して呆れていると宗壺はこう続けた。

「それじゃあ先ずは風呂：：シャワー何だけでも初めにエルムが入って次に俺、順番になつたらメールで伝えること、着替える時は互いに自分のベッドで

仕切りを使って見えにくいようにしてから着替える事。」

他に質問はと聞くとエルムは首を横に振った。

すると宗壺はエルムに向けてこう聞いた。

「そういえばだけどこっつってトイレってどうするんだ？」

そう聞くとエルムはこう答えた。

「ええとねえ、各階の両端に二か所だけ。男子の方は来賓用のあるらしいけどアリーナにあるからねえ。」

「そうか・・・はあ、ラトロワ先生に聞かないとなあ。」

宗壺はそう言うのとエルムはこう聞いた。

「そういえば宗壺君ってご飯は？」

「いや、未だだな・・・俺外で待っているから着替えとけよ。」

「ハハハハ。」

エルムはそう答えると・・・宗壺の目の前で突如脱ぎ始めた。

「ウワアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

「え?!何?!」

エルムは宗壺の悲鳴を聞いてどうしたのと聞くと宗壺は慌ててこう言つて

部屋から出て行つた。

「お前何今すぐ着替えてつて俺出てくから!!」

そう言つて速攻で出て行つた宗壺に対してエルムはと言うと・・・。

「・・・・・・?」

何でと?マークを浮かべていた。

一方織斑「夏はと言うと・・・。

「何で俺だけなんだよ・・・!!」

悔しそうな表情で一人寂しく寝転がっていた。  
因みに翼は奏と相部屋。

夕食。

宗壺は豆腐ハンバーグ定食、エルムは大豆ステーキ。

何でこんなヘルシー食事なのかというところ……ここが女子高だからだ。ダイエットを気にする生徒からすれば正に天国の様に見えるからだ。

「大豆ステーキって意外と美味しいねえ♪」

「豆腐ハンバーグも中々だな。」

そう言って2人は舌鼓を打っていた。

そして互いにベッドで寝た（無論個別）

そして翌朝。

「ふあゝあ、よく寝た．．．は？」

宗壺は自身の隣にある．．．不自然に膨れ上がった布団を見て何でと

そう思っていると宗壺は取敢えずと言つて捲れて．．．目を思いつき見開いた。

!!!

何せ見えたのは．．．白い肌だからだ。

よく見たら銀髪。

まさかと思つていと．．．寝返りうってやっぱりと確信してしまった。

「エルム．．．!?!」

そう．．．エルムが裸で寝ていたのだ。

「んんん．．．。」

エルムは寝返り打った後に目を覚まして宗壺の目の前で．．．

大きく背伸びした。

!!! (大きい)．．．!!

背伸びしたことでその大きな胸がバルンと揺れただけではなく

そこから見える小さなピンク色と髪と同じ色をした・・・下半身から薄つすらと見える

「アアアアアアアア！」

宗壺はヤバイと確信して大声上げてベッドから・・・転げ落ちてしまった、然も頭から。

「うぐおおおおおおお・・・!!」

「うにゅ・・・アア、おはよう宗壺。」

何やらエルムは寝ぼけている様な感じであったが宗壺は何でいるんだと聞くとエルムはあれ?と言つて隣を見て・・・こう答えた。

「あああ・・・そう言えば一度トイレで起きたから出て行つて帰つて・・・眠つてたんだあ。」

「何で裸?!」

「私服着て寝るのが苦手なんだもん、きついから。」

くわあああと欠伸しながらそう言うのとベッドから降りてエルムはこう言つた。

「私シャワー浴びるから・・・フあああ。」

そう言いながらシャワー室に入るのを確認すると宗壺は・・・

自身の下半身でテントになっている場所を見てこう呟いた。



「・・・どうすりやあいんだよこれから・・・。」  
ハアアアアアアアアア・・・と深いため息ついていた。

それぞれの戦いの前。

「美味しいね宗壺！」

「ああ・・・そうだな。」

「元氣ないけどどうしたの？」

エルムがそう聞くと宗壺はこう答えた。

「・・・エルムが裸で俺のベッドに入り込んでいたから疲れてんだよ。」

「・・・御免。」

「良いんだ、謝ってくれるなら。」

エルムの謝罪を聞いて宗壺はほっとした様子でそう言いながら

ご飯を食べていると・・・エルムはこう言った。

「じゃあこれからは何時でも宗壺のベッドで寝て良いんだよね！」

「何でそうなるんだお前は！違う！って言うかまずパジャマ買え!!」

「えええ、あれ着てると胸とかきついんだからさあ。それに別に昔の人はどうせ裸で寝てたんだから良いじゃん。」

「何でそうなるの！お前には恥じらいとかそういうの無いのか!!」

「軍にいた時にそういうの教わらなかつたから！」

「笑顔で言う事かそれ!？」

もう嫌と宗壺は泣きたいような感じで机に突っ伏していると・・・声が聞こえた。

「2人共朝早くから元気だな。」

「ああおはよう、翼さん。」

宗壺は話しかけてきた翼と一緒にいる奏に向けて挨拶すると2人は宗壺達の隣に座って何かあつたのかと聞いて宗壺が説明して2人は・・・。

「それは・・・な。」

「流石に考え物だな。」

翼と奏は互いに苦笑いしていた。

そんな中で織斑一夏はと言うと・・・。

「何でアイツばかり．．．！それに二年生も絡んでこないしどうなってんだよ」

そう言いながら食事をしていた。

そして数日後。

宗壱はアリーナで《灰戦騎》の準備をしていた。

今回は2つのアリーナで男性IS操縦者が戦うと聞いて半分ずつの生徒達が観戦していた。

そんな中で宗壺は《灰戦騎》に向けてこう言った。

「とうとう来たぜ俺達のデビニュー戦。……一緒に頑張ろうぜ相棒。」

そう言いながら機体を装着した。

そして発進用のカタパルトに機体を固定するとラトロワから通信が入った。

『鬼塔、ハインリヒの方も準備が整ったそうだ。今回の試合は全員が

見ているため貴様らに言うのはただ一つ……無様な試合はするなよな。』

「ハイー！」

宗壺はそれを聞いてそう答えた。

そして互いにカタパルトから発進すると宗壺はエルムの機体を見つけると

機体から情報が届いた。

『シユヴァルツ・レーゲン・ズイーベン』か。』

そうやって『シユヴァルツ・レーゲン・ズイーベン』を観察した。

見た目は脚部は重装甲に見えるが意外にほっそりとしたような印象が伺える。

両腕には突起物の様な武装が2つありそれが脚部にもあった。

そしてその手に握られているのは大型の銃火器であった。

するとエルムが通常通信で宗壺に向けてこう言った。

「やっこの日が来たね宗壺。」

「ああ、そうだな。」

宗彦はエルムに向けてそう言うのとエルムはこう続けた。

「そういえばさ、クラス代表を決める奴だったけどさ。もう一つ賭けない？」

「・・・良いな、何する？」

宗彦はそれを聞いてニヤリとそう言うのとエルムはこう答えた。

「そうだなあ・・・もし私が勝ったら私の私生活で

もうとやかく言わないでね♪」

「其れっってお前が全裸で寝る事を黙認しろって意味かよ！だったら

こっちが勝ったら絶対にパジャマか寝間着を買わせてやるからな!!」

「オツケー、それじゃあ・・・ヤロウカ宗彦!!」

「おおよー!」

それを聞いて互いに身構えた。

そしてラトロワの声が会場全体に響いた。

『それでは《鬼塔 宗彦》対《エルム・M・ハインリヒ》の模擬試合を・・・

開始する!!』

その音声が流れて・・・戦闘が始まった。

一方もう一つのアリーナでは。

「全く貴様は、何故誰にも教わろうとしなかった！」

「……」

「ええと……織斑先生、そろそろその辺で宜しいかと」

山田先生が怒っている織斑千冬に向けてそう言うが千冬はこう続けた。

「お前は今日まで何していた!? 機体の特訓ではなく道場で剣道をしていると

聞いたがISバトルはそんなに簡単なものではない!! お前の鈍った勘

程度ではな!!」

千冬はそう言うともまあ取敢えずと言ってこう続けた。

「貴様は今搬入された機体に乗れ込め。良いな！」

そう言うと千冬は何処かにへと向かって行った。

そして残った山田先生と織斑一夏は気まずい中で機体を見た。

「これが・・・。」

「はい、織斑君専用のIS。《白式》です。」

そう言つて織斑一夏は機体に搭乗してチェックした。

「(やっぱり武装は近接ブレードオンリーか。だけどセシリアの機体は

遠距離特化型っていうのは原作で予習済みだ！これで俺のハーレム計画が

始動だ!!)」

心の中でげすいことを考えている織斑一夏であつたがそれを知らない山田先生は設定の準備を終えて出て行くところ聞こえた。

『織斑君、所定の位置に着いてください。』

「はい、分かりました。」

織斑一夏はそう答えてカタパルトから発進した。

相手はセシリア・オルコット。

機体は『ブルー・ティアーズ』。

それらを試合が始まるまでの台詞迄覚えていた織斑一夏は只々それを口にするに煽り耐性の無いセシリアからしたら侮辱されたような感じであつた為



試合開始前に発砲するが其の儘・・・始まった。

## エルム対宗壺

「先手必勝だよー！」

エルムはそう言つて自身の手にあるライフル『ヴェーア』を発砲した。

然し宗壺はそれを躲すと自身もハンドガンを展開して反撃するも

それをエルムも同じように躲した。

「へえ、やるね。」

「お試しがつくけどな！」

そう言いながらも互いに回転しながら発砲していた。

これはISにおける『シューター・フロー』と言う円状制御飛翔であり回転しながら攻撃することで互いに牽制しつつ攻撃を当てるという飛行戦法である。

それは見る人間からすればまるでワルツを踊るようなそんな感じである。

然し宗壺はヤバいと感じていた。

装弾数である。

ハンドガンと通常ライフルとでは装弾数が絶対的に違っているため

このままだとじり貧だと考えた宗壺はハンドガンを収納して大型ブレードを

展開して突っ込むことにした。

だがエルムはそれを見ても慌てることなく対処した。

「へえ、近接戦が得意なんだ．．．そうはいかないね！」

そう言いながらエルムは両腕と脚部に内蔵されているワイヤーブレードを展開して四方八方から襲い掛かるが宗壺は．．．それを見てニヤリとしながら武器を展開した。

「行け！ソードビット!!」

すると宗壺の機体の腰部にマウントされていたビットが4基ほど展開してワイヤーブレード全てを叩き落した。

「嘘ー！」

エルムは驚くもライフルを格納して新たに大型ブレードを展開して斬りあった。

「ウグググ！」

大型ブレードと言ってもそれは国によってまちまちだ。

宗壺の大型ブレードは戦術機で使われるブレードをベースに反りを大きくして製造された日本刀に近いタイプ、一方のエルムの方は西洋剣のような形状で叩き斬るというコンセプトの下で製造されている。

その為かパワーでの．．．ガチンコでのぶつかり合いならば

エルムの大型ブレードが有利と言えるのだが・・・斬りあいともなれば反りが大きく受け流しながら攻撃できる日本刀型の大型ブレードを持つ宗壺の方に分がある。

詰まる話がどうなるかと言うと・・・こういう意味だ。

「嘘!？」

エルムは叩き潰そうとして大型ブレードを上段から斬り落とそうとするが宗壺はその威力を受けるのではなく・・・流すことでエルムの体勢を大きく崩して宗壺はエルムの後ろに回り込んだ。

「ヤバい!」

「おらあ!」

宗壺はエルムに向けて斬りかかった。

「ガハア。」

そしてそれを諸に喰らったエルムに対して宗壺は更に追い込みをかけた。

「未だ2基残ってる!!」

残ったソードビットを使って同じ個所に突きこんだ。

そしてその儘地面に激突したエルムを見て宗壺は地面に降りて大丈夫かなと

そう思っていた。

ISには搭乗者を保護する為に絶対防御と呼ばれるシステムがあるのだがそれらは万が一である為発動しないという事もあるのだ。

衝撃次第ではここで終わりかもしれないとそう思いながら土煙を眺めて

治まり始めると・・・影が見えた。

それは少しずつ明らかになり見えたのは・・・黒の機体。

『シュバルツ・レーゲン・ズイーベン』がそこにいた。

何やら俯いている様子であったが暫くして・・・エルムが・・・。

「アハ・・・アハハ・・・アハハアツハハハハ!!」  
笑い出したのだ。

まるで狂ったかのように笑いだすとエルムは宗壺に向けてこう言った。

「凄いや宗壺! 私久しぶりだよこの感触!!」

「エルム・・・さん?」

突如大声を上げてそう言うエルムを見て宗壺は少し引き気味でそう聞くがエルムはこう続けた。

「アア良いよ良いよこの感じ! 体の中の血液が沸騰するような感じが私の中で溢れ出て来るヨ!!」

「こんなに戦いたいわって思ったのはラウラ以来だよ!!」

「ラウラ?」

宗壺はそれを聞いて誰だと思っているとエルムは・・・蠱惑的な笑みを浮かべてそう続けた。

「だからさ宗壺・・・もつと遊ぼうよ!!」

そう言った瞬間にエルムは『シユバルツ・レーゲン・ズイーベン』に命令コマンドを入力してこう言った。

「行こうよ『ズイーベン』! 私達の本気を宗壺に見せようよ!!」

そう言った瞬間に『シユバイツァ・レーゲン・ズイーベン』から音声 flowed.

『パイロットの戦闘コマンド入力を確認、

『I S 拡張兵装収納庫 (デビルズバックボーン)』を起動します。』

『偽装煙幕展開』

するとエルムの周りに煙の塔が立ち込めた。

「何だこれは!!」

宗壱はそう言いながらそれを見ようと機体のハイパーセンサーから

探そうとするも・・・ノイズが走った。

「くそ！ ジャミング粒子入りかよ!!」

宗壹はそう言いながら一体仲はどうなっているんだとそう思っていた。

『両腕部兵装変更・大型パイルバンカー搭載式腕部

『パイルドライバー』セットを承認。』

『機体バランス修正完了。機体再起動を認識。』

『《シュバルツア・レーゲン・ズイーベン》始動。』

そして煙幕が晴れると目の前にあつたのは・・・異形の姿であつた。

両腕に大型パイルバンカーが装備されたエルムが現れたのだ。

そしてエルムは宗壹に向けてこう言った。

「さあ、宗壹。再開しようよ・・・私達の戦闘を!!」



## 織斑一夏対セシリア

一方それを見ていたラトロワはと言うと・・・。

「あれがドイツの新型システムか。」

そう呟いて戦闘を眺めていた。

「パイロットの適性に応じてあらゆる武器を格納することが出来る拡張領域の追加システム『デビルズバックボーン』。そしてそれらのシステムを管理するAI『ガンスレイブ』。使い方一つで小国一つを確実に潰せることが出来ると言われているが成程な、確かに使いようで如何とでもなる。」

そう言いながらラトロワは宗壺を見てこう言った。

「さてと、貴様はこの化け物相手に如何やって乗り越える？」

そしてもう片方。

「あれがドイツの・・・ですか？」

「いや、あれは只のシステム上の兵装。本来の第三世代兵装は別物だ。」

千冬は別のアリーナで山田先生に向けてそう言うところ続けた。

「元々奴は天才ともいうべきかな？あらゆる兵装に通じれる能力を持っていてな、私がドイツで教官やるまでは第一位であった。」

「それから彼女は二位に落ちてどうなったんですか？」

「いや、奴は順位とかそういうのを抜きにして戦闘に対してのみ感情を

爆発させていたのだがあまりの攻撃力に本来なら隊長になる予定であったのだが

奴自身が辞退するという自由奔放だったからな。」

まあ、奴にとってはどうでも良いのであると付け加えるとこう続けた。

「奴の兵装は見た限り近接格闘型、鬼塔宗壹は近中距離型。ビットを持っている鬼塔宗壹が上だと思われるが実際は格闘戦においてエルム以上の存在を

私は見たことがない。」

「織斑先生がそこまでいう何て。」

「本当だ、実際にだが私は奴とナイフ剣術で隠れて試合したことがある。その時にまあ私が勝ったがあの時こう思ったんだ。」

「？」

「奴は常に本気を出していなかったのに私は負けそうになったんだ。」

「!!」

それを聞いて山田先生は目を見開いて驚いていた。

何せ千冬以上に剣術が上手いのかとそう思っていると千冬はこう締めくくった。

「まあ、奴がどれだけなのかは後で見るとして織斑の方はどうだ？」

「アアアアはい！今はオルコットさんのビットを避け続けていますが被弾は  
そう対して少ないですね。」

「ふん、所詮はオルコットが男だからと言う理由で

本気を出していないのであろう？足元掬われることしていることが織斑にとっては  
チャンスとも言えるな。」

「然し倉持はあんな機体をよく織斑君に与えましたね？」

「全くだ、建造している『打鉄』の後継機にすればよいものを。」

全く何考えているんだろうなとそう思いながら試合を眺めていた。

「くう！いい加減に落ちなさいな!？」

「落ちるかよ!!」

織斑一夏はそう言いながらビットを観察していて・・・そろそろかなと感じて攻撃に転じた。

「何ですって!？」

「この兵器は毎回お前が命令を送らないと動かない！

そしてお前はその間動けないのが弱点だ!!」

「!!!」

セシリアはそれを聞いて目尻を引き攣るが織斑一夏はこう考えていた。

「（こいつを俺が誘う場所まで誘導させてぶっ飛ばせばいいだけだ。

後はミサイルとライフル、ナイフだけだから楽勝だぜ!!）」

そう考えながら先ほど破壊したビット2基に加えてもう二基を破壊した。

「後はお前だけだ!」

織斑一夏はそう言いながら突っ込んでいくとセシリアは・・・

ニヤリと笑ってこう言った。

「かかりましたわね．．．『ブルー・ティアーズ』は6基あってよ！」  
そう言いながら腰に装備されていた武器が稼働した。

「(良し！ミサイル程度なら躲して)」

叩き斬つてやるとそう思っていると装備されている武器から．．．  
ガキンと音がした。

「(?、ガキン??)」

何の音だとそう思っていると腰の装備が．．．射出されたのだ。

「何!？」

織斑一夏は驚いて避けると．．．レーザーが放たれた。

「ぐあ!?! 一体何が!!」

織斑一夏はそう言いながら後ろを見ると目に映ったのは．．．ビットであった。

「何で．．．全基破壊したはず．．．!!」

織斑一夏はそう言いながらビットから見える．．．金属製の糸を見て  
目を見開いて驚いていた。

何せその糸は．．．セシリアの腰と繋がっていたのだ。

するとセシリアはこう説明した。

「あら?驚いていますわね??これこそ私に切り札でもある

『有線』ブルー・ティアーズ。ペットにリードを付けるのは当たり前でしてヨ。」

そう言いながらセシリアは有線型のブルー・ティアーズを撫でるかのようにあやすと織斑一夏に向けてこう言った。

「さあ、そろそろフィナーレと洒落込みませう!!」

そう言いながらセシリアはライフルを構えた。

「織斑君ピンチですねえ。」

「全くあの阿保は、ちゃんと対策を練らんからこうなるのだ。」

千冬はそう言いながら有線ビットとライフルを使おうとするセシリアを見て

こう言った。

「それに奴も奴だ、有線を隠し玉にするのではなく無線型を隠し玉にした方が勝率が上がるというのに。」

「相手を見くびっていたんでしようか？」

「どっちもどっちだ、これならば鬼塔宗壺の試合の方が見る価値がある。」

千冬はそう言いながら宗壺と鏝競り合っているエルムの試合を見届けていた。





宗壺はそう言いながらエルムに向けてバスターソードを構えるとエルムはこう続けた。

「楽しいじゃない！こうやって本気で戦えるなんてラウラ以来だもの!!  
楽しまなきゃね!」

そう言いながら宗壺に向かって突撃すると宗壺も立ち向かおうと

向かって行き・・・突然宗壺が動かなくなった。

「まさか!!」

宗壺はヤバいと感じていた。

何せ今宗壺は・・・エルムの左手の目の前で止まっているからだ。

「AIC（アクティブ・インナー・キャンセラー）。これで宗壺は動けないよ。」

そう言うのとエルムは右手を振りかざして・・・こう叫んだ。

『レーヴェリア・ファウスト』!!」

その言葉と共に宗壺は・・・壁まで吹き飛んでいった。

「畜生……シールドエネルギーが残り20%まで減りやがった。」

そう言いながら宗壺は立ち上がるようにしているがヤバいなと感じていた。

「バスターソード……壊れちゃった。」

バスターソードが半ば程へし折れていたのだ。

「(あと残っているのはハンドガンとソードビット、ワイヤーアンカー。」

小出しの武器ばかりで厳しいな。おまけに実弾兵器はAICで止められる、

あれは目の前の空間を檻のようにして相手の動きを止めちゃうからな。)」

厄介な物造りやがってとそう思いながらもこう続けた。

「(さてと……残っている武器で如何やって勝つか。)」

そう思いながら武装の確認をしていると……。

「(?!……こんなの入っていた……父さんめ。)」

今はありがたいなとそう思っていると宗壺はどのタイミングでやるかと

考えて……思いついた。

「よし、やってみるか。」

そう言つて煙の中から宗壺が現れると宗壺がハンドガンを構えるのを見て

エルムはこう言った。

「へえ、まだやるんだ。」

「まあな、男だつたらピンチをチャンスに変えなくてどうするんだよ？」  
互いにそう言うど．．．動き出した。

先ずは宗壹がハンドガンで牽制しつつソードビットで攻撃するが

エルムは多少の被弾は覚悟のうえで『イグニツションブースト』で

宗壹に迫つて目の前に辿り着くと宗壹に向けてこう言った。

「これで終わりだよー」

そう言いながら宗壹に向けてもう一度パイルバンカーを振りかざすと．．．

宗壹はニヤリと笑つてこう言った。

「そつちがな!!」

そう言いながら宗壹は両腕に装備されているワイヤーアンカーを射出して．．．エルム目掛けて頭突きを喰らわした。

「!?!」

いきなりの事で体勢がぐらついたエルムは自身も脚部にある

ワイヤーブレードを展開して宗壹目掛けて放とうとするとソードビットが行く手を塞いだ。

そしてエルムの腹部に手を当てると拡張領域からある物を展開した。

展開したのは・・・ロングキャノンであった。

そしてそれをエルムに押し付けるとこう言った。

「これで如何だ——!!」

そう言って・・・砲撃を始めた。

数発もの砲弾がエルムに襲い掛かり・・・暫くしてラトロワがこう宣言した。

『《エルム・M・ハインリヒ》戦闘不能！勝者《鬼塔宗壺》!!！』

それを聞いた瞬間にアリーナ全体で・・・拍手が巻き起こった。

そして宗壺は機体から降りると機体が解除されたエルムに近づいてこう聞いた。

「ええと・・・大丈夫か？」

「・・・宗壺は鬼畜だ。」

何やら負けたのかそれとも先ほどの零距离射撃の事なのかどうか分からないが

何だか頬を膨らませていじけているような感じであったがまあ大丈夫かと思つた

宗壺は臍を曲げたエルムに向けてこう言った。

「悪かつたって、お詫びに何か奢つてやるから。」

な、とそう言うのとエルムは少しして・・・こう答えた。

「・・・じゃあ食堂にあるデザートのスウィーツパフェ奢つてよ。」

「うぐ!!・・・あの一杯3100円の奴か。」

「・・・嫌なの？」

そう聞くと宗壺は暫くしてこう答えた。

「分かった・・・分かったよ！パフエでもなんでも奢ってやらあ!!」

「やったあ!!」

それを聞いてエルムは途端に燥ぐのを見て宗壺はこう思った。

「まさかこいつここ迄計算づくで・・・何て恐ろしい子!!」

何やら少女漫画に出てくる雷が落ちたかのような感じであったが

背に腹は代えられないという思いで覚悟を決めると宗壺はこう呟いた。

「そーいえばあつちはどうなっているんだろーな？」

そう言いながら宗壺は今でも試合が行われているアリーナに向けて

視線を向けた。

## 織斑一夏対セシリア 決着

「オホホホホ！ さあ、踊り狂いなさい織斑一夏!!」

「畜生が！ 今度は射撃も出来るのかよ!!」

織斑一夏はそう毒づきながら回避していた。

何せ原作に於いて弱点であったビット使用における行動制限が

なくなってしまったからだ。

こうなると近接格闘特化である『白式』が圧倒的に不利である事など

百も承知であろう。

そんな中で機体から情報が発信された。

その内容は……。

『フォーマットとフィッティングが終了しました。確認ボタンを

押してください。』

それを見るや否や織斑一夏は嫌さずに押そうとするとセシリアが大声で

こう言った。

「これでフィニッシュですわ!!」

そう言った瞬間にレーザーの一斉砲撃をしようとした瞬間に……  
機体からメツセージが現れた。

『各兵装エネルギー残高危険数値！再チャージを所望！』

そう出てくるとセシリアは悲鳴交じりでこう言った。

「ああもうこんな時に！」

そう言いながらセシリアはライフルを格納して新たな武装を展開した。  
展開したのはサブマシンガン。

それを構えた瞬間に織斑一夏の機体から光が輝き始めた。

「何ですの一体!?!」



「やっとか、機体に救われたな。」

「織斑先生、先ほど鬼塔君とハインリヒさんの試合が終わったそうです。」

「結果は？」

「僅差で鬼塔君の勝利だそうです。」

「そうか・・・ここで勝たんと後が大変だぞ。」

千冬はそう言いながら試合を見ていた。

「さてと……ここからが本番だぜ!!」

織斑一夏はそう言いながら近接ブレード『雪片式型』を構えると刀身からビームサーベルが出てきたのだ。

然しセシリアは織斑一夏の機体を見てこう言った。

「貴方まさか初期状態で私とあそこ迄?!」

それを聞いて驚くが織斑一夏は其の儘セシリア目掛けて突進してきた。

「そんなもの!!」

セシリアはそう言いながらサブマシンガンをばら撒くかのように発砲しながら有線型ビットを固定砲台として扱いながら照準を合わせた。

「このビットは普通の武器としても扱えるのですわ……」

この勝負頂きですわ!!」

そう思いながらセシリアは其の儘砲撃するが織斑一夏はそれを……回避して突っ込んでんだ。

「一体どうして」

躲けたのと言う前に織斑一夏はセシリアに対して袈裟斬りして攻撃すると……ブザーが鳴った。

『試合終了!勝者は織斑一夏!!!』

「『零落白夜』?」

「そうだ、それこそ先ほどお前が使った

『単一能力（ワンオフアビリティー）』だが説明はいるか?」

「お願いします（本当は原作で知っているけどな。）」

取敢えずは聞いておくかと思つて聞いた後に織斑一夏はこう聞いた。

「そういえば千冬n・・・じゃなくて織斑先生、俺ともう一人の男子は?」

そう聞くと千冬はこう答えた。

「ああ、もう一人の方も勝つたぞ。僅差だが中々いい勝負だったから

お前の試合よりも見入ってしまった。」

「ちよつと!？」

「冗談だ馬鹿者、だがこれでオルコットが大人しく謝罪してくれば良いのだがな。」

「謝罪って?」

「あの馬鹿が初日に言った日本に対しての差別的発言だ、代表候補生と言うのは候補生とはいえ国の看板を背負っているからな、公になれば間違いない奴の立場は危うくなるだろうな……今のイギリスだとどうなるか分からんが。」

最後に千冬はそう呟くがそれは織斑一夏には聞いていなかった。

「クソ！クソ！！クソ！！私があのイエローモンキーに敗れたなんて！！」  
セシリアはシャワールームでそう毒づきながら今回の試合を振り返っているが  
納得していなようであるが取敢えずは報告をどうするべきかと考えていた。  
男に負けたとなれば自身の沽券にも関わるためにどのように報告すべきか、  
責任を誰に押し付けようかと考えていた。

一方エルムはと言うと・・・。

「~~~~~♪」

鼻歌歌いながら今日の試合を思い出していた。

あれ程楽しいと感じた試合は久しぶりであると同時に奇妙な感覚が浮かんた。

「(私、何であんなに楽しかったんだろう？ラウラとは違うナニカ・・・)

私の心に響いたあの感情。」

・・・アイタカツタ。

「(何であんな風に思ったんだろう？私と宗壺ってナニカ関係があるのかな?)」

そう思っている中でエルムは小さな声で・・・こう呟いた。

「・・・宗壺。」

ドクン

「宗壺・・・宗壺。」

ドクンドクン。

「・・・何でこんなにドキドキしてるんだろう・・・？」

エルムはそう思いながら戦っている宗壺の姿を思い出すと・・・。

「・・・シユウ、イチ。」

ドクドクドク

心音が激しくなっているのを感じるとエルムは少し顔を赤くしてこう言った。

「シユウ・・・良い響きだよねえ♪」

(＊、σー、) エへへと笑顔でそう呟いた。

「それにしても良く勝てたな宗壺。」

「本当だな。」

「然しこれでお前もクラス代表って事は翼と戦う事になるな。」

翼、宗壺、奏の順番でそう言いながら食事をしていた。

すると宗壺は翼に向けてこう言った。

「そんな時は手加減しないぜ。」

「こちらもだ。」

互いにそう言って笑っていると奏はこう呟いた。

「良いねエ、青春。」

そう呟きながらジュースを飲んでいた。



因みに次の日に正式に宗老がクラス代表になってエルムは副代表となった。それからと言うものエルムは宗老にべったりしている。

## 歓迎会

「それではこれよりISの基本飛行についての実習を行う！鬼塔、ハインリヒ。機体を展開して飛翔せよ!!」

4月下旬の暖かな陽気にてISの実習が執り行われた。

2人はすぐ様に機体を展開した。

そしてそれを見たラトロワは飛翔するようにと指示を与えるや否や2人は大空に向けて飛んでいった。

「気持ちいなエルム。」

「うん！本当に気持ち良いね。」

2人はそう言いながらまるでダンスをしているかのように舞っているとラトロワが通信で指示した。

『2人とも、確かにこれは実習だが誰が踊れと言った。』

「す、スイマセン!!」

『まあ、仕方がない。それはそれとして2人共順番に急降下と完全停止をやって見せろ。目標は地表から10cm上だ。』

「分かりました！」

2人がそう言うのと先ずどっちが先にやるかと聞いてエルムがこう言った。

「それじゃあ私が先で良い？」

「おお、じゃあ俺が後だな。」

宗壺がそう言うのとエルムはお先と言って初めに地表に向かって行った。

そして最後に宗壺も向かった後にラトロワは次の指示を出した。

「それでは次に武装だな、鬼塔、ハインリヒ、展開だ。」

それを聞いて2人は武器を展開した。

「このように操縦者の腕次第で0.5秒で展開も出来るがこの2人だって

最初は素人だ。貴様らも鍛え方次第で何とでもなるから精進せよ!!」

『『ハイー!』』

それを聞いて生徒達はそう答えた。

因みに翼や奏、織斑一夏とセシリアも同じようにした。

そして夜。

一年生用の寮の食堂に於いて・・・

宗壺と織斑一夏のクラス代表就任パーティーが執り行われた。

『『織斑君！クラス代表就任おめでとう！』』

『『鬼塔君！クラス代表就任おめでとう！！』』

パンパンとクラツカアの鳴る音が聞こえた後に立食パーティーが執り行われた。

まあ、メニューは冷凍食品を解凍した奴やお菓子類であるが

それでも歓迎会であろう。

人数が一年の殆ど全員と言うのが驚きであるが。

「いやあ、これでクラス対抗戦も盛り上がるねえ。」

「ほんとほんと。」

「ラツキーだよねえ。同じクラスになれて。」

「ほんとほんと。」

そういう中で宗壺がポテチを摘まんでいると・・・エルムが声を掛けた。

「シュウ〜〜〜！」

「うおわエルム!?びつくりするだろう!!」

「(\*・σー) エヘヘ。」

エルムはそれを聞いて反省0の笑顔で宗壺に抱き着いていると宗壺はこう聞いた。

「なあさ、エルム。シュウって・・・俺の事か?」

「うんそうだけど・・・嫌だった?」

エルムは上目遣いでそう聞くと宗壺はこう答えた。

「いや、今までそんな風と呼ばれたことなんてそれで良いぜ。」

「(\*・σー) エヘヘ、ありがとう。」

そう言いながら宗壺の背中に抱き着いているが当の本人は・・・  
混乱状態で在った。

「(おワアア!ヤバイやばいやばい胸が背中につて滅茶苦茶柔らかい!!)」  
背中に当たっているエルムの大きな2つの物体に慌てていた。

何せエルムの胸部は間違いなく学園一と言っても過言ではない位の大きさであり何時もよく見ている宗壺に対して世の男と達はこう言うであろう。



「えー。もつといいコメント頂戴よろ。」

俺に触ると火傷するぜ！とかさあと言っているのでこう答えた。

「自分……不器用者ですから。」

「うわあ、前時代的！」

まあどうせ捏造するんだけどねとそう言っていると次にと宗壺に訪ねた。

「それじゃあ鬼塔君、何か一言！」

「ええと……ですなあ。」

そう言つて暫く考えると……宗壺はこう答えた。

「俺は……選ばれた以上は頑張つていきたいし先ずは優勝目指したいと

そう思っています！」

「ほほう、中々強気だねえ。今のところ専用機持ちは

二組以外全員いるから厳しいよ？」

「それでも。やらなければわからないです!!」

「……うん、良い言葉だね。応援しているよ青年!!」

そう言つて『薫子』は肩をトントンと叩いていると今度は翼と奏に

目を向けてこう聞いた。

「それじゃあ翼さん、何か一言。」

「ハイ、皆から・・・奏から求められている以上私は皆の期待に応えたいとそう思っています！」

「あたしからそうだな・・・こいつが肩肘張っている時に側にいて支えてやる事くらいしか出来ねえけどちゃんと守ってやりてえってそう思ってるぜ!!」

2人の言葉を聞いてうんうんとそう言っていると最後にとエルムに向けてこう聞いた。

「あ、ハインリヒちゃんも良いかな？」

「?」

「君は鬼塔君を如何やって支えてやりたい？」

そう聞くとエルムはにこりと笑ってこう答えた。

「戦闘面とか・・・後色々！」

「うん、簡単に宜しい。」

そう言うのと最後に記念写真ねえと言って『薫子』は専用機持ちを集めさせるところ聞いた。

「あれ?もう一人いたはずなんだけど?」

「ああ、セシリアさんなら欠席ですよ?二年のイギリス代表候補生から



「説教受けているそうです。」

それを聞いて『薫子』はあつそとそう言うのと5人に向けてこう聞いた。

「それじゃあ『35\*51/24||?』?」

そう聞いてええとと言っていると宗壺はこう答えた。

「ハイ! 『74. 375』です!」

「正解!」

そう言った瞬間に写真に・・・殆ど全員が入った。

「まあ、いつか。」

『薫子』はそう呟いてそれじゃあねとそう言った。

そして・・・。

「待ってなさいよ一夏ー!!」  
嵐は未だ吹き続けていた。

## 転校生は中国の代表候補生

そして次の日の朝。

宗壺とエルムが教室に入るとクラスの一人がこう喋った。

「あ、おはよう鬼塔君。聞いた？転校生の話。」

「おはよう、転校生？・・・いや。」

「どうも中国の代表候補生らしいんだけどこんな時期につてみんな話しているんだよねえ。」

「クラスは？」

「そこは知らないけど。」

女生徒がそう言うのと他の女生徒がこう続けた。

「それよりも鬼塔君には優勝してもらわないと！何せ優勝賞品には『学食デザート半年フリーパス（尚全員に割り触れられるのは一人6日まで）』何だから!!」

この賞品は一人6日となっているが使った日を1回としているので詰まる話が6回しか使えないのだ。

まあ、意識向上の為に物で釣らすのもどうかと思うが。

「おおよ！絶対に勝って目指せスイーツ!!」

『『おオオオオオオおおお!!!!』』

それを聞いてクラス一同が勢いよくそう言った。

そして一組ではと言うと。

「その情報古いよ、二組でも専用機持ちが加わったんだから。」

「鈴！お前鈴か!?!懐かしいなあ!!」

「ホントよねえ一夏！アンタ何IS動かしてるのよ!!」

「びっくりしたじゃない!!」

「いやあ、只触ったら動いちやってさあ。」

「そうなんだ、そういえばあんたに滅茶苦茶似ていたもう一人は何処?」

「ああ、三組だけど？」

「へえ、まあ良いわ。私強いから・・・!!」

「何しているんだ戯け！さっさと教室に戻れ!!」

「はいー——!!」

このような一幕があつた。

そして昼休み。

「あれが中国の代表候補生か。意外に小さいな」

「奏油断するな、代表候補生の実力が体格では表せないのだ。」

「それもそうだな。」

「それにしても可笑しいな、元々のクラス代表はどうしたんだ？」

「聞いた話だけど今のメンツを聞いて正直な所滅茶苦茶怖がついていたところを

あの子が来たからこれ幸いって気分で自分が副代表で落ち着いたらしいよ。」

奏、翼、宗壹とエルムは互いにそう言っていると宗壹はエルムに向けてこう言った。

「それじゃあ俺達は特訓と行くか。」

「そうだね、翼達も？」

「ああ、もうすぐクラス對抗戦だから奏とだがいい加減に癖が互いに分かってしまうからこれを期に上級生とも戦って見たいと思っているんだ。」

「そうか、俺達もそうするか？」

「そうだねえ、シユウの言う通りそろそろマンネリ化しそうだしねえ。」  
「そうだなと言うが誰にしようかと考えていた。」

それを……とある少女が聞いていた。

「へえ……良い事聞いちゃった♪」

そう言いながら扇子を片手に立ち去った。

そしてアリーナに向かう中。

「ねえ、君達が『鬼塔宗壺』君と『エルム・M・ハインリヒ』さん？」

「?!」

シユウとエルムは互いにその声を聴いて振り返るとそこにいたのは・・・水色の髪を持つ少女がそこに立っていた。

「ねえ、シユウ。あの人のネクタイ。」

「ああ、二年だな。」

エルムとシユウは互いにそういう中で少女は自己紹介した。

「初めまして、私はI S学園生徒会長『更識 楯無』。二年生で

ロシアの国家代表生よ。」

「国家・・・代表生。」

「宜しくね♪」

そう言いながら扇子を開くと・・・言葉が書かれていた。

内容はこれ。

『夜露死苦』

「・・・何でそれ？」

「ああ、気にしない気にしない。ねえ、偶々聞いたんだけど貴方達上級生と模擬戦したいって聞いたけど・・・私がそれしてあげようか？」

「!!」



それを聞いてシユウとエルムは目を見開いて驚いていた。

何せそれを喋っていたのは一年の寮の食堂であり本来ならば二年生が入る事など出来ないはずなのに一体どうやって思っているか……

『更識 楯無』が2人に向けてこう言った。

「さあさあさあ、早く行きましょ。」

そう言つて2人の背後に……何時の間にか移動してアリーナ二に向けて押していった。

これには流石の2人も何故とそう思っているが仕方ないと思つてアリーナに向かった。

そして翼達はと言うと……。

「ありがとうございます、手伝つてくれて。」

「別に良いんだよ新入生！アタシらが好きでやっているんだから。」

「そうつすよ、これは先輩としての役目つすから！」

「先輩……小さいのにな。」

「それ余計つす!!」

奏がそう言うのは黒髪を三つ編みにして猫背の少女『フォルテ・サファイア』。ギリシヤの代表候補生で専用機はここ最近受領した。

そして翼に向けて言う金髪の少し長めの髪を持つ少女は『ダリル・ケイシー』。アメリカの代表候補生で専用機持ち。

この2人は何時もコンビを組んでおり渾名が『イージス』と言う防御能力とコンビネーションにおいては一流ともいえる学園に於いて名のある2人である。因みに恋人同士であるが女学校である為珍しい事ではない。

翼と奏は2人の内『ダリル・ケイシー』に頼んだところ

『フォルテ・サファイア』も加えての参加となっており互いに了承済みだ。

「それじゃ始めるが新入生共・・・覚悟してもらおうぜ！」

「アタシらはその辺の連中よりも強いっすよ!!」

「其れはこつちも同じだぜ！翼！あたしら『ツヴァイウイング』の実力

見せてやろうぜ!!」

「ああ！奏!!」

このような感じでシュウとエルム、翼と奏、互いに模擬戦が執り行われた。そして時間が経ち・・・クラス対抗戦が始まった。

## 試合開始

そしてクラス対抗戦。

第二アリーナと第一アリーナにて一年生の試合が行われるのだがアリーナは既にどちらも満席であった。

中には通路に立って見ていたり中にはリアルタイムモニターで

見ていたりとしている中で織斑一夏対凰 鈴音と宗壺対翼と言った

対戦カードとなったが世界でたった2人のIS操縦者が相手にするのは片や

たった二年足らずで代表候補生に迄上りつめた天才少女、片や今や

時の人とも呼ばれる有名アイドル。

そんなことも相まって裏ではチケットの高額取引にも発展するほどであったが

そういうのは織斑先生によって駆逐されて云った。

「まさかお前とこの様な形で戦う事となるとはな。」

「ああ、驚きだよな。」

翼と宗吉は互いにそう言いながら獲物を構えた。

翼は蒼羽場斬に装備されている銃剣『影打』を構えて宗吉の方もバスターソードを構えていると翼がこう言った。

「然しお前とは練習がてらにやっではいたが本番ともなると・・・

容赦するなよ。」

「其れはこつちの台詞だぜ。」

そう言っていると・・・通信が来た。

『それでは両者！試合始め!!』

そう言った瞬間に互いに鏑迫り合いとなった。

がりがりとした金属音が奏でる音がある中でガチ遭った後に互いに離れると

宗吉はソードビットを二基展開した。

「おらー！」

宗吉はソードビットと共に突撃すると翼は『影打』を格納して両腕部に内蔵されているハンドガンを使って牽制した。

「クソ！」

宗壺はそう毒づきながらビットだけでもと思っていると翼はハンドガンの銃撃を止めて・・・ナイフを出してそれらをビット目掛けて投擲した。

「マジかよ!?!」

「お前とは何度もやっているからな!!」

翼はそう言いながら『影打』を手にとって突っ込んでいくと宗壺は・・・

少し笑ってこう答えた。

「そうだよな!!」

そう言いながら互いにもう一度鏢迫り合いをした。

管制塔。

「はあ、凄いですねえあの2人。」

「確かにな、だが互いに近接格闘型ともなると均衡が破れた時に天はどちらにつくのか見物だな。」

千冬はそう言いながら試合を見ている中で内心こう思っていた。

「(お前がどの様な暮らしをしていたのかは聞いていたが成程、風鳴元首相はちゃんと育ててくれたようで安心したぞ・・・」

・・・  
「箒」

そして第二アリーナでは。

「それがお前のI Sか？」

「そうよ！これこそ中国の第三世代機『甲龍』よ！」

「何かその名前を聞くと願いを叶えてくれる奴に聞こえないか？」

「其れ今言うか!!まあ、私もちよつとそう思ったけどね・・・。」

鈴もそう思ったのか少し頬を掻いている中で織斑一夏はこう思っていた。

「（見た感じは原作とぱっと見だけど変わっているとするとするなら・・・

あの楯だな。」

そう思いながら両肩に装備されている大型の盾を見ていると鈴はこう答えた。

「ああ、これ。これチョット邪魔なのよねえ？ 私みたいなタイプには守るなんて性に

合わないんだから。」

そう言いながら鈴はこう続けた。

「さてと、ちゃつちゃと始めましょうよ？ こうやって浮いているだけ

時間の無駄なんだから。」

「鈴。」

「何ヨ？」

「負けねえぜ。」

「其れはこつちの台詞ヨ!!」

鈴はそう言いながら『双天牙月』を構え、織斑一夏も『雪片式型』を構えて・・・試合

開始の通信と共に互いに仕掛ける中で織斑一夏はこう考えていた。

「（『甲龍』の『衝撃砲』は不可視で然も360。全てが砲撃の範囲内だ、

だけど）」



と思いながら織斑一夏はハイパーセンサーを起動して鈴の顔・・・特に目に集中してこう続けた。

「(こいつの弱点はお前の目線、そこに着目すれば勝てないなんてあり得ない!!)」

そう思いながらガチ遭った。

互いに宗壺と翼の様になった後に離れると鈴はこう言った。

「甘い!」

そう言つて織斑一夏を弾き飛ばすと更に連射した。

「今のは軽いジャブよ!」

「ぐあ!!」

織斑一夏は其の儘弾かれるが立て直した。

「まだまだ!!」

そう言いながら鈴歯其の儘攻撃を続けた。

「あれが衝撃砲ですか。」

山田先生はそう眩くながら試合を眺めていると千冬がこう続けた。

「そうだ、機体の周りの圧力をかけて砲身を形成して

その余剰で生じる衝撃を砲弾として放つ兵装。」

だがと千冬は鈴の期待を見てこう眩いた。

「あれは本当に『甲龍』なのか？」

「え？どういう事ですか織斑先生!？」

山田先生がそう聞くと千冬はこう答えた。

「先ずは凰の機体の形状だが見た感じで言うがあれはどちらかと言えば

第二世代機『空龍』に見えるのだ。」

「えっと確かそれって『甲龍』の前継機でしたよね？それでしたら似ていて

当然だと思いますが」

そういう中で千冬はこう続けた。

「次に出力だ、あれが第三世代機ならば織斑がああ程度で済むわけではない。」

「えええ!?あの威力であの程度何ですか!!」

「そうだ、本来ならば織斑はあのまま地上に墮とされているはずなんだ。

だがあの程度ともなると中国政府がアレで完成などありえないし」

それにと云って千冬はこう言い切った。

「あの国は共産党で党に対する忠誠心で代表候補生のランクが

変わって行くんだ。二年未満の凰が専用機を貰えると思っているのか?」

「あ」

それを聞いて山田先生は合点がいった。

党に対する忠誠で操縦者が決まると言った事が度々あり内部では金持ちの娘や

有名人などにI Sを提供してしまう為本当に実力がある人間が貰えるのは

国家代表生にならないといけないのだ。

「恐らくは第二世代機に第三世代兵装を装備させた

『第2, 5世代機』だと私は推測している。」

まあ推測だがなと云って織斑先生は織斑一夏に向けてこう呟いた。

「ここに負ければお前は格下に負けることになるから気を付けておけよ。」

## 乱入者現る

千冬がそう呟く中で宗壺と翼の試合は最高潮に盛り上がっていた。  
今時見られない近接格闘系同士の戦い。

それを見て興奮が冷めやまナイノダ。

そして暫くして・・・翼がこう提案してきた。

「宗壺、これで終わらすぞ!!」

「ああ!望むところだ!!」

宗壺は翼の言葉を聞いて宗壺はそう答えてバスターソードを構えた。

そして翼も高周波振動刀を構えて互いに暫く動かなかつた。

「・・・・・・・・」

それを見て客席の方でも誰かがゴクリと喉を鳴らしていた。

そして・・・。

「!!」

互いに真っ直ぐに相手に目掛けて突進した。

「うおおおおおおお!!」

「ハアアアアアアアア!!」

宗壺と翼、その大声と共にぶつかり合おうとしていたその時に!! . . .  
管制塔から通信が来た。

『鬼塔! 星音!! 今すぐ試合を中断しろ!! 敵機g』

そう言いかけた瞬間に . . . アリーナのシールドが壊されて何か落ちてきた。

「!!」

突然のことで互いに動きを止めて何だと思っていると土煙から姿を現したのは . . . 異形のISであった。

「何だアレハ?」

「IS . . . か?」

宗壺と翼は互いにそう言って目の前のISを見た。

深い灰色のカラーリングをしていて巨大で長い腕が印象的な兵装であった。

然も肩と首が繋がっている様な感じであれが人間なのかどうかと言われれば

間違いなくこう言うであろう。

全く持って違うと。

然も頭部には剥き出しのセンサーレンズが気味悪く不規則に並んでおり肩部には大型の砲口が2つほど装備されていた。

そして宗彦と翼を見ると・・・突如としてレーザー兵器を使って攻撃してきた。

「何だ!？」

「下がるぞ!!」

宗彦と翼は互いに下がるが異形のI Sをはそんなの関係ないばかりに攻撃してきた。

「ああクソこいつビーム持ちかよ!!」

「然も攻撃力が高いぞ!!」

宗彦と翼はそう言いながら回避しつつ宗彦と翼はハンドガンを使って応戦した。

その少し前のアリーナ。

「鈴！本気で行くぞ!!（俺の攻撃で終わりにしてやるぜ!!）」

「来なさいよ!!」

織斑一夏は鈴音に向けてそう言いながら『雪片式型』を構えた。

目的は自身の持つているワンオフアピリティー『零落白夜』を使うために高機動である『瞬時加速』を使おうとしたその時に・・・こちらでも

何かが落ちた。

すると織斑一夏はそう言えばとこう思い出していた。

「（そうだ！ここから無人機がやってくるんだ!!こいつを倒して）」

そう思っていて土煙が晴れた先にいたのは・・・異形は異形でも違う意味での異形であった。

先ずは頭部であるが本来ならばセンサーアイが不規則的であったのだがそうではなくモノアイ。

胴体だが全身が装甲で覆われていて灰色。

両腕はレーザー砲台が腕の部分でまるで同化されている様な感じであった。

そして背面部であるが・・・何故か分からないがピット兵器が装備されていた。

「何だよあれ・・・」

織斑一夏はそれを見て何だと思っていた。

まあ、実際合切原作のは宗壺と翼の所に行っているためこちらは完全にお前が来たことによる弊害だ。

すると異形の I S が攻撃してきたのだ。

「やばい!!」

「一夏!!」

織斑一夏と鈴は互いに避けると鈴がこう言った。

『一夏！試合は中止よ直ぐにピットに戻って!!』

『お前は どうするんだよ!?!』

『アタシが時間を稼ぐからその間に』

そう言っている間にも異形の I S はピットを展開して三基を鈴、もう半分と異形の I S は織斑一夏に向かった。

「畜生がー!!」



「もしもし織斑君！ 凰さん!! 聞こえてますかもしもしー!!」

「無駄だろうな、ジャミングで恐らくは通信すら出来んだろう。」

「そんな!? 早く織斑君達と鬼塔君達に救援を」

「・・・それが出来たら苦勞はせん。」

「？」

山田先生は何でだと思っていると千冬は現状をデータに纏めて見せると

山田先生は目を見開いて驚いていた。

「遮断シールドがレベル4に設定・・・」

然も全ての扉がロックされているなんて!!」

「恐らくは奴か又は仕掛けた奴だろうな。」

「そんな!? 今アリーナには大勢の生徒が」

「既に中にいた候補生や整備科の連中が開けられないかどうか

データをクラッキングしてる最中だ。同時並行で三年の精鋭たちにも

手伝ってもらってはいるが時間がかかりそうだ。」

「政府に通信は」

「其れも駄目だった、こうなったらあいつらに任せるしかなさそうだ。」  
千冬はいらいらとしながらそう呟いていた。

それは無論こつちでもそうであつた。

「ええい！扉が全て閉まつていては話にもならん!!」

そう言いながら何とか開けられないかやっていると・・・通信が来た。  
相手は・・・エルムである。

「エルムか!?!今こつちは忙しい」

『ラトロワ先生！叱られるのも承知していますので話を聞いてください!!』  
「?・・・ナンダ言ってみろ。」

ラトロワはそれを聞いて何だと聞くとエルムの言葉を聞いてこう答えた。

「分かった、緊急的な処置として私が責任をとる。思いつきりやれ。」

『ありがとうございます!!』

「みんな離れて!!」

エルムはそう言ってアリーナの扉前にいる生徒達をどかせると銃を出して……こう言った。

「ぶっ壊れろ!!」

そう言ってエルムはIS用の銃で扉を破壊した。

「皆今のうちに！奏さん手伝って!!」

「避難誘導だろう!?!任せろ!!」

そう言って互いに行動した。

自分たちが今やれることを最大限やって。

## 異形の I S を倒せ

「こいつとんでもない機体だな！」

「すばしっこいしそれに重火力とはな!!」

宗壺と翼は互いにそう言うて異形の I S と戦っているがすばしっこいからか銃弾は当たらずおまけに向こうのレーザー砲台はパワーがある為対応に手間取っているのだ。

そんな中で宗壺は翼に向けてこう聞いた。

「翼さん、何だか可笑しくくないですか？」

「？」

「あの I S、俺達が攻撃する時はするけど基本的に俺達が喋っている時は何もしてきませんよね？」

「確かに・・・隙があるのに何故？」

翼は宗壺の言葉を聞いてそう返すと宗壺は翼に向けてこう聞いた。

「もしかしてあの機体って・・・無人機？」

「無人機!? 馬鹿な I S は人が・・・まさか・・・!!」

翼は何やら思い当たる所が合ったように思えるところ続けた。

「だがどうやってあれを倒すのだ？あいつは機動力と攻撃力は段違いだぞ。」  
翼がそう聞くと宗壺は翼に向けてこう言った。

「それで何だが・・・」

「どうだろう？やれますか？」

宗壺がそう聞くと翼はこう答えた。

「正直な所賭けでしかないが・・・やれるな。」

「やれるかどうかじゃない・・・やるかどうかだ。」

宗壺がそう言うのと翼は分かったと言って行動を始めた。

すると異形の I S も行動を始めた。

翼に対して近づいて攻撃しようとした瞬間に何故か・・・ガクツと動きが

鈍くなったのだ。

「・・・矢張りな。」

翼はそう呟くと其の儘銃剣の刀身部分を相手の拳目掛けてぶち当たった瞬間に機体が・・・何やら震えているような感じがしたのだ。

すると機体が離れようとした瞬間に酔ったような動きを見せ始めたのだ。

「今だ宗壺!!」

宗壺はそれを聞いてワイヤーアンカーをビーム砲台目掛けて放つと其の儘大型ライフルを出して突進してきた。

「うおおおおおおお!!」

宗壺は其の儘ビーム砲台に向かって行って上に乗った瞬間に異形の I S はそれを感じて拳を振るおうとした瞬間に翼がそれを斬り捨てた。

「私を忘れるな。」

そう言った瞬間に宗壱は砲台にライフルをぶち込むとこう言った。

「これでどうだー!!」

そう言った瞬間にドカンという銃声と共に砲台が・・・破壊された。

そしてその儘落ちていくのを見て宗壱と翼は互いにこう言った。

「作戦成功ですね。」

「あ・・・ああ。」

「?」

宗壱は翼の何やら歯に何か挟まった様な感じの言葉であったことに

何だろうと思いつながら2人は其の儘異形のISが堕ちた場所に行くと言った。

幾つものスパークと・・・本来ならば人間には存在しない配線などが

ちりばめられていた。

「やっぱり無人機だったか。」

「ああ・・・そして。」

翼はその機体を見て何か言いたげな様子であったがそろりと近づいた瞬間に

異形のISは突然・・・宗壱目掛けて襲い掛かった。

「ぐあ!!」

「宗壱!」



翼は突然のことに剣を構えた瞬間に……声が聞こえた。

「アタシを忘れんじやねエエエエエエエエ!!」

そう言いながら奏が……異形の I S 目掛けて突進してきた。

「奏!!」

翼がそれを見た瞬間に奏は槍《星穿》を異形の I S の胸の中心目掛けて突き刺したまま壁に突っ込んだ。

すると異形の I S は奏を見て襲い掛かろうとした瞬間にもう片方の腕が……

パイルバンカーで吹き飛んだ。

「エルム!!」

宗老はそれを行つた存在、エルムを見てそう言った瞬間にエルムはこう言った。

「ぶつとベ——!!!」

そう言いながら異形のISの頭部目掛けてパイルバンカーで・・・叩き潰した。

そしてやつと異形のISは・・・動きを止めた。

そして織斑一夏達の方はと言うと。

「ああもう何よこれ!!」

「クソが（こんなの原作になかったぞ!!）」

織斑一夏はそう心の中で毒づきながらもビットと異形の I S の攻撃を躲していたが決定打にならないとそう思っていた。

そしてそれからやつとの思いで離れるが 2 人の機体の

シールドエネルギーは僅かとなっていた。

「一夏……アンタ後シールドエネルギーどんくらい?」

鈴がそう聞くと織斑一夏はこう答えた。

「あと……1 回分だな。」

「私もあと 80 回分所かしら、全く! 教師陣は何やってるのよ!!」

鈴はそう言いながらもどうするかを考えていた。

攻撃するとビットが自動で対象に攻撃してきて然も向こうが攻撃すると

死角を狙うどころか避ける場所にも攻撃してくるので回避行動がとれにくいのだ。

そんな中でどうするかと考えていると……声が聞こえた。

「おほほほほほほほ！如何やら私の出番のようですね!!」

「セシリア!？」

「何やってんのよアイツ!？」

鈴はセシリアの今の立ち位置を見てそう答えた。

あんな上空で然も見えやすい所にいるなんてやられに来たのかと

そう思いたいほどであるがセシリアはこう続けた。

「この私が来た以上あんな薄汚い機体に負ける訳ありませんわ!!」

そう言いながらビットを展開すると向こうもビットを展開して攻撃してきた。

苛烈な攻撃に見えるがセシリアのビットが1機、また1機と言った感じで

墮とされていき最後に有線ビットも破壊されて其の儘落とされた。

「何したかったのよアイツ?」

「・・・さあ。」

織斑一夏も何やっっているんだとそう思っていると何かを感じたのか  
異形の I S は其の儘去って行った。

## 襲撃後

IS学園地下50m。

レベルIV権限を持つものでしか入れないISの解析場が存在する。

そこには千冬と山田先生、ラトロワ先生、ヴィレッタ先生の4人が

その機体を眺めていた。

その機体は・・・宗壺と翼、奏、エルムの4人で倒した異形のISであった。

それらを見ている中で千冬は山田先生に向けてこう聞いた。

「どうだ、山田先生。」

そう聞くと山田先生は3人に向けてこう答えた。

「・・・あれは無人機です。」

「無人機!?!」

「厄介な、一体何処の機体だ?」

ヴィレッタとラトロワ互いにそう言うが山田先生はこう答えた。

「コアから探ってみたのですが・・・未登録の物でした。」

「未登録・・・奴か。」

千冬は山田先生の言葉を聞いてそう答えるとヴィレッタとラトロワはこう聞いた。

「織斑先生、一体誰が黒幕なのか分かっているようだな？」

「話してもらおうぞ、こちらの生徒が巻き込まれたからな。」

そう言うと千冬は全員に向けてこう言った。

「あれは恐らく・・・」

・・・だろうと推測するが目的は恐らく星音だろうな。」

「星音、何故彼女が？」

「済まないがそれは他言無用となつて居るのでヴィレッタ先生、だが」

「・・・分かつた、他人のプライベートについては私も聞かない様にするが・・・万が一何かあつたらちやんと見えよ？」

「分かつた。」

ヴィレッタ先生の言葉を聞いて千冬はそう答えるとラトロワはこう聞いた。

「然しもう一機も恐らくだろうが被害の方は？」

そう聞くと山田先生はこう答えた。

「あ、はい。鬼塔君と星音さんは保健室で検査した後部屋に戻ってます、

織斑君と嵐さんも同じくですけどオルコットさんなんですがちよつと・・・」

「「??」」

何だと思つて居ると山田先生はこう答えた。

「機体のパーツは予備で何とかなるのですが無線ビツトの方がもうなくて。」

それを聞いて成程と思つていた。

女尊男卑の影響でイギリスでは慢性的な技術不足が公になり始めていたのだ。

まあ理由は察しての通り男性がいなくなり女性が中心となつて居るのだが機体の整



備は汚れるからと言う理由で全てオートメーションされているのが仇となり

ビットのような精密兵器は直接検査しなくてはならないため時間がかかるのだ。

「それでですね・・・ビットは有線型に全て統一されたらしく今本国から予備兵装をと。」

「ああ分かった分かった、そっちはオルコットに任せておけ。

ここでの事は内密とする。宜しいでしょうか？」

そう聞くと三人は了承して立ち去った。

「大丈夫か？翼。」

「ああ奏、・・・大丈夫と言われると何だかな。」

翼はそう言いながらベッドの上で体育座りで座っていた。

あの時異形の I S が自身を見て止まったのを見て彼女が関係していると感じたからだ。

「(間違はなくあれを造ったはあの人だ・・・どうしてあの方は

私なんか！)」

そう思いながら怒りを覆い隠そうとするかのように腕を強く握っている・・・奏が後ろから抱きしめてきたのだ。

「奏。」

「大丈夫だ翼、アンタは『星音 翼』。あたしの相棒だぜ？

それ以外の誰でもねえ。お前はお前なんだから。」

「・・・ありがとう奏。」

「どういたしましてな。」

「シュウ、大丈夫？」

「ああ、大丈夫だよエルムさん。怪我とかしていないし。部屋で互いにそう言っている」とエルムはこう呟いた。

「あれって結局何だったんだらうねエ？」

「さあな、だけどあれ．．．何かあるような気がするんだよなあ？」  
「？」

そして某国

「ありやまあ、一号機は未帰還かア。まあしようがないか！」

式号機は帰還できたからそこから造っちゃえば良いんだから!!」

「それにしても\*ちゃん、あんな変な機体を使うなんて

\* \* \*さんジェラシーだぞー!!」

「あんなの壊して\* \* \*さんの最高の機体で\*ちゃんをカッコ良くさせるぞー!!」  
そう言う女性が・・・組み立て中のISを見てそう言った。

## 転校生来る

そして数日後の6月初頭。

「成程ね、そういう事が。」

「うん、父さんはこれ聞いてどう思うのかなって。」

宗壺は久三に向けてそう聞いた。

聞いているのはIS学園を襲撃してきた例の異形のISである。

本来ならば箱口令が課されており外部に話せば罰が下るであろうが

宗壺は久三が口外しない事くらい分かっている為話してみると久三はこう言った。

「機体に操縦者はいなかったとなれば間違はなく無人機、だけど

そんなの公表する国なんて今のところいないし遠隔操作ならば

イギリスかもしれないけど今のイギリスにそこまでの技術力がない事くらい

自明の理だから除外ともなれば作った人間は・・・まさか。」

久三はそう言ってブツブツと何か言っていると宗壺がこう聞いた。

「父さん?」

「…………アア、済まない宗壺。ちよつとな」

そう言うともう一度考えながらこう続けた。

「父さんはこれからちよつと用があるけど……宗壺はどうするんだい？」  
そう聞くと宗壺はこう答えた。

「うん、エルムが東京観光したいから誘ってきてるからそれ行くよ。」

「エルム……ああ、あの銀髪の女の子か。……お前が等々女の子、

然も美人でスタイルも抜群の女の子連れてきた時には父さんは

やつとお前にも春が来たののかって嬉しかったな。」

「何言っているんだよ父さん!? エルムは友達!!」

「本当かなあ……?」

「もお! 俺行ってくるから!!」

「朝帰りはやめとけよ……。」

「しないよ!!」

宗壺は久三の言葉を聞いて顔を赤くして出て行くとそれを見ていた久三は  
こう呟いた。

「あの子にもやつと春が来たか、俺の父親としての役目も終わりが  
近いかなア。」

そう呟きながらこう続けた。

「それにしても無人機となれば間違いなく……彼女が関係していることは間違いなさそうだな、全く『天災』と言われるのも納得がいくがもう少し考えて行動して欲しいよ。」

全くと思いつながらも久三はエルムの事を思い出してこう言った。

「まさかあの子が宗吉と一緒にいるとは思ってもよらなかったが

これも運命と呼ぶべきかそれとも……2人の共鳴か。」

分からないなとそう思いつながら久三は三人の機体の新武装の

設計図を見ながら構築を始めた。



そして宗壺はと言うと・・・。

「それじゃあ行くか。」

「うん！」

エルムと宗壺は互いに東京観光を十分な程に楽しんでた。

服屋に行けば宗壺の事はテレビで結構な頻度で（織斑一夏に比べれば低い）

出ており有名なのだがエルムを見て男性陣は足を止めて見ていた。

何せ顔良しで長い銀髪は周囲を引き付けそのスタイル（特に胸）を見て

鼻の下を伸ばす人間やそれを見て自身と見比べて絶望したり

血涙流す人がいるほどである。

エルムは服屋でニットの服とミニスカート等を買ひ、靴はブーツ。

ゲーセンでダンスゲームの際にエルムを見て色々と揺れているのを見て

男性陣が前かがみになったりとしていた。

食事をすれば落ち着かないので公園の近くでテイクアウトしたものを

一緒に食べていた。

「美味しいねシュウ。」

「おお」

そう言いながら食べていた。

そして織斑一夏は五反田弾と言う青年と彼が経営している食堂で食事をしていた。

そしてさらに数日後。

「それでは休みも終わった事だし貴様らには本格的な実践訓練となる、本当ならばもう少し先にする予定であったがこの間の襲撃の事も相まって今日になったので今皆の手にはISスーツのカタログを持っている。

それで自身が今の実力と今後の実力の向上を平均化して出した答えを基にどの会社のISスーツにするのかを親御さんに報告して財布事情も考慮した上で判断しておけよ。」

いいなとラトロワ先生は全員に向けてこう言った。

ISスーツは肌表面の微弱な電位差を検知することによって操縦者の動きを

数万分の一の速さで機体に伝達し動かすのだ。

然もこのスーツは耐久性にも優れている為一般的な小口径拳銃程度では衝撃は防げないが銃弾を防ぐことが出来る。

「尚、金が無かつたりいた場合は本校指定のISスーツを

着て貰う事となっている。なければ・・・本来ならば水着なのだが男子がいる事も考慮して体操服で授業を受けることとなっている。前に名前は明かさんがどつかの教育実習生が二度も忘れてな、その全部忘れていることから

下着で受けているという実話があるから諸君は決してないように・・・もし態と忘れたんて言ったらそいつらはISのサポートなしで

アリーナで8周走らせた後に私と個人レッスンを受けて貰うから・・・覚悟しておけよ貴様ら。」

『『ハイ!!!!』』

それを聞いて全員が恐怖の表情を浮かべてそう答えた。

何せ元とは言えロシアの国家代表生であったと同時に

第一回モンドグロツゾ経験者相手に万全な状態であっても勝てる見込み無いのにアリーナ8周の後に戦うなど最早死体蹴りも良い所だ。

それを聞いて目に力が入ったのか良しとラトロワ先生はそう言うところ続けた。

「それでは転校生を紹介する、入れ。」

そう言って入ってきたのは・・・小さな女の子であつた。

そしてその少女は・・・熊の人形を持ったまま自己紹介した。

「えええええて・・・『クーリエ・ルククシエフカ』です・・・。」

消え入りそうな声でそう答えた。

## 授業開始

「クーリエちゃんだつて。」

「何処の国の子かな？」

「何だか小さいね、幾つなのかしら？」

「少なくとも私達と同じ年つて事は無いわよね？」

女生徒達がそれぞれそう言っているとラトロワ先生はこう答えた。

「クーリエは未だ10歳でロシア代表候補生見習いであるが既に専用機を持っており今回は特別に留学を許可されている。だがこの様な性格である為皆出来るだけ

仲良くしてくれ。」

ラトロワ先生がそう言うのと女生徒達は口々にこう続けた。

「え？あの年で代表候補生見習いつて凄くない？」

「専用機持ちつて事はやっぱり強いのかな？」

「羨ましいなあ。」

そう言っているとクーリエがラトロワ先生の後ろに隠れるかのように下がるとラトロワ先生はクーリエに向けて優しい口調でこう言った。

「大丈夫だ、その内皆お前の事を羨ましいではなくなるはずだ。」

「・・・本当?」

「ああ、本当だ。」

そう言つてラトロワ先生はクーリエの頭を撫でた。

その光景に対して生徒達にはこやかな顔つきになつてしているとラトロワ先生はそれを感じて咳き込んでこう言つた。

「うん!ではホームルームを終えようと思う、一時間目は通常授業だ!」

クーリエは自分の席・・・宗壺!貴様の隣だ。面倒見えておいてくれ!!」

「ハイ!」

宗壺はラトロワ先生の言葉を聞いてそう答えるところつちに來たクーリエを見てこう言つた。

「宜しくなクーリエ、俺の名前は『鬼塔 宗壺』だ。」

「えええええと・・・『クーリエ・ルククシエフカ』です。」

クーリエはそう言つて熊の人形を抱きながら席に座るが・・・座つた瞬間に正面からみたら顔が・・・出てこないのだ。

それを見てラトロワ先生がこう言つた。

「ああ・・・後で座布団が何か敷かないとな。」

そう言つてどうするかと考へているとエルムが手を上げてこう言つた。

「ハイ先生！私がクーリエちゃんを抱っこするのはどうでしょうか！」

「却下だ、どうせクーリエを抱き枕にしたいとかその程度であろう。」

「ハハハハセンセイナニツテイルノカワタシワカラナイ。」

「片言の時点でバレバレだ戯け！鬼塔!!貴様がクーリエの席代わりになれ!!隣同士だからな!!」

ラトロワ先生がそう言つて宗壺にそう命令すると宗壺はクーリエに向けて

こう言つた。

「クーリエ？」

「ふひゅ!？」

クーリエは宗壺の声を聴いて熊の人形を抱きしめっていると宗壺がこう言つた。

「俺の席に座るか？見えないだろ?？」

「・・・良いの?？」

クーリエがそう聞くと宗壺はこう答へた。

「ああ、良いぞ。」

そう言つて笑顔になつている宗壺を見た後にラトロワ先生を見るとこくりと

頷いたラトロワ先生を見てクーリエはびくびくしながら宗壺の膝に座ると宗壺は



クーリエの頭を撫でてこう言った。

「大丈夫だぞ？俺は何もしないから。」

「・・・本当？」

「ああ、本当さ。」

宗壺がそう言うのを聞いてクーリエは暫く熊の人形を手放さないでだがラトロワ先生の授業を聞いた。

「よし、一時間目はこれで終了だ。次の時間はアリーナでの実習訓練で三組と合同で行うから準備するように。」

ラトロワ先生がそう言うのと各々で着替える準備をしている中で宗壺はエルムに向けてこう言った。

「それじゃあクーリエをアリーナに案内させてくれるか？  
俺は着替えに行くから。」

「うん、分かった。クーリエちゃん、シユウに行つてらっしゃいって  
言つて見て？」

エルムがそう言うのとクーリエは手を少し降つてこう言った。

「い……行つて……らっしゃい。」

「お……おお。」

宗壺はそれを聞いて何だか痒くなるような感じでアリーナに向かつていく中で  
生徒たちはこう思っていた。

『『(何だか仕事に向かうお父さんに向けて行つてらっしやいする  
若夫婦みたいで・・・羨ましい!!)』』

そういう・・・血涙を流すような心の声が聞こえた。

## 演習

「あれは確か・・・織斑一夏？」

宗壺はそう言つて織斑一夏を見ると何やら疲れた様な様子であつたので何だろうと思つているが授業だよなあとと思つて急いでアリーナに向かった。

「それではこれより三、四組合同の格闘・射撃を含む実践訓練を執り行う事とする。各員、怪我の無い様によく頼む！」

『『『『『『『』』』』』』』』』

それを聞いて全員が一斉にそう答えるとラトロワ先生がこう言つた。

「それではその前に戦闘実演をして貰う事となるからそうだな・・・こちらからは鬼塔とハインリヒ！」

「ハイ!!」

そう言うのとそれではとヴィレッタ先生は名指しでこう言った。

「星音!天羽!お前たちも出る!!」

「ハイ!!」

そう言つて互いに前に出るとヴィレッタ先生が4人に向けてこう説明した。

「貴様らにはコンビネーションにおける実戦訓練をして貰うがお前たちが

コンビを組む相手は鬼塔とエルム、天羽、星音はそれぞれ別々になつて貰う。

それで良いな?」

「つまりアタシらはクラスメイトを敵に回せつて意味で良いですか?」

「その通りだ天羽、それでは組合して終わったら飛翔。良いな?」

「ハイ!!」

それを聞いて宗壺達が揃つてそう答えた。

組合わせ

鬼塔・星音

ハインリヒ・天羽となった。

そして互いに機体を展開して飛翔すると互いに武器を構えると宗壺は翼に向けてこ  
う言った。

「翼さん、俺達は互いに交互に攻撃して牽制しつつ接近戦に  
持ち込みましょう。」

「ああ、負ける訳にはいかないからな。」

そして天羽達はと言うと。

「そんじゃああたしが一発突っ込むから援護宜しくな。」

「分かりました、それじゃあ私はその後が続きますね。」

奏とエルムは互いに簡単にだがそう言った。

そしてラトロワ先生が4人に向けてこう言った。

「それでは演習開始！」

「[[[[!!!]]]]」

それと同時に先ずは宗壺が前に出て翼は後方からハンドガンで攻撃すると・・・それすら眼中になしと言わんばかりに奏が突っ込んできた。

「何?! マズイ!!」

宗壺はそう言って奏の前に出てその攻撃を受け止めようとするが・・・エルムが大型ライフルで宗壺の動きを封じた。

「うおわ!!」

「お先!!」

奏はそう言つて其の儘・・・翼に突撃した。

「やるな奏！」

「そうかよ！」

翼の言葉に奏はそう言いながらもまるでダンスをするかのように槍を回し振りながら翼と一騎打ちし、宗壹はエルム相手に同じように格闘戦を仕掛けた。

互いに見知っている為千日手になるだろうなど考えたヴィレッツタ先生とラトロワ先生は時計を見てこう指示した。

「良し！演習はここ迄!!」

「総員は地上に降りて生徒達の実習の手伝いをしてくれ。」

そう言うのとそれを聞いて4人は・・・不完全燃焼気味であったが降りるとヴィレッツタ先生が4人に向けてこう言った。

「そんな顔をするな、今度始まる学年別トーナメントで挽回すれば

良いであろう？」

ヴィレッツタ先生はそう言つて4人に説得した。

学年別トーナメントとは文字通り一対一にテ執り行うトーナメント戦でこれには各国から大勢の観客が集まるのだ。



それを聞いて4人は目をギラリと光らせるとラトロワ先生がこう言った。

「さあさあ、時間が無いからすぐに準備しろ。機体は『打鉄』と

『ラファール・リバイブ』。どっちが良いかを自分たちで決めて使え。」

そう言つて生徒達はどちらにするか考えているとラトロワ先生はクーリエを見てこ  
う言つた。

「クーリエはこつちだ、お前は皆を見て覚えなさい。」

「は・・・ハイ。」

それを聞いてクーリエはラトロワ先生に向かつて行つた。

そんな中で授業が始まつた。

そして終わって機体を片付けている中ラトロワ先生は

宗壺とエルムを呼びつけた。

「鬼塔、ハインリヒ。少し話がある。星音と天羽は帰って良い、

これは4組での話だ。」

「分かりました。」

翼はそれを聞いてではと言つて去つて行くのを見てラトロワ先生は近くにいるクーリエにもこう言つた。

「済まないが私はこれから2人と話をしなければならぬが直ぐに戻るから心配するな。」

「………」

「お前は強い子だから大丈夫だ、な？」

「……ハイ。」

「それじゃあまた教室でな。」

そう言ってクーリエが去って行くのを見届けた後にラトロワ先生は2人に向けてこう言った。

「さてと、話だがクーリエについてだ。……貴様らは今のロシアの国際事情を知っているな？」

「は……ハイ。」

「結構問題つて言うよりも……あの一件で分断しかけたEUが纏まったどころか更に強くなりましたしね。」

「そうだ、先のウクライナ戦争に伴い国際的批判が高まっただけではなく数々の国際法違反が露見され前の大統領と幹部、軍部上層部、民間人虐殺を行った兵士は皆……何故か知らないが惨殺又は復帰不可能な程の重症となつて発見して

今やロシアは嘗て日本にいた『GHQ』と同じ様にEUから組織が送られてしまいでんやわんやでな。忙しいったらありませんそうだ。」

「それとクーリエちゃんの何の関係があるんですか？」

エルムがそう聞くとラトロワ先生は少しだが……表情を歪ませてこう言った。

「何故あんな小さな子にISを貰えたか分かるか？」

それを聞いて宗壺とエルムはこう答えた。

「えええと……分かりません。」

「私も。」

それを聞くとラトロワ先生は生徒データを2人に見せてこう言った。

「これがその理由だ。」

それを見て2人は・・・目を見開いて驚いたのだ。

「先生コレツテ!?!」

「本当何ですか!!」

宗壺とエルムが驚いたのはこれが理由である。

ク  
ー  
リ  
エ  
・  
ル  
ク  
ク  
シ  
エ  
フ  
カ  
出  
身  
ロ  
シ  
ア  
I  
S  
ラ  
ン  
ク  
・  
・  
S

## お願い

「ランクS!?!」

「まさかこれが理由ですか!?!」

宗壺とエルムはそれを見て驚きながらそう言った。

ランクSともなればあの織斑千冬と同じランクで最高位なのだ。

「そうだ、天性の才能とも言わべき奴でな。孤児だったことも相まって

政府は非合法の実験も幾度もしていたのだ。」

「非合法ってそんな!?!」

「それだけロシア国家はIS搭乗員に多大な期待をしていたという事だ、

だがクーリエは見て分かる通り臆病で人見知りか激しい気質のせいでISを動かすのを日に日に嫌がり始めたが無理やり搭乗させて実験させたのだ。」

「そんな!?!」

宗壺とエルムは酷いと言いながらラトロワ先生を睨んでいるとラトロワ先生はこう返した。

「私もそれを初めて聞いた時には腸煮えくりかえりそうな勢いだった、

ウクライナ戦争で若しもあの子を投入したのならあの子は間違ひなく心に大きな傷を抱えているのは明白だ。その前にロシア国内の政治家や軍部、何処からか知ったか知らないが大統領が使っている秘密シエルターを攻撃したから難を逃れたがクーリエは今でも人を怖がっている。其れゆえかどうか分からないが

空想上の友達相手に喋ってどうしようか迷っているのだ。

この学園に来た以上はISとも人も関わらなければならぬが

クーリエにとっては酷とも言わんばかりの所だがロシア国内だと残存勢力が何仕出かすか分かったものではないからな。それでお前たちに頼みたい。」

「???」

それを聞いて何だろうと思っているとラトロワ先生はこう答えた。

「あの子をお前たちの部屋に置かせてくれないだろうか？」

「え??」

それを聞いてマジとも思っていた。

人見知りが激しくて然も今日知り合ったばかりの自分たちにと思っているとラトロワ先生はこう続けた。

「正直な所貴様ら以外であの子を特別扱いしないともなると考えにくくてな、本当なら私が面倒見なければならぬ所だが私の家は離れているし



それにあの子には集団生活を身に着けて貰って今後の成長に繋げたいのだ。済まないが頼まれてくれないか？」

頼むと言ってラトロワ先生は頭を下げると宗壺とエルムは慌ててこう言った。

「頭を上げてくださいよラトロワ先生！今のを聞いたら俺達協力するに決まっているじゃないですか!？」

「そうですよラトロワ先生！それにあんな可愛い子と一緒にいられるんだから寧ろ大丈夫ですよ！」

2人がそう言ってOKしてくれたのを聞いてラトロワ先生は  
「ありがとうと言ってこう続けた。

「それじゃあ荷物なんだが既に学園に届いてあるから昼休みに  
エルムが持つて行ってくれないか？」

「分かりました!!」

「それじゃあ俺は自分用に椅子で寝れるように」

「イヤそんなことせんでも良いぞ？あの子とエルムと一緒に寝れば  
大丈夫だし小柄だから入れるぞ。」

「えっと・・・それで良いんですか先生？」

「無論だ、寧ろあの子は戦争が終わった後から一緒に寝る事が

大半を占めていたから慣れているほうが良いだろう。」

そう言ってそれじゃあ教室に戻って良いぞと言って2人が慌てて着替えに戻って行くのを見送って・・・ラトロワ先生は

柱の陰に隠れている楯無に向けてこう言った。

「それで、貴様の狙いは何だ？」

「何のことでしようか？」

「とぼけるな、貴様ほどの人間ならば秘密シエルターの居場所どころか

核弾頭の発射システムであるA-Iが読み込んでいた大統領の心拍情報を

偽装することも可能ではないのか？」

ラトロワ先生がそう聞くと楯無はこう答えた。

「何のことでしようか？私は只単に愛国心に従っただけですよ♪」

「愛国心か、国を愛すると言う事は国を守り、間違っていたら何があっても

正そうとすることこそ愛国心であって決して独裁者の言い分に

従う事ではあらずと言った処か？」

ラトロワ先生は少し笑みを浮かべてそう言うところ続けた。

「まあ、私にはどうでも良い事だが手に入れたその核弾頭のデータで

貴様は何をしようとするのか知らんがもしそれで何か起こそうとするのならば・・・私

の命に代えても貴様と刺し違えるから覚悟しておけ。」

ラトロワ先生はそう言つて・・・殺気を放つた。

一瞬だがそれはまるで暗闇の中に迷い込むかのような殺気であったが

楯無はへらつと笑いながらこう返した。

「何言つているんですか？ 私は只戦争を早期終結に

漕ぎ付けたかっただけなので。」

「・・・そうか、ならよいがもう一つ聞きたい。」

「何でしょうか？」

楯無がそう聞くとラトロワ先生はこう聞いた。

「貴様が何故鬼塔宗老とエルム・ハインリヒの特訓を手助けしたのだ？」

織斑一夏はどうしたのだ？」

それが貴様の仕事であろうとそう聞くと楯無はこう答えた。

「うーくん、私が出るのは時期尚早かと思われまますし彼つて何だか

何か隠しているような感じがして近づくのも何かなあと思つていまして。」

「そうか、なら良い。さつさと貴様も授業に戻つたらどうだ？」

「はい、それはすぐに。」

そう言つて立ち去つて行くのを感じたラトロワ先生はこう呟いた。

「貴様が何するか知らないが嵐が起きそうなのは言うまでもなさそうだな。」

## クーリエが入居した。

そして昼食。

「よし、席が空いているぞ！エルム、クーリエー！こつちだぜ！！」

「うん分かった！行こうクーリエちゃん。」

「う．．．うん。」

クーリエはエルムの言葉を聞いてそう答え乍ら席に着いた。

今回は食堂でご飯を食べることとなり宗壺とエルムはクーリエを連れて来たのだ。

因みに宗壺は唐揚げ定食、エルムはクーリエと一緒に

サンドイッチ＋ミルクセーキ。（因みにエルムはそれに野菜サラダ）

そして食事しようかとするとエルムがある少女を見てこう言った。

「ああ！『ラウラ』——！一緒に食べよう！！」

そう言つてエルムが向けている視線の先にいたのは．．．小柄な少女である。

背丈的にはクーリエと同じくらいかと思ひ、腰まである長い銀髪、

そして右目に眼帯（どう見ても病院が使うタイプではない）が付けられていた少女、

『ラウラ』を見てエルムが大声でそう言うので振り返つてきてこう言った。

「・・・貴様か、また会ったな。」

「うん！最後に会ったのは軍での見送り以来だもんね！！一緒に食べよう！！」

「・・・良いだろう、その前に聞くが貴様は？」

『ラウラ』はそう言いながら宗壺を見るとエルムがこう答えた。

「ああ、この人は『鬼塔 宗壺』でシユウって呼んでるの！

私のクラスのクラス長だよ！！」

「！！・・・ほお、貴様が報告にあつたエルムを倒した男か。」

「倒したって言うよりはあれって・・・運って言ったほうが良いかな？」

「運だろうが何だろうが使つて勝利する事こそ最良だ。特にこいつみたいな

出鱈目な強さを持つ輩には特にな。」

『ラウラ』はそう言いながら持つているカロリーメイトを食べながらこう続けた。

「それに貴様も中々強いと聞く、近接格闘に関してはこいつ以上と聞いて私は是非試

合を申し込みたいところだが。」

そう言いながら『ラウラ』はニヤリと不敵な笑みを浮かべるが

宗壺はアハハと乾いた笑みを浮かべてこう返した。

「いや、俺程度の実力じゃなあ。それに今は学年別トーナメント戦に向けて

特訓しているからその時にしないか？」

「ふむ、そんな催しがあるのなら話は早いな。なら……  
奴を倒すならばその時だな。」

そう言つて『ラウラ』はニヤリと笑つていると一体何があつたんだと  
宗壺はそう思つているとエルムがこう答えた。

『ラウラ』織斑一夏に何だか執着つて言うか逆恨みみたいな感じな事を  
偶に言つているから気にしないでね。」

「逆恨みつて?」

「ううん、私は知らないけどそのおかげで織斑先生つて一年間ドイツで  
教官してくれたからね。」

ソレデかなとそう言つと『ラウラ』が立ち上がつてこう言つた。

「それではまた会おう。」

そう言つて『ラウラ』は席から離れた。

「さあ、ここがクーリエちゃんの部屋だよ！」

「おおお、お邪魔しましゅ。」

クーリエはそう言ってシユウ達の部屋に入った。

現在放課後でありクーリエを部屋に入れた宗壺達は

クーリエの荷物（着替えだけ）を持ってるので中に入って

自分は何処に寝るのかと聞くとエルムはこう答えた。

「クーリエちゃんは私のベッドで寝るんだよ、お揃いだね！」

あ、けどもし嫌だったりして一人で寝たかったらそう言ってね。

私はシユウと一緒に寝るから！」

「お前どうせ裸で寝るからやめろって言うか止めてくださいお願いします。」

宗壺はそう言って最後に頭を下げてまで頼み込んだ。



男なんだから寧ろ役得だろうがと思いたいところであるが何せ男である以上スタイル抜群の美少女と一つ屋根の下（裸で寝ることあり）で然も同じベッドで寝るなど生活安全上且つ眠りの妨げになること間違いないからだ。

そんな事はまあどうでも良いとして。

「良くない！」

地の分読むんじゃない！取敢えずだがクーリエはこう答えた。

「う．．．ううん、大丈夫。その．．．一緒に．．．寝ても良いの？」  
クーリエがそう聞くとエルムはこう答えた。

「うん大丈夫だよ！寧ろ何時でも良いよ!!」

私達これから一緒に暮らすんだから!!」

それを聞いてクーリエは少し嬉しそうにクマのぬいぐるみを握っていた。

「全く本国め、こんなものを寄越しておつて。」

ラトロワ先生はそう呟きながらその機体を見た。

今彼女がいるのは格納庫、ここは各国毎に場所が決められており

今ラトロワ先生はロシアのIS格納庫に入っていた。

その機体は背面部に大型のサブアームが二本と

ハルバードの様な槍型の武器が8本、そして大型の盾と銃火器と言つた武装を持つこ

の黒い機体はロシア製のIS『スヴェントヴィト』。

現在残されているISの中で最も汎用性のある機体である。

そしてその隣にあるのが水色の軽量装甲を持つ機体。

銃火器内蔵ガンランスを保有した機体『ミステリアスレディ』と

呼ばれる機体だ。

因みにこの二機は只のフェイクでありこれらは機体の整備の際の見本として置かれているのだ。

それらを見てラトロワ先生はこう続けた。

「あの子がISを使うこと自体は何としてでも避けなければならない。

その時は・・・分かっているな？」

「ええ、そのつもりですよ。」

それに答えたのは楯無であった。

両名は其の儘少し話して解散した。

## ラウラ対宗壺

そして暫くして土曜日。

この日宗壺はエルムとクーリエと一緒に奏と翼との特訓（クーリエは見学）でアリーナに来ていた。

この時織斑一夏は他のアリーナで練習していた。

そんな中で宗壺はラウラを見かけた。

ラウラの機体は見ようによってはエルムの機体と同じに見えるが見た目が違っていた。

右側に大型のカノン砲、左にはワイヤーブレード射出機、そして何よりも頭部にあるバイザーが異様な見た目を放っていた。

右目は普通だが左目は3つのレンズがありそれらがカシャカシャと動いていた。

「おおいラウラー——！！」

エルムが大声でそう言っているとラウラはそれを聞いて振り向くと通信でこう言った。

『何の用だ？！』

「一緒に練習しようよー!!」

『断る。』

ラウラは簡単にそう言つて通信を切るとエルムはぶくーつと頬を膨らませて宗壺に向けてこう言つた。

「ねえシユウ酷いと思わない!一緒に練習しようつて言っているのに無視するなんてさ!!」

「ああ、はいはい。落ち着こうなあ。」

宗壺は慣れた様子でエルムを落ち着かせようとすると今度は宗壺に通信が入つた。

相手はラウラであつた。

何だろうと開くとラウラは宗壺に向けてこう言つた。

『おい鬼塔、私と戦え。』

「・・・何で?」

『私にはなさなければならぬことがあるのだが如何せん奴の実力がどれ程が分からないのだが貴様はエルムに勝つたのであろう?』

「・・・ギリギリだつたけどな。」

『だが本気のそいつに勝つた、ならばそれ相応の実力は保有していると見て

貴様と模擬演習をしたい。』

「だから前にも言ったと思うけど学年別トーナメント戦で」

『そうはいかんで、ここで会ったのが運の尽きと思つて戦え。』

ラウラは宗壺に向けてにべもなくそう言うと言つて宗壺はラウラに向けてこう言つた。

「それじゃあ演習は時間制限付きで如何だ？」

『良いだろう、試合時間は10分。その間に生徒共を退避させておけ。』

ラウラはそう言つて通信を切ると翼と奏にその事伝えると2人はこう言つた。

「皆！これから宗壺が模擬演習をする事となつた!!直ぐに退避だ!!」

「機体は今搭乗している奴が片付けるんだ急げ!!」

そう言うとその場にいた生徒たちが逃げ出すかのように去つて行つた。

そして2分後。

「準備完了だな。」

「ああ。」

宗壺とラウラは互いにそう言うと言つて担当の教師（事情は既に聴いている為アリーナにシールドを張らせて貰つた。）が通信でこう言つた。

『それではこれより『ラウラ・ボーデヴィツヒ』対『鬼塔 宗壺』に於ける

模擬演習を執り行うものとする！制限時間は10分！

その間にどちらかのシールドエネルギーが半分以下になった時点で勝利とする！」  
担当の先生がルール説明をして両名が承認するところ言った。

『それでは試合開始！』

その声と同時に先ずは宗壺が手始めとしてソードビットを射出すると  
ラウラが右腕を出した瞬間にソードビットが手前で動きを止めた。

「A I Cか。」

「正解だ、だが私とエルムとでは使い方が違うがな。」

ラウラはそう言って避けると同時にA I Cを解除した。

エルムの場合は相手とインファイトする際の拘束として使うが

ラウラの場合は純粹に防御として使っていたが何時攻撃時にも使うかどうかわからない。

宗壺はどうするべきかと思っているが取敢えずと思つてこう続けた。

「考えても仕方ねえ．．．やるしかねえよな!!!」

宗壺はそう言つて大型ライフルを展開して今度はビットと共に攻撃を始めた。

「頑張れシユウ! ほらクーリエちゃんも!!」

「が．．．がんばれ．．．」

何だか微笑ましい光景に見えるがそれに引き換えラウラと宗壺の戦いは激しいの一言であつた。



ラウラのカノン砲が攻撃しながらワイヤーブレードが宗壺に襲い掛かるがそれを宗壺はソードビットで叩き落しつつ大型ライフルで攻撃しながら互いに回転し始めた。

「あれは!？」

翼は何だあれと思っているとエルムはこう続けた。

『シューター・フロア』、然も『円状制御飛翔（サークル・ロンド）』。

「何だそれは?」

奏がエルムの眩きに対してそう聞くとエルムはこう答えた。

「あれは射撃型の戦闘方法なんだけどマニュアル操作による

機体制御と射撃の両方を組み合わせなきゃ出来ない高度な技術何だけど・・・

2人じゃ決定打に欠ける。」

「!?!」

2人はどうしてとそう思っていると生徒の一人がこう言った。

「あー!鬼塔君が動くよ!!」

そう言ってみてみると宗壺が攻撃しつつ接近している様な感じであった。

本来こんな時に対しては互いに動かない方が定石なのだが宗壺は

そのセオリーを無視して進んでいくとラウラはニヤリと笑いながらこう言った。



・・・『ブル・アイ』だ。」

そう言ったラウラの機体はバイザーが降ろされて何やら・・・  
奇怪な姿となっていた。

## ラウラ対宗壺②

「『シユヴァアルツァ・レーゲン・フუნフ』……それがお前の機体の名前か？」

「ああそうだ、こいつは汎用型だが私用にチューンされているから……」

強いぞー！」

ラウラがそう言った瞬間に『シユヴァアルツァ・レーゲン・フუნフ』が高速戦闘を仕掛けた。

「は、速い！」

「それだけではない!!」

ラウラはそう言うのと背面部から……サブマシンガンを右手に左手にはバズーカをコールして一斉攻撃して……全てが宗壺に命中しそうになった。

「こいつのバイザーは特別製でな！ いかな距離であろうとも

確実に命中させることが出来る!!」

更にとラウラは……宗壺の手前まで急接近して手刀で貫くかのように

殴りかかって来たので宗壺はバスターソードで受け止めようとした瞬間に……

バスターソードが粉々に其の儘吹き飛ばされてしまった。

「ガハア・・・!!」

「これこそが私のAICの使い方だ、相手を覆う結界を限定的にすればこのように攻撃に変換することが出来るのだ!!」

それを聞いて宗壺はマジかよと思いつながらも・・・攻略しなければ勝てないと確信して破壊したバスターソードを破棄してソードビットを格納してハンドガンを出して構えた。

「ほお・・・これでも戦う気概がある事に敬意を払って・・・少し本気を」  
出そうではないかと言いかけた瞬間に・・・アリーナ一面に声が響き渡った。

『10分経過したため試合終了!これ以上するならば教員部隊を送り込むぞ!!』  
それを聞いて何だと構えを解いたラウラは宗壺に向けてこう言った。

「次のトーナメント戦、楽しみだな。」

じゃあなと言って出て行くラウラを見届けて・・・宗壺は脱力してこう言った。  
「やべえ・・・ありゃあ強いや。」

そう言つて倒れそうになると・・・後ろから声が聞こえた。

「シユウー————!!大丈夫!」

エルムがそう言いながら宗壺に近づくと宗壺はこう答えた。

「ああ・・・それにしても強いなあいつ。」

「そりゃあそうだよ、なんたつて私が所属している『黒兎』隊の隊長さんなんだから。」

「・・・隊長？」

「うん、そうだよ。」

「まじでか？」

「うん、マジ。」

「・・・そりゃあ強いわけだ。」

そう言いながら機体を解除した。

「『鬼塔 宗壺』、確かにエルムが気に入る人間なだけあるか。奴の戦闘能力はまあまあだが気を付けるべきはその成長力かもしれないな。」

こちらもあるを使わなければいけないなかつたしなとそう呟くと

ラウラは着替え室から出て行ってこう呟いた。

『織斑一夏』、教官の汚点。必ずや倒す！完膚なきまでに！！然し奴を如何やって引きづり出すかを考えねばな。」

そう言いながら・・・自室に向かって行った。

そして数日後のアリーナ。

そこにいたのは・・・珍しくセシリアと鈴音であった。

2人は互いに目を合わすところ言った。

「あらお初めまして男に媚びうるおちびさん?」

「あらあ? 誰かと思えばその男に負けた拳句に負け戦したしたことが無いイギリスの代表候補生(・ 艸、) (笑) さんじゃないかしらwwwwww。」  
互いにそう言いあっていると・・・先ずセシリアがこう言った。

「オホホ負け戦? あんなもの戦闘ではありませんわ、

只花を飾らただけであって本気出せばあんな男楽勝でしたわくく。」

そう・・・顔を引きつらせながら言っていると鈴音はこう返した。

「あらあ? 花を?? あれで花なんて笑えるわねあんなの花つて只の腐りかけの枯れかけじゃないかしらねえ。」

ほほほほとそう言っていると・・・セシリアがブちぎれてこう言った。

「誰が腐りかけデスッテ! 良いでしょう!! その小さな体を更に小さくしてまな板どころかコインのギザギザみたいにしてやりますわ!!」

「誰の胸がまな板デスッテこのチョココロネヘアーが! ぶっ飛ばしてやって



アンタの機体ごと本国にけちよんけちよんにして送り返してやるわ!!」  
そう言って互いに臨戦状態になると・・・上空で声が聞こえた。

「それならば私も混ぜて貰おうか?」

そう言う・・・ラウラの声が聞こえたので2人は上空を見るや否や  
嫌な顔をしていたがラウラはこう続けた。

「イギリスの『ブルー・ティアーズ』と中国の『甲龍』か、  
イギリスの方はまるで継接ぎみたいだな。哀れでしか見えん。」

「!!」

「そして中国の方は見た感じは確かに本物だが如何せん機体の出力は  
低そうだな、弱そうに見える。(大方第二世代機だろと思うが  
情報が少ないから言わんほうが良いな。)」

ラウラは2人の機体と操縦者の評価を見てそう言う・・・  
鈴音とセシリアはこう返した。

「何やるの? 態々ドイツくんだりまでやってきてボコられたいなんて  
大したマゾっぶりね? それともジャガイモ農場じゃあそう言うのが  
流行つてのかしら?」

「ハン、如何やらドイツの代表候補生は言語がなっていないようですわね?」

犬でもワンと泣きますのに。」

そう言うがラウラは2人に向けて・・・こう言った。

「ふん、所詮は女性権利主張団体によってなれた馬鹿と何も知らない間抜け。良いコンビだな。所詮はあの教官の汚点でもある『織斑一夏』に負けたもの。実力が大差ない奴だな、言葉一つとっても弱さが滲み出る。」

「!!」

それを聞いて2人は怒り心頭であった。

一人は織斑一夏についての事で激怒しもう一人は弱者と言われたことに腹が立っているとラウラはニヤリと笑ってこう言った。

「さあ来い、本物の戦争を教えてやるぞ?・・・」

下らん種馬のクソに群がる蠅共。」

「上等!!」

それを聞いた瞬間に・・・戦闘が始まった。

## ラウラの実力

「宗壺！今日も特訓よろしくね!!」

「ああ、翼さん達も来るって言っているしもう着いてるかも」

宗壺とエルムがそう言っていると・・・翼が走ってやって来たのだ。

「宗壺！エルム!!お前たち今からか!」

「ああそうだけどうしたんです翼さん。」

「うん、何か慌ててるけど何かあったの?」

2人がそう聞くと翼は大慌てでこう答えた。

「た、大変なんだ!ラウラ・ボーデヴィツヒが一組のオルコットと二組の凰相手に模擬戦を行っているんだ!!」

「えええええ!!」

翼の言葉を聞いて2人は驚いていた。

幾ら部隊長でもあるラウラとはいえ代表候補生2人相手に一人ではと宗壺がそう思っているとエルムは考えながらこう言った。

「いや、寧ろピンチなのは2人だと思う。」

「?？」

宗壺と翼は何でと思っているとエルムはこう答えた。

「私達って多対一用の訓練もしているから多分大丈夫と思うしそれにあの2人のISだと・・・」

何か言いたげな感じであるが宗壺は取敢えずと言つてこう続けた。

「行ってみようぜ！もし何かあったら止めなきやいけないし。」

「・・・確かにね。」

「ああ。」

そう言つて三人は第三アリーナに向かって行つた。

ドゴオン!!と言う爆発音が鳴り響く中で奏が既に席に座っていた。

「奏!そつちはドウダ!」

翼がそう聞くと奏はこう答えた。

「ちよつとだが・・・酷い状況だぜこいつは。」

奏がそう言つて指さした先にあつたのは・・・ボロボロになつた二機のISと・・・無傷で立っているラウラの姿があつた。

「食らいなさいよ!!」

鈴音はそう言つて衝撃砲を打ち込むが・・・AICで防御してこう言つた。

「いい加減にしろ、貴様も軍属所属ならばもう勝算がない事くらい

理解しているだろう?」

「クウウ!」

「でしたらこちらはどうです!」

すると今度はセシリアが割り込んできて・・・2人纏めて有線ビットで

攻撃してきた。

「ちよつと危ないじゃないの!!」

「勝てば宜しいのですわ!勝てば!!」

セシリアがそう言っているが・・・既にラウラがいなかつた。

「ど……何処に」

「ここだ・」

ラウラはそう言つて……セシリアの背後に回り込んでいた。

「い……イグニッション」

「貴様程度でも存在は知つているようだがこの程度とは聞いて呆れる。」

そう言つて零距离によるサブマシンガンでセシリアを吹き飛ばした。

「キヤアアアアアアア!!」

悲鳴と共にセシリアが吹き飛んだがラウラはワイヤーブレードを射出して

セシリアの四肢を巻き取つて近づかせて……ISのPICを切つて自由落下で

蹴りを喰らわせて其の儘落ちた。

「が……ハア!!」

「もう寝てろ。」

ラウラはそう言つてセシリアを一瞥すると鈴音に向かってこう言つた。

「さてと……貴様だけとなつたが未だ続けるか?」

そう聞くと鈴音はこう答えた。

「当然でしょうが!寧ろ邪魔者がいなくなつたから好都合よ!!」

「そうか。」

ラウラは鈴音の言葉を聞いてそれだけ言ってナイフを取り出してこう言った。

「さてと、私は弱者相手に本気で戦う獣ではない故に貴様相手ならばこの程度で済みそうだな。」

「・・・言ったわね・・・!!後悔しても知らないんだから!!」

うおりやああああアアと大声でそう言いながら青龍刀2本で攻撃するが

ラウラはそれをナイフと拳だけで往なして攻撃を躲していると・・・

ラウラはこう言った。

「・・・もう飽きたな。」

「!!」

「終わらせる。」

簡単にそう言った瞬間に・・・鈴音の腹部に拳がめり込んだ。

「が・・・ハア!!」

「遅いな、これでは拳法に於いて名高い中国の名が泣くぞ。」

そう言うのと今度はワイヤーブレードを四方八方に展開して機体を破壊し始めた。

どんどん崩れていく装甲を見てラウラはこう呟いた。

「・・・矢張り第二世代機か、然し改修箇所から見

て、5世代機と言った処か。」

そう言つて其の儘地面に叩きつけるとラウラは鈴音に向けてこう言つた。

「今度闘う時はもう少し実力を付けてから出直してこい。」

そう言つて零距離での・・・レールカノン砲で鈴音を壁に迄吹き飛ばした。

そして土煙と同時に見えたのは・・・機体がバラバラ一歩手前まで壊れた『甲龍』と失神した鈴音の姿であつた。

「何だ、矢張り弱いな貴様ら。」

準備運動にもなりやしないとそう言つたと宗壺を見てラウラはこう言つた。

「おい鬼塔、前の模擬演習の仕直しと行くか？」

「・・・遠慮させてもらう、予定があるから。」

「そうか・・・ならトレーニングルームでも」



「それなら・・・俺と戦うか。」

ラウラの言葉を遮るように・・・織斑一夏が現れるとラウラは・・・憎らしい表情をして織斑一夏を見てこう言った。

「よく来たな織斑一夏。」

「ああ・・・ここ迄ヤレバ嫌でも来るぜ!!」

そう言って雪片式型を構えるがラウラはこう言った。

「ならば来るか?」

「上等だ!!」

そう言って『零落白夜』を始動させて突撃する織斑一夏を見て

ラウラが右腕を構えようとして・・・何かを感じて後ろに下がると2人の間に・・・誰かが入って来た。

その人物は織斑一夏を・・・剣1本で弾き飛ばすところ言った。

「全く・・・砂利共の喧嘩の仲裁に教師を割り込ませるな。」

そう言って現れたのは・・・白の機体を纏って現れた・・・。

「千冬姉。」

「織斑先生だ。」

機体名『暮桜』を身に纏った織斑千冬の姿がそこにあつた。

## 今後

「千冬姉・・・何で『暮桜』が」

「どうしたのだ貴様は？私が何かあったのか？」

千冬は織斑一夏に向けてそう聞くと織斑一夏はこう答えた。

「何で・・・『暮桜』が？」

「ああこいつか？こいつは私が引退した後に倉持技研から万が一と言われて改良されて譲ってもらったのだが何かあるのか？」

「・・・・・・・・」

それを聞いて織斑一夏は何でとそう思っていた。

「（嘘だろおい！原作じゃあ『暮桜』は箒が『紅月』で戦った事で機体が機能停止してしまうほどの故障をしているはずなのに何でだ!?!）」

そう思っていると千冬は織斑一夏に向けてこう言った。

「もう良いか？これ以上やってもと言うよりもお前ではラウラには勝てん。」

「そんなのやってみなきゃ」

「イヤ分かる、専用機2人がかり。それも第三世代が2機掛かりで戦っても目立った

負傷などしていない、それだけで今のお前との差は歴然であろう?」

「くう!!」

織斑一夏はそれを聞いて苦々しい表情をしたが・・・暫くして千冬は織斑一夏に向けてこう言った。

「分かったのならば刃を下せ、ラウラ。貴様もこれ以上戦うともなると庇いきれんぞ!」

「了解しました教官。」

そう言ってラウラは構えを解くと織斑一夏も渋々であるが構えを解いた。そしてそれを見た千冬は今アリーナにいる全員に向けてこう言った。

「では、学年別トーナメント戦迄の間私闘の一切を禁ずるものとし破ったものは参加資格を取り消すものとする!解散!!」

千冬がそう言って今回の戦いは終わった。

そして放課後の機体格納庫にて。

「それで、被害状況についてだが。」

千冬は整備員に向けてそう聞くと整備員はこう答えた。

「いやですね、酷いの一言ですよこいつは。先ずは『ブルー・ティアーズ』

何ですがね、ライフルはお釈迦様。ビットはミサイルシステムが破損、各パーツが悲鳴を上げていますから一度本国に戻させてオーバーホール、

ダメージレベルはE。つまりコア以外は全部だめですね。『甲龍』ですが

腕部の衝撃砲と言うよりも関節が壊れ始めてますね。パイロットの操作に機体が摩耗してしまってますよこれ？ダメージレベルはD、機体の機構部分にも

重大な損傷がある可能性がありますので暫くは使えませぬね。」

そう言つてパッドを千冬に見せるが成程なと言つてこう締めくくつた。

「ありがとう、私が彼女達に事情を説明しておく。」

「それでは。」

そう言つて整備員が出ていくのを見て千冬は・・・近くの影にいた楯無に向けてこう言つた。

「聞いた通りだ、濟まないが轡木理事長の提案通りに頼む。」

「分かりました、では。」

そう言つて立ち去るのを見て千冬は・・・『暮桜』を見てこう呟いた。

「まだまだお前には頑張つて貰わんとな。」

そう言つて自身の愛機を見つけていた。

## その後

「それでどうなったんだあいつ等?」

宗壺はエルムに向けてそう聞くとエルムはこう答えた。

「うん、聞いた話だけどオルコットさんは機体がボロボロになっただけじゃなくて予備パーツすらなくなったから一度本国に戻るって。それと凰さんは

予備パーツで修復しているんだけど本人が重症で今回の学年別トーナメント戦は欠席するってさ。」

エルムがそう答えると宗壺はこう呟いた。

「それにしても織斑先生の機体を見れるってそうないよな?生で。」

「私もだよ!まさかここに配備されているなんて驚きだったよ!!」

あの機体で戦う織斑先生見たかったなあ!!」

「止めてくれ、もしそんな状況になったら俺達ヤバイぜ?」

「まあそんなだけどね。」

互いにそう言っているとクーリエがオレンジジュースを飲み干してこう言った。

「シユウ、エルム。これからどうするの?」

そう聞くと宗壺はこう答えた。

「取敢えずは訓練するか、クーリエは機体の動作訓練とか。」

「……………」

「まあ、嫌ならやらなくていいと思うから好きな時にね。」

「……………」  
「パアアアア。（\*^▽^\*）」

エルムの言葉を聞いて突如として笑顔になるクーリエを見て宗壺はアハハと笑いながらとりあえず今日は夕飯食べるかと言って三人で向かった。

織斑一夏の部屋。



「クソ糞糞糞！何だよあれ!!何で『暮桜』があるんだよ！

あれは確か原作じゃあ学園の最地下室に石像みたいになって封印されているはずだろうが!!」

そう言いながら枕を殴っている織斑一夏であったが更にこう続けた。

「それに何だよこの間のあの無人機はよ!!聞いた話だと

もう一機あつたつて言うじゃないかそれをあの鬼塔とか言う奴が倒したつて何で俺の思い通りに動かないんだよ畜生が!!」

織斑一夏はそう言いながら枕を投げ捨ててこう言った。

「それにシャルも来やしねえ．．．一体どうなつてんだこいつは

箒は別の名前になって俺から離れるし一体全体どうなつてんだよこれ。」

そう言うのが気を取り直してこう締めくくった。

「まあ仕方がねえ、こうなつたら学年別トーナメント戦でラウラがVTシステムで暴走しているところを俺が助けて惚れさせれば良いんだから。序にアイツの

周りにいるあのエルムっていうあの女も俺のハーレムに加えて．．．

ククククク．．．ぎやははハハハハハハッはあ!!」

最後に狂ったかのように笑う織斑一夏であったが．．．世の中そう簡単に

うまくいくわけがないのが世の常と言うのは全く理解していないようであった。

次の日

掲示板にある書類が公開されていた。

内容はこれ。

『今回行われる学年別トーナメント戦は先のクラス対抗戦において起きた襲撃事件に基づきタッグマッチで行う事とする事をここに記載する。』  
そう書かれていた。

すると女生徒達の殆どが一目散に宗壺や織斑一夏に向かって行った。だが宗壺は全員に向けてこう言った。

「悪い、俺エルムと組むから。」

これにより残りの対応を織斑一夏がすることとなったのでその対処に追われることと相まった。

「へえ、それじゃあ翼さんと奏さんもペアに？」

「ああ、私と奏は常に息が合っているからな。」

「ま、立ち位置的には丁度良いしな。」

互いにそう言うのと翼はクーリエを見てこう聞いた。

「聞きたいのだが宗壺、クーリエはどうするんだ？参加するののか?」

そう聞くと宗壺はこう答えた。

「うゝゝん、何せクーリエは事情が事情なだけあって

自由参加つて事になつてゐるから参加・・・するか？」

「・・・・・・」フルフル。

クーリエはそれを聞いて首を横に振つて答えると翼はなある程など言つてこう続けた。

「だがなクーリエ、何れ嫌でもやらなければならぬ事がある。

その時に備えなければいけないぞ？」

まあ、分からないと思うがなと翼はそう呟いて水を飲んでゐた。

そして6月の半ば頃、宗壺は一人で第9アリーナに来ていた。

そこで・・・・久三と出会つてゐた。

「父さん、届け物って何？」

宗壺がそう聞くと久三はこう返した。

「ああ、今度始まる学年別トーナメント戦で出す兵装だよ。」

そう言うのとコンテナからある物が出てきた。

それは……。

「……腕？」

そう、腕が出てきたのだ。

そして久三はこう続けた。

「これが新しい兵装『補助アーム《修羅》』だ。こいつは機体の背面部に搭載させて武器の使用の幅を広げさせることが出来るんだけど……

その分ビットの操作がAI頼みになってしまうからまあそこんところは許して欲しい。」

「いや良いよ、後は俺の腕次第って意味だし。」

それを聞いて久三はそうかと言うともう一つ出した。

「そんでこれがその《修羅》と同様に搭載する《バッテリーパック》。こいつはシールドエネルギーの予備電源が内蔵されているから長時間の運用が

可能になっていてな、武器として新しく長距離ライフルがあるから

バスターソードと一緒に拡張領域に突っ込んでおいてくれ。」  
そう言うと久三はこう言って締めくくった。

「それじゃあ搭載したら運用実験するから準備しておいてくれ。」

「おお！任せろ!!」

宗彦はそう言って準備を始めると久三も準備を始めた。

## 学年別トーナメント戦

そして学年別トーナメント戦当日。

その慌ただしさに於いてはこれ迄の比ではない。

第一回戦が始まる前にも関わらず各企業のスカウトマンや国家の関係者、

大使館職員、各IS製造会社の重要人物などが来るため学園内に配備されている

戦術機部隊が見回っており全生徒達は雑務や会場の整理、来賓の誘導等で

忙しかった(織斑一夏と宗彦は男性IS操縦者であると同時に重要人物である為

待機している)。

そしてそれが終わると全員一直線に各アリーナにある更衣室で着替える。

男性人たちは既に着替え終えている為邪魔にならない様に各整備室にて

待機している。

そんな中で織斑一夏はこう思っていた。

「(糞! 箒は既にあの女とコンビ組んでいるから組めねえし鈴音は原作通りだし

俺の周りにはいるヒロイン達がいねえじゃねえか! これじゃあ下手したら俺がラウラ

と組む……いや待てよチャンスだ! 俺がカッコよく相手を倒せば俺の事

見直してくれるだけじゃなくて惚れてくれるかもしれない！  
だったら手頃な奴を標的にして)」

等とどれだけ女の子のハーレムが作りたいたんだよと思う現在である。

そして宗彦はというと今回の来訪者の中に久三の名前があったため

何処にいるか探していると・・・ちゃんとしたので少し喜びながらこう思っていた。

「(父さんが見ているんだ・・・絶対に勝たなきゃな！)」

そう思いながら宗彦はは久三の言葉を思い出していた。

「良いか宗彦、今回の結果次第じゃあスカウトがあるかもしれないんだ。

まあこっちは三年が主立っていたけど去年は一年からそういう人間がいたからな、

頭の隅に入れておけよ。トーナメントで上位に入ればチェックされるから

これ次第じゃあ斑鳩グループの今後の経営方針が変わるけどまあ・・・

楽しんで来い!!」

「楽しんで来いって何言ってたんだろうなあ父さんは。」

アハハと乾いた笑い声を出していると・・・モニターに対戦の組み合わせが



発表され始めて映し出されると出てきたのは……これだ。  
「…………え？」

一年の部Aブロック第一回戦対戦情報

『織斑一夏・ラウラ・ボーデヴィツヒ』

&

『鬼塔 宗壺・エルム・M・ハインリヒ』

と出ていたのであった。

そしてその情報を見た2人はと言うと……。

「ほお、まさか貴様と当たるとはこれは運が良いかもしれんな？」  
「どうか、ラウラ。私とシユウのコンビネーション見縊らないでね。」

「無論だ、貴様と鬼塔宗壺の実力は知っているからな。対策させてもらうがつまらないな。」

「？」

エルムはラウラがつまらないと言って何でと思っていると・・・  
好戦的な笑みを浮かべてこう続けた。

「織斑一夏をこの手でボロ雑巾の様に叩き潰してやりたかったからな。」

「・・・うわああく〜。」

それを聞いてエルムはドン引きしていたがラウラは準備してくると言って機体に向かって行った。

既にISは展開済みで操縦者が何時でも使えるように待機しているのだ。  
そしてエルムも走って向かって行った。

そして互いにピットに向かって行き先ずは宗壺とエルム。

「相手は織斑一夏か、映像からするとアイツの機体は近接格闘特化型で『雪片』って言う織斑先生が使っていた機体の武器の後継機って事と

単一能力を持っていることぐらいなら注意点も含めて充分理解しているから対策はとれるし今の俺の機体は新装備があるからアイツは対処するにも

時間を掛けれそうだな。」

そっちはと宗壺はエルムに向けてそう聞くとエルムはこう答えた。

「うん、こっちは何回か模擬試合はしているし向こうも理解しているから

千日手になりそうだなあ。」

「だったら俺がラウラと戦うからエルムは織斑一夏を頼みてえんだけど

良いか？」

そう聞くとエルムはこう答えた。

「任せてよ、こう見えてもナイフ裁きはワタシ自信あるんだから!!」

そう言いながら（^^）Vサインするのを見て宗壺はエルムに向けてこう言った。

「それじゃあ・・・勝つぞエルム！」

「うん！シュウ!!」

そう言つて互いに飛び立った。

それに対して織斑一夏とラウラはと言うと。

「なあラウラ、一つ良いか？」

「……」

「俺達はチームなんだ、だからコンビネーションでアイツらを」

「必要ない。」

「何!？」

ラウラの言葉を聞いてどうしてと聞くとラウラはこう答えた。

「作戦を作ったとしても素人のお前の案など向こうからしたら

分かり切ったものだ。それにハインリヒはワタシよりも強いから貴様は邪魔だ。」

「!!」

それを聞いてマジかよと思っていた。

ラウラは原作では全体の中でもトップクラスの实力を持っているのに

ハインリヒはラウラよりも強いと聞いて何でそんな奴が

原作に登場しなかったんだ!?とそう思っているとラウラは織斑一夏に向けて

こう言った。

「私が奴らと戦うから貴様は隅でじっとしている。」

良いなど冷たい視線をぶつけると織斑一夏はうぐぐ!?とたじろぐと

ラウラは興味を無くしたかのように外に向かって行くと

それを追いかけるかのように織斑一夏も続いて行った。

天気は快晴、戦闘態勢は良好であった。

## 試合開始

「あの時の続きと洒落込もうじゃないか、鬼塔宗壺。」

「望むところだラウラ！」

宗壺とラウラは互いに臨戦態勢に入ると織斑一夏とエルムも同じであった。

「さてと、暴れるよ〜〜！」

「さあ、来い！（それにしても本当に胸がでかいなこいつそれに下乳が丸見えだし俺に惚れさせたらまずアイツを。）」

クククククと内心黒い笑みを浮かべながら捕らぬ狸の皮算用をしている

織斑一夏であった。

そして暫くして・・・開始の合図が鳴った。

互いに相手目掛けて攻撃を始めた。

宗壺対ラウラ



「ウオオオオオオオオ！」

互いに大声を出し乍ら武器を使って攻撃を始めた。

ラウラは前の模擬試合の際に使っていたサブマシンガンを右手に持ち、

他に《灰戦騎》の武器は近中距離型が多い事を考慮して

遠距離用のバズーカを左手に保有してレールカノンと同時併用して攻撃してきた。

「うおわ!? あいつ俺の武器の事を考慮して選びやがったな!!」

「戦闘でまず重要なのは情報だ、先のロシアではそれすらしなかったから

あの様な愚行を仕出かしてしまい今ではあの国はEUの属国的扱いとなっているのだが私は違う。完全たる力と敵の情報を仕入れて確実に敵を倒す事で

任務が達成されるのだ!!」

そう言いながらラウラは更にワイヤーブレードを使って宗壺を追い込もうとすると

宗壺はハンドガン・・・だけではなく《修羅》を使って拡張領域から

大型ライフルを展開してそれを《修羅》に装備させた。

「何!?!」

ラウラは何だと思って下がろうとした瞬間に大小さまざまな砲撃と

ビットにおける近接戦闘が始まった。

ラウラはそれに対して全てを出し尽くすかの勢いで、勿論宗壺も同じ気持で

攻撃が繰り広げられた。

エルム対織斑一夏

「ああもう何だよこの攻撃！卑怯だぞ!!」

「何処が？これはISの試合なんだよ！卑怯も何もないからね!!」  
織斑一夏の言葉に対してエルムはライフルを巧みに使って攻撃しつつワイヤーブレードを展開して追い込んでいた。

正直な話近接格闘特化型の織斑一夏の機体に対して中距離型のエルムの機体とでは相性が悪いがためにじり貧であったのに織斑一夏はヤバいと

感じて《零落白夜》で攻撃するがエルムは面白そうだなと感じたのか  
大型のバスターソードを展開して斬り込みにかかった。

「はっ！この《零落白夜》の能力を知っていないのかよ!!

これではアイツを)」

宗壺を倒せばと思った瞬間にエルムはバスターソードを・・・投擲した。

「へ？ぶぎやー！」

織斑一夏はそれを見て何でと思った瞬間に直撃してそれと同時に中に入って  
ライフルを織斑一夏の懐に乱射して・・・機能停止した。

「ばいばい。」

そう言っつてエルムは離れて宗壺の方に向かって行った。

それを見て管制室にいる千冬はと言うと。

「あのバカ者が、良いように弄ばれおつて。」

「アハハ・・・まあ仕方がないかと。」

「最後の何てアレでは只の案山子にしか過ぎん、あの瞬間に上に飛んで回避すれば最低限ライフルでの攻撃は防げていたのに全くあの阿保は。」

千冬はブツブツそう言っていると山田先生は宗壺達の戦い方を見てこう言った。

「あの2人は恐らくボーデヴィツヒさんを最後に倒すために織斑君を

先に仕留めたんですかね？」

「恐らくな、ボーデヴィツヒは確かに強いが単体では高が知れている。

凰やオルコットの場合は相性の問題であろうがああ2人ともなると

ボーデヴィツヒも警戒を上げるであろうな。」

千冬は山田先生の言葉を聞いてそう答えてこう続けた。

「近接系の2人相手にボーデヴィツヒも白兵戦、然も肉弾戦に關しては

エルムと粗互角と言った処だ。どちらが強いかここで軍配が上がるであろうな。」

そして試合では。

「ええい！まどろっこしい!!」

ラウラはそう言って武器を全てマウントし直すとガントレットを展開して攻撃態勢に入った。

すると横から・・・銃撃がラウラを襲った。

「エルムか!!」

ラウラはそう言いながら回避すると宗壺と合流したエルムがこう言った。

「織斑一夏はもう戦えないよ！後はラウラだけ!!」

「そうか・・・ならやるぞ！」

「うん！」

そうやって攻撃を始めた。

「(あいつらとは一対一でも互角と言った感じだった・・この試合は楽しませてくれそうだな!!)」

そう思いながらラウラは機体に向かってこう言った。

「《シユバルツァ・レーゲン・フュンフ》拘束システム解除。」

『パイロットの戦闘コマンド入力を確認、

『IS拡張兵装収納庫(デビルズバックボーン)を起動します。』

『偽装煙幕展開』

「この音声は！」

「ラウラ！本気出すんだね!!」

宗壺とエルムは互いにそう言った。

そう、宗壺からすればあれは嘗てエルムが使っていたのと同じシステムなのだ。

『レールカノン及びワイヤーブレード射出機格納、対戦車及び対空兵装装備。

両腕部ガントレットトクロー装備完了。各バランス調整完了。』

『《シュバルツア・レーゲン・フュンフ》始動。』

その音声と同時に煙幕が晴れて現れたのは・・・

大型の武器を背に纏った《シュバルツア・レーゲン・フュンフ》であった。

右側はガトリング砲、左側はミサイル発射装置が装備され、まるで単騎で

複数の敵と戦うかのような兵装であった。

「さあ・・・戦争を始めよう。」

そう言った瞬間に・・・武器から火が噴いた。

そして着弾した場所が・・・文字通り噴火した。

## 闘い続けて

ドイツが開発したシステム『IS拡張兵装収納庫（デビルズバックボーン）』は搭乗者の戦闘能力や才覚、実力等で武器が異なっている。

例えるならばエルムは近接格闘特化型に開発されている為

パイルバンカー等の兵装があるがラウラの場合は違う。

同じ様に近接格闘特化だが彼女の場合は戦闘意識の違いによるものだ。

「最大火力で圧倒したところを近接格闘で止めを刺す。」

この様に高火力と高出力の両面を重視した兵装を主立っている為ラウラの機体はその殆どが・・・大雑把であるのが伺える。

「そらそらどうした!」

ラウラはそう言いながら重火力形態となった

『シュバルツァ・レーゲン・フュンフ』で攻撃しているが宗壺とエルムはそれに対して避けるしかなかった。

「何だよこの火力はよ!」

「大雑把にも程があるよ!」



互いにそう言いながら避けているとラウラは2人に向けてこう言った。

「どうした貴様ら！私はここに居るぞ!!」

そう言いながらも攻撃は更に苛烈さを増した。

「あれがボーデヴィツヒの兵装か。」

「あれっでもう完全にオーバークルものじゃないですか!?!」

山田先生は千冬に向けてそう言うのと千冬はこう続けた。

「奴らしいと言えば奴らしいな、圧倒的な力で捻じ伏せると言うシンプルであるが重点的なコンセプトだ。」

「あんな攻撃下手したらアリーナのシールドが何時まで持つかわかりませんよ〜!!」

「泣き言言うな山田先生、アリーナのシールドを最大に上げろ。」

「試合終了迄はそれで耐えさせるしかあるまい。」

「そんな〜!!」

山田先生は泣きながらもシールドの耐久度を上げた。

管制室でそんな事起こっていることなど露知らず。

「ああもう！弾切れていつ何時になるんだよ!!」

「・・・だつたら!!」

エルムはそう言つて両手を前に出すと弾丸やミサイルが・・・止まった。

「今だよシュー！」

エルムはA I Cを発動しながらそう言つたと宗壺は分かつたと言つて

バスターソードを二本展開して《修羅》を使った二刀流で攻撃しようとする……  
ウラはニヤリと笑ってこう言った。

「私にもAICがある事を忘れたか!!」

そう言つてラウラは腕に装備されているクローが……何か見えないシールドで守られて  
いるかのように纏つて攻撃した。

「ヒュンケファウスト!」

そう言つてバスターソードにぶち当たつた瞬間にバスターソードが……粉々に砕け  
散つた。

「まだまだ——!!」

宗壺はそう言つて腕に持っていたバスターソードの柄をラウラ目掛けて  
投げ捨てるがラウラはそれを弾き飛ばした瞬間に

もう一本のバスターソードも破壊した。

「終わりだ!」

ラウラはそう言つてクローを振り下ろそうとした瞬間に……

宗壺はニヤリと笑つてこう言った。

「忘れたか? こいつはタッグマッチだぜ?」

そう言つた瞬間に横から……アラームが鳴り響いたので見てみると

そこでラウラの目に映ったのは・・・幾つものミサイルが直撃コースで来ていた事だ。

そして爆発がアリーナを襲った。

「危ねえ！サンキューエルム!!」

「シユウもお疲れ様!!」

宗壺はエルムに向けてそう言った。

何故無事だったのかと言うと予備のシールドエネルギーを使って

あの爆発に対して対応したのだ。

只代償として《修羅》を失ってしまったがこれでならと思うっていた。

そもそもミサイルは何処からだと思っっているようであるがあれはラウラが放ったAICで往なして再利用したのだ。

そして爆風が収まると目の前に写っていたのは・・・。

「う・・・ぐう。」

同じく背面部の武装が全損して機体にもダメージがあつたラウラであつた。ラウラは消えゆく意識の中でこう思っていた。

負けるのか? . . . 私だ。

「遺伝子番号強化試験体《C—0037》、

今日からお前は《ラウラ・ボーデヴィツヒ》だ。」

あの時科学者の一人がそう言ったのを覚えていた。

人工子宮で生まれたデザインチャイルド、それが私だ。

只戦うためだけの存在、戦闘教育のみを徹底して誕生した最強の兵士。

そのプロトモデルを基に製造され直されたのが私だ。

私は最強であつた。

あらゆることに秀でていたが・・・あの兵器《IS》によつて全てが変わつた。

疑似ハイパーセンサーとも呼ばれるナノマシン

《越界の瞳（ヴォーダン・オージエ）》の投与で私は常にオフが

出来なくなつて来た。

それどころか部隊内で後れを取り始めてしまい部隊からは嘲笑と侮蔑が私の耳に

残つて来た。

そう……ただ一人を除いて。

「貴方がラウラだね？」

「……貴方は？」

当時から大尉として配属されていたあの女。

私の大元。

「エルム・M・ハインリヒだよ、宜しくね♪」

彼女は私によくしてくれた。

優しくしてくれたこともあつて心に余裕がうまれていたある日……

あの人が来てくれた。

「こいつハインリヒ、お前が目をかけているという兵士は？」

「ハイ！結構強いですよ!!」

「そうか、ここ最近成績が芳しくないようだが私が鍛えてやろう。

一か月で最強と呼ばれるくらいにな。」

私にとってのターニングポイント。

私を最強に戻してくれた恩人。

織斑千冬に出会えた。



## システムの悪意

それからと言うものラウラは千冬からの教えを忠実に実行するだけで最強とまではいかなかったが其れなりの地位に迄返り咲くことが出来た。

エルムの存在もあるであろうがそれでもラウラは千冬に対して感謝しなかった。だからこそ気になったのだ。

何故そこまで強いのかを聞こうと思ひ嘗て千冬に聞いてみると千冬はこう返したのだ。

「私に弟がいる。」

「弟・・・ですか？」

「アイツを見ていると分かる時があるんだ、強さとは一体何なのかを。」

その先にあるナニカをな。」

「・・・よくわかりません。」

「今はそれでもいいかもしれないが日本に来た時に一度会うのも一興かもな。」

そう言う千冬の顔をラウラは忘れようがなかった。

優しい笑みを浮かべて何処か気恥ずかしくしているその表情に・・・

ラウラは知らずの内に嫉妬の感情を芽生えさせてこう思っていた。

「許せない・・・教官を・・・あの強く凛々しく堂々としている

あの人の顔をまるで・・・女の様な表情をさせる奴を・・・絶対に！」  
だからこそラウラはその時から決めたのだ。

織斑一夏を完膚なきまでに叩きのめして千冬の目をもう一度自身に

向けさせたいがためにあの時専用機持ち2人を一度に相手どつたのに蓋を開ければ  
タツグマツチとなつてしまつただけではなく最も嫌な奴、織斑一夏相手に

共闘しなければならぬと言う最悪な状況となつてしまつたが

それだけはなかつた。

ラウラにとって最悪なのはあのエルムが敵として現れたことだ。

ラウラにとってエルム千冬を紹介してくれた恩人であるとともに好敵手とも  
呼べる人間でありその実力は常にセーブされているがために判断できないが

下手したら千冬と互角とも言わんばかりかもしれないと思つていた。

そして鬼塔宗壺。

織斑一夏と同じ顔をした男性であるが彼と違つて実力も申し分ない存在である。

そんな人間相手に戦つたのだから普通ならば諦めがつくかもしれないが

ラウラは違う。

ここで負けたら自分は織斑一夏と同じく一回戦負けとなってしまう。

そんなものになるのだけは御免被りたいと思っているラウラは力を欲した。

何物にも負けない・・・最強の力を。

すると何処かで・・・声が聞こえた。

『願うか・・・？ 汝、自らの変革を望むか？ より強い力を欲するか？』

それを聞いてラウラはすぐ様にこう返した。

「（構わない！ あの2人にかけるのであるとするならば何を代償にしても良い！ だか

ら寄越せ！ そのチカラを!!）」

「本当に良いのか？それでよ?？」

「(?!)」

突如先ほどとは違う声を聴いて何だと思つて振り返ると

そこに立っていたのは・・・大柄の人間?・・・であつた。

何故?が付いたのかと言うと・・・顔に理由があるからだ。

頭が・・・銃なのだ。

いや、間違いではない。

頭が銃なのだ、然もリボルバー型の。

するとリボルバー型の頭をした人間が・・・何故か分からないが

口に煙草を加え乍らこう聞いた。

「手前はそれで良いのか?そんな何処にあるか分からない訳も分からない力を

強請つて手に入れて勝つたとしてもよ、ソレ得手前の目的は

達成出来るのかつて話だ?」

そんなうまい話があると思つてんのかよとそう聞くがラウラはこう返した。

「(煩い!私は力が欲しいのだ!!最強の・・・あの教官の様なそんな絶対的な力を!!)」

ガンとせず真正面からそう答えると銃頭の間はこう答えた。

「・・・分かつた、好きにすりゃあいいと思うけどよ・・・忘れるなよ?」

俺は何時でもお前を待っているし見ている。お前がもし本当に力を欲して何の為に使いてえか分かった時に……あれを手に取りな。」

そう言つて銃頭の人間が指さした先にあつたのは……何やら幾つものパイプの管で雁字搦めになっている銃がそこに鎮座されていた。

「(何だアレハ？ 錆びているではないか?)」

「今はな、だがお前が本当に何のために戦いてえ時にもう一度ここに来たのならあれは新品同様かもしれないぜ？」

そう言つて銃頭の人間はラウラの頭を……ガシガシと撫でながらこう言つた。

「本当に欲しいもんは目には見えねえのさ、手前はそれが分かつて

何をしてえのか分かつた時こそ……『俺達』の出番だぜ。」

相棒と言つて……ラウラの視界がぼやけて消えた。

Damage Level D  
Mind Condition Uplift  
Certification Clear  
Devilus Backhorn restart  
《Valkyrie Trace System》 Boot

「グああああああ!!」

「!!!」

突然のラウラの悲鳴を聞いて3人は驚くが突如として機体から音声 flowed。『機体に異常システム確認! デビルズバックボーンシステム強制起動!!』それと同時に煙幕が辺りを充滿させると音声はこう続けた。

『右腕部装備変更、拠点制圧用兵装に変更。左腕部兵装変更、

《ブリュンヒルデ》兵装に変更。』

その音声と同時に右腕は自身の体を包めるかの様に大きな腕に、左腕はまるで大剣の様な日本刀が現れると音声はこう締めくくった。

『強制変更終了、《弾劾》形態移行完了。全システム再起動。』

『《シュバルツァ・レーゲン・フュンフ・ブリュンヒルデ》完全起動。』

## クライマックス

「何だ・・・あれ？」

宗壺は突如現れたラウラの機体を見て目を大きく見開いていた。

何せ右腕は肥大化しているだけでなく左腕には日本刀の様な

バスターソードを担いで現れたのだ。

すると・・・変貌したラウラの機体が突如として織斑一夏のすぐ近くに迄

一瞬で接近して大型の日本刀で薙ぎ払った。

「イェー！」

織斑一夏の白式が如何やら絶対防御が発動したようで難を逃れたが機体が

粒子となって消えた。

すると放送が鳴り響いた。

『非常事態発生！全トーナメントを中止としてレベルDの対応を実施!!』

鎮庄の為に教師部隊を送り込むのと同時に来賓と生徒は速やかに避難すべし!!』

その放送が響き渡るがラウラの機体が宗壺を見るや否や・・・

大型化した右腕で誘うかのように指を動かすと宗壺はそれを見て・・・



アハハと言つてこう続けた。

「如何やら俺をご指名みたいだけど．．．どうする?」

宗壺はエルムに向けてそう聞くとエルムはこう答えた。

「普通なら先生たちが対処するからって訳で私達は参戦しないけど．．．ここまで誘われて何もしないつて言うのが不義理だし。」

そう言いながらエルムは体を動かしていると．．．宗壺に向けてこう言つた。

「取敢えずは時間を稼いで、今のラウラ多分．．．違ふと思うから。」

「．．．分かつた。」

宗壺はそう答えながらも自身の今の兵装の状況を分析していたが．．．

最悪であつた。

「(予備のシールドエネルギーは後半分、ハンドガンも弾丸数0、残っているのは長距離ライフルと大型ライフル。完全に遠距離しかねえな)」

そう思つているが宗壺は仕方ないと言つて展開するとラウラに向けてこう言つた。

「さあ行くぞラウラ、ここからはタイマンだ!」

そう言つて武器を全て展開してソードビット全機を展開したが．．．殆どが

刃毀れしているがために正直な所じり貧だなど思いながらも．．．攻撃を始めた。

『ふん!』

ラウラは大型化した右腕で銃弾を・・・弾き飛ばしながら前進してきたのだ。「嘘だろ何だよアイツは!？」

宗壺はそう言いながらも何とかエルムから離れていると・・・巨大な煙幕が張られていた。

恐らくあの中ではエルムが機体を換装しているのだろうと思っっている中で

攻撃する中でソードビットが全機・・・破壊されたのだ。

「クソが!」

宗壺はそう毒づきながらも時間稼ぎをしながら砲撃していた。

そして1分後。

「あとちよつと!」

『終わりだー!!』

ラウラはそう言つて日本刀の様なバスターソードを振り上げた瞬間に……  
何かが当たったかのような音がした。

目にしたのは……漆黒の機体。

大型のシールドが宗壺を守っていたのだ。

そしてその持ち主は……。

「クーリエ!」

クーリエの駆る機体『スヴェントヴェイト』であつた。

「だ．．．大丈夫？」

クーリエは震えながらもそう聞いた。

如何にクーリエのランクが最高水準とは言え未だ乗り慣れていない．．．

然も恐怖症から来るもので機体に搭乗したことすらないのと宗壺は

そう思っているというラウラはクーリエを見て．．．大型化した右腕で迫って来た。

「ひー」

クーリエはそれを見て恐怖して．．．サブアームが起動してこう言った。

「来ないでー」

すると大型のハルバードがラウラを受け止めるともう一方のサブアームに

装備されているロングバレルライフルが襲い掛かった。

『!!』

ラウラはその衝撃で少し下がるとクーリエは更にこう言った。

「来ないで！来ないで!!来ないで!!!」

そう言いながらロングバレルライフルで攻撃している中でラウラはこう言った。

『エエイ鬱陶しい!!』

そう言うラウラは日本刀の様なバスターソードでクーリエ目掛けて

投げつけようとする．．．それが銃弾で攻撃された。

『邪魔だ鬼塔!!』

「それが俺の役目だからな!!」

宗彦はそう言つて攻撃しようとする。……声が聞こえた。

「クーリエちゃんを虐めるなあ!!」

「そう言うのは……巨大なドリルを左腕に装備しているエルムがそこにいた。するとそれを見ていたラウラはニヤリと笑つてこう言つた。

『待つていたぞエルム!!』

「待たないで良いよ!!」

エルムはそう返すと互いに腕を構えて……走つた。

そして互いに範囲内に入った瞬間に・・・技を放った。

『ヒュンケファウスト!』

「スピアハールファウスト!」

互いにガキンと火花が散った瞬間に互いに・・・こう続けた。

『ドツペルツヴァイ!』

「ラキートエクスプロージョン!」

それと同時にラウラの大型化した右腕から・・・引き金が弾かれたと同時にエルムの巨大なドリルが分離して放たれた。

『!!』

それを見て驚いた瞬間に2人の間に・・・爆発が起きようとした瞬間に

宗壺がエルムを守るかのようにその体を抱きしめてから爆発した。

ドーン!と大きな爆発と同時に土煙が立ち上って・・・クーリエはこう言った。

「エルムお姉ちゃん! シュウお兄ちゃん!!」

そう言ううと土煙が晴れていたのは・・・エルムと宗壺であった。



「シュウの……H。」



## 事後処理

「う．．．あ。」

「気が付いたかラウラ？」

千冬の言葉を聞いてラウラが目を開けると千冬がそこにいたのでラウラは  
こう聞いた。

「私は．．．一体」

「何処まで覚えているか分かるか？」

千冬がそう聞くとラウラはうろ覚え乍らもこう答えた。

「確か．．．鬼塔と．．．ハインリヒと戦って．．．それから。」

そう言うのと千冬はこう続けた。

「．．．本来ならばこれは重要案件である為機密事項にカウントされるため  
口外禁止となつているが軍人でもある貴様ならばそれがどう言う意味なのかも  
理解している事を踏まえて話すか．．．『VTシステム』を知っているか？」  
そう尋ねるとラウラはこう答えた。

「は、正式名称は『ヴァルキリー・トレース・システム』。」

過去のモンドグロツゾに於いてヴァルキリーの名を冠する者達の動きをトレースするものでしたがですがあれは。」

「そうだ、I S条約に於いてあらゆる国家・組織・企業に於いても

研究・開発・使用どちらかに於いても禁止となつてゐるが巧妙に隠されてな、操縦者の精神状態と意志、機体に蓄積されているダメージで

発動するようにされていたが丁度いたドイツ軍の関係者に問い詰められている最中でな、近くI S委員会が強制捜査に乗り出すこととなつており良くても

I Sコアの一部返却か最悪ドイツ軍その物が解体されてアメリカ軍の管理下に置かれることとなるだろうな。ウクライナでの一件でEU内では色々問題が山積みなのに更に追加ときたものだ、全く問題を起こしてくれる。」

千冬がそう言うトラウラは・・・しよぼんとした様子でこう呟いた。

「私が・・・望んだばかりに。」

「確かにそうかもしれないが早かれ遅かれこうなる事は明白であつたこととなると気が暗くなるがこれだけははつきりしたな。」

「?。」

「お前はお前だラウラ・ボーデヴィツヒ、これからお前が

どうしたいのかを決めろ。」

「教官……。」

ラウラは自身の頭を撫でてくれる千冬に対して少しだが……甘えたくなりそうな表情をしていると千冬はこう続けた。

「エルムから聞いたがお前は一夏を叩き潰すと言う目標でここに来たようだがその『VTシステム』で奴を倒したのだからこれはこれでな。」

其れとなとラウラに対して千冬は更にこう続けた。

「普通ならば体の筋肉が断裂して最悪死ぬはずが筋肉痛で済んだのは貴様の機体が関係しているのかもしれないな。」

「え？」

「何せ関節部分が摩耗しているだけじゃなくてシステムにもバグが幾つか検出されていてな、コアその物の見直しも兼ねて

貴様は一度本国に送るといふ話にもなったが貴様の引き取り先は軍部だから委員会がそれに対して抗議してきたからな。当面は貴様はこのIS学園が引き取り場所となり機体については向こうから職員を派遣して

こちらの技術者監視の下でバグの除去を行う事となったから安心しろ、それとエルムには後で礼の言葉でもかけてやれよ？アイツがお前を止めただからな。」

「!!・・・奴は?」

どうなりましたかと聞くと千冬はこう答えた。

「ああ無事だ、検査を終えて食事しているのであろうが先ほどまでお前をずっと見ていたから何か言っておけヨ?」

それじゃあなたと言って千冬は部屋から出ていくのを見てラウラは

ベッドに倒れ込んでこう思っていた。

「(あいつは何時私を救ってくれているな、教官を紹介してくれたのも奴だった・・・本当に面倒くさい・・・優しい奴だな。)」

そう思いながら眠りについた。

『トーナメントは事故により中止となりましたが今後の個人データ指標と

関係するため全生徒の一回戦を執り行いますので場所と日時の変更につきましては各個人端末で確認の上』

宗壺はそれを聞きながら海鮮塩ラーメンを啜り乍ら見ていると

エルムは肉うどん、クーリエは焼きそば（お子様サイズ様にしている）を食べておりそんな中で宗壺はエルムに向けてこう言った。

「ありがとうなエルム、危機一髪だったぜ。」

「良いよ別に、それに今回のMVPは間違いなくクーリエちゃんだから!!」

「そうだったな・・・ありがとうなクーリエ。」

宗壺はそう言いながらクーリエの頭を撫でてしているとクーリエは目元を細めて

何やら擦ったような表情をしているとそんな中で・・・翼と奏が3人に

近づいてこう言った。

「宗壺！大丈夫であったか!？」

「怪我とかは・・・してなさそうだな。」

2人はそう言いながらランチを持ってくるとエルムがクーリエを自身の太ももに座らせると翼と奏が互いにこう言った。

「それにしても暴走するとは驚きだったが本人は大丈夫なのか?」

「ああ、今は保健室で休んでいるようだけど直ぐよくなるってさ。」

「けどお前らも災難だったなあ、そんなとんでもない機体相手によく戦ったな。」

2人はそう言いながら夕食（中身はご飯と味噌汁、サザエのつぼ焼き、薩摩芋の甘煮）を堪能していると・・・山田先生が宗壺を見てとてと来た。

「ええと鬼塔君で良いんですね?！」

「あ、はいそうですけど・・・何か?！」

ありましたか?と聞こうとするとエルムがクーリエを連れてこう言った。

「それじゃあ私達先帰ってるから。」

「おお、じゃあな。」

そう言うて帰るエルム達を見送ると宗壺はこう聞いた。

「それで一体・・・何か?！」

「その前にありがとうございます、今回の一件。」

「良いですよ別に、俺はそれほど活躍していませんし。」

「ですけど本当でしたら教師でもある私達がやる事でしたのでお礼はしないと。」

そう言うとうと山田先生は宗壺に向けてこう言った。

「鬼塔君に朗報です!何と今日から・・・」

・  
・  
・  
・  
男子の大浴場使用解禁です!!  
」

「あれ？ボイラーが直ってる？・・・クーリエちゃん一緒に風呂入ろ！」  
「う・・・うん。」



## お風呂にテ

「お風呂お風呂くく♪」宗壺はウキウキした気分で大浴場に向かっていた。ようやく来ることが許されたこの状況を有効活用する手はないと考えて行っている中で宗壺はこう思っていた。

「織斑一夏も来るのかな？」

それはそれで嫌だなあと思っているがその心配は皆無である。

何せ当人はラウラの攻撃で気を失っている為この事は聞いていないのだ。そんな中で宗壺は知らずの内に向かって行くと山田先生が見張りとして立っていた。

「ア、来ましたね鬼塔君。こちらですよく。」

「あ、山田先生。すいません見張りなんてしなくても。」

「いいいえ、これも教師としての仕事ですし今回は本当のご苦労様でした。後はゆっくりと浸かって体の疲れを癒してください。」

山田先生の言葉を聞いて宗壺は中に入ってみた。

「うおお・・・流石国立。金の使い方が違うなあ。」

宗壺は脱衣所を見てそう呟きながら服を脱いでいるが実はと言うと既に……先客がいたのだ。

そう、宗壺の使っている脱衣所の反対側の向かいにある2つの……服がある事を。

「ウオオオオオ……風呂の中は更に広いななあ。」

宗壺はそう呟いて先ずは体を拭こうとしてシャワーのある場所まで向かって洗おうとすると……宗壺はこう言った。

「あれ？石鹸は何処だ？」

そう言っている……隣から声が聞こえた。

「ハイ、シユウ。」

「おお、ありがとうなエルム。」

宗壺はそう答えて石鹸を貰ってタオルに付けていざ洗おうとした瞬間に……何か違和感に襲われた。

「?今日は俺一人だけだったはず・・・だよな。」

そう言いいいながらギギギと錆びた人形の様に首を石鹼をくれた方向を見るとそこには・・・2人の少女がそこにいた。

「あ、シユウ。」

「・・・ふえ?」

裸になつているエルムとクーリエがそこにいた。

クーリエはエルムから頭を洗ってもらつていたのであるのか、

頭に泡が付いており運が良かったのかどうかかわからないが泡で体全体が

見えないようだがエルムは違つていた。

クーリエの頭を洗っている為顔に泡が付いていたがそれ以外は

全部丸見えであつた。

前に宗壺がうつかり見てしまったエルムの裸だがお風呂に入つていたのでか

どうかかわからないが少し赤くなつており白い肌と混じつて

綺麗な感じになつていたが当の宗壺はそれどころじゃなかつた。

「くえwrてrついゆおびうおいytyrchえrwqw!!」

宗壺はそれを見て驚いて転がりながらもエルムとクーリエに向けてこう聞いた。

「ナナナナナ何でここにいるんだ!」

そう聞くとエルムがこう答えた。

「え？帰る時にお風呂が直っているなあって思ってたから疲れを癒すために来たんだけど？」

「山田先生は!?!」

「会ってないよ?」

「となると……つい数分前って所かよ。」

宗壺はそれを聞いてマジかよとそう思っていると仕方ないといって出ていこうとするとエルムがこう聞いた。

「あれ?入らないの?」

「ああ、正直な所今回だけじゃないって分かったから次の時に。」

「一緒に入ろうよ?折角来たんだからさあ。」

「女の子と入るか普通!常識で考えてくれ!!」

「軍じゃあそういうの教わらなかったから!」

「胸張って言うなって見える見える!!」

宗壺は慌ててそう言う……隣にいたクーリエが宗壺の手を掴んでこう言った。

「一緒に……入ろ?」

そう言いながら首を横にしてかくんと傾けていると宗壺はそれを見て……。  
「うぐ。」

少しだが意志が傾きそうになり始めるとエルムが突如抱き着いてこう言った。

「クーリエちゃんもこう言っているんだからさ、一緒に入ろー!!」  
にこやかにそういうエルムを見て……。

「もう……勝手にしてくれ。」

宗壺は諦め口調で前のめりになってそう言った。

「ふ〜。」

クーリエは何やら気持ちよさそうにぶかぶかとエルムに抱きしめられながら

浮いているとエルムはクーリエの頭を優しく撫でていた。

「気持ちよさそうだな．．．俺は今煩惱消し去るのに必死なのに。」

「何か言つたのシユウ?」

「イヤなんでもない!」

宗壺はそう言つて風呂に入っているとエルムが宗壺に向けてこう聞いた。

「それにしても色々あつたねえ。」

「ああ本当だなあ。」

そう呟きながら今回の戦闘を振り返っているがよく生き残つたなあ

そう思っているのだ。

するとエルムは宗壺の肩に頭を乗せてこう言つた。

「今日は大変だったからさあ、これくらいしても良いでしょう?」

「．．．．．おう。」

宗壺はそれを聞いてもう諦めて其の儘お風呂を再開した。

「それじゃああのシステムは貴様ではないと?」

『何言ってるんのさちーちゃん! 束さんが作るのには十全な最高傑作だよ!! あんな不細工造る訳ないじゃん!! それとあれを作った馬鹿どもは束さんが』

みっちり恐怖を与えて病院送りにしといたから!!』

「そうか、ならば」

『ああそれとさちーちゃん! \*\*ちゃんの事なんだけどさ!』

「アイツの事はもう諦めろ、今のアイツは」

『ふふ〜くん! こう見えても束さんはファンクラブ会員なんだから』

そういうのはちゃんと理解してるよ!! ああそれとさ、誕生日プレゼント楽しみにして

おいてねって伝えておいてく〜!!』

そんなじやと言って切られたのを見て・・・千冬はこう呟いた。

「全く・・・いい加減に妹離れしろと言うのに。」

そう言いながら夜空を見上げる千冬であった。

因みにだが織斑一夏は今回風呂には入れなかったため少しであるが泣きそうな顔になっていた。



## 買い物

寮の裏にはほつきかりと空いたような場所が存在し簡単な集会等で使われる場所で日夜使っている2人の存在があつた。

「お疲れ奏。」

「おお、翼もな。」

奏と翼がそこにいた。

歌の練習として使っており偶にである人が来て観客として見てくれたりして歌や振り付けの感想などを聞いて自分たちを高めていた。

そして2人は部屋に戻ってシャワーを浴びて着替えて食堂に向かう、これが2人のルーティンである。

そして宗壺はと言うと・・・。

「ふあ・・・よく寝た。」

そう言つて起きると隣には薄着だがパジャマを着たクーリエと・・・また真つ裸で寝ているエルムがまだ寝ていた。

「いい加減にしてくれエルム・・・！」

そう言つて宗壺は落ちかけたタオルケットをもう一度2人に被せると着替えるかと言つて脱衣所に向かった。

そして教室。

「ああ、それではこれより授業を執り行う。間もなく期末テストである為赤点を取れば夏休み中補習生活だ、そんな事貴様らなりたくなかろう？」

『『(\*・ω・)(\*—ω—)(\*・ω・)(\*—ω—)ウンウン!!!』』

ラトロワの言葉を聞いて全員鬼気迫った表情でそう答えた。

誰だって嫌であろう、何せ貴重な夏休みを補習で終わらせるなんて学生生活に於いて苦痛でしかないのだから。

するとラトロワはこう続けた。

「それとだが来週から校外特別実習期間で3日間の間学園を

離れることとなるのは全員周知していると思うであろうが自由時間中は

羽目を外して怪我したり前日になって病気になる様にならない様に各員気を引き締めて対応するように。」

この校外特別実習期間と言うのは詰まる話が臨海学校であり初日は

丸々自由時間で海で遊べるのだ。

彼女達からすれば先週から遊べることに相まって楽しみなのだ。

そして宗壺は当日に備えてエルムと共に水着を買いに行くことと

なっているのだがその目的はエルムがアホナ水着を買わない様に見張ると言う悲しい理由であった。

「それでは授業を行う。」

ラトロワはそう言って授業を始めた。

「それでき、どんな水着買おうかシユウ！」

エルクは宗壺に向かってそう聞きながらソフトクリームを食べていた。

現在は食堂、全員何時もの面々で食事を堪能していた。

「私達は水着についてだが矢張り市販とは言え大きいタイプだからなあ。」

「ああ、確かにアタシら其れだもんなあ。」

翼と奏はそう言いながら翼はとろろご飯御膳を、奏はパエリアを食しながらそう答えた。

ぶつちやけた話学園生徒の中で一年どころか全学年に於いてまず間違はなく

上位に入る程の胸部を誇る翼と普通ならば大学生とは言え山田先生と同じくらいの胸部を持つ奏だと普通のタイプじゃ無理だなど思うが上には上がいる。

エルフだ。

何せ翼や奏以上の胸部を誇る彼女の水着など間違はなく

とんでもないものになる事間違いない為正直な所見張らないとまずいのだが

もう一つある。

クーリエだ、何せ殆ど着の身着のまま学園に来たような物なので身の回りの物を揃えたいことも相まって今度の週末を利用して買い物をする事となったのだ。

そんな中で織斑一夏はと言うと・・・。

「糞！何だよこれは!?結局一期の終盤まで来ちまったぞ!!攻略できたのは鈴だけで箒は翼って言う名前になって俺を避けるしセシリアは未だおれに敵対心持っているしそれ以前に機体が壊れたから本国に戻ってラウラ何て

俺の事眼中無しみたいな顔で俺から避けて他の連中と言うよりも先輩たちと

食事していて何がどうなってんだよこれはよ!!」

そう思いながら織斑一夏はステーキを食べているがこうも思っていた。

「いや待てよ、確かもうすぐ臨海学校だから

『銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）』と箒が『紅椿』を束さんから受領されるしアイツの誕生日だからあれをやってそんで巻き返してやる!!」

そう思っているが正直な所それはどうかと思う。

ラウラの『VTシステム』の時点で最早原作知識など意味がない事くらい察するべきであると思いたいところであるがそれを考えない事が

こいつの駄目な点であると同時に原作知識が邪魔していること位気づけとそう思いたいところである。

そして週末。

「良い天気だなあ。」

「うん。」

「買い物だー!!」

エルムがそう言つて向かう事と相まつた。

エルムは半袖の薄紫色のブラウスと下は黒のミニスカートを身に纏つており

クーリエは白のワンピーススタイルの服でぬいぐるみを持っていた。

そんな中で宗壺は2人に向けてこう聞いた。

「それじゃあ先ずはクーリエの買い物だけど先ずは雑貨だな、コップとか服とか買つてそれから日用品だな。先ずはぐるりと回つてみるか？」

「そうしよー!!」

「う・・・うん。」

クーリエもそう答えて歩き始めた。

そして数分後。

「イヤあ買ったな。」

そう言つて宗壺は自身の両腕に持つてある荷物の山を見ていた。

服や雑貨だけではなくクーリエには玩具とかを買おうと思つて聞いてみると  
こう答えたのだ。

「・・・プーちゃんと同じ。」

そう言つて熊の玩具とか置物も買ったのでそれなりの数となつた。

そんな中でクーリエは宗壺とエルムと手を繋いで歩いてゐる為傍から見れば  
家族の様な感じに見えそうである。

そんな中でエルムがこう言つた。

「そういえばクーリエちゃんつて泳げるの?」

そう聞くとクーリエはこう答えた。

「えええええと・・・プールで何回か。」

「そうか、だつたら泳ぎ方教えるね!一杯遊ぼー!!」

エルムはそう言つてクーリエに向けて笑うとクーリエもうんと笑顔で答えた。  
それを見ていた周りはまるで親子の様だなあとほんわかしていた。



## 馬鹿との遭遇

「えーっと、水着売り場は……ここか。」

宗壺はそう言つて水着売り場に来ていた。

中は殆ど女性ばかりで男性物など隅にあるくらいしかない。

最近はそんな事無い様に思えるが女性が有利であることは未だ変わらないと言う現実が見て取れた。

そんな事を考えている中で宗壺はエルム達と中に入った後にエルムがこう言つた。

「じゃあまずはシユウの水着から探そう、私達のは終わつてからで良いよ♪」

「え？良いよ、俺は。まずは女子からの方が。」

「ぶつぷー！こう言う言時は早い方を先にやった方が後々良い買い物が出るんだよ♪」

「そんなもんか？」

「そんなもんだよ！それじゃあ行つてみよう！」

エルムがそう言つて宗壺と共に水着を見に行つた。

「ええとき、シユウはどんなのが良いの?」

色とかさとエルムがそう聞くと宗壺はこう答えた。

「そうだなあ・・・あえて言うなら赤・・・かな?」

好きな色が其れだなとそう言うのとエルムは驚いた様子でこう言った。

「エ?!? 灰色かなって思っちゃったよ!!」

「いや何でだよって言うかそうなるかと鼠色じゃん!!」

宗壺はエルムに向かってそう言うと同じやあねえと言ってエルムとクーリエは

互いに出した。

エルム。

「私はこれ!」

赤の短パンタイプの水着

「無難だな。」

クーリエ

「んんんんんこれ。」

全身タイプ。

「完全に泳ぎ特化……。」

そして選んだのはエルムだが水着以外にキャップはイルカの柄が施された青いタイプを選んだクーリエの方を選んで等々……来てしまった。

「さてと……行くか。」

そう言つて宗壺はエルムと共に向かつて行くと……ある女性に引き留められてこう言われた。

「その貴方。」

「?。」

「男のあなたにいつているのよ、その水着片付けておいて。」  
そう言つてきたので宗壺はこう答えた。

「え、嫌だよ。それアンタの何だから自分で片付けるよ、自分ののは自分で片付けるのが常識だろう?」

「ふうん、分かってないわね貴方。自分の置かれている立場つてのが。」

「(ぶつちやけあんたの方だろうがなと思うんだけど。)」

宗彦はそう思っただけで周りを見ていると如何やら女性を見て頭を悩ましている同性が殆どを占めていた。

現在日本に於いて女尊男卑等役に立たずそれどころか絶滅危惧種レベルに該当されるのだ。

戦術機の普及に伴う男女平等でそんな思想を持っている人間は国内で

少数しか存在しない。

然し海外ともなれば違う。

中央アジアでは『女性教』と呼ばれる女性は神の使いでありISを使える

自分達こそが優良種だと言って支配域を伸ばしつつあり本拠地はウズベキスタンの山中にあると言われている。

そして『女性優良党』と呼ばれる組織が女性権利主張団体を拡大化させており

主にEUで活動して今やイギリスが丸々支配されていると言われても過言ではなく他のEU加盟国でも危険なものである。

ロシアでは先のウクライナ戦争でEUの管轄下に置かれている為動揺に危うい。そしてアメリカではと言うとISにおける女性達の横暴を阻止する為に

無人戦闘兵器の開発と量産と同時にISの無人機計画等も始まっておりいわば反抗作戦とも言える状況となっている。

そして戻って日本、宗壺はそれを聞いて何言っているんだと思っていると騒ぎを聞きつけたのかエルムとクローリエが出てきてこう聞いた。

「どうしたのシュウ?この人は??」

「アンタの男なの?ちよつとき、躰位ちゃんとしなさいよ!」

何やらエルムに向けてぎゃんぎゃん言っているが暫くしてエルムはこう返した。

「それで?」

「はあ?」

「それでって話だよ、正直な話叔母さんの話って滅茶苦茶支離滅裂で

意味わからないし躰とかって叔母さんがまず率先してやるべきじゃないの?」

「なあ!」

「クローリエちゃんはどう思った?今のを聞いて。」

「ええとねえ・・・何か変。」

「だよねえwwwwww。」

クーリエの言葉を聞いてエルムが笑いだすと女性は怒り心頭でこう言った。

「何ヨ！ I S が使えない男なんて私達女の為に動くべきじゃないの!!」

「ぶっちゃけ戦術機があるし I S 倒せることだって実証出来てるぜ。」

「うぐ!!」

女性は宗彦のそれを聞いて息を詰まらすがエルムは更にこう聞いた。

「ねえさ叔母さん、 I S 動かしたことあるの?」

「はあ?」

「運用実績は? 機体はどれだけ稼働させたの?? 所属は? 代表だったの??」

「そ・そ・それは」

「やったことすらないのに偉ぶるなんておかしいよね? 私からすれば

I S 動かしたことすらないのにそんなこという何て……

私達専用機持ち舐めてるの?」

「ヒイヒイヒイ!」

女性はエルムの視線に対して恐怖するがエルムは更に畳みかける様に

こう言った。

「ねえさ叔母さん、私達の制服見て何とも思わない?」

「そそ……そんなの知る訳」

「じゃあさ、シユウ。生徒手帳ある？」

「才あるぞ。」

そう言つて宗壺はその女性に向けて生徒手帳を見せるが女性は更にこう言つた。

「それが何だつて言うのよ！」

「校章と言うよりも学校の名前くらい聞いたことあるでしょう？」

「はあ……IS学園……!!」

女性はそれを見て目を見開いてこう言つた。

「ウウウ嘘よ！男がISを動かすことなんて」

「3月くらいに結構ニユースになつたはずだけど叔母さん

もう忘れちゃつたのかなあ？」

「へ……ニユース……アアアアアアア。」

女性はそれを聞いて暫くするとまさかと言うとエルムは更に追い込んだ。

「然も相手は『斑鳩グループ』の『鬼塔 久三』の子供……

叔母さんどうしてくれるのかなあ？」

「鬼塔……まさか戦術機の……。」

それを聞いて女性は厚化粧が汗でドロドロに溶けていることすら構わずに宗壺に目を向けると周りを見てヤバいと感じて……慌てて逃げていった。

「ほい、馬鹿は(@^\_^) /~~~~バイバイだね！」

「凄いなエルム。」

「ああいうのは自分よりも格上が相手だと逃げるのが常套なんだよ。」

それを聞いて確かになんそう思うとエルムは宗壺に向けてこう言った。

「それじゃあ水着選び再開だー♪」

「・・・やっぱやるのね。」

宗壺はそれを聞いて・・・ため息と共に向かって行った。



## 水着かって

あの後宗壺はエルムに連れられて水着を買うために連れていかれて先ずはクーリエの水着を選んで着させた。

フリルが付いた赤と白の線が交互に入った水着を着ていた。

「クーリエちゃん、如何？ 気に入った?？」

「・・・うん。」

それを聞いてクーリエは笑顔でそう答えるとエルムが宗壺に向けてこう言った。

「じゃあ今度は私♪」

そう言つてエルムが水着を何着か持つて行つて暫くして出てきた。

「ねえ、シユウ。こう言うのはどう!」

そう言つて出てきたのは・・・黒のビキニを着たエルムであったが・・・

サイズが合っているのかと言いたいほどの光景であった。

特に胸に至つては間違いなく無理やりだろ!と言いたいほどに

胸部が溢れておりもしかしたら零れるかのような感じであった為宗壺は顔を赤くし

てこう言つた。

「ダダだ駄目だそれは却下！」

「えええ、それじゃあ待つてねエ。」

そう言つて暫くして他のを着た。

白の水着

「これは如何？」

「うゝゝん、肌の色と同じだからぶつちやけ変わらない．．．かな？」

黒（少しフリルが付いている。）

「これは？」

「おお、これなら合いそうだな。」

「うゝゝん、けど気に入らないんだよなあ。」

黒（胸の谷間を薄い布で覆っているタイプで見える。）

「じゃあこれ。」

「却下、前のデ。」

そう言つて暫くして決めたのが．．．これ。

「じゃあこのフリル付きで決定！」

そう言つてエルムはまあ着たからなと言つて他の水着も買った後に少し早い昼食を摂ろうと思つてレストラン街に来ていると何やら．．．

人だかりが出来ていたので何だろうと思っていると・・・原因はこれだった。

「奏さんサインくださいー！」

「翼さん握手を!!」

ファンが翼たちに集まっていたのだ。

よく見たらサインをしているようなので宗壺はこう言った。

「・・・取敢えず邪魔になつていない所に行くか。」

「OK♪」

「うん。」

そしてその儘宗壺達はファミリーレストランに入った。

「ええと・・・小学生一人、高校生三人です。」

「畏まりました、お席は禁煙席にご案内させていただきます。」

店員はそう言つて店の中に案内させた後に宗壺達が座るところ言った。

「それではご注文はパッドでお願いいたしますね、注文しましたらロボットが持つて

きますので。」

そう言つて立ち去ると宗壺達は以下の物を頼んだ。

宗壺Ⅱガーリックチキンステーキ

エルムⅡポークカレー

クーリエⅡハンバーグステーキ

これらを頼んで食べた後に暫くは服を買つたり映画を見たりとちよつとしたデートを楽しんでいた。

因みに翼達はあの後暫くして定食屋でご飯を食べて織斑一夏は何故か山田先生と水着を選んでいた。

## 宿について。

「海だー——！！」

バスの中でクラスの女子の一人がそう言うと全員が窓から海を見ていた。

「おー、やっぱり海に行くとテンション上がるんだな皆。」

「そりやそうだよ？ 何せIS学園は海が見えるけど泳げないからね、周りには海上自衛隊の船がうようよしているんだから。」

エルムがそう言うがまあ確かになと思う。

IS学園は世界中のエリートが集まる名門校である為その防衛のの為に展開されているのだ。

然も海上自衛隊には海中に無人機『海神』と言う戦術機を配備してあるのだ。

この機体により潜水艦等の発見に貢献しているのだ。

そして暫くしてラトロワ先生が全員に向けてこう言った。

「そろそろ到着する！ 各員準備せよ！！」

それを聞いて全員が準備をした。

そして到着すると3日間お世話になる旅館『花月荘』の女将が従業員たちと共に立っていた。

そしてクラス担任でもあるラトロワ先生（原作なら千冬だが今作の場合は担任になって未だそう日が立っていない事と経験不足という観点から

こちらになりました）が全員に向けてこう言った。

「それでは今日から3日間この花月荘でお世話になる為

女将に挨拶するように。」

「「宜しくお願いします。」」

「ハイハイ、皆様こちらこそ宜しくねって毎年元気な事たちばかりがって  
そういえば今年は男子が2人程。」

「ええ、『織斑一夏』と『鬼塔宗壺』です。」

ラトロワ先生が2人を見せてそう言うのと2人ともちゃんと挨拶した後  
こちらこそと女将は挨拶を返してこう聞いた。

「そういえばお部屋の方なんですが用意しておきましたのですがあれで宜しいので？」

「ええ、ないよりマシです。」

ラトロワ先生がそう言うのとエルムが宗壺に向けてこう聞いた。

「ねえシユウって部屋何処？クーリエちゃんも見当たらないから分からないんだよ。」

「さあな、多分織斑一夏と同じ部屋かなって思うんだよなあ。」

宗壺が嫌嫌な表情を浮かべているとラトロワ先生がこう言った。

「鬼塔、来い。部屋を案内する」

そう言つてクーリエと共に向かうと宗壺がこう答えた。

「じゃあなエルム、分かったら連絡する。」

「分かった。」

そう言つて2人は別れた。

「ここがお前たちの部屋だ。」

「(お前達?)」

どう言う意味だろうと宗壺はそう思っていると既に・・・先客がいた。

「よう、宗壺じゃねえか!」

「宗壺!」

「あ、シユウ。」

「奏さん!翼さん!!クーリエ?」

何だと思っっているとラトロワ先生がこう答えた。

「簡単だ、こいつらは兎に角有名だから我々の部屋の隣にしたのだ。」

教員室の隣ならば生徒達がおいそれと来るわけないからな。」

そう答えると宗壺はこう聞いた。



「じゃあ織斑一夏は？」

そう聞いてラトロワ先生はこう答えた。

「ああ、あいつならば山田先生の部屋だ。普通ならば織斑先生の所とこれ迄のを見たらそう思うだろう？ 発想の転換だ。」

そう言うのと確かになと思つた。

こう言う時に自分達が教員室の前にある部屋の為迂闊に

入れないという事もあるしまさか山田先生の部屋にいるなど露とも思わないだろう。

そう思っているとラトロワ先生は4人に向けてこう言つた。

「それじゃあ初日は自由行動なんだ、楽しんで来い!!」

「「ハイ！」」

「ははははハイ！」

クーリエは慌ててそう答えるところ続けた。

「クーリエ、今日はゆつくり羽を伸ばして楽しんで来いよ。」

「う、(u u u\*) ウンウン。」

それを聞いてクーリエが頷くのを見て3人は微笑ましそうになつたのだ。

そんなでもって織斑一夏はと言うと・・・こうだ。

「お、織斑君こんな所でって・・・アン♡」  
「へえ、そう言いながらも山田先生だって楽しみじゃないですか下の口が  
今でも欲しがってますよ？」

「だから・・・その織斑君、最初から激しかったけど・・・水着は後で  
2人っきりの時に♡」

「ええ良いですよ・・・後で脱がしながらね。(クククク、山田先生  
攻略成功だぜ！千冬姉が他ん所だからゆつくりと楽しめるぜ!!)」  
そう思いながら山田先生の体を視姦しながら楽しんでいた。

## 兎来る

そして宗壺達が部屋から出てクーリエと共に向かつて行くところある物を見つけた。

それは庭に刺さっていると思われる人工物の・・・兎耳であった。

然も・・・『抜いてください』と看板が刺さっていたがぶつちやけた話怪しき

満々であったが為全員見て見ぬふりしてそこから立ち去っていくと・・・何かキーンと上空から音がして何だと思っただけで見てみると目に映ったのは・・・

ミサイル状のナニカであった。

「全員逃げろー——！！」

宗壺は三人に向けてそう言っただけで翼達を押し倒してISを展開した瞬間にそれが着弾した。

「一体何なんだよ!」

「ロシア残党軍の攻撃か!」

奏がそう言うのと砂煙が晴れて現れたのは・・・これだ。

「人参?」

クーリエがそう呟いて人参型のロケットを見るとそれがぱかりと竹を割ったように

別れると中から・・・奇抜な服装をした女性が現れた。

「はくく、皆のアイドル『篠ノ之 束』だよくく！」

出てきたのは一人『不思議の国のアリス』をごっちゃにしたような服装の女性。

『篠ノ之 束』本人であった。

すると『篠ノ之 束』は翼を見て・・・目を輝かせながらこう言って跳んだ。

「『箒』ちゃー————ん!!」

「『箒』?」

何その名前と宗壺とクーリエがそう思っているが束と翼の間に奏が割り込んで『束』から離れさせると『束』は奏を見て・・・目をギロリと睨みつかせて

こう言った。

「おいお前邪魔だよ、アタシと『箒』ちゃんとの中に割り込まないでくれる?」

「そうはいかねえんだよなあこれが、アタシは翼の相棒なんだ。勝手に

抱き着かれて貰っちゃあ困るんだよ?」

そう言って奏は翼を抱き寄せると『束』奏に向けてこう言った。

「ハア何言ってるの? 『箒』ちゃんは『箒』ちゃんだよ、ねえ『箒』ちゃん♪」

『束』は翼に向けて笑顔でそう言うが翼は意を決してこう言った。

「私は『箒』ではない、私は『風鳴翼』。風鳴八鉦の娘だ!」

「何言ってるの『箒』ちゃん?! 正真正銘間違はなく『束』さんの」

「私は貴方の言葉など知りませんので帰って下さい迷惑です。」

「『箒』ちゃん何言っているの!?! 私だよ私、おね」

「いい加減にしろよ!」

宗壺は『束』に向かってそう言うと宗壺はこう続けた。

「本人が違うって言っているのに詰め寄って迷惑しているって分からないのかよアンタは!?!」

「はあ?! お前だれだよ? 『いっくん』に顔が似ているだけの有象無象が

吠えるな?」

「生憎だけど俺も翼さんの関係者なんだ! 同じ仲間だから困っている時に助けることが出来ないなんて男である前に人間失格だろ!!」

「宗壺……。」

翼は宗壺の力強い言葉を聞いて涙目になるが『束』は宗壺に向けてこう言った。

「へえ、『束』さんがその気になればお前の家なんてすぐにでもぶっ壊して」

「やってみろよ! こちとらアンタみたいなテロリスト集団相手に

何回も追い返しているんだからな!!」

「『束』さんがそこら辺の」

「いい加減にせんか貴様ら!!」

「「「!!!」」」」

そう言つて出てきたのは・・・織斑千冬であつた。

「ああ!ちーちゃん!!」

「『束』、やはり貴様かつて何しに来た?」

「えええ、決まつてるじゃん!プリティラブリイなマイシスターのほ」

「妹など何処にいる?」

「え、何言っているのかなちーちゃん、『箒』ちゃんはおそこに」

「お前が指さしている場所で私の目に映っているのは

斑鳩グループのI S部隊に所属している『風鳴翼』だ、

『篠ノ之 箒』などおらん。」

「千冬……さ」

翼が言いかけようとするのと千冬がウインクしてそれを止めさせると

千冬は『束』に向けてこう言った。

「さてとだが、クラスは違うが私にとっては教え子には変わらない

『鬼塔 宗壺』に向けて何をしようとしているのだ貴様は？」

「其れはこいつらが私と『箒』ちゃんとの」

「いい加減に大人になれ『束』、貴様が言っているのは餓鬼の癩癩と

さほど変わらんぞ。それにこの光景を見たらだが確実に貴様が悪い事くらいは

見当がつく。」

「た、『束』さんは悪く」

「お前は昔からそうだったがこれはやり過ぎだ、本人が違うと

言っているのだから違う。それでいいだろう？」

「そんなの納得が」

「良くもいかないもそれが現実だ、それに仮に翼が貴様の言う



『篠ノ之 箒』だとしてもお前の事を姉と認めるか？」

「どういう意味！」

「其の儘の意味だ、貴様が身勝手な事をしたせいで両親共々離れ離れになって幾つもの街を転々としてその元凶が出てきてお前を許すとも思うか？

人生を無碍にさせた張本人に対して？」

「・・・それで何が言いたいのちーちゃんは。」

「簡単な理由だ、お前の事など姉とも思わん害虫としか

思っていないという事だ。」

「そんな事!!」

「思っていないとも言えるか？貴様がどうであれ『篠ノ之 箒』の人生を破壊しつくした貴様に対して。」

そう言う『束』は黙ってこう言った。

「分かったよ、『今日』の所は退くよ。じゃあねえ『箒』ちゃん！」

そう言う『束』は何処かへと立ち去って行った。

それを只々見ている事しか出来なかった。

## 着替えて

東が出て行ったのを見て宗壺は翼に向けてこう聞いた。

「ええとさ……大丈夫か？何か人間違いされて」

「いや……人違いではない。」

「？」

宗壺はそれを聞いて首を傾げると奏がこう言った。

「宗壺、この話ただけで後で部屋で良いか？夕飯が終わったら話す。」

「……分かりました、そうしますけどエルムはどうします？」

「アイツも加えておいてくれ、長い付き合いだしな。」

奏がそう言うのと翼と共に着替えに向かつて行くのを見て千冬は宗壺に向けてこう言った。

「さてと、貴様も速く遊びに行つてこい。我々教師陣は仕事があるのでな。」

「ああ……ありがとうございます織斑先生！」

「何……色々なるからな、誰でも。」

そう言つて千冬が去るのを見て宗壺はエルムに向けてこう言った。

「さてと・・・俺達も行くか。」

「・・・(U R U \* ) ウンウン。」

クーリエはそれを聞いて頷いてから向かって行った。

「ああ！遅いよシユウ!!」

「悪い悪いエルム、ちよつと遭ってな。」

「それって翼さん達と何か関係あるの?」

「まあそんなところだけどエルムも晩飯終わったら部屋に来てくれないか?  
教職員室の真向かいだから。」

「うん良いけど何かあるって事。」

「ああ、翼さんが何か話したいって言っていたからそれで。」

「うん分かったよ、皆には取敢えず言いくるめておくからそれじゃ行こ

クーリエちゃん!!」

「ハ〜い。」

そう言つてエルムはクーリエと共に着替えに向かつて行つた。

「織斑一夏はいないようだな．．．着替えるか。」

そう言つて宗壺は着替えている中で丁度隣が女子用の着替え室である為隣の声が丸聞こえとなつていたのだ。

『うわあミカつてば胸大きいね！また育つたんじゃないの〜？』

『きやあ！ちよつと揉まないでよ!!』

『嫌々それにしてもエルムさんも結構大きいって言うかナニコレ

Kカツプってどんだけ大きいのよ!?!』

『う〜ん、どんだけ大きいって言われても・・・砲弾みたいかな?』

『それ私達貧乳に喧嘩売っているわよねあんた!!』

『ちよつと鈴落ち着きなさいよ、ここで暴れたら弁償ものだよ!!』

『煩いわねティナってアンタだつて大きいじゃないの!?!水着なんて大胆だし胸はみ出てるじゃないの!!』

『そうかしら?アメリカじゃあ普通と思うんだけど?』

『ここは日本ヨ!もう少し露出控えなさいよね!!』

『ああ御免御免、鈴じゃ余る物ねエ。』

『ヨシコロソ。』

その後から何やらドタバタと音がする中で宗壺は先ほどのエルムの言葉を聞いて頭に残っていることに嫌気を感じていた。

「(エルムはK、トランプの13番って何考えてんだおれは!仲間に向かつて何あほな事つてまあ確かに胸結構大きかったってこんな事考えてたら股間がヤバい事になるから忘れろ俺忘れろ!!)」

そう思っているが他にもこの様な声があった。

『奏さんって凄い腰細いですよねえ、それに胸だつて。』

『嫌々アタシよりも翼だろ？あの年でアタシと同じだから卒業頃にはとんでもない位に大きくなっているって事も。』

『何言っているんだ奏は!?!大きくても良い事なんて一つも』

『まあそれはあたしも良く分かつているけどな、けど其れ今言うなよ？何せ大暴れしている奴がいるんだからな。』

『あ・・・ああそうだな。』

この様な声があったのだ。

そして宗壺が出てくるのを見て既に外に出ていた生徒達が宗壺の上半身を見てきやあきやあところ言った。

「あ、鬼塔君だ！」

「ウ、嘘！わ、私の水着って大丈夫だよね!? 変じゃないよね!!」

「わ、わ、体カッコいい。鍛えているよね絶対あの筋肉。」

「細マツチョだ・・・良いなあ。」

「鬼塔君、後でビーチバレーしようよ!!」

「おお、後でな。」

宗壺はそう言いながら準備運動をしていた。

海で溺れたくないと思っっている為そうやっていると背後から・・・

足音が聞こえて誰かがこう言った。

「いゝちかゝ!!」

そう言って何かを感じた宗壺が避けると飛び込んできた相手は其の儘・・・海に真つ

逆さまに落ちて云った。

「ちよつと！何で避けるのよアンタ!!」

海からざばーと現れたのは・・・鈴であったが未だ宗壺の事を織斑一夏と

勘違いしているがためにこう言った。

「俺は宗壺だ、織斑一夏じゃねえよ。」

「え……あ、御免。」

「気を付けてくれよ？首に当たっていたらヤバいんだからな。」

そう言うど鈴はぶすりとしながらも海に潜ろうとすると宗壺が

こう言っ止めた。

「ちよつと待てよおい！準備運動しないのかよ!？」

「良いのよアタシは！運動神経抜群なんだから!!前世は人魚だったわ!!」

そう言っ泳いでいっっていくのを見て宗壺はこう呟いた。

「溺れても知らねえぞ？」

そう言っ準備運動を再開すると翼達もやって来た。

「よう、こんな所で何しているんだお前？」

「ああ、奏さん。ちよつと準備運動をしまして。」

「生真面目だなお前、アタシらはこれからサンオイル塗ろうと思ってな。」

「泳がないんですか？」

宗壺がそう聞くと後ろでシートを広げている翼がこう答えた。

「私達はアイドルなのだ、日焼けをして水着を着た時に跡があると



困るからな。」

用心だなと言うと奏は。パラソルを広げてこう言った。

「じゃアタシら向こうに行っているからじゃあな。」

「ああはい、それじゃあ。」

そう言って離れていくのを見届けてから宗壺は再開し直した。

## 海で遊んで

「おーいシュウ！」

「エルムか、来たのかつて・・・おおい何だそりゃあ!？」

「え？何か変?？」

そう聞かぐが当たり前である、前に宗壺が決めた水着ではなく・・・  
エルム自身が決めた奴なのだから。

乳肉がはみ出る程の奴で走っているたびにブルンブルンと揺れていたのだ。

「エルムお前前に決めた奴は!？」

どうしたんだと聞くとエルムはこう答えた。

「ああああれね、・・・気に入らなかったから置いてきちやった♪」

「置いて行くな——!!」

宗壺はエルムに向けて大声でそう言うが当の本人は聞く耳もたずで  
聞いていなかった。

「そんなこと良いから・・・早く泳ごうシュウ!!」

「その前に準備体操。」

「了解！」

エルムはそう言って柔軟をするが・・・正直なところ目のやりように困るのだ。何せ胸だけではなく尻も大きいがために動くたびに揺れ動くので見ない様心がけているが・・・他の生徒達はそうではなかった。

「嘘・・・翼さんや奏さんよりも大きい・・・。」

「何だど!? 戦闘力が計測を超えて・・・ギャアアアアア目が目が一!!」

「神様は残酷よ、あんなに大きいのにどうして腰細いのよ！」

「反則よあんなん!!」

等等と色々とおある中でやっと準備体操が終わって海に行こうとすると・・・

宗壺がこう言った。

「おいあれって・・・溺れてる?」

「え?」

「あ・・・本当だ。」

クーリエがそう言った視線の先にいたのは・・・鈴であった。

「あのバカだから準備体操しとけて!!」

「助けに行こう!!」

エルムがそう言った瞬間に・・・背後から声が聞こえた。

「鈴！」

織斑一夏が大声でそう言って……『白式』を展開して颯爽と向かって行った。

「うわあ!!」

エルムは危ないと思つてクーリエを抱きかかえて砂浜に倒れた。

「エルム！大丈夫か!？」

宗壺がエルムに近寄るとエルムはこう答えた。

「うん大丈夫、ちよつと転んだだけ。」

そう言つて立ち上がつて……水着のトップスが取れた。

「!？」

宗壺はそれを見て慌てて視線を逸らすとエルムがこう言つた。

「あれえ、取れちゃつてる。シユウ付けてく。」

「何で俺が!？」

「近くにいますのつてシユウだけだから。」

「翼さん呼んでくる!!!」

宗壺はそう言つて翼を大急ぎで呼びに行つて……数分後。

「全く、貴様には恥じらいと言うのが無いのか?」

「いやさ、丁度いたんだし。」

「それでもだ、貴様は常識を知るべきだ!」

翼がエルムの水着を付けている中で・・・怒声が響き渡っていた。

「この馬鹿者が!勝手にISを使って何をしている!!他の人間に

何かあったらどう責任を取るんだ貴様は!」

「けど千冬姉、鈴が溺れていて」

「それでもだ!勝手にISを使う事は許されないんだ!!今回は運が良かったものだが万が一を考えずに力を振り回すでない!!」

千冬が織斑一夏を叱っているのだ。

無断でISを使う事は規約違反であり専用機持ちと言う事もあつて後で規約違反の署名提出と無断使用の反省文をIS学園で提出するようにとの沙汰が出た。

そして鈴も言わずもがな。

「良いですか嵐さん、今回の事は嵐さんが準備運動を怠ったのが

そもそもの原因なんですよ。鬼塔君の言葉をちゃんと聞いておけば

この様な事態にはならず済んだかもしれないと言う事を考えてくださいね。」

「ハイ……。」

因みにだが今回の事で鈴は今日の自由時間の間は他の先生達と共に

機材のチェックをするようにとの沙汰で済んだ。

「済まなかつた鬼塔、弟が不始末を。」

「いえ良いですつて、俺よりもエルムに謝るべきかと。」

「ああ・・・今からそうするつもりだが東に対してあそこ迄真正面から言つてくれたことも兼ねているからな。」

それでだと千冬は水着姿で寝ると言つてサングラスかけてマットを敷いて寝た。そして宗壺も遊び始めた。

近くでは織斑一夏が近くでビーチバレーをしている中で宗壺はエルムと遊んでいた。

「うおりゃあー！」

「冷たい！やったなあ!!」

エルムと海の岸ら辺で水を掛け合つておりクーリエはと言うと・・・。

「よいしよ、よいしよ。」

「おお、よく出来てるなクーリエ。」

「う・・・(・▽・)ウン!!。」

奏と共に砂で城を作つたりして遊んでいた。

「そして夕ご飯は豪勢であった。

「うわあ・・・流石国立、高そうなメニューだなあ。」

宗壺はそう呟きながらカワハギの刺身を食べているとクーリエがこう聞いた。

「シューウ・・・これ何？」

「勘あ、ワサビだよ、気を付けろよ？それ食べると凄い辛いから鼻が」

「!!!」

「!!・・・ああなるからな。」

「うん・・・分かった。」

如何やらエルムがペーストと思って食べたように苦しそうであった。



それを見たクーリエはじゃあどうするのと聞くと宗壺はこう答えた。

「刺身皿に醤油を入れて少量付けるだけ、それで良いんだ。」

「分かった。」

そう言つてクーリエは食事を進める中でそういえばと思つていた。

クーリエの食事は全員よりも少し少な目で本人用であろう、小鍋の中には

煮込みハンバーグが入つていて山菜の和え物は苦みが少ない法蓮草の御浸しに、

お新香はデザートに変わつていた。

クーリエの為にここ迄変えてくれたことに厨房の人達に感謝しつつ宗壺は

食事を続けていた。

因みにだが風はあまりの重労働があつたのであろう、ぐったりとしていた。

## 翼の正体

そして夕食後宗壺達は織斑先生達がいる部屋の真向かいにある自分たちの部屋に教員全員と宗壺、奏、翼、エルムが入っていた。(クーリエは難しそうな話になる為教員室で寝ている。)

「それでは皆を呼んだのは他でもない星音の事だが……私から話した方が  
良いか？」

千冬が翼に向けてそう聞くと翼はこう答えた。

「いえ、私が喋ります。これは私個人での問題ですから。」

そう言うと翼は全員の前に立ってこう言った。

「皆何故私が『篠ノ之 束』が私の事を『箒』と呼んだことについて

疑問に思っているかもしれないから話そう。」

そう言うと翼は重く口を開けてこう告げた。

「私の本当の名前は『篠ノ之 箒』にして『風鳴翼』、『篠ノ之 束』の妹にして先代総理『風鳴 八鉦』の養子だ。」

『……ハアアアアアアアアア!?!』

千冬と翼と奏以外の全員が大声出して驚いていると宗壺がこう言った。  
「えええええとーつまり翼さんは翼であると同時に箒さんでもあつて。」

そしてヴェレッタ先生がこう続けた。

「あの天災の妹であると同時に先代総理の養子とは……何なんだ  
貴様の経歴は？異常を超えているぞ。」

そう言いながら頭を抱えていると翼改めて箒がこう続けた。

「其れの説明の前にはですが元姉である篠ノ之博士が嘗て起こした

『白騎士事件』、戦術機と共に行動した例の戦闘で日本がISと戦術機を

世界に向けて運用することと相まった際に私達家族はどの様になると

思いますか？」

そう聞くと宗壺がこう言った。

「そりゃあ万が一の為も兼ねて見張っているとか?」

そう言うのと翼はこう返した。

「確かにそうだが一日中とはいくまい、人間なんだ。何かしらのトラブルや裏切り等で私たち家族の身辺情報が露呈されてしまったら元も子もない、

だからこそ当初政府はある事を極秘裏に行う事としそれを私達家族に

押し付けたんだ。」

「一体何なの?翼?」

エルムがそう聞くと翼はこう返した。

『『重要人物保護プログラム』』と言うのに聞き覚えがありますでしょ、

ヴィレツタ先生?」

翼がヴィレツタ先生に向けてそう聞くとヴィレツタ先生はこう返した。

「ああ、知っている。そもそもそれは我がアメリカが最初に行った制度だ、重要な事件の際に情報提供又は証人になってくれる人間に対して危険が

及ばない様に名前や身許に関するもの全てを別の人間に変えると言うものだが

まさか日本政府はそれを。」

「はい、それを行って私達をあちこちにばらばらに移住させて

それを永遠と繰り返させると言った物です。」

「ば・・・バカナそんなこと無理だ！そもそも『重要人物保護プログラム』はそう何度も使うものではなく多くても二回ぐらいが精々だ!!それ以上は発見されるリスクが高くなって最悪居場所が明らかになってしまうぞ!」

「そうです、ですが私達が初めての対象であったこのプログラムでどれくらい持てるのかと言うテストも兼ねていたんじゃないかと私はそう思うんです。」

「馬鹿な！正気の沙汰とは思えんぞ!」

「ええ、正気と思えません。ですが今の父親でもある『風鳴 八鉦』はそれを良しとせずに私を娘として引き取ってくれました、この保護プログラムにおける弊害を回避させるためと言ってくれて。」

そう言いながら笑顔を見せる翼を見て奏がこう言った。

「そんでなんで星音って言う名前にしたのかって言うのであれば芸名だ。」

「芸名って・・・ああなる程、万が一に備えてですか。」

「その通りだ宗壺、真面目に『風鳴』だと元総理の娘とかで色々と色眼鏡で見られたりそれで誹謗中傷書かれるのは嫌だからさ、アイドル活動中は芸名で通すこととなったんだ。」

「その通りだ、星音と言うのは『星』は『ほうき星』から、

『音』は音楽からとつて『星音』と言う芸名で売る事になってまさか今じゃアイドルとして歌っているとは夢にも思わなかった。」

翼はそう言いながらまるで懐かしい思い出を思い出すかのように呟いていると宗壺があ穴と言つてこう続けた。

「だから織斑一夏が翼さんの事を『箒』つて言つていたのか。」

「ああ、まさか奴が覚えていたとは思わなくてな。」

そう言いながら頭を掻いている翼であると千冬がこう言つた。

「だからこそ束は奴を監視していたんだ、恐らくはあの無人機も奴のだろう。」

目的はこいつの試合で活躍する環境を整えるようになる。」

「嫌な話だよねえ、それだとそれ以外はどうなつても良いつて言っている

様なもんじゃん。」

エルムがぶー垂れていると千冬はこう返した。

「ああその通りだ、奴にとつて親は『自分を産んだ存在』程度しか思つておらずこの世で私と一夏と翼以外など路傍の石程度しか思つていないんだ。」

迷惑な奴だと言つていると宗壺が翼に向けてこう言つた。

「まあ俺からしたら翼さんは翼さんだしそれ以上でもそれ以下でもないな。」

「そうだよ！私にとっても同じだし。」

「生徒である事には変わりあるまい、『箒』だろうが『翼』だろうがお前はお前だ。今後も貫ければよい。」

「・・・皆・・・ありがとうございます！」

翼は宗壺、エルム、ヴィレッタ先生の言葉を聞いてウルウル涙で

お礼を述べるのを見て千冬はこう思っていた。

「（ふふ、全く『篠ノ之』は、良い仲間や教師に巡り合っているじゃないか？東、お前では出来なかったことをこいつらが出来ている。それで天災等

呼べれないな。）」

そう思いながら千冬は外を眺めていた。

そして織斑一夏はと言うと。

「うおら！真耶！！もつと腰動かせ胸揺らせ！！」

「アアアアアアア♡もつと♡モットー♡♡♡♡」

山田先生相手に夜の特訓をしていた（ベッドの上で）



## 試験運用

そして次の日、合宿二日目は宗壺達専用機持ち（織斑一夏は除く）は朝早くから夜まで丸一日使って各種装備の試験運用とデータ取りに追われることとなっており全員同じである。

そんな中で・・・ラウラが遅れてやって来たのだ。

「スミマセン！遅れました!!」

「遅いぞラウラ・・・何パンなど啜えておるのだ。」

千冬が呆れ口調でそう聞くとラウラはもきゅもきゅとパンを食べながらこう言った。

「ふあい、そりえはでしゆね。」

「喰い終わってから喋れ。」

「ファイ。」

そう言っただけでラウラはあんパンを食べ終わるところで説明した。

「副官からの報告によれば遅刻した際には女は食パンを食べて現れるのがセオリーだと説明してくれたのでそれに倣いました！」

そう言つて敬礼するラウラを見て千冬は・・・ハアアアアアアと  
長いため息付いてこう返した。

「其れは違うぞラウラ。」

「・・・？」

何故と言つて眼をしている純粋な目を見て千冬は更にため息ついてこう続けた。

「ソレハだな・・・ああ、もういいや、兎に角だがもうそれやるなつて言うかちよつと  
説明してもらおうと思つたが気が萎えてしまった。」

千冬がそう言つと宗壺がこう聞いた。

「でしたら俺が答えましょうか？一応勉強も兼ねてですし。」

「・・・分かつた、なら鬼塔。『ISのコアネットワークについての

説明をしろ。』

「はい！『ISのコアはそれぞれが固有のデータ通信ネットワークを有しており  
搭載される機体に応じて出力が変化します、元々このシステムは

広大な宇宙空間における相互位置情報交換の為に設けられたシステムであり

現在このシステムを利用したレーザー通信技術の向上や犯罪捜査に使用されてお

りISに於いてはオープン・プライベートチャンネルの2つが主に使用されております

！それ以外にも《非限定情報共有（シェアリング）》と呼ばれる現象が存在し、

コア同士が各自に行う事で様々な情報を基にして自己進化の糧としていることが

近年の研究で発見されました。このシステムは制作者でもある篠ノ之博士が

自己発達の一環として無制限展開している為現在も広がり続けている為

これを発見した科学者曰く「まるで宇宙を探しているかのようだ。」と言っており未だ  
全容解明には至っていない』次第であります!!」

「良し」苦勞だったな鬼塔、テストの点数に加えられそうだが

ラトロワ先生はどう思います?」

千冬はラトロワ先生に向けてそう聞くとラトロワ先生はこう答えた。

「うむ、これでテストの点に加算させるのはいかんしがたいが

まあ内申点くらいには足しても問題ないぞ。」

「ありがとうございます!」

宗老がそう言つて頭を下げるとエルムはそれを見て頭を撫でようとして

つま先立ちで立とうとすると宗老はこう答えた。

「いや待て何するの? 見て見えてる見えてるって!」

「え? 何が?」

「いや・・・その・・・。」

宗老はそれを聞いて言いつらそうに・・・エルムの胸の谷間を見ていたが

こう続けた。

「そういえばエルムの新装備って何なんだ!？」

見たいなあと言っているのとエルムが目を輝かせてこう答えた。

「(\*・σー) エへへへ、凄いんだよ今回はさ!!」

そう言ってみてみるとあつたのは・・・巨大な大砲と支えるのであろう

脚部が見えると宗壺はニコレと思っているとエルムがこう続けた。

「これこそドイツが建造した最新鋭兵装『パンツァー・カノニート』って

言ってる大型のレールガンで支えなきや使えないんだけど威力は抜群で然も私用に

調整されていて歩くんだよこれ!!」

凄いでしょ凄いでしょとびよんびよん跳ねる為・・・胸も同じように

バルンバルンと揺れているのが見えたので宗壺は目を逸らしてこう言った。

「そそそそう言えば俺のって何処だっけかな!？」

そう言うのとエルムがこう答えた。

「あ、それならあそこにあつたよ。」

そう言つて指さした先にあつたのは・・・『鬼塔 宗壺へ、久三より。』と

書かれたコンテナがあつたので見てみると・・・武器が幾つもあったのだ。

すると紙で説明が書かれていた。

武器は以下の通り

全距離対応ビット『戦牙』\*6

連結型ソードビット『神龍』\*6

銃剣\*2

と言った感じで書かれていると更に翼と奏の分もあつた。

内容は以下の通り

翼・・・外付け用パワーアシスト兵装『雪崩』

奏・・・外付け用大気圏突破バーニア『天空』と書かれており他にも

こう書かれていた。

『他にもただけど翼さんには近接用日本刀型長刀が二本と奏さんには

シザーアンカーもあるから有意義に使ってねえ。』

そう書かれていると宗壺はこう呟いた。

「へえ・・・結構使えるのあるじゃん。」

そう言つて宗壺は翼と奏と共に機体のセッティングしていると周りの生徒達は

山田先生を見てこう呟いた。

「ねえさ、なんか山田先生嬉しそうだね?」

「うんうん、なんか肌とかつやつやだよだね?」

「何したらあんなに綺麗になるのかなあ？」

そう言つて肌が綺麗になつている山田先生を見ていると何やら・・・

ドドドドドドドドと海から聞こえてきたのだ。

一体何なんだと思つて見えたのが・・・これであつた。

「ほうきちやーん！ちーちやーん！！」

東がどうやつているのであろう海を駆けてきたのだ。

いや・・・何だこれ？

## 束来る

「ほうきちやー——ん！ちーちやー——ん!!」

束がそう言いながら海上を走っているのを見て千冬は又かと思っていると束は千冬に向かって抱き着こうとしてきたので・・・

・・・避けて首根つこの襟を掴んで其の儘円盤投げの要領で投げ飛ばした。

「ウオリやああア!!」

「アギやああアアアアアア!!」

束は悲鳴を上げながら海に向かって飛ばされるが近くにあった木を掴んで回って着地してこう言った。

「んもうちーちゃんたらそんなに束さんの事好きなんて相思相愛って

こう言う事なんだね♪」

「違うわ馬鹿垂れが。」

千冬は束の言葉を聞いて頭を抱えていると・・・近くにいた山田先生が束を見てこう注意した。

「あのうスミマセン、この合宿に於いてですけど関係者以外は」

そう言いかけると束はにこりと笑ってこう返した。

「んん? 珍妙奇天烈な事言うね君? ISの関係者だったらこの束さんを置いて他にいないよね?!」

「え・・・あつはい。そ、そうですねあはははは。」

山田先生は乾いた笑いをして退散していくと千冬は全員に向けてこう言った。

「ああ、キサマラハ作業を続行しろ。山田先生は生徒達の方を。」

「ああ、ハイ!」

それを聞いて山田先生は退散していったのを見てると・・・束は翼を見てこう言っ



た。

「ほうきちやー——ん！」

そう言つてダイビングしようとして……宗壺が立ち塞がるのを見て東は又もや睨みつけようとする。今度はヴィレッタ先生も加わつた。

「いい加減にしてほしいものだな篠ノ之博士、星音は私の生徒だ。」

篠ノ之等おらんと本人も言つてゐるだろう？それとも貴様には学習能力が無いのか??ああ、だからこそ妹から連絡も取つてくれないようだな。」

「お前……死にたいの?」

それを聞いて殺気が漂つてゐる中でラトロワ先生もこう言つた。

「その前に貴様は自分の行動を悔むべきではないのか?自分勝手にやつた末路が理解できんようでは貴様は一生許されぬぞ?」

「アアアアアアア!!?」

東はそれを聞いてキレ掛けそうになつてゐるとあるボタンを胸の谷間から出してこう言つた。

「東さんの事そう言うなら……これ見てから言いなよ!!」

そう言つて押しした後……空から巨大な鉄の塊が落ちてきたのだ。

「皆逃げろ——!!」

宗壹がそう言つて全員が立ち去つたと同時にそれは地面に思いつきり激突して落ちて土煙が立ち上つたがそれは晴れたと同時に・・・

その正体が露わになつたのだ。

銀色の箱の正面部分がぱたりと倒れて現れたのは・・・一機の紅いISであつた。すると束はそれに向かつてこう言つた。

「ふふん！これぞ箒ちゃん専用機にして全てのISを凌駕する束さんお手製のIS『紅椿』なのだ——!!」

そう言うのを聞いて全員が目を見張つた。

束お手製ともなればどんな機能が入っているのかと勘ぐつてしまうからだ。

腰には左右一対の刀が二本ある程度で近接格闘特化型かなとも思える

見た目であるが翼はと言うと・・・。

「宗壹、濟まないが蒼羽場斬と雪崩のフィッティングを終わらせたいのだが？」

「才才良いぜ、じゃあこつちのビット兵器とかの調整を手伝つてくれないか？  
時間かかりそうぞ。」

「分かつた、奏と一緒にやっておこう。」

「任せとけよ。」

既に自分の機体の調整で忙しそうにしていたので束はそんな翼を見て慌てて

「こう言った。」

「ちよちよちよちよつと箒ちゃん何でそんな不細工なI Sを整備しているのさつて言うかアイドルがそんなことしちやだめだよ怪我したら困るでしょう!?!」

そう言っていると翼は束に向けてこう答えた。

「スミマセンが私は翼であつて箒ではありません、人違いですしそれにこの機体は私にとつて大切な相棒ですので・・・侮辱は許しませんよ?」

「ほうきちゃん・・・」

束は翼の鋭くなった目つきを見てびくついていたがその後直ぐに頬を膨らませていると・・・織斑一夏が現れてこう言った。

「お久しぶりです束さん、お元気そうですね?」

「あー! びっくりーん!!」

束はそう言いながら織斑一夏目掛けて抱き着くとこう言った。

「あのねあのねいつ君聞いてよ! 箒ちゃん束さんの事無視するんだよ酷いと思わなーい!!」

「大丈夫ですよ、箒はその・・・反抗期ですよ一時的なと思えばさ。」

「反抗期か・・・そうだね! 直ぐに素直になるか!!」

アハハハッとすぐ様に立ち直ると織斑一夏の『白式』の

データを見ている中で翼はこう思っていた。

「(やつと分かった、アイツは私個人を見ていたのではない。

姉のその能力目当てで近寄ってきたのがやつとわかったよ。これでせいせい出来ると言ったものだな。)」

そう思いながら機体の調整を終えて宗壺はこう言った。

「それじゃあ機体を動かして取敢えずデータ取るか。」

そう言うのと全員飛翔して始めた。

### 宗壺の場合

「ソードビットとオールレンジビットはAI操作か、なら動かしてみと。」  
そう言いながら銃剣も使った攻撃を試してみた。

翼

「ふむ、内部にはブレード搭載型のサブアームがあるのか。見た感じ蠍の尻尾みたいに見えるな、それにホバークラフトも付いているとは何がしたいんだあの人は？」

奏

「へえ・・・武器完全に無くなって言うかまあアタシ向きだから良いけど速さバケモノじゃね？」  
そう呟きながらも互いに操作をしていた。

## 作戦に向けて

「たたたた、大変です織斑先生！これを見てください!!」

突然山田先生が走りながら小型端末を見せると千冬は驚いてこう呟いた。

「特命任務・・・レベルA『現時刻より対応を始められたし』だと・・・!」

それを聞くと千冬は他の先生たちを集めさせるとラトロワ先生達はそれを見て驚く中でこう呟いた。

「ターゲットはハワイ沖で・・・クソ何があったというのだ!!」

「これを生徒達だけで対応させるなど何を考えているのだ日本の自衛隊は!!」

ラトロワ先生とヴィレッタ先生が互いにそう言うと言とうと山田先生がこう言おうとしていた。

「そ、それがどうもアメリカ軍の最新鋭」

「山田先生、機密事項であるぞ。生徒達がいるから口走るな。」

「す、スミマセン!」

「専用機持ちはどうだ?」

千冬がそう聞くと山田先生がこう返した。

「そちらは全員何とかできます。」

そう言うのとラトロワ先生が大声でこう言った。

「全員聞け——!! 現時刻を持って I S 学園は

特殊任務行動にへと移る! 今日の日テスト稼働はすべて中止とし、各班は I S を片付けて船で旅館に

帰投しろ!!

連絡があるまでは角都室内待機とし、以降許可なく室外に出ることを

許さんとする! 各自解散!!」

『『『は・・・ハイ!!!!』』』』

それを聞いて生徒達は一同驚きながらもラトロワ先生はこう続けた。

「尚専用機持ちは全員宴会用の大座敷の『風花』の間に集合せよ!」

特殊任務についての説明をそこで執り行うものとする!!」

『ハイ!!』

そう言うって全員が船に向かう中で織斑一夏はこう思っていた。

「(いよっしゃー! 来た来た来たぜこのイベント!! 確か

『銀の福音(シルバリオ・ゴスペル)』イベントだったよなこれ!?)

『白式』のセカンドシフトがあるし何よりもこのチート能力を持っている

俺がいるから華麗に倒して箒も奏とか言う女もエルムも俺のハーレムに加えてやるぜ——！！」

そう思いながら船に向かって行くがこいつは忘れていないだろうか？

主人公が強いのは痛みを耐えて強くなり、その心にヒロインが惚れると言う事に。



そしてお前が居る時点で物語が狂っている事すら……まだ知らない。

「では現状を説明する！」

そう言ってラトロワ先生が陣頭指揮を執るところ説明した。

「今より二時間前1230、ハワイ沖に於いて停泊し試験稼働中であつた

次期主力海上無人戦艦『ウイニング・ゼロ』が突如制御下を失い暴走、

現在この日本の排他的経済水域に侵入し現在も航行中である！」

『!!』

全員はそれを聞いて驚いている中で織斑一夏はというと……。

「え?」

と素つ頓狂な声を出したのでラトロワ先生がこう聞いた。

「どうしたのだ織斑一夏、何か質問でも?」

「ああいいえ!何でもありません!!」

織斑一夏はそう言つて顔を俯かせるが一体何なんだと思つていた。

「(一体どうしたんだよこいつは!?)」

『銀の福音(シルバリオ・ゴスペル)』じゃなかったのかよ

何でこうなつちまつたんだよおい!?)」

そう思つている中でラトロワ先生はこう続けた。

「ハワイ沖で停泊していた際に『ウイニング・ゼロ』は補給艦『ダグラスII』を攻撃し沈没、のべ190名もの船員全員がその攻撃で死亡した。」

『!!』

それを聞いて全員がぞわつとしていた。

既にこの攻撃で死者が出ると言うとなると最悪な状況としか

言いようが無いのだから。

「そして出航後無論アメリカ軍は出撃、8回もの攻撃をするも全てが失敗し、

空母3隻の内1隻が轟沈し二隻が中破状態、戦艦5隻全てが沈没、駆逐艦12隻の内

5隻が轟沈6隻が中破し残った1隻が後方から追撃の為航行中、潜水艦13隻の内7隻が轟沈、そして残った6隻も航行不能状態で死者3700人以上だしたった1隻の駆逐艦

『エンドレス』しかないこの状況の中日本政府は先ほど航空護衛艦『ほくらい』を発進させており護衛艦『さがみ』を中心とした合計14隻の艦隊で出撃し以降の

作戦はそこで執り行うものとなる為諸君はISに至急搭乘して向かって欲しい。」  
以上と言うと全員が準備する中で・・・屋根裏にいる束がニヤリとこう呟いた。

「へえ・・・良い事聞いちゃったなあ♪」

## 護衛艦『さがみ』

最新鋭の護衛戦艦であり先の台湾での暴動事件に伴って万が一に備えて日本が開発したものだ。

護衛艦と名を持つが内容は既に戦艦であり嘗て運用されていた『大和』を基軸とし三式主砲改が前門に二門、後門に一門保有しており全自動型のCIWSや各所に配置されているミサイル格納システムが多数、戦術機及びIS格納や整備室も完備しており現代における『大和』の再臨とも呼ばれるものである。

宗壺達は艦にある後方射出口から中に入ると既に誰かがそこにいた。

年齢は恐らく60代前であろうと思われる男性がいる中で男性は宗壺達に向かってこう名乗った。

「私がこの『さがみ』の艦長『梅津 三郎』、階級は一等海佐だ。」

「は……初めまして俺は」

「鬼塔 宗壺君だろうか？君の父上の事は皆がよく知っているよ。」

「え……どうしてわかるんです？」

宗壺はそう聞いたのだ。

大抵初見では織斑一夏と間違われるのに何故と聞くと『梅津』はこう答えた。

「ハハハハ、私はこう見えても人を見る目は十二分にあるしそれに年の功と言う奴だよ。」

ハハハハと笑いながらそう言うと『梅津』は全員に向けてこう言った。  
「さて・・・作戦を説明しよう。」

## 作戦会議

「それではこれより作戦会議を始めるーラトロワ教諭、宜しいですね？」

「ああ、ここは貴官の方が適任だ。」

ラトロワ先生がそう言うのと梅津がこう説明した。

「敵艦名『ウイニング・ゼロ』、全長約320m、船速は通常は60ノット、最大加速時は150ノットと言う高速戦闘をも可能としたバケモノ戦艦だ。武装は艦の全後方それぞれ一つずつに左右配置されている

移動式対空迎撃システムが4つ、これは着脱が可能で脚部も装備されており戦車の様な形になる。

次に固定式対空迎撃システム『メタル・ベル』、艦の内部に内蔵されているレーザー兵器で射角調整も可能だ。そして何よりも艦中央にある大型砲台『ギヤラクシー・カタストロフ』、こいつは大型のレールガンで発射してから速度でマツハ8のスピードで敵艦隊中央に爆裂し内部に溜めている電流が流れ込んであっという間に船を残して中にいた人間たちは焼き焦げてそれでおしまいと言う驚異的な武装を保有している凶悪な船だ、

そして何よりも恐ろしいのはこいつの内部に格納されている

ISサイズの無人戦闘機『レギオン』だ、

こいつ自体にも兵装があり武装はバルカン砲と大型のアームクロウで破壊した

敵艦から使えそうな部品や武装を取り出して接収すると言うハゲタカみたいに嫌な奴だ、性能的には第二世代ISと同格と言ってもいいくらいだから

気を付けるように。何か質問はあるか？」

梅津がそう聞くとエルムが手を上げてこう聞いた。

「敵の武装の正確な把握のために一度偵察を行いたいのですが。」

そう聞くと梅津はこう返した。

「・・・そうしたいのはやまやまだが何せ奴が向かって行く場所が場所だからな。」

「其れって何処ですか？」

宗壺がそう聞くと梅津は重く口を開けて・・・こう答えた。

「・・・日本の東京だ。」

『!?!』

それを聞いて驚くと梅津はこう続けた。

「更に言えばこの速度から何もせずともなるとあと6時間半で東京だが

その1時間前には射程距離に達して無差別攻撃で東京は火の海と化すだろう、故に我々がここで防衛ラインを整っているのがその理由だ。東京湾に面する陸地にいる民間人には万が一の為に都に要請して今日は緊急的な避難訓練として参加させている。幸か不幸かそれは分からないがウクライナ戦争での

教訓を基にした訓練と言う謳い文句で納得してくれてな、全員参加しているから何とかなっている。時間的には全員避難するのに後5時間はかかると言う情報だからその間に陸上自衛隊が戦術機や戦車を配備し航空自衛隊が

新型戦闘機と共に待機している。これは日本だけではなく場合によっては日米関係の悪化又は断絶も視野に入れた非常に複雑な戦闘となるであろう、今なら後方待機と言う形でここに残れるが誰かいないかね？」

そう聞くと全員手を上げなかった。

そう・・・内心手を上げたい織斑一夏も含めてだ。

「(一体何がどうなってるんだよって何でそんな重要な状況になってるんだよ可笑しいだろこれはよ!?)」

何でこんなに政治関係になってんだよと内心毒づいて暴れたがっているのを必死で堪え乍らも原作と同じ展開になれば未だ何とかなるとかアホナことを思っている中で梅津はこう言った。



「皆ありがたい、それでは作戦なんだが現在の全員が保有する機体情報はこちらにも記載されている為作戦をこうとしたい。」

そう言う『さがみ』を中心とした陣形で全員の作戦場所を伝えた。

「星音、天羽は艦にて上空から敵に対する攻撃と牽制を、その間にハイインリヒが大型砲台を使用して艦後方から攻撃開始。風、織斑、鬼塔の以下三名は我々が

戦闘を行っている間に回り道で敵艦『ウイニング・ゼロ』を索敵し攻撃、可能ならば迎撃！出来なければその場で時間稼ぎ、ボーデヴィツヒ、

ルククシエフカは本艦にて待機。何か聞きたい事はあるか？」

梅津の言葉を聞いて全員が納得する中で梅津は全員に向けてこう言った。

「1時間後に行動を起す！総員準備せよ！！」

『了解！！』

それを聞いていた東は空中で例の人参型ロケットの中から聞いていた。

「ふ〜ん、それならさ．．．東さん的には良い展開だよねえ♪」

「然しとんでもない事になったよなあ。」

「本当だよねえ、篠ノ之博士の事と言い今回の事と言い大変だよねえ。」

宗壺とエルムが互いにそう言っていると翼と奏がこう続けた。

「だが我々が戦わねば都民数千万人の命が掛かっているのだ、やらない訳にはいくまい。」

「そうだよな、専用機持ちの定めと思えばちよつとは気が楽になるからな。」  
「そう云う中でクーリエが全員に向けてこう言った。

「皆・・・帰ってきてね？」

「そう言っていると宗壺がクーリエの頭を撫でてこう言った。

「当たり前だろう？俺達は必ず帰るさ。」

「そう言っているとクーリエは少しほつとした様子でくすぐったい表情をしていた。」

そして一時間後、作戦開始時刻1130

「間もなく敵艦の射程距離範囲内に入ります。」

「各艦戦闘配置、初弾攻撃後 I S 部隊全機発進。この攻撃に日本の未来が掛かっていることを心に刻め!!」

『了解!!』

梅津の言葉を聞いて艦内にいる全員が敬礼した。

そしてレーダーに反応が出た瞬間に・・・梅津が大声でこう言った。

「全艦攻撃開始!!」

## 戦闘開始

梅津の合図で戦端が開いた。

先ずは牽制も兼ねて遠距離からの砲撃である。

人ならば通常以上に警戒して回避行動をとるであろうが

『ウイニング・ゼロ』は無敵艦、そんなのは関係なく只々目標の敵を

破壊すると言うプログラムに則って行動している。

——標的艦隊が攻撃を開始、射程距離範囲外と推定し回避行動は不可。

そして海上に着弾すると艦の左右が開くと現れたのはまるで・・・海老によく似た機動兵器である。

是の名前は『レギオン』、聖書に掛かれる兵隊に準えておりその目的は拠点及び艦隊又はIS、戦術機に対する攻撃、牽制、殲滅を目的としており然も倒した敵の武器や機材を奪い取って母艦に持ち帰って使用すると言うとんでもない

外道兵器なのだ。

これはウクライナ戦争初期からヒントを得た兵器であり

嘗ては3機しかなかったのが今では62機も増えていた。

そんな『レギオン』が飛び立って『さがみ』を含む艦隊に向かって行った。

「敵艦から飛行物体確認！ 接敵迄後20秒！」

「全艦迎撃準備！ 戦術機部隊は対空装備、IS学園出向部隊は発進後

所定の位置へ付け!!」

「さてと、先ずは我々が道を切り開くが……奏大丈夫か？」

「ああ大丈夫だぜ！なあとアタシにはお前が居るからな!!」

「それじゃあ皆行くよー——!!」

翼と奏、エルムがそう言つて『さがみ』から出ると次に織斑 一夏、鈴音、宗老の順で発信すると奏が全員の前に立つてこう言つた。

「アタシがアイツらを引き付けるからお前らは作戦通りにな！」

「奏さん！気を付けてください!!」

「任せろつてんだ!!」

そう言つて上空から奏が、海上からは雪崩を使ってホバー走行している

翼が下から挟み込むかのように『レギオン』を攻撃すると『レギオン』は翼達に引き付けられるかのように攻撃しようとする……エルムが甲板でこう言つた。

「それじゃあ行つちやうよー——!!」

『デビルズバックボーン』起動！

《ハンズにおける戦闘許可受諾、武装を『蹂躞特化型』に変更》

その音声と同時に煙幕が張れて暫くすると煙幕の中から……無数の弾幕が『レギオン』に襲い掛かった。

——!!

突然の事で『レギオン』は6基ほど破壊されたと同時に現れたのは……ガトリング砲だった。

2つのガトリング砲が横一列になって腕に装備されていると同時に背面部には巨大な楯が装備されていた。

是こそが守りながら敵部隊を殲滅することに特化した『蹂躞形態』である。

「こっち向け——!!」

エルムの声と同時に全ての艦隊からミサイルが発射されると織斑一夏がこう言った。

「よっしや! 攻撃が始まったぜ!! 早く行くぞ鈴!」

「分かってるわよ一夏! ほらあんたも速く来なさいよ!!」

「あ……ああ。」

宗彦は後ろ髪を引かれる思いで……2人について行った。



「情報によればもうすぐ．．．あれよ！」

鈴がそう言って指さした先にいたのは『ウイニング・ゼロ』であった。

——敵I Sを確認、数は3。

——敵機特定中国の第二世代機『空龍』、日本の第三世代機『白式』と『灰戦騎』を特定。第一目標を『灰戦騎』に指定、続いて第二目標を『空龍』に設定する。尚『白式』は対象外とする。

そのデータと同時に移動式砲台が全て向けられて・・・放たれた。

「来たぞ！」

「散開!!」

鈴音がそう言った瞬間に3人が離れると宗壺は『戦牙』と『神龍』を

AI操作で攻撃するために切り離すと同時に鈴音も新たに装備された兵装『崩山』を使って応戦した。

そして織斑一夏はタイミングを計っていた。

そう・・・『ウイニング・ゼロ』の中核システムがある艦橋だ。

「艦橋？」

「そうだ、そここそ『ウイニング・ゼロ』の弱点だ。」

作戦説明の中で梅津はそう言っただけで続けた。

「ここには大型のAIが配備されておりここを壊せば船は止まるそうだが何をとち狂ったのかシールドエネルギー発生器を配備している為並の攻撃ではびくともせんのだが・・・。」

「白式にあるワンオフアビリティ『零落白夜』で倒すのですか？」

千冬がそう聞くと梅津は頷いてこう続けた。

「そこで織斑一夏君の機体が確実に倒せるまで君達には囿になって貰いたいのだ。無論我々も全力でサポートするが・・・死ぬなよ。」

「(ここで俺が華麗に倒せば鬼塔なんて後は転がり落ちるように終わるだけだ!!)」

織斑一夏はにひひと笑いながら考えていると宗壺が鈴音に向けてこう言った。

「凰さんもう少し距離を取って!!」

「煩いわね!この方が囿として最適でしょうがこの臆病者が!!」

鈴音は宗壺に向けてそう毒づきながらも攻撃するが『ウイニング・ゼロ』が突如ビ―

ム兵器で攻撃を始めた。

「うおー！」

「危ないわね!!」

2人はそう言いながら避けていると・・・突如として『レギオン』が現れたのだ。

「な!?!」

「こいつらまだいたの!!」

鈴音はそう言いながら攻撃しようとした次の瞬間に・・・

鈴音にしがみ付いて・・・自爆した。

「がは」

「鈴!!」

織斑一夏はそれを見て驚くと『メタル・ベル』が起動して織斑一夏に照準を定めたのだ。

「しま」

「危ない!!」

宗壺はそう言つて『戦牙』と『神龍』で防御した瞬間に・・・大量のミサイルが宗壺目掛けて襲い掛かった。

「あ」

そう呟いた瞬間に・・・大爆発が起きてしまった。

## 戦闘後

旗艦『さがみ』

「・・・酷い状況だな。」

梅津はそう呟いて現状の戦力分析を行っていた。

敵戦艦『ウイニング・ゼロ』被害状況

『レギオン』45機撃破

戦艦・・・健在

味方部隊

全戦艦戦闘に支障なし

IS部隊、凰 鈴音の機体『甲龍』中破、パイロット右腕骨折と全身の幾つかに火傷有。

織斑一夏健在なれど精神的負担から作戦続行不可能  
行方不明者・・・鬼塔 宗壹

「行方不明・・・MIAに該当とするか。」

MIAとは作戦中における行方不明であり戦闘中では戦死扱いとして扱っている。

「私の作戦がこんな事になるとは・・・。」

「艦長のせいではありません、まさか敵があそこ迄とは。」

船員の一人がそう言うのと梅津はこう聞いた。

「他の者達は？」

「落ち着いて・・・いる訳ないですね、星音さんと天羽さんは知らせが来て

暫くは動揺していて搜索したいと行ってきましたが織斑千冬によって

阻まれたそうです。」

「何故だ？生徒の一人が行方不明のはずなのに。」

「恐らくは弟ではなかったからじゃないかと向こうが言ってきた事から

討論となったようですがラウラ・ボーデヴィツヒによって何とか止まることが

出来ました。」



「そうか・・・まあ仕方あるまい、同じ会社の仲だからな。他には？」

「一時ですがハインリヒさんが呆然としていましたがクーリエちゃんの遊び相手になつている時は楽しく・・・見せようとして実際は恐らく」

「不安と言うよりも恐怖か、若しもと言う名の。」

梅津はそう言つて外を眺めていた。

若い子供たちを戦場に送り込んで年老いた自分たちは安全な船の上にいると言うこの光景に対してこう呟いた。

「嘗ての世界大戦でも私の様に思っていた者達がいたのかもな。」

「はい？」

「いや、こつちの話だ。艦隊の再編はどのくらいかかりそうだ？」

「は！1650時に全戦力再編可能という知らせが」

「遅い、敵はその20分前には攻撃するかもしれんのだぞ！現状使えるだけの船だけで出動する!!そう伝えておけ!!」

「了解しました！」

「艦長、先ほど無線で通信が」

「何だ!?!」

「は！読みあげます、『IS学園よりアメリカ代表候補生が新型戦闘機と共に

そちらに乗艦するため滑走路を開けて欲しい』だそうです!」

「戦闘機はどの位だ?」

「8機ほどです、ISは1機。」

「話にもならんな・・・だが今戦力が欲しい所だ、船の着艦準備に

入らせるように伝えておけ!総員これから再戦となるため各員気を緩むなよ!!」

『了解!!!』

そして数分後

合計9つの影が見えた。

「あれが新型機か。」

梅津はそう言ってその戦闘機を見ていた。

4つの羽が戦闘機の後部にエンジンと直結している様な感じであった。そして前部は細長い筒、まあ恐らくは機関砲であろうその戦闘機の中で先頭を跳んでいる水色の戦闘機が『さがみ』の内部に・・・垂直に降りてきたのだ。

「これが新型か、ヘリと戦闘機の2つの要素を併せ持った奴と言った処か。」梅津はそう言つてその戦闘機を観察しているとコックピットから・・・小柄な人間が出てきたのだ。

そしてヘルメットを取つてみた姿は・・・少女であつた。水色の髪を内側が跳ねている状態にしている少女が梅津を見た瞬間に敬礼して自己紹介した。

「初めまして、『航空自衛隊開発研究部隊所属』の『更識簪』と申します。」『簪』と名乗る少女がそう言つたと梅津も敬礼してこう言つた。

「『海上自衛隊《さがみ》艦長の《梅津》だ、済まないが話は簡単にして・・・彼女がアメリカ代表候補生かね?」

「はい、私達と合流した候補生です。」

名前はと言うと金髪でホーステールの少女はこう名乗つた。

「おつと待ちな、紹介くらいはできるぜ。アメリカ代表候補生

《ダリル・ケイシー》であります。」

「うむ、よく来てくれた。それでは今いる面々で会議したい。」  
ついてきてくれと言って2人はついて行った。

「シユウ・・・」

エルムはそう呟いて窓の外を眺めている中で翼と奏が互いにこう言った。

「糞！今すぐにも助け出したいのに！！」

「落ちた場所が場所だからって頑張ってくれた仲間を見殺しに出来ねえだろうが!!」

そう言っているとクーリエはこう聞いた。

「ねえ、シユウいつ帰って来るの?」

「……」

それを聞いて3人はどうしようかと考えていると……ラトロワ先生がこう言った。

「今鬼塔は他の船でメンテナンスしているがこの作戦が終わったらすぐに帰って来るぞ。」

「本当に!」

「ああ、本当だとも。だから今は大人しく待っていような。」

「うん!」

そう言つてクーリエは座ると3人を連れてラトロワ先生はこう言った。

「今貴様らがなに考えているのか見当がつくが今はまだ駄目だ、戦場においてはこの様な事があると覚悟しておけ。」

ウクライナ戦争ではこの様な事日常茶飯事だったらしいからなとそう言う

ラトロワ先生は《ダリル》を見てこう言った。

「貴様が来たという事は・・・そういう意味か？」

「ああまあそういう所だな、それで男のIS操縦者は?」

「織斑一夏は部屋だが戦えるかどうかわかん、鬼塔は・・・」

「ああ云わなくても分かりました、それじゃああたしは空いた穴を埋めますか。」

そう言って立ち去って行った。

一方織斑一夏はと言うと・・・。

「おら真耶！もつと尻向けろぶつぞ!!」  
「ああ〜ん♡一夏もつと♡もつと強く〜♡♡」

## 海の中

助けて・・・助けて。

深海の中で光の繭となっっているその物体がそう言っていた。

まるで生まれる前の胎児の様に丸まりながらもその物体はそう言っていた。

そして光のない深海から・・・声が聞こえた。

「あつたあつたよ～～、いつ君の偽物の機体♪」



「何だ……」

宗壺はそう呟きながら周りを見渡していた。

辺り一帯は吹雪で覆われており地面は雪で積っており雲は暗雲に覆われていた。そして眼前に聳え立つは巨大な鉄の塊。

まるで要塞の様なその圧倒するかのような大きさにあんぐりとしつつ宗壺はこう考えていた。

「何で俺こんな所にいるんだ？ 確か俺は『ウイニング・ゼロ』の破壊任務があつてそんで戦闘になつて……そして……あ。」

宗壺はそう記憶を辿るうちにあの事を思い出した。

織斑一夏を助けたがために自分がミサイルに撃ち落とされたという……あの記憶が。

「ああ……俺死んじゃつたのかなあ。」

宗壺はそう呟きながらマジかよとそう思っていると……歌が聞こえた。

「歌？」

一体何処からとそう思いながら宗壺は目の前にある鉄の塊……

巨大な壁に向かって行くと目の前に突如入り口と階段が現れたのだ。

宗壺はそれを昇って行きながら周りを見ていた。

至る所にある配線や壊れた外壁、そして幾つもある・・・剣や銃の残骸。それらを通り過ぎて宗壺はある部屋で止まった。

そして壊れていて少ししか開いていなかった扉を開けて目の前にあったのは・・・壊れた戦艦であった。

「これって戦艦？・・・一体どうしてこんな所に？」

これがあの世なのかとそう思いながら中に入ると・・・

一人の少女が立っていた。

漆黒のドレスを身に纏って同じく黒髪の少女がニヤニヤと立っていた。

「ようこそ我が『グレートウオー』へ、

今日は最後までお楽しみくださいませ。」

一方『さがみ』では。

「あれが援軍か・・・何か知ってるの奏さん？」

「いや、アタシもこう言う関係は知らねえから気になるな。」

奏はエルムに向けてそう言いながら目の前にある戦闘機を見ていた。

まるでSF映画に出てくるような戦闘機を見ると翼が来てこう言った。

「奏、艦長さんが皆に集まれて言ってるよ。」

「オオ分かった、直ぐ行く。」

そう言っただけで離れようとするのと海の向こうを見ているエルムを見てこう言った。

「大丈夫だって！宗壺はちゃんと帰って来るって言ってたんだろ？」

「アイツは約束を破る奴じゃねえから大丈夫だって!!」

そう言っているが内心奏も同じ心境であった。

M I Aと聞いて暫くして頭が混乱していったが今ここで喚いても何もならないと  
考えて心を落ち着かせてあの中で最前線に於いて最も年上であったからこそ  
自分かと思つてちやんと行動していると確信していたが  
それでも気にはなっていた。

だが今はそういう時じゃないと思つていた奏も一瞬だが海を見てから  
指令所に向かった。

「皆、よく集まってくれた。感謝する」

「スミマセンが織斑一夏がいません。」

翼がそう聞くとああと千冬がこう答えた。

「アイツはさっきのデその・・・そういう意味だ。」

「分かりました。」

翼はそれを聞いて一步下がると梅津がこう説明した。

「それでは第二次『ウイニング・ゼロ』討伐戦闘についてだが

その前に援軍として駆けつけてきたダリル・ケイシーが加わった為

挨拶位はさせようと思っている。」

どうぞと言うとダリル・ケイシーはこう言った。

「よう一年共！取敢えずは初めましてと言っておくぜ!!そんでだけど

男性のIS操縦者は何処だ？」

片方はいるようだけどとそう言っていると梅津は言いにくそうに・・・

こう答えた。

「もう片方の・・・鬼塔 宗壱はMIAになっていて所在が

捉まっておらんのだ。」

「ハアマジかよ!?!今手が足りねえと言うのにまあ・・・

何とかするしかねえか。」

そう言いながら頭を掻いているが奏はこう呟いた。

「そういうなら手前らだけでやりゃあ良いじゃねえかよ・・・!!」

そう言いながら口をぐつと噛み縛っているともう一人が簪が軽く紹介して作戦内容を説明した。

「既に分かっていると思うが首都近辺に着くまで既に後41分しかない、今から動いたとしても残り時間は5分と言った処だが先の戦闘も相まって奴の速度が遅れていると考えてざっと見て・・・1時間半の猶予があると見ても良い。つまり攻撃開始時刻は1930と見て間違いなからう、

我々はその手前の1800に攻撃を再開し、今度こそ奴を沈める! 皆済まないがもう一度耐えてくれ!!」

梅津の言葉で会議が終わると互いに補給と再出撃に備えて全員携帯食を食べ始めた。

そして宗壺はと言うと・・・。

♪~~~~♪~~~~

「へえ、上手いんだなあ。」

とある少女の歌声を聞いてそう呟いていると何やら・・・ガラガラと崩れる音が聞こえた。

「な、何だ?！」

地震かと言っていると少女はこう呟いた。

「やってくれるじゃないの・・・悪魔が。」

「あれ〜〜何でシールドが解除されないのかな？可笑しいなあ??  
何で東さんの言う事聞かないんだろぅねこいつ。」



## 言葉

「間もなく攻撃範囲内！皆、気合入れるよ!!」

エルムがそう言つて全員に向けて喝を入れていているのを見て翼と奏は何やら思いがありそうな目をしていた。

そう、宗壺が行方不明である事でエルムは今精神的にカツカツなのである。

そんな中での再出撃に2人は何もならなければ良いんだがとそう思っていると

『ウイニング・ゼロ』の姿を捉えた。

「手前から構えろ！攻撃が来るぞ!!」

ダリル・ケイシーが全員に向かってそう言った瞬間に・・・

ビーム兵器の攻撃がエルム達に目掛けて襲い掛かった。

それを全員は避けるが今度は十数体もの『レギオン』が襲い掛かって来た。

「敵機か！だが前の様にはいかねえぜ!!」

そう言つて上空から・・・簪が率いる戦闘機部隊が姿を現すと簪が指示を与えた。

「全機兵装自由！海老共をバーベキューの材料にせよ!!」

『了解!!』

その声と共に戦闘機『真電』が攻撃を始めた。

この戦闘機はこれ迄の戦闘機とは一線を画すものであり前に出した垂直着陸するという離れ業を保有するのは理由があるからだ。

その理由は・・・ISのPIC技術の転用である。

これにより推進剤いらずの戦闘が可能となっており物資の節約につながるだけではなくそれにおける制動で重火力兵器を運用することが可能となったのだ。

その為か武装としては大型の機関砲を二基装備しておりその火力は正に苛烈の一言に事尽きるのである。

それを見てダリル・ケイシーは全員に向けてこう言った。

「よし・あいつらが『レギオン』の気を逸らしている間に

アタシらは『ウイニング・ゼロ』を止めるぞ!!」

そう言つて全員が攻撃を始めた。

そんな中で海中では。

「ぶく、何なのさこいつさ？ シールドを解除しないなんて束さんの言う事聞かないんならこうしてやるんだからくく!!」

そう言いながら束は目の前にいる・・・エネルギーの球体を模っている『灰戦騎』のコアを消そうとしていた。

束は『ウイニング・ゼロ』を紅椿を纏った翼（箒）と織斑一夏の2人の力で倒してもらい翼（箒）の壮大なデビューを飾ろうとしていたのに紅椿を

受け取ることをせずに自身が目の敵にしている鬼塔 久三が製造した

ISに乗っていることに腹立たしく感じており何としてでも自分の機体に乗って貰いたいと言う思いともう一つあるのだ。

「それが・・・これだ。」

「何せいつ君の偽物もISに乗っているからなあ、こいつを殺せば束さんの溜飲も少しは下がるってもんだよねえ♪」

束はとんでもない物騒な言葉をヘラツとした表情で喋っていたのだ。

自分を邪魔した、それだけで束にとっては殺す理由と言う

最悪な手合いであった。

「それに、どうして男なのにISに乗っているのかも

まあコアデータから見れば簡単だから死んで奪えば良いもんね。

束さん頭いいく〜♪」

そう言いながら解析しようと企んでいた。

そして宗壺はと言うと・・・。

「また地震!?!」

宗壺はそう言つて何処か隠れる所はないのかとそう思っていると・・・  
少女のいる場所の丁度真上に何かが崩れそうになっているのを見て宗壺は・・・  
ヤバいと思つて走り出してこう言つた。

「危ない!?!」

「!?!」

少女はそれを聞いた直後に宗壺が崩落して落ちる手前で少女を助け出したのだ。  
そして崩れるのが止まると少女は宗壺に向けてこう聞いた。

「何で私を助けたんですの?」

少女はそう聞くと宗壺はこう答えた。

「何言つてんだ!危ない時には助け合うのが普通だろ!?!」

そう言うのを見て少女はこう答えた。

「貴方は本当に・・・優しいのですね鬼塔 宗壺。」

「まあ・・・よく言われるな、人当たりが良すぎるってそういうえば聞きたいんだけど・・・って」

死後の世界なのかと宗壺が聞く前に少女はこう答えた。

「ここは何処でもない世界、私しかいなかった世界です。」

「いや・・・だからさ、そのそう言う事聞きたいんじゃないって」

宗壺は何ていったら良いんだろうとそう思っていると少女はこう続けた。

「ここに来れるのは己の力を渴望する者、そして求めるものしかこれなき場所、鬼塔宗壺、貴方に聞きましょう・・・『貴方は何のために力を欲しますか?』」

そう聞いてきたのだ、それを聞いて宗壺は暫く考えて・・・こう答えた。

「力か・・・力ね・・・そうだな・・・仲間を守るため・・・かな?」

「守るため、それにしても少し抽象的ですわね?」

「まあなんていうかその・・・ISがあるからってそれで強くなるって

訳じゃないしけどだからって疎かにはしたくねえからな。それに不道徳な暴力って結構あるだろう? そう言うのから守りたいって思ってる・・・ただよなあ。」

「そうなるも今は何です?」

少女はそう聞くと宗壺はこう答えた。

「簡単だよ、力があるからって悲しませないために。」

皆を守るようになるための力が……俺は欲しい!」

それを言った瞬間に少女は宗壺に向けてある物を手渡したのだ。

それは白い剣と黒の銃であった。

「これは?」

「貴方が持つていて欲しい力ですわ、それで何から守るのかを知った時に

ここに来るまで……また逢いましょう。」

そう言うとき宗壺の足元が突如として……黒い穴が出てきたのだ。

「ハア?!」

宗壺はそれを見て驚く中で重力に従って墮ち乍らこう聞いた。

「君の名前は一体何なんだ!」

そう聞くと少女はこう答えた。

「きつと分かるはずだよ、貴方でしたら。だって私は……」

「……………ずっとあなたの側にいたんだから。」  
それを聞いたのを最後に宗壺の意識は途切れた。



## 進化

幾つものレーザーやミサイルによる攻撃で近づけられないエルム達は避けながら作戦を練っていたがその弾幕の多さに奏はこう言っていた。

「ああもう！・どんだけあるんだよこいつはよ!？」

「報告が正しけりやあそろそろミサイルの弾幕が底尽きるはずなんだが未だ其の兆候が見えやしねえって弾幕厚すぎるぜ!!」

ダリル・ケイシーはそう言いながら炎弾を撃つも効果は薄かった。

然も移動砲台が甲板の上で動いており当たりづらいのだ。

「このおお!」

「エルム！前に出過ぎだ!!」

翼はエルムに注意しながら攻撃しているがエルムは前に出ている。

今のエルムはそれどころではなかったのだ、速くこの戦いを終わらせて宗壹を助けたいと言う想いがあつたからだ。

「あれからもう何時間も経つて！此の儘じゃあ幾らISがあつたからって・・・嫌！シユウがいなくなるなんて嫌!!」

頭の中で露わになった・・・最悪な末路に一瞬頭を過って・・・振り払おうとして目を離した瞬間に、ビーム兵器がエルムを捉えたのだ。

「あ。」

「「エルム!!」」

翼と奏は不味いと思って助けようとするが最早間に合わないであろう、

それを察したエルムは目を瞑ってこう思っていた。

「(あ・・・私駄目なんだ・・・こんな事なら・・・)

・・・もう一度でいいからシユウにアイタカツタかなあ。」

その数瞬前

「……は何処だ？」

宗壺はそう呟きながら周りを見ていた。

周りは水で覆われていて上下左右が分からなかった。

「俺は確か落とされてそれから……」

宗壺はそう呟きながら思い出そうとしていると……白い剣と黒い銃が淡く光っていた。

「……これって確かあの子から。」

そう言うのと剣と銃は互いに共鳴するかのようには浮かぶと

それらは交じり合った瞬間に……一つの鎧が現れたのだ。

所々角ばった装甲は灰色で覆われており背面部には翼が、そして何よりもその二丁の白と黒の銃剣が際立っていた。

そしてそれが宗壺の前に手を出すと宗壺は……そうかといって手を向けた。

「お前は……『灰戦騎』か。」

そう言つて手が重なり合うとその光は大きくなつて……宗壺の意識はまた薄れていった。

「へへ〜ん、あと少しでシールドが解除されちゃうよ〜♪

さあ明らかにしてもらおうよ！その秘密!!」

そう言った瞬間に胸の谷間から・・・光が輝いていた。

「?ナニコレ!?!」

取り出して見てみるとそれは・・・紅椿の待機形態である金と銀の鈴が輝いていたのだ。

「エエエエ! ナンデドウシテどうなってんの来れ!?!」

束は初めての事で慌てていると突如光の膜が強く輝き始めたのだ。

「な〜こんな時にー——!!」

束はそう言いながらシールドを解除させようとするとその瞬間に・・・  
機体が変貌を始めたのだ。

「まさか・・・セカンドシフト!?!」

束はそれを見て驚いていた。

セカンドシフトとはISが操縦者の戦闘データを元手にして

新たに生まれ変わる事であるのだが其れには膨大な時間とISコアと

操縦者との関係が密接に関係するため発現する人間は千冬をはじめとして

この10年の間に未だ20人足らずしか発現していないのだ。

そんな中で何故ドウシテと思っているとその膜が解き放たれた瞬間に

『灰戦騎』はすぐ様に飛び立っていった。

『さがみ』艦橋

「・・・千冬姉。」

「?、織斑か、何の用だ?」

千冬がそう聞くと織斑一夏は・・・こう答えた。

「俺を出撃させてくれ!」

『!!』

それを聞いて全員が目を見開くが織斑一夏はこう続けた。

「俺・・・さつきので怖くなったけど・・・鈴があんな風になつちまつて黙ってここにいたくねえんだ!ここで退いちまつたら俺は男でもなんでもねえんだ!!」

だから千冬姉と言つて織斑一夏は千冬に出撃させるように言う中で織斑一夏は内心こう思っていた。

「(ヒヒヒヒ、計画通りだ。俺がここで颯爽と登場して箒達どころか

エルムが手に入るしそっぴやあアメリカのダリル・ケイシーだっけ?

亡国機業の連中の情報も盗れるし良い体つきしてたから俺のハーレムに加えて

ヤツテ・・・俺の春だ!!)」

そう思つておると・・・リーダーに反応が出た。

「艦長!反応があります数はー!」

「一体何処の反応だ！なぜ今まで反応が無かったんだ!？」

梅津がレーザー班に向けてそう聞くと彼はこう答えた。

「いきなり現れました！猛スピードで・・・このままいけば戦域です!!」

「何!?!確認しろ！一体誰なのか付きとめるんだ!!」

そう聞くとレーザー班は・・・暫くしてこう答えた。

「確認取れました、機体は所属『日本』の『鬼塔技術研究所』開発の・・・

・・・『灰戦騎・・・紅凰（かいせんき・こうおう）』。

『!!』



それを聞いて驚いていた、M I Aと思われていた宗壺が生きていることを知って全員が驚く中で織斑一夏は・・・まるで死人を見るかのような目でこう呟いた。

「何で・・・生きてるんだ。」

「(シユウ・・・御免ね。)」

「エルムー——！！」

翼と奏はもう間に合わないと思った次の瞬間に・・・レーザーが放たれて当たる手前で誰かが・・・エルムを救ったのだ。

「え？」

エルムは一体誰だと思ってその機体を見た。

灰色の胴体と赤の手足を持つ機体

大型の翼のアンロックユニット

そしてその顔にエルムは・・・泣き笑いしながらこう言った。

「遅いよ・・・シユウ！」

「悪い、遅くなった。」

鬼塔宗壺がエルムをお姫様抱っこして現れたのだ。

「シユウ！一体何処にいたんだよ!!心配したんだからね・・・!!」

エルムは泣きながら胸元に抱き着いていると宗壺はこう答えた。

「御免、まあ色々あってな。心配かけてごめんな。」

「もう良いよ・・・シユウが生きてるから・・・ここに居るって・・・

分かるから・・・!!」

そう言つてエルムは抱きしめっていると宗壺はエルムに向けてこう言つた。

「それよりもだ・・・アイツを何とかしないとな。」

「うん・・・けどどうやって?」

エルムがそう聞くと宗壺はこう答えた。

「分かるんだ、こいつが一体何なのか。如何奴なのかってな。」

そう言つて宗壺はエルムを離すと両手に新武装右手に『白宙』、

左手に『黒月』が展開されると背面部から4基、両肩部にそれぞれ一基ずつの大型ソー  
ドビットが射出されると宗壺はこう言つた。

「俺がアイツらを無効化させるからエルムは」

「分かつてる・・・私は只守られる存在じゃないからね!!」

そう言つて構えると・・・宗壺の周りに仲間が集まり始めた。

「貴様だけじゃないぞエルム、宗壺。」

「ああ、アタシらだつているんだ!何時までも助けられてばかりじゃ

いけねえもんな!!」

「後輩ドモガ粹がりやがつて全く、今年の一年坊は皆こんな連中なのかよ?」

宗壺はダリル・ケイシーを見て誰かと思つていとエルムが紹介すると

ダリル・ケイシーは宗壺をジーツと見てこう言つた。

「へえ、よく見りゃあ良い顔した一年じゃねえか?あの織斑一夏つて

言つてたっけ?あれよりも良い目してるじゃねえか気に入りそうだなおい。」

そう言つていとエルムが宗壺の背中にくつつくとククククと

ダリル・ケイシーは嗤いながらこう言った。

「全くいい女に恵まれてんなお前？」

「アハハって今はアイツを何とかしないと。」

「それじゃあ手前ら・・・リベンジだ!!」

ダリル・ケイシーがそう言うのと宗壺は大型ソードビット『双刃』を放つと

『ウイニング・ゼロ』は対空レーザーで迎撃しようとした瞬間にビットが・・・

2つに分かれたのだ。

そして2つに分かれた『双刃』はレーザー砲を切裂くと宗壺は右手にある

『白宙』で攻撃すると・・・太いレーザーが移動砲台を一撃で破壊した。

「凄いなこれ、一撃かよ。」

そう言つて左にある『黒月』を放つとこれは連射性が高い事により

まずは足を壊して行動を不能にさせると・・・エルムがドリルの付いた腕で

攻撃して破壊させると其の儘・・・射出して内部で爆発させるとエルムが

こう言った。

「今だよ!」

「おお!」

「よくやったな一年!」

宗壹とダリル・ケイシーは互いにそう言つて破壊されたところから内部に入った。

そして宗壹は『白宙』で内部から貫通させて艦橋に向かつて見ると……  
酷い物であつた。

あちこちでブザーが鳴っており中央にあるメインサーバーが

今にもショートしそうなのだ。

「こいつはやばいな。」

「ああ、後はこいつを壊すだけだ。」

ダリル・ケイシーはそう言つてメインサーバーを見て……こう言つた。

「悪いな、これも仕事なんだ。」

そう言つて炎弾をぶちかますと爆発したと同時に宗壺達は艦橋から下に

脱出しようとして……ナニカが宗壺達の目の前に現れた。

現れたのは……例のあれであつた。

「こいつは……あの時の!?!」

宗壺はそれを見て驚いていた、何せ目の前にいるのは……無人機だからだ。

上半身は襲撃してきた機体とそっくりであるが下半身はまるで……蟲のように8脚

だからだ。

そして両腕のレーザーと、下半身にある砲台が……火を噴いたのだ。

「!!」

2人はそれに気づいて慌てて避けると無人機ISは宗壺を

執拗に攻撃してくるのを見てダリル・ケイシーはこう言つた。

「クソが!・アタシはお呼びじゃないってかよ!?!」

そう言いながら双剣を呼び出して攻撃しようとするも背部にも・・・  
砲台があつたのだ。

「しま」

ダリル・ケイシーはそう言いかけて・・・諸に攻撃を浴びた。

「先輩!?!」

宗壺はダリル・ケイシーを見ると幾つかボロボロになつていたのでこう呟いた。

「クソ・・・ここままで・・・とはな。」

「先輩!」

宗壺はそれを見てそう言うと突如として無人機ISが宗壺の目の前に現れて  
足を掴んでぶん回して壁にぶち当たらせた。

「がは」

「二年!」

ダリル・ケイシーはヤバいと感じていた。

こんなバケモノを如何やって倒すんだよとそう思っているとなんかISが

ダリル・ケイシー目掛けて銃口を向けた。

「ああくそ・・・アタシからかよ。」

ダリル・ケイシーはそう呟きながらこう思っていた。



「（悪いなフォルテ、帰れそうにねえわ。）」  
そう思いながら目を瞑ろうとすると・・・

「辞めろー——！！」

宗壺は大声でそう言いながら二丁の銃剣を斬撃形態にして両腕を斬り落とすが  
無人機 I S はそれを見て嫌さず脚で落とそうとすると・・・ソードビットが  
それを切裂いた。

「!？」

無人機 I S はいきなりの事で驚く中で宗壺はこう言った。

「もうこれ以上・・・仲間を傷つかせるか——！！」

そう言った瞬間に機体から情報が流れた。

『単一能力（ワンオフアビリティ）・舞雷（ぶらい）』

その情報が出ると同時に『灰戦騎・紅凰』の装甲にソードビットが

両手両足全身に装備されるとソードビットの刀身が青から黄金に変わって  
攻撃を始めた。

その攻撃は正に神速の一言に事尽きるものでありその攻撃と同時に当たる  
斬撃によって無人機 I S はいとも簡単にバラバラにされて・・・

I S コアだけとなった。

そして宗壺はダリル・ケイシーを……お姫様だっこするとこう言った。

「脱出しますー!」

「へあ!?!」

ダリル・ケイシーはいきなりの事で驚くが宗壺と共に『ウイニング・ゼロ』から脱出した。

そしてそれと同時に……『ウイニング・ゼロ』は海に消えた。

## 戦いが終わって

『さがみ』艦橋

『ウイニング・ゼロ』反応消失！』

『よっしやー！』

その言葉を聞いて艦橋にいる全員が喜んでいた。

何せ後数分で首都に攻撃される所だったのだから喜びも一塩であるが

梅津は全員に向けて命令した。

「全員喜ぶのはまだ早いぞ！操縦者達が戻って来る迄が戦争だ、各員気を緩めずに警戒を第二警戒態勢に移行！受け入れ準備を忘れるな！！」

『はー！』

それを聞いて船員たちは準備作業を始めると同じく艦橋にいた

ラトロワ先生はほっとした様子でこう呟いた。

「良かった．．．全員生きてて。」

そして数分後、全員が帰投するとラトロワ先生はこう言った。

「諸君、苦勞であつた！色々とあつたが・・・よく生きて帰つてくれた。」  
そう言う全員が少し笑みを浮かべているとラトロワ先生は宗壺に向けて  
こう言った。

「鬼塔、お前は検査だ。怪我の事も考えて旅館に簡易的だが施設がある、  
それで検査して問題が無ければ部屋に戻れ。食事はこつちで用意する。」

「わ・・・分かりましたけど俺そんなに疲れては」

「馬鹿者、一度撃墜されたのだ。念には念を押すべきだ。」  
ラトロワ先生は呆れた口調で宗壺に向けてそう言うところ続けた。

「其れとだが今回の迎撃に当たつての報酬として・・・貴様らには明日夕方まで遊ぶ事  
を許そう！疲れ果てる迄遊ぶが良い!!」

「「「いよっしやー——!!!」」」

それを聞いて宗老達が喜んで、いる中でクーリエはと聞くとこう答えた。

「奴も無論だ、貴様らがいなくてはあの子は満足に外に出なさそうだからな。」  
そう言うのとラトロワ先生は全員に向けてこう締めくくった。

「それでは・・・状況終了とする!!」

「ねえねえエルムさん、教えてよ～～？何があつたの??」

「教えないよ～～♪」

「ええええケチ～～！翼さんも奏さんも教えてくれないし

「何でアメリカの代表候補生然も3年も来ていたのって

皆気になってるんだよ〜?」

「御免ね、制約があつて知つちやうとI S学園で監視されちやうよ?」

「え・・・それは嫌だなあ。」

エルムの言葉を聞いて女生徒の一人がそう答えた。

現在は宴会場で食事を楽しんでいるが中にはあの時何があつたのかを聞かれるので参加者は全員言わない様になっている。

そんな中で一人がこう言った。

「そういえば凰さんはどうしたのかな? 織斑君もだけど?」

「さあね。」

エルムはそう言つて頬張つていた。

鈴はあの後火傷の治療も兼ねて病院に向かつており織斑一夏は・・・

何故だか今日は部屋で食べると言つてから籠つていた。

まあ仕方あるまい、活躍の機会が悉く奪われたのだから。

そんな事も露知らずに食事は過ぎて行つた。

そして海

「ふ〜、夜風を感じながらの散歩は気持ちいなあ。」

宗壺はそう言いながら散歩をしていた。

簡易検査では異常がなく取敢えずは様子見をさせることとなった後に食事を済ませて夜の散歩を楽しんでいた。

海風が心地よく穏やかになる中で宗壺はある事を思い出していた。

「そういえばあの夢・・・何だったダ一体？」

最後のは『灰戦騎』であつたことは理解できたが其れより前の・・・

あの女の子が何もであつたことが気がかりであつたのだ。

何せ会つた事もないのであり記憶を掘り返すも覚え無、一体誰だつたのかと思ひながら散歩をしていると・・・海の波の音とは違う音が聞こえた。



「何だ？」

宗壺は音が鳴った方向に向けて歩いてみると・・・人影が見えた。

誰かが泳いでいるのかと思って見てみると・・・その人物が上がって来た。

月夜に輝く金色の髪、弾みながら揺れる胸と大きく柔らかそうな尻と

その間で細いながらも鍛えていることが分かる腰、一度出た後に腰を

下ろしている・・・ダリル・ケイシーがそこにいた。

「!？」

「誰だ!!」

ダリル・ケイシーはそう言って岩陰に向けてISを部分展開して剣を抜くと・・・宗

壺が罰悪そうな表情で現れた。

「ええと・・・こんばんわ。」

「よう・・・」

．．．．．エロガキ。」

「誰がですか！」

「悪いな、何せ水着なんてねえから今のうちに泳いどころと思ってさつきまで泳いでたんだ。」

「だからって・・・変な人が出たらどうするんですか?」

「大丈夫だ、護身術は習ってるし大抵の専用機持ちはそう言うの持ってるぜ?」  
「へえ・・・そうなんだ。」

宗壺は感心したかのようにそう言っていると・・・目の前に  
下着だけの姿となっているダリル・ケイシーがそこにいた。

「ナナナナナナ何で着てないんですか!？」

「着てるだろ?ちゃんと」

「下着は服に含まれません!!」

宗壺がそう言うのとへエと言ってダリル・ケイシーは宗壺に詰め寄って  
こう言った。

「アタシの裸全部見てそれ言えるたあ良い度胸だな一年?」

「あ」

宗壺はそれを思い出して赤面すると・・・ダリル・ケイシーは

宗壺を関節技で動けなくさせてこう言った。

「アタシの裸見たんだから代金として手前の大事なもん拝ませてもらうぜ?」

「大事な物って・・・ちよつとこれって強姦」

「アタシは女だからセーフだ。」

「男女差別!？」

「今女尊男卑だ。」

「知ってたよ畜生!!」

宗老はそう言いながらもパンツだけは守ろうとして腕を出す  
それをダリル・ケイシーは・・・胸の谷間で押さえつけたのだ。

「!?!?!」

「ほらどうした?速くしねえと最後の一枚が見えちまうぜくく?」

ダリル・ケイシーはそう言いながらパンツに手を伸ばして・・・こう言いながら脱が  
した。

「おらアタシの裸見た駄賃だ見せろ!!」

そう言ってひっぺ剥がして見えたのは・・・

「・・・お・・・大きい。」

天に向かって聳え立つ特売とかにある大型のスプレー缶の如き塔（笑）である。  
ダリル・ケイシーはそれをじつと見て・・・こう言った。

「これが・・・でけえ。」

「いや待って感想良いから速く着させて」

「確か漫画でこうやって」

「イヤ何させようとしているんですかちよつと待つてつていうか誰か助けて  
強姦魔がいるー!!」

「誰がじゃってあれ？アタシ・・・やべえ、衝撃過ぎて一瞬だけど・・・」

・・・ヤリテエって思っちまった。」

「危なかつたって言うか速くどいてください!!」

この様な一幕があつたそうだ。

因みにであるがエルムも無論宗壺のは見て知っている。

そして海上の何処か。

「クソがクソがクソが——  
——  
!!」

東はそう言いながら人参型ロケットの表面を殴っていた。

宗壺の機体を奪えれなかったどころか自分の計画が全てパーだったのだ。

そう、『ウイニング・ゼロ』が暴走した原因は……東だ。

全ては自分の計画と言うよりも翼（箒）を自分の思い通りにさせたかかったという理由であつたのだが全てがおじやんとなくなってしまったのだ。

最初はIS発表と白騎士事件で久三が戦術機で、そしてその息子でもある宗壺が、親子二代にわたって自分の計画の邪魔をしたことに腹を立てているのだ。

そして東は……憎たらしさ満々の表情でこう呟いた。

「鬼塔 久三、鬼塔 宗壺……絶対にアイツらを地獄に墮としてやる……！」



そして旅館の織斑一夏の部屋では……。

「うん……織斑君♡」

汗だくで布団の中に入っている……全裸の山田先生を見ながら織斑一夏は今回の事を思い出していた。

自分が思い描いた事とは違う出来事に戸惑いを隠せず、それどころか良い所を全部宗壺が手に入れていることに……憤りを感じて月を見ながらこう思っていた。

「全部アイツが……アイツが悪いんだ、アイツがいるせいでおれの活躍がねえ何て……認めねえぞ絶対に……アイツを……」

・ ・ ・ アイツだけは俺の手でコロシテヤル ・ ・ ・ !!  
「  
そう言う恨みつらみの言葉を口にしていた。

全て自分の思い通りになる訳ないと誰も知っていることを感じないまま。

## 世界情勢

8月の暑い日、宗壹は技研にて機体の整備されているのを見ていた。

『灰戦騎・紅凰』、新たに進化したその姿は正に鳳凰と言つても良い形状であつた。

そして全身に装備されているソードビットがまるで剣山のように装備されているのを見てると久三が現れてこう言つた。

「どうしたんだ宗壹、こんな所で？」

「ああ父さん、ちよつとこいつを見たくてな。」

そう言つていると宗壹は久三に向けてこう聞いた。

「ねえ父さん、一つ聞いて良いか？」

「何だ？」

「ISに意志があるって・・・本当？」

「ああその事か、コアネットワークには無数の世界がありセカンドシフト以降の操縦者たちはその際に夢を見ると言う事があると聞いてはいるがお前が見たのが

其れだとするやと強ち嘘じゃなかつた事だが・・・もうあんな無茶はして

欲しくないって言う親心は知って貰いたいね。」

「・・・本当に御免父さん、けどあの時は」

「其れでもお前は私の息子だ、何があつても無事に帰るつて事を成し遂げてこそだ、そのの所はちゃんと考えてくれ。」

「・・・分かつた。」

「まあしかしお前がセカンドシフトしたと聞いた時は何事と思つたし

お前の事聞いて斑鳩社長經由で抗議したからな、今後は軍部も新型開発と同時に有事に備えて例の法案が採択されたからな。」

そう言つて思い出したのは・・・尖閣諸島における中国及び韓国、

台湾に備えて基地建造と軍費増強案である。

野党や一部の政治家団体が抗議する中であつたが首相の一言でそれは収まつた。

「我々は今重大な局面に立っています！ 大国による力づくの世界変貌に対して我々は対抗するため二戦力を整えなければなりません！」

力は確かに使わない事に越した事ではありませんが我々が今やるべきことは何ですか？ 力で捻じ伏せようとするまるで山賊や海賊の様な輩に国際法とか言つても何もしないんですか？ 聞く耳もたない連中に対して理性或る対応とか言つて

彼らは納得しますか？ 裁判に対しても自ら行つてることが重罪であると

認識しておきながらもそれでもやる外道共に我々が道理を弁えますか？

そんな義理は我々にはありません！力に対して我々は力をモツテ

立ち向かわなければなりません！例えそれで悪魔と罵られ

後世から外道と侮辱されようとも私はこの国の国民として、

今を生きる子供たち、そしてこれから生まれてくる子供たちに

恥じない国を創るためには！この国を外敵から守るためには！！

私はその手に銃を持つ正義を執行することをここに宣言いたします！！」

それを聞いて与党内部でも意見が分かれたが現在の世界情勢に対して

この国がやるべき対応に対する意見こそがこの国の未来を創るのだと

思っているのだ。

「これに対して中国からはもう反論すると来たが日本の外交官のあの言葉に中国の外交官のあの顔は傑作だったな。」

その時の言葉がこれ。

「じゃあ裁判しましょうよう？白黒はつきりしましょうよ??え? 裁判しない?? ああ負けるのが怖いからか、そうですね? 貴方方の脳みそって

大体が脳筋ですから暴力でしか外交できないですもんね。」

これを聞いて中国の外交官は無礼だぞと言うと日本の外交官はもう一度こう言った。

「だから裁判しましょう? 国際裁判所で判決しない限り我々は尖閣諸島に基地を造りますから。」

それを聞いて中国の外交官たちはグヌヌぬぬと歯軋り鳴らしており

この光景は中国以外は生中継として報道され世界中で議論を呼んだ(まあ、大体が中国における強引なやり方怒っていた各国の市民たちにおける賛成意見と

海外にいる中国人たちにおける『何故彼らは裁判したがるのか?』と言う

疑問がネットで上げられると投稿者が政府の治安維持組織に逮捕されたり

削除されたりする中で国民の一部がこう考えていたのだ。

『モシカシテ政府は負けるのが分かっているから裁判したくないのか?』

その考えが中国中で密かに議論されており当局でも若手を中心となっている為

今の政府はそれの封じ込めに躍起になってしまったがこれも日本政府の思惑であり  
中国内部でこの意見により内部に目がいっている間に基地の建設を  
執り行っているのだ。

そんな中に於いてアメリカでもとある議題が取り出されていた。

内容はこれ。

『アメリカ海軍開発の次世代無人戦艦暴走！艦隊の再編!!』

『人類にAIの技術は速すぎたのか？無人技術の今後は如何に!!』



前にあった『ウイニング・ゼロ』の暴走から始まったこの議論により艦隊運用にAIを使つて大丈夫かとか映画の様に反乱が起きないとも限らないとか言っている面々が多くあつた。

そして現在立て直しているロシアでは北方領土の返還式の日取り決定や再開発に伴う資金等をどこまでロシアからしやぶり取れるかと言つた

内容が記載されているだけではなくドイツのIS保有数が義期限したこととかもあつたがまあ関係ないなど久三はそう思いながら機体を見ていると

宗壺に向けてこう聞いた。

「そういえばお前夏休みはどうするんだ？ 予定とか??」

そう聞くと宗壺は・・・少し表情を暗くしてこう答えた。

「アハハ・・・何せ女学校同然の所に行つていたから

『ハーレム野郎滅べ!』とか言われて予定なしなんだよ。」

「そうか・・・それ・・・残念だな。」

「(´ ｀)グスン。」

宗壺のその光景に久三は何も言えなかつた。

言えても・・・同情にしかならないからだ。

## 各国の少女達（海外編）

鈴音の場合

『成程な、貴官は怪我で二回目の戦闘には参加していなかったと。』

「は……ハイ。」

『今回の件で貴官が手柄を上げていれば中国政府からしたら

現在のマイナスイメージの払拭と共に日本政府に対して大きな借りが作れると

思っていた者達もいて貴官の代表候補生の資格はく奪を検討すべきだと言う案が浮上っていた。』

「!!」

『だが私が何とかチャンスを作っておいたから一つ言っておく……

これ以上は底いきれんぞ凰候補生。』

「は……ハイ、『楊候補生管理官』。」

『貴官は当初の予定通りに織斑一夏をこちら側に引き寄せられるように

任務を続行せよ、期間は次の長期休暇……クリスマス手前までに完了するか

それに匹敵するような手柄を上げろ。さもなければ……分かっているな?』

「了解……。」

鈴はそう言つて電話が切れると……とほほといわんばかりにベッドに腰かけた。これ以上失態を見せてはいけなさと感じている彼女であつたがどうすればいいのかと考えていた。

「やっぱハニートラップしか……ウウウウウ。」

そう言いながら鈴は自身の……小柄な体型を見て唸つていた。

どつかの誰かが言つていた『貧乳は希少だ！ステータスだ！！』と言つていたが正直な話一夏の周りで最近よく見る山田先生を見て自信が喪失しているのだ。可愛らしい見た目とは裏腹に自身にはない大きな……あの胸が。

「クソが……所詮胸なんて脂肪なんだよ〜〜！」

唇尖らせながら鈴はどうするべきなのかよ考えていた。

あの時に高官をISで脅したのがまずかつたかなあと……普通に考えて当たり前な事をやべエと思うあたりこいつ阿保だろうと思つてしまう。

セシリアの場合。

「何ですって！それは本当ですよ!!」

セシリアは慌てた様子で女性権利主張団体の電話を聞いていた。内容は『ウイニング・ゼロ』についてでありそれを倒したのは鬼塔 宗壺であることが知れたため二ふざけるなど思っていた。

「そこに私がいれば遠距離で華麗に倒せてたのにいいいい!!」  
ムきいいいいと言わんばかりに地団駄踏んでいると近くに居る男の整備士に文句を言い放った。

「ちよつと貴方何ちんたらしているのですの！貴方が遅いせいで私の活躍がなくなつたではないのですの!?!」

「も・・・申し訳まりませんオルコツト様、ですが

『ブルー・ティアーズ』は酷い壊れようでして予備パーツも不足しておりますし何よりも自動製造機では造れない繊細な作業をであります」

「言い訳は聞きたくありませんわ！何ですのこの兵装は前の方が良かったですわ!!」

そう言ってセシリアはカスタムされた『ブルー・ティアーズ』を見て憤慨した。

胸部には増設された装甲が、両腕にはハンドガン、周りには

有線型ビットと共にあるシールドがありどちらかと言えば防衛重視に

仕上げたかのような感じであった。

「し……しかし現在『ブルー・ティアーズ』を造りなおすとなると

予算の都合上不可能ですし予備パーツがない以上前々からあつた戦車や

配備予定でした戦術機のパーツからやりくり」

「戦術機ですって！あんな不細工で男も使えろと言う愚かな間抜けに

私の『ブルー・ティアーズ』を繋ぎ合わせたと言うのですか!」

「で……エスがこれしか方法が」

「もう良いですわ！貴方はもう必要ありませんわ!!」

セシリアがそう言った瞬間に男の左右に……女性達が現れて両腕を掴むと

セシリアは女性達に向けてこう言った。

「その男は殺してテムズ川に捨てておやりなさい！男など墓よりも

そこの方がお似合いですわ!!こいつの息子共々です!!」

「お、お待ちくださいいセシリア様！私はどうなっても構わないので  
どうか息子は！！息子だけは——！！」

そう言いながら引きづられて行く男を見てセシリアは鼻で笑ってこう言った。

「さてと、新しく整備士を雇わないといけませんわね。

男など吐いて捨てる程입니다し。」

そう言いながら『ブルー・ティアーズ』から離れていくセシリアであった。

エルクムの場合

「おりゃあー！」

エルムはそう言いながら周りにあるドローンを破壊していった。

そして全て壊すと・・・離れている軍人がこう言った。

「よし！今日はここ迄!!機体は研究員に引き渡してくれ!!!」

「ハ~~~~イ。」

エルムはそう言つて戻つて行つた。

ドイツのISの保有数がラウラのVTシステムによつて激減してからと言う物

ドイツではアメリカが開発しているAI開発のための研究所を作っていたのだが

『ウイニング・ゼロ』事件で使われることなく然もEU加盟国で考えられている計画『イグニッションプラン』がフランス、イギリスに続いてドイツも除外されておりこのままではヤバいと考えた政府はある行動に打つて出た。

それが・・・これだ。

## 数日前

「え？私が日本ですか？」

「ああそうだ、我々は『イグニッションプラン』から除籍されていて

今後の国防についての話し合いで決まったのだが日本から戦術機を

今までよりも多く配備させることとなってそれに伴ってIS部隊の廃止が

決定されてね。其れで悪いがこれから君は日本の『斑鳩グループ』にある

『鬼塔技術研究所』所属となったからそれを伝えにウオわあ!？」

「今の話！本当ですか!？」

エルムはそう言つてそれを言つていた軍部の上司に迫るかのように聞くと上司はそうだと言つてこう続けた。

「まあ君も顔馴染みの人間がいる方が気か楽になると思つて言つて見たが大丈夫そうだから取敢えずそれで良いな。」

「はい！それは勿論!!」



「それではエルム・ハインリヒ！貴官は今から2週間の中に最終チェックを行ってそれが済み次第日本に向かう事を許可する・・・最後に一つ言うが体を養生しろよ。」

「ハイ！了解致しました!!」

エルムはそう言って離れたが内心は・・・嬉しかったのだ。

宗壺に会えると思つて頑張ろうと思つたからだ。

その証拠に頑張りすぎて2週間かけて終わる奴を6日で終わらせると言う・・・愛は強と思わんばかりであると思つたのであつた。

## 国内にて

そして数日後、東京国際空港。

「なあ父さん、本当なのかあの話？」

「まあな、元々考えられていた事だがドイツの事も相まって急に決まったんだ。戦術機の増産については前からあつたけど

まさかあんなに大規模になるとはねえ。」

おかげで工場は休日出勤だよ（； ㇿ、）トホホと久三がそう呟いていると・・・エ  
ルムが鞆を持つて現れるのが見えると宗壺が手を振っていると・・・  
それに気づいたエルムが走つて宗壺を・・・抱きしめた。

「シューー！」

「うおわエルム!?!」

「（青春だなあ。）」

そう思いながら久三は2人を見ているとエルムは離れてこう言った。

「（＊、σー、）エへへシューウ仁また逢えたく〜!」

「イヤ俺も驚きだったぜ何せこれから一緒つて・・・何で?」

「うーんとね・・・分からない。」

「アア・・・まあ良いけど取敢えずは宜しくな。」

「うん！これからもね!!」

そう言つて互いに握手を交わした。

ところ変わつてライブハウス

ここでは翼と奏が夏のライブに向けて猛特訓をしていた。

ISも使つたこのライブに社運を変えているマネージャーからすれば正に

背水の陣とも言えるがそれでもそう思つてこうやって準備に明け暮れていた。

何処かの山中

倉持技研

織斑一夏のI S 『白式』の製造に携わっている会社であるが今この会社は・・・  
大変危機的状況となっていた。

織斑一夏が目立った活躍をしていないがために宗壺が所属している

鬼塔技術研究所が躍進しておりこのままではヤバいと思つて新たな操縦者を見つけようとするもそんな簡単に発見される訳ではないのだ。

何故なら専用機持ちとは代表候補生からさらに良い人材を見つけるとなると時間が掛かるがためにどうしようかと迷っている中で・・・とある女性がこう言った。

「ねえ皆さ、ちよつと話があるんだけど？」

そして数日後のI S学園

その中にある教室の一角に千冬と・・・ラウラがそこにいた。  
一体何事だと思っていると千冬はラウラに向けてこう聞いた。

「ラウラ、お前I Sに乗る気はあるか？」

「!!一体どう言う意味でしょうか教官？」

ラウラが一瞬目を大きく見開くが何故と言って千冬はこう答えた。

「・・・ついこの間クラリッサから電話があつたのだ。」

「クラリツサ！今あいつは何をしているのですか!!？」  
ラウラはそれを聞いて驚いていた。

『クラリツサ・ハルフオーフン』、ドイツ軍に於いてラウラよりも先に  
ヴォーダン・ヴェージュユを移植してラウラの前の隊長として存在していた  
女性である。

まあちよつとであるが・・・その趣味を真に受けてアホナ事する以外は  
優秀な兵士である。

そして千冬は重い口を開けてこう言った。

「ドイツ軍がISをすべて手放すことを発表した。」

「え？」

ラウラはそれを聞いて意識が飛びかけた中で千冬は更にこう続けた。

「原因はVTシステムが暴走した件で各国からの抗議で仕方なくだそうだが、それにど  
うやらデザインチャイルド育成に伴う倫理的問題も問いただされている為

対象となった少女達は全員ドイツの施設に全員が政府の責任で面倒見ることとなり  
その資金の為にIS部隊を解散させるそうだ。」

「で・・・でしたら教官・・・私は・・・これから」

どうやってと思っていると千冬はこう答えた。

「お前については今後三年間はI S学園で面倒見ることとなっているがここからが問題だ。」

「……………」

「二つは此の儘ドイツに戻って一般人として生活するかだ、これには政府からの補助も受けられるから生活等については問題なからうがお前……家事とかした事ないだろう?」

「……………はい。」

「そこでもう一つだ……この学園の学園長の轡木学園長の養女となって日本国籍を取得するだ。」

「……………へ?」

「向こうは乗り気らしいぞ?ここで日本国籍を貰って改めて代表候補生として試験に受けて名乗るかそれとも他の仕事で働くなども出来るかどうか?」

「何故……私を」

「簡単だ、子供を助けるのに理由などないと言っていたからだ。」

貴様に足りないのは誰かに甘えると言った事だラウラ、軍ではエルムが

甘えているような感じであったがあれはお前に見本を教えていたにすぎないんだ。

これからお前がどうするのか?どうしたいのかをお前は一人で

考えなければいかん。．．．他に聞きたい事はあるか？」

「あ．．．いえ．．．その」

「まあよく考えておけラウラ・ボーデヴィツヒ、未だあと3年はあるからゆつくりと今後を考えれば良いんだ。」

それじゃあなたと言って千冬は部屋から出ていく中でラウラは今後どうするべきなのかと．．．自問自答するしかなかった。



そして生徒会室。

「そう、もうそろそろ限界よねえ？」

「ええお嬢様、このままでは生徒の怒りが爆発しそうです。」

「下手したらアタシらに迄火種が襲い掛かるっすよ〜〜？」

「そうねえ．．．じゃあ来月の学園祭までに準備しておかないとね。」

そんで織斑一夏であるが家にて．．．。

「ああああ♡一夏君一夏君一夏君♡♡もつと!もつと私を○して♡  
イかせてー♡♡♡♡」

「おら麻耶!俺のを加えてイキヤガレー!!」

## プールで遊ぶぞ!

そしてエルムが宗壹達の本社に入社することになったが取敢えず研究部は……地獄であった。

『デビルズバックボーン』、これが問題だったのだ。

あらゆる戦況に操縦者によって武装を変えるところがこのシステムはISの拡張領域の更なる可能性を見出せるという事も相まってデータ取りで忙しくしていた。

更に言えば機体の新装備やその設定処理、日本製の機体と相互間性が成り立つようにパーツの組み換えなど上げればキリがないと言われるほどである。そしてこう言う時に限って本社からまた……無理難題を押し付けてくるのだ。

「はあ! 『灰戦騎』にも『デビルズバックボーン』を装備させる!!」

『そうだ、何せこのご時世だ。何時中国から攻撃があつてはたまらぬからな。今基地建設を行っているが奴らめ漁業船団を使つて反対運動して

工事の邪魔をさせようとしているので自衛隊の海上艦隊で砲台向けたら直ぐにいなくなるという事を繰り返しておるからこれに伴い

海上・航空戦力の増強と言う名目で無人機の製造を行っておる、お主が作った戦術機の新機も建造して欲しいと言ってきた追って堪ったものではない。』

「其れはこつちも同じですよ、ドイツから来た

ISの調整も込みでやっているんですから正直な所残業手当を倍くらいは」

『5倍出してやるから徹夜してでもプロトモデル仕上げる。』

「よっしややってたるぜー!!」

『・・・現金だな。』

斑鳩がそう言つて電話を切つた後にそういえばと久三はある事を

思い出していた。

「そっういやあこの間くじ引いたらプールのチケットがあつたからあれ上げるか、丁度宗壺暇しているし。」

そして次の日

「と言う訳で来てしまったぜプール。」

宗壺がそう言うのと夏服（胸元南半球丸出しの上半身とミニスカート）を着ているエルムがこう聞いた。

「それにしても良かったのシユウ？久三さん達今忙しいんでしょ？」

「そうなんだけど父さん曰く『どうせ暇なんだから数日掛けてエルムちゃんに日本の観光をしてやれ』って言われてさ、取敢えずは……」

この暑さを凌げることから始めないと。」

「うんそうだよね……ドイツと比べてとけちやいそ。」

エルムはそう言いながら胸元をパタパタと仰いでいると宗壺は大声でこう言った。

「ちよお前何やってんだよこんな往来で!？」

「エエエエ、だつて暑いんだもん。」

エルムがそう言うのと宗壺はああもうと言ってエルムの手を掴んでこう言った。

「ほら、速く行くぞ！」

そう言つて引つ張つていった。

「イヤッホー！」

エルムはそう言いながらプールで遊んでいた。

水着は前に宗壺が決めたフリルの付いた奴であるが男性陣たちは殆どがエルムの見た目を眺めていた。

揺れ動く胸部、細い腰つきに腹筋、長い足と大きいお尻に全員がそれを見ていた。

そして女性陣達は血の涙を流している中でエルムは宗壺に向けてこう言った。

「シユウ見て見てウオーターズライダーがあるよ!」

そう言つてエルムは宗壺の手を引いて向かつて行くと女性の監視員がいたが

エルムの胸を見て一瞬驚いた後に気を取り直すかのような感じでこう言った。

「お客様、この度は当プールにご利用いたしました誠にありがとうございます。こちらでは前か後ろ女性の方がしがみ付くような感じとなりますので・・・

カップルはゆつくり楽しめ畜生が——!!」

「あ、本音が出た。」

宗壺とエルムは互いにそう言ふと・・・宗壺はある事に気づいてしまった。

「(あれ?これつてつまり俺がエルムを抱き着くかそれともエルムが

俺を抱きしめるかの違いつてだけで俺滅茶苦茶ピンチじゃね!?)」

宗壺はそう思っていた。

何せエルムの胸部は凄まじいのだ、正直な所間違はなくあれが立ちそうと思

っているがエルムは宗壺に向けてこう聞いた。

「ねえ、シユウ。前か後ろどつちが良い?」

そう聞くとどないしよと思つて・・・宗壺はこう答えた。

「よし、じゃあ俺は別の時に」

「前か後ろ？」

「・・・俺が後ろで良いか？」

「エエエエ、シユウが前の方がいいじゃん。前の人もそうだし。」

「嫌あれはカップルだからって理由だしそれに俺達付き合っていないって。」

「部屋同じだから良いじゃん！」

「そんな笑顔で言うか普通それ!？」

宗壺はそれを聞いて驚くがエルムは良いから良いからと言って

シユウの背中を押して・・・抱き着いた。

「!!!」

宗壺はエルムのその胸が思いつきり当たっているだけではなく形状が変形している事感じている中で監視員がこう言った。

「それではレッツゴー！」

そう言って押し出して・・・落ちて行った。

「いやっほー！」

「ウオオオオオオオオ!!」

宗壺は驚きながら下に降りて行って其の儘プールに落ちて云った。

そして起き上がるがシユウはこう思っていた。



「ああ・・・立ってやがる」

そう思いながらプールの中で前屈みになっている宗壺であった。

## 2学期

二学期、それは新たなる始まりにして夏休みが終わったことを告げる……  
ある意味学生たちにとっての『ギャラルホルン』と思うものである。

そんな中で三組対四組の試合が行われていた。

翼対宗壹である。

セカンドシフトして強くなった宗壹の機体である『紅凰』に対して翼は4本の剣で戦っていたが機動力、性能が段違いになっているがために対応が遅れるのだが

それだけではないのだ。

「ちいっ……このソードビットが何とも邪魔くさい!!」

宗壹の機体に装備されているソードビットが翼の行く手を塞いだり

死角からの攻撃や射線の乱しなどでうまく攻撃が届きにくいのだ。

そんな中で宗壹は銃剣『日宙』と『黒月』を展開して一斉掃射した後

銃口を向けてこう言った。

「チエックメイト。」

「……負けた。」

翼の言葉と共に模擬戦闘が終わった。

「然しまあ翼お前もタフだなあ。」

「何言っているんだ奏、私達は数時間ものステージ活動をするんだからあれ位体力を維持できるようにしなくてはいかんだろ?」

「まあそうなんだけだよ、それでも限度つてあるだろう?ましてや相手は宗吉だぜ?!勝てるイメージ浮かばねえのによくやるなって思つてな。」

「まあ確かに宗吉は強いが何時までもおんぶにだつこと  
言う訳にはいかんからな。」

そうだよなあと奏はそう思いながらさば味噌煮を食していると

隣でステーキを食べているクーリエがこう言った。

「シユウ凄いいね、皆よりも強い。」

そう言うのとエルムがこう答えた。

「当然だよ！何時もシユウと特訓してたんだからね!!」

そう言いながらエルムが立ち上がるがその際にその大きな胸が揺れるがために

周りにいる少女達は溜息をついていた。

そんな中で宗壺はこう聞いた。

「そういえばだけどレイン先輩カラ聞いたけど

もうすぐ学園祭が始まるらしいぜ？」

「ほう、ここでもか。となると出し物を考えなければいかな。」

翼がそう言うのとエルムもこう言った。

「出し物かア・・・どんなのが出るのか楽しみだなあ〜♪」

何やら面白そうだなあと思っっているようであった。

そして翌日

この日はSHRと一時間目の半分を使つての全校集会を執り行う事となつた。内容は無論昨日話していた学園祭についてだ。

周りは全て女子であるがために溜息付いていると眼鏡をかけている少女・・・恐らくは生徒会所属であろう少女の言葉に先ほどまでガヤガヤと騒いでいた声が一瞬で静かになつた。

そして壇上に目を向けると出てきたのは・・・一人の少女であつた。

水色の癬ツ毛が外側にはねていて悪戯っぽい表情と猫の様な目つきをしたネクターの色から見て二年生の生徒が上がると全員に向けてこう言つた。

「やあやあ皆おはよう、今年はまだ色々あつて自己紹介出来なかつたから

今ここで紹介するわね。私の名前は『更識 楯無』、君達の生徒の長にして

元ロシア国家代表生で今は日本代表候補生見習いつて所かしらね？宜しくねえ。」  
そう言うのと一年生たちがざわざわと話し声が聞こえた。

「え？ロシアつてあの日本人じゃないの？」

「ロシアって確かI S コア全部奪われて多額の賠償金をウクライナと

日本に請求されてて国土を幾つか譲らなきゃいけなくなつて縮小したんだよね？」

「そうそう、それだけじゃなくて国土もその影響で

3つに分けることになつたつてニュースで話してたよ？」

そう言つていた。

ロシアは敗戦後多額の賠償金を出さなければいけなかつたが金が圧倒的に

足りないどころか戦犯の引き渡しとかで国内が荒れ始めていたがために

苦肉の策として国を分けさせることとなつてしまつたのだ。

北方領土とカムチャツカ半島は日本が、ウクライナがロシア教支配域を

統治することで合意しているが問題は・・・その他の少数民族におけるエリアだ。

何せ近隣諸国がこれ幸いと支配領域拡大のために民族に紛争した際の

自国の型落ち武器を提供したりして紛争の火種を作ろうと虎視眈々と

狙っているのだ。

そして北方領土返還が丁度今月の終わりであつた事から何かしらの事が

起きるんじゃないかと言う噂が立っている。

そんな事を露知らずに楯無は全員に向けてこう言つた。

「はいはい一年生勢はちよつと黙つててね？何分世界情勢が逼迫している中で

それでもこの行事は外したくないからねえ、まあ学園祭の事なんだけど

今年は男子が加わってまあ色々あった訳だからさ。とあるイベントを行おうと思っているのよねえ。」

「?」

そう言いながら楯無が宗壺と一夏を見ると宗壺は何だろうと思っていると楯無はこう続けた。

「では今年限りの特別イベント!題して……」

……『各部対抗織斑一夏及び鬼塔宗壺争奪戦』を執り行う事が

決定しましたー——!!」

「ハアアアアアアアアア!?!」

宗壺は突如としてその言葉と同時に画面に映し出された自身の写真が出てきた事に驚くが・・・更に続きがあった。

「学園祭では毎年各部活動毎に催し物を出してそれに対して投票を行って上位5チームには特別助成金として部費が提供されるんだけど

今回はそれがつまらない事と2人が部活に入っていない事を考慮してこうなったのよ。だけど其れだけじゃないわ、何処かの部活で

一位と二位になつたら・・・



・  
・  
・  
・  
・  
2人をその部活に片方ずつ強制入部させます!!」

## 内容決め

「学園祭では毎年各部活動毎に催し物を出してそれに対して投票を行って

上位5チームには特別助成金として部費が提供されるんだけど

今回はそれがつまらない事と2人が部活に入っていない事を考慮して

こうなったのよ。だけど其れだけじゃないわ、何処かの部活で

一位と二位になったら・・・

「……2人をその部活に片方ずつ強制入部させます!!」

「ハアアアアアアアアア!?!」

宗壺はそれを聞いて更に驚いている中で周りは……大声で包まれた。

『『『『ウおオオオオオオおおお!!!!』』』』

歓声に沸きだつ生徒達がいる中で宗壺は反論しようとして

手を上げる手前で……こう続けた。

「そして更に更に、優勝したら部活動費を去年の4倍に増やすからそのつもりで励みなさーい!!」

『『『『イヨツシャー——!!』』』』

最早この熱狂に水差す事など出来ないと思ひ始めた宗壺であった。

そして放課後、出し物をする為に放課後生徒達で話し合っていたがラトロワ先生は・・・頭を突っ伏していた。

その理由が・・・電子ボードに出ているこれである。

『鬼塔 宗壺のホストクラブ』

『鬼塔 宗壺とツイスター』

『鬼塔 宗壺とポツキーゲーム』

『鬼塔 宗壺と王様ゲーム』

・・・などなどと言った欲望丸出しの奴にラトロワ先生は頭を悩ませてこう言った。

「却下だ、鬼塔を過労死させる気か貴様らは？ 限度と言う物がるだろう、もうちよつとまともな物を出せ。」

そう言つてデータを消去させるとこう言った。

「もう少しまともなものはないのか？ 例えば食べ物屋とか縁日の出し物程度で良いから意見を出してくれ。」

それを聞いてざわざわと意見する中で・・・クーリエが手を上げたのだ。

「?どうしたんだクーリエ、何かあるのか?」

「えええ、ええと・・・あの・・・ね。」

そう言いながらクーリエはぷーちゃんを掴みながらこう言った。

「ええとね・・・休憩・・・とかどうかなって?」

「休憩って・・・ああ軽食屋さんか、それなら大丈夫ですよね

ラトロワ先生!」

クーリエの言葉を聞いてエルムがそう答えるとラトロワ先生はこう返した。

「成程な、休憩所として使うならば費用はそんなに掛からんし掛ったとしても材料費程度だからリカバリーもちゃんとしていると言った処だな。

他の皆はどうだ?」

そう聞くと一人こう言った。

「けど折角男子がいるんだからそれにもアピール出来る奴じゃないと

赤字にはならなそうだけど出来れば黒字にして今後のクラス予算として

回したいよねえ。」

そう言ってきたのであればどうするかって話になると・・・

エルムがこう言った。

「だったらさ、皆で仮装しようよ!そうすれば皆楽しめれるでしょう!」

「「おオオオオオおおお!!」」

それを聞いて成程と思つていた、それならば十分にお釣りが来るなど  
そう思つていると今度は何を着るかになるのだが

それに対して宗壺はこう提案した。

「よし!じゃあ皆で着物とか着て和風にするか?大正風喫茶店つて

感じにしてさ。」

「「それだ!!!」」

それを聞いて全員が宗壺に向けて指さして更に内容を詰めていくと  
ラトロワ先生が全員に向けてこう言つた。

「よし、十分に詰めたところでもうすぐ夜になる。このまま閉幕して

明日もう一度話し合つて決めるぞ、厨房班や接客班、

並んだ際のグループ分け班に分けて対応するようにな。」

以上と言つて話しを終わらせて宗壺達が出ていくと・・・楯無が目の前に  
立っていた。

「やあこんにちは、久ぶりね鬼塔 宗壺君?」

「これは・・・どうも。」

「あら何だか機嫌が悪そうだけど何かあったのかしら?」

楯無はあつけからんにそう言うと言つて宗壺はこう答えた。

「貴方がアホナ企画を作つたせいでしょ。」

「あああれね、初対面だからインパクトがあるほうが良いでしょ?」

「限度がありますよ、それに人の許可も取らないで勝手にやらないで

欲しいですよ?ここは日本ですよ、幾らIS学園がどこの国の法にも

縛られないからつて少しモラルもきちんとして下さい。勝手に人の事賞品扱いして

俺達は物じゃないですよ!」

「・・・御免なさいね、ちよつと理由があつて」

「そもそもラトロワ先生達には許可貰つているんですか?」

「これ絶対問題になりますよ?」

「うん・・・あの後ラトロワ先生からお　り受けた後で織斑先生から

これでもかと言う位に出席簿の角つこに頭打ち付けられて

たん瘤できたわ。」( ; ω ; ; ) (ノロ) クスン

楯無はそう言いながら泣き顔で頭を撫でているが自業自得だろうなこれとは

宗壺はそう思つて無視しようとするが楯無は宗壺に向けてこう言つた。

「ねえ待つてよ!あの時の事は本当に済まないつて本当に思つているからさ、

話聞いてくれるとありがたいのよねえ?」

そう言つてウルウル顔でそう言つたと宗壺は暫くして……こう聞いた。

「何ですか……その理由つて？」

すると楯無はこう答えた。

「うん実はね、君つて確か今アメリカの代表候補生にIS教えて

貰っているんだよね？」

「エエマア……それで？」

宗壺はぶつきらぼうにそう聞くと楯無は……にこやかにこう答えた。



「私が貴方を集中的に教えて目指せ代表候補生しない？」

「あ、すいません。俺先約があるんで。」

「まさかの即答!？」

## 楯無と特訓

「ちよちよちよちよつと待つてよ鬼塔君！何で!？」

「それ言うなら自分の胸に手を当てて確かめて下さい。」

「あら嫌だわ鬼塔君のH♡」

「ラトロワ先生呼びますよ?」

「スイマセン調子乗ってました!」

まるでコントみたい楯無が謝ると楯無はそうじゃなくてと言つてこう続けた。

「良い！貴方の機体はセカンドシフトしていてワンオフアビリチイーが

手に入つたけれどそれを完全に使いこなす様になるためには特訓!!

これしかないのよ!?!けどそれをやれるのは周りにいるの?」

それを聞いて宗壺は黙りこくつてしまった、何せワンオフアビリチイーである

『舞雷』はビット『双刃』を2つずつ分割させた後に新たに合体し直す事で

機動力が攻撃力と共に爆上がりするのだがそれ故に自身だけではなく

『紅凰』での戦闘経験が必要不可欠となるのだがそうするためには他の専用機持ちと戦わなければならないのだがそうするために必要な人材が足りないと言う現実が

襲い掛かっているがために堂々巡りなのが実情である。

それを間違いなく知っている楯無はふふくんと鼻息吹かしてこう言った。

「それじゃあ決まりね、じゃあ私織斑君を生徒会室に招かなきゃいけないから第三アリーナに集合だからそれじゃあねえ。」

そう言つて去つていく楯無を見て宗壺ははああつと溜息付生きながらこう呟いた。

「・・・エルムに報告しなきゃなあ。」

宗壺はそう言いながら・・・重い足取りで向かつて行つた。

そして一時間後。

「御免御免待つた〜?」

「ええ滅茶苦茶ね。」

「もう、鬼塔君たらそう言うのは駄目よ！女の子に待っていたとしても

『あ、自分も今来た所です。』っていうのがベターよ。」

「何でそんなこと言うんですか、学園内で一時間も何処にほつつき歩いていると思うんですか本当に。」

宗壱はそれを聞いて何言っているんだとそう思っていると楯無は

気を取り直してと言っつてこう続けた。

「さてと、君の機体のワンオフアビリティ『舞雷』は高機動と攻撃を

同時に行う事が出来ることを売りにした多対一特化のタイプだけど課題はそれを使用してでの攻撃の際に敵と味方の区別してでの攻撃だから

貴方の場合はハイパーセンサーを最大活用して戦わなければいけないけど高速戦闘での使用の場合はそれだけじゃないわよ？」

「？」

宗壱はそれを聞いて何だろうと思っつっていると楯無はこう答えた。

「ISのセンサーの中には高速機動用補助バイザーを使用するんだけど

それはモードをハイスピードに変更しておくことと各種スラスタ運動設定を連動監視設定しておくのよ、因みにこれ

本当は『キャンノンボール・ファスト』での運用に使う時に習う事だけど

良かったわね鬼塔君、今のうちに習えて置いておけば楽よ♪」

楯無はにこやかに笑うと宗壺はそれを聞いてこう返した。

「何か変な感じがするな、今までよりも鮮明に見える。」

「当たり前でしょう？高速機動時にはあらゆる情報をいち早く手に入れるためにやっているんだから今のうちに慣れておかないと酔っちょやうから。」

そう言うのと宗壺は先ず飛翔すると楯無はこう言った。

「それじゃあ先ずはその状態で何週か回って見て今日はそれでおしまい、明日から私と特訓だから手を抜かないわよ。」

そう言つて楯無は手を叩いてこう言った。

「それじゃあ今すぐ飛びなさい！時間は有限よ!!」

それを聞いて宗壺はいち早く飛んで行った。

「うん、それなりって所ね。明日からは私もIS使うからじゃあねえ。」  
そう言うのと楯無は立ち去って行った。

「とまあそう言う事があつたんだ。」

「ふくくん、大変だねえ。」

「じゃあ何でそんなにむくれてるんだよエルム？」

「知らない！」

そう言うのとエルムはジュースを飲んでいるとダリルが宗壺に向けてこう言った。

「然し楯無かあ、アイツは強いぞお。ああ見えて今年初めまでは

ロシアの国家代表生でその高い実力から当時の大統領のお抱え機関の隊長も  
歴任していたからなあ。まあ今じゃ日本の代表候補生だけで来年までには

間違いなく日本の国家代表生に昇格するんじゃないかって話だぜ？」

ダリルはそう言つてステーキを頬張っているとどうするべきか考えているが  
考えても仕方ないと割り切つて宗壺はもつ煮込み定食を食していた。

そして織斑一夏であるが奴はと言うと……。

「ああクソが！何であんなに強いんだよあの女は！！俺の身体能力でも勝てねえってアイツはバグかよ畜生が！！」  
保健室でほざいていた。

生徒会室



「それじゃあ報告だけど先ずは織斑一夏君、彼はそうねえ・・・  
自意識過剰なところが結構目立つわね。口調と実力が合っていないから  
弱く見えるって所ね。鬼塔君については中々の学習能力と高い実力を  
保持しているわね関心感心。」

「そりゃあそうでしょう？何せダリル先輩がきたえてるんつすから。」

そう言うのは黒髪で小柄な少女『フォルテ・サファイア』である。

「明日から全面的に教えるから虚ちゃんお願いね♪」

「分かっておりますお嬢様。」

そう言うのは眼鏡で知的な印象を持つ女性『布仏 虚』である。

それから暫く内容を協議している中である紙がそこにあつた。

内容はこうだ。

『元ドイツ代表候補生《ラウラ・ボーデヴィツヒ》の日本国籍取得と  
代表候補生見習いに備えての試験について。』

# 祀るだー!!

そして学園祭当日。

宗壺達3組は1組同様盛り上がっていた。

一組の執事・メイド喫茶と同様に出来上がっている和風大正喫茶店と言う

洋と和が一体何があったらこうなったんだと思う位にてんやわんやとなっているが

それは4組でも同じだ。

4組では投票を条件に翼と奏の特別ライブが聞けると聞いて

今ステージの建造中である。

因みにライブは学園祭での最終内容となっておりその為か4組全員が

設営に勤しんでいた。

そして最後に二組であるが・・・そんな中で同じく中華喫茶であったが

矢張りと言うべきか何なのやらであるが男性IS操縦者の接客と相まって

閑古鳥が鳴いていた。

一組では織斑一夏に対する指名が多くあり本人は大慌てであった。

そして三組では・・・忙しいの一言であった。

「ハイ確認いたしますね、柚子ケーキセットが一つ。コーヒーはブラックで宜しかったですね?」

「ええ、お願いします。」

「それでは2番に注文入りまゝす。」

生徒の一人がそう云う中で宗壺も忙しく働いていた。

「お待たせいたしましたお客様、ブドウケーキとカフェオレですね。

他は確かフルーツサンドでしたよね?」

「あ、はい。そうです!」

「後少しお待ち下さいね、直ぐに出来ますので。」

「ああああいいいいオカマいにやく!」

宗壺が着ている着物を見てドキマギしている女性がそこにいた。

そして無論招待客の中には男性もいる為男性たちは女子の・・・

特にエルムの着物を見て鼻を伸ばしていた。

胸の谷間が露出している其れは歩きたびに柔らかく揺れているがために男たちは良  
いもの見たなと心の中で合掌しながらそれを見ていた。

そして仕事中にダリル先輩が来てくれたのだ。

「よう鬼塔、今暇か?」

「いや開口一番何言ってるんですか先輩!今忙しいですよ!!」

「そうか、じゃあ何か頼むかってええとメニューは・・・」

へえ結構充実しているなおい。そんじゃ俺はチョコケーキと

コーヒーブラックで。」

「もう注文しているって畏まりました直ぐに持ってきます!!」

宗壺はそう言って注文してきたメニューを伝えて暫くして・・・来たのだ。

「お客様お待たせいたしました!」

「おお、待つてねえぜってそーいや鬼塔気を付けておけよ?今企業の社員が

「I Sの武器をお前らに売るため二血眼になってるようだぜ？」

「ええ何ですか？」

「広告塔だなそりゃあ、何せ男性I S操縦者は希少だからな。自社の宣伝に丁度いいんだろうよ。」

「そう言いながらダリル先輩はコーヒーを飲んでいると・・・生徒の一人が宗壺に向けてこう言った。」

「鬼塔君、丁度今在庫が無くなっちゃって店閉めようかなって

話になっているんだけど予定ある？」

「いやそうだな・・・これからエルムとクーリエ連れて回るくらいかな？」

「そう言うのと生徒の一人が了承すると全員に向けてこう言った。」

「それでは後片付けに入るよ！食器班は洗い物の再開して使った食器と

調理器具は後で調理部に返しに行つて接客班は着物を後で茶道部に返しに行くからその時に皆で行く様！！分かりましたか？」

『『了解しました。』』

「そう言つて片づけを終えると宗壺はエルムとクーリエ、

そしてダリル先輩が加わつて互いに周りに行つた。」

まず初めに向かったのは写真部、そこでは記念撮影が執り行われており何人かのグループで撮っている中で宗壺が入ると周りは大騒ぎになっておりそんな中で宗壺を中心としてクーリエが宗壺の膝に座って右にエルム、左にダリル先輩が宗壺の腕に・・・胸の谷間で挟めて写真を撮影した。

次に向かったのは料理部で軽食がてら何か食べようとカナ感覚出来たら結構本格的でいろんな国の食事がずらりと並んでいた為全員で何品か食べている中で・・・とある少女が声を掛けてきた。

「あのおう、スミマセンガもしかして鬼塔　宗壺さんでしょうか？」  
「ええそうですけど？」

宗壺がそう言つて振り向いた先にいたのは金髪紫眼の美少女であった。スーツを着ているがその格好から同じ年頃だなと思つていと少女は名刺を取り出してこう言つた。

「初めまして、私は『IS装備開発企業『みつるぎ』の社員の

『シャロット・ドノミコルソン』と申します。本日は鬼塔様に如何か見て頂きたい武装をご紹介したいと思ひまして。」

「ああスイマセン、うちは既に『斑鳩グループ』の傘下でして既に武器は十二分に揃つていますので良いです。」

「それぞれそんなこと言わずにこれなんてどうでしょうか！胸部に装備されるリアクティブアーマー何ですが今でしたらハンドガンに＋して脚部ブレードとかが」

「イヤ本当に大丈夫ですのでつていかまです初めに会社に許可を求めて下さい、そういうのはまず会社に許可を求めるのが普通かと思ひますので。」

ではと言うとエルム達が宗壺を追つて行く中で『シャルロット』は顔を俯かせて・・・こう呟いた。



「ちえ、結構身持ちが固いんだねえ。」

そう言うと電話を取りだしてこう言った。

「スイマセン先輩振られちゃいました〜、え？先輩も？でしたら  
押しても駄目なら・・・」

・・・・叩き潰しちやいましょう♪」

そう言つて『シャルロット』はカバンに入つてあるそれを見た。

それはオレンジ色の腕輪の形をした・・・ISの待機形態であつた。

## 劇は大ごと

「あ、いたいた鬼塔君♪」

「あれ？更識生徒会長何ですか一体？」

宗壺は楯無に向けてそう聞いた。

今彼らは茶道部でお茶を嗜んで他の所に行くところでこう言った。

「ねえちよつとお願いいかしら〜？」

「・・・何ですか？」

宗壺は何やら野球で牽制するかのような動きをしていると楯無は妨害するようにこう言った。

「実はね、君に手伝って貰いたい事があるのよ？織斑君も一緒なんだけど良いでしょ？これ決定事項だから。」

「ふざけるのも大概にして下さいってラトロワ先生に許可は!？」

宗壺はもう怒ったぞと言わんばかりに大声でそう言うが楯無はあつけらかんところ答えた。

「ああ、ラトロワ先生ならもう断り貰ってるからって言うか粘れば人間って

「願ひ叶うのよねえ。覚えておきなさい鬼塔君。」

「もう許可下りてるって言うか俺の意思ないのかよ!？」

宗壹はまじかよと頂垂れると楯無はこう続けた。

「出し物は演劇で観客参加型、衣装は第四アリーナにあるから

ああダリル先輩とエルムちゃん私は私とちよつと聞けくれないかしら??」

そう言つて2人の背中を押しながら向かつて行くと宗壹は楯無に向けて

ぶつきらぼうにこう聞いた。

「それで・・・何するんですか一体?」

そう聞いて楯無は扇子を開いてこう答えた。

そこには『追撃』の二文字が書かれていた。

「『シンデレラ』よ。」

「2人共準備良いかしら〜?」

「はい、大丈夫です!」

「は〜〜〜。」

宗老は楯無の言葉を聞いてため息交じりにそう言う。織斑一夏はこう言った。

「おい何元気ねえ顔してんだよ? やりたくなけりやあ俺が

全部やってやるからな!」

「ああ、ハイハイご勝手に。」

「ち！何だよ張り合いがないな本当に!!」

そう言つてずんずんと向かつて行く織斑一夏を見て宗壺はため息ついていると楯無がこう言つた。

「あら疲れているわねえ、ため息ついていると幸せ逃げちゃうわよ〜?」

「仕方ないじゃないですか? 貴方ですと何があるか分かつたものじゃないですから。」

「あら? 君のワンオフアビリティを稽古したの誰だつたかなあ?」

「うぐ。」

宗壺はそれを聞いて嫌な顔をしていると楯無はこう続けた。

「まあ頑張りなさいよ、青春は楽しんでなんぼよ?」

「そうですね、楽しませてもらいますつて言うか良いんですかこれ?」

俺達稽古なんてしてないんですよ?」

宗壺は楯無に向けてそう言つた。

何せ稽古どころか台詞すら覚えておらず覚えていることと言つたら偶にエルムがクォーリエに対して読む程度で内容なんて殆ど覚えていないぞとそう思つていると楯無は笑つてこう答えた。

「大丈夫大丈夫、基本的にこちらからアナウンスを掛けるからそれに従つて

お話を進めて良いから。あ、それと台詞はアドリブでも平気だから。」

「・・・大丈夫なんですかそれ？」

宗壱はそれを聞いて責任重大+何ていう放任主義なのかとそう思っていた。然も王子が2人いる時点で最早お話なんて成立するのかとそう思っていると楯無は宗壱の背中を押しながらこう言った。

「さあさあさあ開幕よー！」

そう言つて宗壱が壇上に上がると・・・セット全体にかけられていた幕が上がつてアリーナのライトが照らされた。

『昔々ある所にシンデレラと言う少女がいました。』

「( )までは普通通りだな。」

宗壱はそう言いながら身構えていると楯無はアナウンスで・・・こう言った。

『否！それは最早名前ではない！！幾多の舞踏会を潜り抜け、

群がる敵兵をなぎ倒し、灰燼を纏う事さえ厭わぬ史上最強の兵士達！

彼女らを呼ぶにふさわしい称号・・・それが《灰被り姫（シンデレラ）》！！！！』

「はい!？」

『今宵もまた、血に飢えたシンデレラ達の夜が始まる！王子の冠に隠された

隣国の軍事機密を狙って舞踏会と言う名の死地に少女達が舞い踊る！！』

「何じゃそれ!？」

宗老はなんつうもんだとそう思っていると織斑一夏の上に・・・影が現れた。

「貰ったー!!」

「鈴?」



織斑一夏はそれを見て驚いたのだ、白地に銀のあしらいが美しい

シンデレラ・ドレスを身に纏った鈴が青龍刀で斬りかかって来たので

織斑一夏はそれを避けるところ言った。

「避けるな！」

「普通避けるわ!!」

織斑一夏はそう言いながら避けていると・・・宗壹は背後に人の気配を感じて振り抜くとそこにいたのは・・・同じ衣装を身に纏ったダリル先輩がリボルバーライフルを両手に一丁ずつ持って現れるところ言った。

「悪いなシユウ・・・その冠頂くぜ。」

そう言って連射しまくって・・・宗壹はそれを某新時代映画の避け方の様に避けているとダリル先輩はリボルバーライフルを捨てて・・・

スカートからナイフをそれを使ってスカートを・・・片方を腰まで切裂いて動きやすいようにすると一本を宗壹に渡した。

「生憎だがアタシは何もねえ奴に攻撃するなんざ趣味じゃねえからな、

さあいつちよ暴れ」

「そうはいかないよ！」

「エルム!？」

宗老は何処なんだと思っていると・・・同じくドレスを着てガントレットを付けたエルムが現れたのだ。そしてエルムはこう言った。

「シユウとの相部屋権利は誰にも渡さないよ！」

## 劇は終わりて戦場の始まり

「エルム何でここにつてつて言うか相部屋権利つて何!?俺初耳何だけど!!」

宗壺はエルムの言葉を聞いて何が何やらと思つてしているとドレスを身に纏つたエルムがガントレットで応戦しながらこう言つた。

「それがね聞いてよシユウ!あの生徒会長が『織斑一夏君と鬼塔 宗壺君の部屋の相部屋賭けて勝負しない?ああダリル先輩も大丈夫ですよ、生徒会長権限で

何とかしますから。』つて言つててき、困っちゃうよねえ本当に!!」

「ああ・・・頭が痛くなりそうだ。」

宗壺はそう呟きながら頭を抱えているとそう言えばと宗壺はエルムに向けてこう聞いた。

「つて言うか勝敗はどうするんだ?まさかと思うけど

俺を倒したらつてないよな?」

宗壺がそう聞くとエルムはこう答えた。

「それがね、どうも今シユウが被つてる冠を手に入れたらつて言つてたよ!」

「そうか、じゃあこいつをエルムに」

渡すかと言って冠を外した瞬間に……

「おぎやあアアアアアアアア!?」

電流が全身に流れたのだ。

「何だよこいつは?!俺はリメイクされた宇宙人の女の子に求婚されている  
変態高校生か!」

プスプスと煙が立ち込めている中で……放送が流れた。

『王子様にとつて国とは全て、その重要機密が隠された王冠を失うと

自責の念によつて電流が流れるのです!ああ何と言う事でしょう!王子様の  
国を想う心は宗までも重いのか?然し、私達は見守る事しか出来ません。

何と言う事でしょう!!』

「そう思っているならアンタが代われ!!」

宗彦はそう言いながら冠を被り直すとエルムとダリル先輩は互いに

見合つて……こう言つた。

「と言う訳ですので先輩私的には此の儘で良いので譲つて下さいって言うか貴方来年  
卒業するんだから良いでしょう?」

「ハハハ・・・悪いが一年坊、そうは問屋が降ろさねえんだよなあ。」  
そう言つて互いに・・・乱れ合つた。

「俺・・・どないすれば良いの?」

宗壺はその光景に対して関西弁を口走りながら見ていると・・・  
地鳴りが響き渡つた。

「は!地震か!」

宗壺はそう言つて近くにある壁に身を置くと・・・放送が流れた。

『さあ!只今からフリーエントリー組の参加です!!皆さん、

王子様の王冠目掛けて頑張つて下さい!』

「ふざけんじゃねえぞあのチエシヤ猫がー!!」

宗壺は流石に怒り心頭になってそう言いながらもセツトを駆けのぼりながら  
どうするかと考えている中で背後にいる女子たちの・・・赤く光る眼を見てげつと思つ  
ていた。

「何だよあれ全員オヤブンになっているのかよ?」

野生に満ち溢れているのかよと某携帯獣を思い出して捕まったらまず死ぬと

そう思つたのかこうなつたらと飛び降りてISで飛翔するかと考えたその時に・・・声  
が聞こえた。

「こつちだよ！」

「へあ!？」

その声と同時に宗壺が……セツトの上から裏に転げ落ちた。

「あれ？何処行つたんだろ？」

「探すのよ！織斑君もいるはずよ！」

そう言つて探している中で……なんやかんやあつて巻き込まれたクーリエがセツトの間にある空間を見つけて……入つて行つた。

「はあ・・・助かった〜ありがとう〜ございませえと・・・」

『シャルロット』さんでしたよね？」

「はい、覚えてくれてありがとう〜ございませえ鬼塔さん。」

シャルロットはそう言つてニコニコと人のよさそうな笑みを浮かべているが・・・宗壺は何か怪しいと直感で感じて一歩下がるような感じで対応していると

こう聞いた。

「其れで聞きますけど・・・何で俺をここに？」

現在宗壺がいるのは第4アリーナの着替え室でありさつきまでいた処に



何故入れたのかとそう思っていると・・・シャルロットはカバンから何かを抜き取って・・・宗彦に向けてこう言った。

「はい、これを機会に・・・『灰戦騎』を頂きたいと」

そう言った瞬間に宗彦は『紅凰』を展開するとシャルロットはニヤリと笑ってこう言った。

「へええ僕の事気づいていたのかい？」

「ああ、俺だって一応は会社の人間だから分かるんだよなあ・・・」

その値踏みするかのようなねつとりとした目つきがな！

「そうなんだ！それなら僕だって考えがあるよ!!行くよ『リバイブ』!!!」

そう言って現れたのは・・・オレンジ色の『ラファール・リバイブ』であった。

「ラファール・リバイブ！第二世代機で・・・アンタ只の社員じゃないな！」

「そうだよ！僕は企業の人間に成りすました美少女だよ!!」

「自分で美少女って言うか普通?！」

そう言いながら宗彦は双刃を展開して更に二分割にしてシャルロットに対して襲い掛かるもシャルロットはそれをマシンガンで弾き返しながら凌いでいると宗彦は嘘だろと言いながら黒月で範囲攻撃をした。

レーザー系統なので棚が貫通するとシャルロットの機体はダメージを負った。

「ヨクモヤツタナ!?」

シャルロットはそう言つてシールド内部にあるサブアームで銃器をコールして  
双刃を弾き乍ら宗壺に近づいて左腕のシールドをパージすると現れたのは・・・  
第二代兵装最強と名高い兵装・・・『パイルバンカー』であつた。

「ハア嘘だろおい!?!」

「貰つたー!!」

シャルロットはそう言つて構えた瞬間に・・・何者かによつて撃たれた。

「何!?!」

シャルロットはそう言つて周りを見渡すとその視線の先にいたのは・・・  
ロングバレルライフルを構えたクーリエとスヴェントヴィトがそこにいた。

「大丈夫シュウ!」

「クーリエ!?!」

## 織斑一夏対オータム

「どうしてここに！」

「シユウがを探してたらここに繋がる道見つけたから。」

「ああ、成程な。」

宗壺はクーリエの小柄な体型を見て確かにとそう思っていた。

彼女ならばあの細い垂れ幕の隙間を見つけることが出来るなとそう思っているとシャルロットはクーリエを見てこう言った。

「ちえ、あと少しだったのに邪魔が入るなんて全く不躰じゃないの君？」

そう言いながらシャルロットはマシンガンを構えようとする。と宗壺は双刃を彼女の周りに集中させるところ言った。

「( )迄だ、二対一で勝てるほどまさか強いとは」

「いや、四対一だ。」

そう言つて現れたのは・・・エルムとダリルであつた。

「エルム！ダリル先輩!!どうしてここに！」

「クーリエちゃんが教えてくれたからね！」

「で、アタシらも来てみたらこの有様だからIS展開してきたんだよ！」

そう言つて2人共ISの武器をシャルロッテに向けるとシャルロッテは・・・

笑つてこう聞いた。

「ねえさ、僕ばかり集中しているようだけどさ・・・

・・・織斑一夏君はどうなつても良いのかな？」

「其れって一体どういう」

そう言いかけた瞬間に爆音が響き合っていた。

「まさかここに!？」

宗壹がそう言うのとシャルロットは嗤いながらこう言った。

「アハハハハハハハハハハ!今更遅いよ本当に!!今頃

『剥離剤(リムーバー)』 I S コア抜き取られて殺されてんじやないのかな!？」

ぎゃははハツハと笑っている中で宗壹はそれを聞いてこう言った。

「『? 離剤(リムーバー)』って対 I S コア用の一回こっきりの奴じやねえか!」

「そうその通りだけどき、今戦っているのはそれなりに強い人だから

今頃倒されてピーピー泣き叫びながら殺されてんじや」

無いのと言う前に突然として隣の着替え用のボックスが突如として壊れて

そこから飛び出てきたのは・・・黒と黄色のカラーリングが施された八つ脚で

蜘蛛の様な見た目をした I S が出てきたのだ。

「あがあ!？」

I S 操縦者は床に叩きつけられて肺に残っていた酸素が

無理やり吐かされるような感触を感じた儘立ち上がると

その視線の先にいたのは・・・水色の I S であつた。

両手に両刃でのこぎりの様な刃が特徴的な武器を持つ・・・更識楯無が狡猾な笑みを浮かべながら立っていた。

今から数分前。

「どうしたんだよおら織斑一夏！」

「畜生が！卑怯だぞ遠距離兵装持っているなんて!？」

「何言ってるんだよお前は!?!こいつは戦争だぜ?殺すか殺されるかの戦いの中で正々堂々なんて普通しねえだろうが！」

そう言いながら蜘蛛型のISを身に纏った女性は右腕にガトリングライフルを持ち

左手には大型の盾を持ちながら織斑一夏相手に戦っていた。

間違はなく白式に対抗するために装備したのであろうその武装を見て織斑一夏は畜生と思っていた。

「（こいつがセカンドシフトしていたら華麗に倒している筈なのに

刀一本しかないから対抗できねえしその前に俺銃火器触ったことすらねえから白式は絶対に考えていないからああもうナンデこう原作から離れていくんだよ本当に!?!それに『オータム』の『アラクネ』の武装も可笑しくねえか!?

ガトリングライフルに楯なんて原作にはネエゾクソが!」

そう毒づきながらも離れさせていく『オータム』と呼ばれる女性がこう言った。

「……だぜー」

そう言って背部にあるサブアームから射出されたのは……蜘蛛の糸であった。

蜘蛛の糸は束ねれば大型トラックを引っ張ること位造作もない程の力を

持っている為それをIS用アレンジさせればあら不思議、ISを拘束する事が出来るのだ。

「手前何する気……まさか。」

織斑一夏はまさかと思って無理やりにも剥ぎ取ろうとするも

『オータム』と呼んだ女性は小さな4本脚の装置を取り出して白式に付けると

織斑一夏はこう呟いた。

「・・・やめろ。」

「さてと、お別れだぜ。手前のI Sとお別れの挨拶でもするんだな。」

そう言うも織斑一夏はやめろと呟くばかりで震えていると『オータム』はこう言った。

「じゃあな、織斑一夏。」

「やめろー!!」

そう言うが装置が起動した瞬間に・・・電流に似たエネルギーが全身に流された。

「ぎゃあアアアアアアア!!」

全身から流れる激痛に織斑一夏は悲鳴を上げているが『オータム』はそれを笑いながら見ていると暫くするとこう言った。

「そろそろつて所だな。」

そう言うつて装置を解除するが織斑一夏は何やら・・・

やばいやばいやばいやばいと呟いているのを見て『オータム』はこう言った。

「へえ、まさかお前こいつが何なのか知っているのか?じゃあ知っているよな

こいつの特性をな!」



そうやって織斑一夏をサブアームで締め上げるところ続けた。

「今の手前はISがねえ只のガキだ！序に殺しておくとするか。」

「ヒイヒイヒイヒイヒイ！」

織斑一夏は『オータム』の声から分かるその殺意に気づいて恐怖して

逃げようとするも足が絡まって走り損なって転ぶとそれを見て笑いながら

こう言った。

「アハハハハハハハハハハ！滑稽だなお前!!?第二回モンドグロツゾで部下共に拉致した時はもう少しいい顔していたけど今じゃあ頼りねえ面だなおい!!」

ぎやははハハハハハと笑いながら『オータム』は背部からキャノン砲が現れるところ  
言った。

「じゃあな織斑一夏、来世はもつといい人間になれよう！出来るならな！」

アハハハハハハハハハハ！と笑いながらエネルギーを充填しているのを見て

織斑一夏はガチガチと歯を鳴らしている間に下半身に生暖かい液体が

出ているのだが其れすらも分からない程恐怖していた。

そしてエネルギーが充填完了したのであろう、狙いを定めていると・・・

何処からか声が聞こえた。

「あら、これは良い獲物が入ってくれたわね〜♪」  
そう言って現れたのは・・・更識 楯無であった。

## 悪魔の斬り姫

「誰だ手前は？」

オータムはそう言いながら楯無を睨みつけているとこう続けた。

「って言うか手前何処から入ってきやがった！ここら辺は

全部システムを掌握していてロツクされている筈！」

そう言ううと楯無はこう答えた。

「あああれね、私の幼馴染がこう言う電子系に対応できるから

開けて貰ったのよねえ。それで何しに来たのかしら・・・

「……『亡国機業（フアントムタスク）』？」

「!!お前何でそれを知って……仕方ねえ手前もここで終わらせてやるぜ!」  
そう言つてオータムは背部にある装甲脚を楯無に向けて刺し殺そうとすると……その寸前で攻撃が止まった。

「な……何が起きて」

「さてと……料理の時間ヨ蜘蛛女。」

楯無がそう言つた瞬間にアラクネの装甲脚が全て……先端の所だけが切り裂かれたのだ。

「何!?!」

オータムが驚いた瞬間に楯無が……水となつて溶けてしまったのだ。

「水……何処だごらあ!?!」

オータムは慌てた様子で探していると背後から……殺気を感じて

振り向いた瞬間にナニカによって装甲脚が根元から切り裂かれていた。

「ああクソ！何なんだよこれはよ!？」

オータムはそう言いながら辺りを見回すとそこにあつたのは・・・

3つのクリスタルのようなナニカが浮遊していたのだ。

するとそれらがオータムから少し離れたところに向かつて行くと

そこにいたのは・・・水色のISであつた。

アーマーの面積が狭く小さいがそれらをカバーするかのよう

透明な液状のフィールドがドレスのように纏わりついているが

手に持っている武器が・・・異様であつた。

両刃剣の様な形状であるが刃の部分がまるで鋸の様に尖っており

それらも液体のようであろうナニカが回転していた。

するとオータムは両手にあつたガトリングライフルで攻撃しようとする・・・その

鋸が回転してきてその水が放たれた瞬間にガトリングライフルは

それらに命中して・・・爆散した。

「クソが!」

オータムはしまったと思つてナイフを展開して攻撃しようとする

今度はクリスタルから水が放たれて装甲が切れかかっていた。

「何なんだよこいつはー!!」

まるで一つ一つじわじわと相手を追い込んで最後に喰い殺す女郎蜘蛛の様に執拗に相手を追い詰めるかのようなこのやり方にオータムは畜生!と言いながら下がろうとした瞬間に・・・足元が突如として爆発したのだ。

「何!何が起きて」

「あら?未だ分からないのかしら貴方?」

楯無がそう言うところ続けた。

「私の機体『霧纏の淑女(ミステリアス・レディ)』は水を操る事が出来るのよ?そして今あなたの周りにある霧が・・・自然発生したのだと思っ込んでいるのかしら?」

「しめ」

「遅いわよ。」

そう言つて楯無が指パツチンした瞬間にアラクネの手足の装甲を破壊したのだ。

然も動けなくなる程度のダメージにさせており其の儘楯無は

オータムに対して・・・三日月の様に笑みを浮かべてこう言つた。

「さあ・・・お料理よ。」

そう言つて始まつたのが・・・地獄であつた。

「うあ……アアアアアア。」

織斑一夏はその光景に恐怖していた。

原作だったらあり得ないようなその攻撃パターンに  
顔が真っ白になっているからだ。

「や……やめ」

「切刻まれなさい！」

アハハハハハハハハハハ！と笑いながら楯無は両手にある鋸でじわじわと  
装甲を斬り落としてバラバラにしていた。

そして等々装甲が頼りなくなると楯無はオータムに向けてこう聞いた。

「ねえ聞きたいけど良いかしら？」

「うぐ……あ。」

「……起きろ。」



楯無はそう言って殴ると覚醒したオータムは楯無を見て恐怖するが楯無はこう続けた。

「何が目的？仲間は何人？システムはどうやってハックしたの？」

そう聞くがオータムは楯無に対して視線を逸らす。楯無はこう言った。

「ねえ……斬り姫って知ってる？ロシアとウクライナ戦争の時に

ロシア側の上層部の殆どがバラバラにされたって話？」

「ま……マサカお前」

「そう……私がその斬り姫よ……だから……喋らないから

徹底的に痛ぶってあげるから良い声で泣きなさい。」

そう言って鋸で斬り飛ばした瞬間に隣に向かって飛んで行ってしまったのだ。



僕が持つて行かなきゃ後（、・∨・、）ノヨロシク♪」

そう言つて離れようとした瞬間に宗壺がシャルロットを見て

止めようとした瞬間に双刃を放つが打鉄を纏っている少女は

それらを全てマシンガンで弾き飛ばすが何機かが打鉄に命中して傷が出来たが

打鉄を纏っているは気にも留めないかのように去つて行こうとするど・・・

アリーナにある演劇用の壁の外にいる少女を見つけると少女・・・

セシリアがこう言つた。

「おーほほほほほほ、この私が来たからには貴方方は私の掌上の・・・

さあ踊つて貰いますわブルー・ティアーズが奏でるワルツで貴方方を華麗に倒して御

覧に入れますわ！」

そう言いながらセシリアは背面部にある有線型ブルー・ティアーズを展開した。

## その後

「おーほほほほほ、この私が来たからには貴方は私の掌の上・・・

さあ踊って貰いますわブルー・ティアーズが奏でるワルツで貴方を華麗に倒して御覧に入れますわ！」

そう言つてセシリアが有線ビットを4基展開して取り囲もうとした瞬間に・・・  
悲劇が起きた。

何と打鉄を纏っている少女が保有するマシンガンで有線ビットにある  
細いワイヤーを全て撃ち落として・・・ビットがコントロールを失つて  
落ちたのだ。

「へあ？」

セシリアは素つ頓狂な声を出していると一瞬の間にセシリアに肉薄すると  
刀を出してブルー・ティアーズの装甲を斬り落とした。

「キヤアアアアアアアア！」

いきなりの事でセシリアは其の儘やられるとシャルロッテが鈴相手に  
戦闘をしていた。



然もちゃんと自分の意思で参加しているんだからまさか無効なんてないでしょねえ？」

ヒヒヒヒと笑っているのを見て畜生とか詐欺師とか言われているが当人はまんざらでもない様子であったが楯無はこう続けた。

「大丈夫大丈夫、鬼塔君と織斑一夏君には各部活の

マネージャー見習いとして出向させるから皆頑張ってねえ。」

そう言うのと先ほどまでのブーイングが少しだが消えた。

そして生徒会室。

「よく来てくれたわね鬼塔　宗壺君と織斑一夏君。」

「あ、はい。」

「……………どうも。」

2人がそう答えると楯無はこう続けた。

「さてと、2人には生徒会所属として鬼塔君には副生徒会長を、織斑一夏君には書記として働いてもらうわね。」

そう言うとう楯無は他の面々の紹介をした。

「まずは会計だけど整備科の三年で『布仏 虚』ちゃん、私の幼馴染で何か分からなかったら聞いてね。」

「宜しくお願いします。」

そう言う眼鏡をかけたクールビューティーな女性が頭を下げると

次はと言ってこう続けた。

「庶務で私と同じ二年の『フォルテ・サファイア』、ギリシャの代表候補生で私と同じ専用機持ちって鬼塔君は既に知っているわよね？」

「ええ・・・まあ。」

「宜しくつす〜。」

宗壺がそう言うとうフォルテが挨拶して楯無は2人に向けてこう言った。

「それで何だけど休みの日は貴方達にISの指導をするんだけどまあ鬼塔君はダリル先輩が目をかけているから良いとして問題は君ヨ織斑一夏君？」

「・・・」

織斑一夏はそれを聞いて黙っているが楯無はこう続けた。

「貴方は弱いわ、ここに居る全員よりも。」

「!!」

織斑一夏はそれを聞いて目を大きく見開くが楯無はこう続けた。

「相手に対して有効な手段など使おうとはせずに馬鹿正直な攻撃オンリーで

それじゃあ今後もし上手いくかどうかわからないわ、そこで私が教導するし貴方と相部屋になるけど一つ言うわね・・・私は甘くないから覚悟しておきなさい。」

「ヒイイイイイ！」

織斑一夏は楯無のぎろりと言わんばかりの視線に恐怖すると楯無は暫くしてにこやかに言ってこう言った。

「まあ堅苦しい事は抜きにして今日は歓迎会！さあ楽しみましょう!!」

そう言ってパーティーが始まった。



学園長室。

「失礼します。」

楯無がそう言うつて入るとそこにいたのは・・・初老の男性である。

表向きは彼の妻が学園長をしているのだが本当は彼なのだ。

すると楯無は彼・・・『轡木 十蔵』に向けてこう言った。

「先ずは鬼塔 宗壺君と織斑一夏君ですが無事生徒会に所属となりました、織斑一夏君はまあ最低弦使えるようにしますが鬼塔 宗壺君は中々ですよ。あと数年経てばモンドグロツゾ出場は間違いなさそうですね。」

「ほお、君がそう言うのであれば今後の活躍に期待が持てそうですねえ。」

そう言いながら『轡木』はお茶を啜っていると楯無はこう続けた。

「それとですが矢張りファントムタスクが動き出しました、まあ敵のISは

あそこ迄破壊すれば当面は出ることはないでしょうし戦力を一つ落としましたが後2機残っていますので気を付けるべきでしょう。」

「そうですか・・・スミマセンねえ貴方にこの様な」

「いえいえ、これが私の仕事ですから。」

そう言いながら笑っている楯無を見て『轡木』は・・・何だか辛そうに感じていた。

そして何処かの高層マンションの最上階

「よくもやってくれたわね．．．更識の斬り姫！」

そう言いながら薄い金髪の美しい女性が怒り心頭でワインが入っていたグラスを叩き割ると女性はこう続けた。

「次の作戦は私も出るわ．．．あの女に私の大切な『オータム』をあそこ迄傷つけた報いは受けて貰うわ。」

そう言っていると『オータム』の部屋からシャルロツテ．．．いや、『S』が出てくると女性は『オータム』の容体を聞くと『S』はこう答えた。

「完全に駄目だねあれは、トラウマものだよ。もうISパイロットとしては使い物になれないけどどうするのさ『オータム』さんのアラクネ？」

『S』がそう聞くと女性はこう答えた。

「．．．仕方ないわ、代わりの操縦士を宛がるわ。心当たりがあるから。」

そう言っていると打鉄を纏っていた少女が部屋に入るとある雑誌を見て．．．こう思っていた。

「(ようやく始まるんだ私の復讐が．．．あんな弱い奴よりも

私が優秀だつて事を証明させてやるから待っている．．．

織斑千冬(ねえさん)。」

そう思いながら少女は．．．邪悪な笑みを浮かべていた。